謎の家

モーリス・ルブラン　井上　勇訳

謎　の　家

モーリス・ルブラン

素晴らしい宝石をつけた女優が誘拐され宝石を奪われた事件に端を発して，お針子がまた誘拐された。しかも連れ去った者も連れ去られた場所も同じ。この奇妙な事件を結びつけるものはなにもない。被害者の記憶から浮かび上がったメラマール伯爵とは何者なのか？　しかし，この事件にリュパンことジャン・デンヌリという爵位をもった航海士が首を突っ込んだことから意外な事実が浮かび上がった。長年の確執から発した犯罪とはいえ，そこには巧みな犯行トリックが隠されていたのだ。≪謎の家≫をめぐって繰りひろげるアルセーヌ・リュパンの大活躍。

登場人物

アルレット・マゾール……洋装店のお針子
アントワヌ・ファジュロー……アルレットの婚約者
レジーヌ・オブリー……女優
ヴァン・フーベン……富豪の宝石商
メラマール伯爵……悲運の家の当主
ジルベルト……伯爵の妹
トリアノン婆(ヴィクトリーヌ)……古道具屋
ロランス・マルタン……トリアノンの妹
ドミニック……マルタン姉妹の父親
ベシュー……巡査部長
ジャン・デンヌリ子爵……紳士航海士

カバー　日下弘・金子博子

謎　の　家

モーリス・ルブラン
井上　勇　訳

201 N

創元推理文庫

登場人物

アルレット・マゾール……………洋装店のお針子
アントワヌ・ファジュロー…………アルレットの婚約者
レジーヌ・オブリー…………………女優
ヴァン・フーベン……………………富豪の宝石商
メラマール伯爵………………………悲運の家の当主
ジルベルト……………………………伯爵の妹
トリアノン婆（ヴィクトリーヌ）……古道具屋
ロランス・マルタン…………………トリアノンの妹
ドミニック……………………………マルタン姉妹の父親
ベシゥー………………………………巡査部長
ジャン・デンヌリ子爵………………紳士航海士

目次

アルセーヌ・リュパンの未発表回想録の抜萃　八
1　女優レジーヌ　一一
2　マネキンのアルレット　二八
3　紳士探偵デンヌリ　四六
4　刑事ベシュー　六六
5　はたして敵か　八九
6　メラマール家の秘密　一〇五
7　救い主ファジュロー　一二三
8　放火犯人マルタン姉妹　一四六
9　アルレットの婚約　一七一
10　鉄拳一閃　一九三
11　浮かれ女ラ・ヴァルネリ　二一三
12　アルセーヌ・リュパン　二三七
エピローグ　アルレットとジャン　二六六

LA DEMEURE MYSTÉRIEUSE

by

Maurice Leblanc

Copyright 1927 in France
by Maurice Leblanc
This book is published in Japan
by TOKYO SOGENSHA Co., Ltd.
by arrangement with Claude Leblanc
through Bureau des copyrights Français

日本版翻訳権所有
東京創元社

謎の家

物が、私とはちがい、また、それぞれのあいだでもちがっているように思われる。それらの人物は、私を愉快にし、不安にさせ、微笑させ、苦しめ、まるで、そのくさぐさの恋を生きてきたのは、私自身ではなかったような気になる。**

　あたかも未知の兄弟のように思える、それらすべての冒険家のなかで、私がほかの人物に増して、おそらくはいくぶんかよけいにひいきにしているのは、パリの可憐（かれん）なモデル女である、感動に堪えないアルレットの心を征服するために、《謎の家》をめぐって戦った紳士航海士、紳士探偵デンヌリ子爵だろう……。

* ギリシャ神話。テッサリア王の娘と息子とを連れ去った金色の牡羊。その皮と娘を守る竜をイアソンとアルゴーの乗組員が退治して娘を救い出す。

** ここに出ているのは、ルブランの他の諸作のそれぞれの主人公。

アルセーヌ・リュパンの未発表回想録の抜萃

私の冒険のいくつかを、できるだけ忠実に物語った既刊のいろいろな本を読みかえしながら気づいたことは、要するに、それらの冒険のいずれもが、私を駆ってひとりの女性の追及に向かわせた偶成的な情熱の結果だったことである。金羊毛皮*は姿こそうつりかわったが、私が征服を志したのは、いつでも金羊毛皮だった。そして一方また、そのたびごとに情況は私をして、名前と人柄をかえざるを得なくしたので、そのたびごとに、私は新しい生活をはじめ、その以前にはまだ一度も恋をしたことがなく、そのあとでは、もう決して二度と恋をしてはならないといった感銘をうけた。

そういうわけで、目を過去にふりむけたとき、あるいはカリオストロ、あるいはソーニア・クリチノーフ、あるいはドロレス・ケッセルバッハ、あるいは緑の目の令嬢の足許に私が見るのは、アルセーヌ・リュパンではなくて……ラウール・ダンドレジーであり、シャルムラス公爵であり、ポール・セルニンであり、ド・リメジー男爵である。すべての人

1　女優レジーヌ

その気のきいた思いつきは、よろこんで快楽を慈善的な催しに結びつける気前のいいパリ人士から大歓迎をうけた。話というのは、オペラ劇場の舞台で、ふたつのバレエのあいだに挟んで、一流の服飾店がデザインした衣裳をつけた芸術家や社交婦人など、二十人の美女を紹介しようというのである。観客の投票で、もっともみごとな衣裳を三つ選び、その夜の収益は、それを仕立てた三つのアトリエに分贈する。そしてその結果、一定数のお針子を、二週間、リヴィエラに旅行させるというのである。

たちまち運動が起こされた。二日間で、座席は、どんな小さいものまでも全部売切れになった。そして、公演の晩は、粋な群衆がひしめきあい、好奇心に満ちて押しかけ、その数は刻々増していった。

底を割れば、この好奇心は、いわばただ一点に集中されていて、とりかわされる言葉はすべて同じひとつのものを対象としており、それが会話に、尽きることを知らぬたねを与えているとい

かにもくったくのなさそうに、ほほえんでいた。廊下の戸口には、英国のポリスマンのようにたくましい、厳粛な三人の探偵が見張っているのを、ひとびとは知っていた。

　桟敷のなかには、ふたりの紳士が立っていた。まず、でっぷりしたヴァン・フーベン、つまり粋人宝石商で、その髪のかたち、頬にわざわざ紅(べに)をさしているところが、いかにも絵に描いた牧羊神の顔に見えた。その富はどうやって築いたのか、正確なことはわからなかった。昔は人工真珠商だったが、長い旅から帰ってきたときには、ごうせいなダイヤモンドの殿様になっていて、どうして、その転身が行なわれたかは誰も知らなかった。

　レジーヌのいまひとりの仲間は、くらがりにひっこんでいた。どうやらまだ若いらしく、そのシルエットは上品であるとともに、たくましかった。それが有名なジャン・デンヌリで、三月まえ、自動艇から上陸した人物で、この男はその船で、ひとりで世界一周をしたのである。前の週、この人物と知己(ちき)になったヴァン・フーベンがレジーヌに紹介したのだった。

　第一のバレエが、一般の無関心のうちに展開された。中幕のあいだ、レジーヌは出ようとして、桟敷の奥で話していた。レジーヌはヴァン・フーベンにたいしては、なんだか辛辣(しんらつ)で、挑戦的な態度をとり、逆にデンヌリにたいしては、気に入られたいとでもいったように愛想がよかった。

「おい、おい、レジーヌ」と、ヴァン・フーベンがいった。「そんなあしらいは見ていてはらはらするよ。きみは、これの頭を狂わせてしまう、この船乗りの。考えてもみなさい、一年も水の上で暮らすと、男は、てもなく火が燃えつく」

　ヴァン・フーベンは、いつでも下品な冗談口を叩いては、大きな笑い声をたてるくせがあった。

うのが実情だった。ひとびとは、ある小さな劇場のしがない歌手であるが、すこぶるつきの美貌の持ち主である、すばらしいレジーヌ・オブリーが、ヴァルハネ服飾店の作品であるローブをつけ、そのローブの上には選り抜きの純粋なダイヤを飾った、みごとなチュニックを羽織って現われるはずなのを知っていた。

それに、ひとびとの関心をいやがうえにもそそる、興味のある問題があった。すばらしいレジーヌ・オブリーが、数カ月以来、彼女を追いまわしている大富豪の宝石商でダイヤモンド皇帝と呼ばれていた男、ヴァン・フーベンの熱情に負けたかどうかという問題である。すべての情況は、どうもそうらしいことを示していた。その前日のある会見で、すばらしいレジーヌは次のように答えていた。

「あすは、ダイヤをつけることになるでしょう。ヴァン・フーベンが選んだ四人の職人が、いまわたしの部屋で、コルスレと銀のチュニックに、それをとりつけています。ヴァルムネもきていて、その仕事の指図をしています」

さて、レジーヌは二階正面の桟敷に君臨して出番を待っており、まるで、偶像のように、その前を人の群れが行列を作って流れていた。レジーヌは、いつでもその名前に《すばらしい》という形容詞をつけて呼ばれていたが、じっさいに、そういわれるだけの権利があった。不思議な現象によって、レジーヌの顔には、われわれが今日、その優雅、魅惑、ゆたかな表情を愛するすべてのものに共通な、古典的美のなかにある高貴さと、純潔さがやどされていた。白貂皮のマントが、その有名な肩を包み、驚嘆すべきチュニックをかくしていた。レジーヌは、幸福そうに、い

その若い娘は、じっさい、上品で、しなやかで、身のこなし、態度がなよやかで、優雅そのものといった印象を与え、その波打つ肉体にからまるローブは、きわめて簡素でありながらも、たとえようもない清らかな線を持ち、申し分のない趣味と独創的な想像力とを示していた。

「アルレット・マゾールですね」ジャン・デンヌリはプログラムを見ていった。

「そうですわ」とレジーヌは答えた。

それから、べつにいやみも、そねみもなくつけくわえた。

「わたしが審査員だったら、文句なく、アルレット・マゾールを一等にもってゆくわ」

ヴァン・フーベンは気を悪くした。

「じゃ、きみのチュニックは？　レジーヌ。そのチュニックのそばへ持ってゆけば、あのマネキンの身なりなんか、なんの値打があるんだね」

「お値段なんか、なにも関係はないわ……」

「なによりもまず値段だよ、レジーヌ。だからして、きみに注意するようにいっているんだ」

「なにに？」

「すりさ。きみのチュニックは、桃のたねで飾ってあるのじゃないことを忘れないでほしいね」

ヴァン・フーベンは笑い出した。しかし、ジャン・デンヌリは宝石商の言葉に賛成した。

「ヴァン・フーベンがいうとおりです。わたしたちがお伴をしてゆかねばならないでしょう」

「絶対にだめ」レジーヌは抗議をした。「わたしは、あなたたちがおっしゃっていた、わたしがここでひきおこしている騒ぎのことを気にしていますのよ。それから、オペラの舞台で、あまり

「あなたってば」レジーヌが批評した。「ご自分で先にお笑いにならないと、わたしはあなたが頓智をいっていらっしゃるのに気づかないわ」

ヴァン・フーベンは吐息をつき、むくれたようすを装った。

「デンヌリ、忠告するがね。この女に迷ってはいけないよ。わたしは、すっかり迷ってしまって、まったく不幸だ、石ころの山のように……宝石の山のように」と重々しくいい直してつけ加えた。

舞台の上では、衣裳の展示がはじまっていた。競争者はそれぞれ、二分間ぐらい舞台にとどまっていて、歩きまわったり腰をおろしたりして、クチュリエのサロンのマネキンのように次から次へとかわっていった。

自分の番が近づいたので、レジーヌは立ちあがった。

「わたし、すこし胸がどきどきするわ。一等がとれないなら、わたしは頭を射ち抜いて死んじまうわ。デンヌリさま、あなたは誰に投票なさる？」

「いちばん美しいひとに」デンヌリは小腰をかがめて会釈しながらいった。

「衣裳のおはなしよ……」

「衣裳は、わたしには興味はありません。かんじんなのは顔の美しさと、からだの魅力です」

「それでは」とレジーヌはいった。「その美しさと魅力を、いま、みなさんが拍手していらっしゃる若いかたをご覧になって、賞美なさるといいわ。あれは新聞で評判のシェルニッツの店のモデルで、自分で意匠をして、仲間のひとたちに頼んで仕立てさせたのですわ。ほんとうにうっとりするわ、あの娘」

しいレジーヌ・オブリーと、その衣裳の洗練された豪奢さのあいだには、原因をつきとめるに先立って、ひとに感銘を与える一種の調和があった。しかし、なによりもまず、宝石の眩きが、人目をそばだたせた。スカートの上に、銀の綾とりをしたチュニックが宝石の帯でぴったりと胴体にしめつけられ、胸元は、全部ダイヤだけでできているかと思われるコルスレで包まれていた。目もくらむばかりだった。石のひとつひとつの煌きが、たがいに交差し合って、胴体のまわりは、これただひとつの軽やかな炎となって、色もあやに、ゆらめいていた。

「すてきだ」とヴァン・フーベンはいった。「思っていたよりも、はるかにみごとだ、あの石ころは。それに、着こなしが、じつにいい、あのあばずれ女は。血筋がいいのかしら。まるで皇后さまだ」

ヴァン・フーベンはちょいとした、にやにや笑いをしてささやいた。

「デンヌリ、きみにひとつ、秘密を打ちあけよう。きみは、なんでわたしがあのたくさんな石ころで、レジーヌを飾りたてたか知っているかね。それはだ、まず、あの女がわたしに手を許すとき、贈りものにするためだ……もちろん、左手だよ、わかっているだろうが。(宝石商は笑いを嚙みころした)そして、そのつぎは、それによって、あの女に儀仗兵をひとりおしつけ、あの女のすること、なすことについて、ちょっとばかり、わたしに報告させるようにしたいためだ。わたしは、なにもあの女に惚れて、したいよる男なんかおそれているわけじゃない……が、わたしは目だけは大きくあけている……しかも、いい目をね」

ヴァン・フーベンは、相棒の肩を軽くたたいた。そのようすは、《おい、若いの、きみもおち

間が抜けてみえないかと」
「それに、保安部のベシュー部長が全部責任を持ってくれてる」
「ベシューを知っているのか」デンヌリは興味をもったようにいった。「……ジム・バーネット探偵社のあの謎のジム・バーネットと協力して有名になった探偵のベシューを……」
「ああ、あの男のことは、ベシューにいってはいけない。あの呪われたバーネットのことは。すると、ベシューは病気になる。どうもバーネットは、あいつをさんざんな目に合わせたらしい」
「そう、そういう話をきいたよ。……金歯の男の話だろう。それから、ベシューの十二枚のアフリカ株券の話。（「バーネット探偵社」参照）するとベシューが、きみのダイヤモンドの保護をひきうけたのか」
「そうなんだ。あの男は十日ばかりの予定で旅行にでかけた。しかし、高い金を払って元探偵を三人雇ってくれた、いま戸口を見張っている壮漢がそれだよ」
デンヌリは意見を述べた。
「一連隊雇ったって、相手の策略次第ではふせぎきれないだろうよ……」
レジーヌは出かけてゆき、探偵に付き添われて大広間を通り抜け、舞台脇にはいった。十一番目に出ることになっていて、十番目の競争者のあと、わずかばかりの間（ま）がおかれたので、その出場の前には、ほとんど崇厳（すうごん）といってよいほどの期待の一刻があった。沈黙が満場を領した。観客はいずまいを正した。そして、とつぜん、割れんばかりの拍手喝采（かっさい）。レジーヌがしずしずと進み出た。
完璧（かんぺき）の美しさと至高の雅致（がち）の結合のなかに、一種の威厳があって、観衆の胸をうった。すばら

ヴァン・フーベンは、はっとした。

「というと？」

「ききたまえ」

ヴァン・フーベンは耳をすませた。

「なにも聞こえない」

「たぶん、わたしのまちがいかもしれない」とデンヌリは白状した。「しかし、なんだかそんな気がしたんだが……」

デンヌリはみなまでいわなかった。平土間の前のほうの列や、舞台脇桟敷の前列がざわめいて、なにごとかが起こっているかのように、舞台の袖の奥のほうを眺めており、それが、デンヌリの注意をひいたのだった。あるものは、怯えたような仕草をして、立ちあがりさえしていた。燕尾服のふたりの男が舞台を横切って走った。そして、とたんに喚き声がひびきわたった。ひとりの道具方が、狂気のように叫んだ。

「火事だ、火事だ」

右手がぽっと明るくなった。煙が少しばかり渦巻いている。舞台の一方から一方へむかって、端役連、道具方の一隊が、同じ方向へとび出して行く。そのなかにまじって、ひとりの男がとびだす。その男もまた右手から現われたが、のばした両腕の先に、毛皮のマントを振りまわしており、それで顔をかくして、道具方といっしょになって喚き立てている。

「火事だ、火事だ」

よっかいをするんじゃないよ≫というかのようだった。デンヌリは保証した。
「わたしのことは、ヴァン・フーベン、心配せんでいいよ。わたしは、ひとの女房や、友人の愛人にはけっして手出しをしないことにしている」
ヴァン・フーベンは顔をしかめた。ジャン・デンヌリは、いつもどおり、なんだか茶化したような口のききかたをして、それが、この際、かなりひとをばかにしたような意味を持っているようにもとられた。ヴァン・フーベンはその点をはっきり確かめるはらをきめて、デンヌリのほうへ、からだをのり出した。
「きみが、わたしを友人と考えているかどうか知りたいものだね」
デンヌリが、今度は相手の腕をつかんだ。
「しっ、黙って……」
「えっ。なんだ。きみのようすは……」
「黙って」
「どうした？」
「なんだか変だ」
「どこが」
「舞台の袖が」
「なんのことで？」
「きみのダイヤのことで」

いった。
「さらわれた、きみの碌でもないダイヤのおかげで……奴は、準備万端ととのえて、あの女をのせるように待たせてあった自動車に、放りこんだにちがいない」
ヴァン・フーベンはポケットからピストルをとりだした。デンヌリは、その手首をねじあげた。
「まさか自殺するんじゃあるまいね」
「とんでもない」と相手はいった。「殺してやるんだ、奴を」
「奴って、誰を」
「泥棒だ。見つかるだろう。見つけねばならん。天地をひっくりかえしても見つけてやる」
ヴァン・フーベンはうわのそらで、げらげら笑う人群れのなかで、独楽のようにきりきりまいをしていた。
「おれのダイヤだ。ほうってはおけない。他人には権利はない。……国の責任だ……」

デンヌリの見当はまちがっていなかった。問題の男は、気絶したレジーヌを毛皮のマントでくるんで肩に担ぎ、オスマン大通りを横切って、モガドール町のほうへ向かって行った。そこに一台の自動車が停まっていた。男が近づくと、扉がひらき、厚いレースで顔をくるんだ女が腕をさし出した。男はそれにレジーヌを渡しながらいった。
「うまくいった。……まったくの奇跡だ」
それから扉をしめると、前の席に乗りこみ、発車させた。

レジーヌはすぐさま舞台からしりぞこうとしたが、力のほうがいうことをきかず、ぐったりとなって膝をついて倒れた。さっきの男は、マントでレジーヌをくるみ、肩に担いで、逃げまどう人の群れにまじってのがれ去った。

その男が行動を起こすまえ、おそらくは舞台に姿を現わすまえですらあったろう、ジャン・デンヌリは、桟敷のはしにすっくと立ちあがって、すでに恐慌状態におちいって、どよめいていた階下の大勢の観客を見下ろしながらどなっていた。

「動くな。ぺてんだ」

そして、レジーヌをかっさらった男を指さして叫んだ。

「あの男を捕えろ、あの男を捕えろ」

しかし、すでに手遅れだった。そして、そのできごとには誰も気づかなかった。平土間の後部桟敷の観客は静かになった。しかし、舞台の上のごったがえしは続いていて、その騒ぎで、声などは聞きとれそうもなかった。デンヌリはとび出し、大広間と平土間を駆けぬけて、苦もなく舞台によじのぼった。狂気のようなひとの群れのあとを追ってオスマン大通りに面した楽屋口まで行った。しかし、どこを探せばいいのか。誰にきけば、レジーヌ・オブリーが見つかるのか。

デンヌリはたずねた。ひとりとして、レジーヌを見たものはいなかった。ごったがえしのなかで、めいめい自分のことしか考えず、襲撃者は、誰にも気づかれずレジーヌ・オブリーを運んで、駆け足で廊下や階段を通りぬけ、やすやすと外に出ることができた。

デンヌリは、息をきらせて、頬の紅が汗で乱れて顎に流れているヴァン・フーベンを見つけて

たレジーヌには想像もつかなかった。なんども急角度で曲がるような印象をうけた。おそらく、万一追跡されている場合、それをのがれるとともに、レジーヌに、たどっている道筋をさとられないようにするためにちがいない。

とにかく、どこの入市検問所（一九四九年廃止）の前でも停まらなかったので、パリ市内から出ていないことはわかった。それに、電気の街灯のあかりが、間隔をおいてはひっきりなしにつづき、車のなかに明るい光を投げこむのを、レジーヌは認めた。

そのうちに、女が握りしめていた手を少しゆるめ、マントにほんのわずか隙間ができたので、レジーヌは、毛皮の上からつかんでいる手の指を二本だけ見ることができた。その指の一本は人差指で、三角形にならべた、小さな、上品な真珠が三つはめられた指輪をさしていた。

行程は、たぶん、二十分もつづいたろう。やがて、自動車はスピードを落として停まった。男が座席からとびおりる。門の二つの扉が、相ついで重々しく開き、中庭と思われるもののなかにはいった。

女はレジーヌをできるだけ目かくしをして、共犯者に手伝わせ、車から助けおろした。

六段ある石の正面階段をのぼる。それから石畳の玄関の間を横切り、絨毯（じゅうたん）をしいて、古い手摺（てすり）をつけた二十五段の階段をのぼり、二階のひと部屋にはいった。

今度は、男が同じように低い声で、耳もとでいった。

「ついたよ。おれは乱暴なことをするのは好まない。そのダイヤモンドのチュニックを渡せば、きみはなにも痛い目にあわないですむ。承知するか」

恐怖の結果女優が落ちこんだ自失状態は、長くはつづかなかった。火事、あるいは、火事だと思ったものから遠ざかって行くような感じがしだすと同時に、意識がもどった。そしてまず最初に考えたのは、救ってくれたひと、または、ひとびとにお礼をいうことだった。しかし、たちまち、顔を蔽っていたなにかで、息を塞がれるのを感じ、呼吸が苦しくなって、そのうえ、ものも見えなかった。

「どうしたんですの」とレジーヌはささやくようにいった。

女の声と思われる、たいへんに低い声が、レジーヌの耳もとでいった。

「動くんじゃないよ。助けを呼んだりなどすると、とんでもないことになるよ、おまえさん」

レジーヌは肩に激痛を感じて、叫び声をだした。

「なんでもないよ」女はいった。「ナイフの先だよ。……もっと強く押そうかね」

レジーヌは、もはや身動きをしなかった。そのうち、考えが秩序だってきて、情況のほんとうの姿がわかってきた。そして、かいま見た炎と、火事のはじまりのことを思い出し、こころのなかでくりかえした。

《さらわれたのだ……あの騒ぎを利用した男にさらわれた……そして、共犯者の助けをかりて、どこかへ運ばれている》

レジーヌは自由な手でそっと手探りした。ダイヤのコルスレはあった、まだ、手をつけられてはいないにちがいない。

自動車はたいへんなスピードで走っていた。とっている道は、暗闇の牢獄にとじこめられてい

部屋は、電灯があかあかと照らした、たいへんに広い客間で、青い絹を張った肱掛椅子や、普通の椅子、長い壁掛け、小テーブル、しらきの鏡板で飾られ、そのいずれもみごとで、もっとも純粋なルイ十六世王朝スタイルだった。大きくてゆったりとした暖炉の上方には、壁に鏡がはられ、金色の青銅のカップがふたつと、緑の大理石で作られた、小円柱つきの振子時計がひとつ飾られていた。壁には、四つの突出し燭台があり、天井には、何千という小さなカットグラスでできたシャンデリアがふたつあった。

無意識のうちにレジーヌは、こうしたすべての細部を胸にたたみこんでいたが、そのかたわらで、女はチュニックとコルスレを剝ぎとり、腕や肩が丸出しの簡単な銀糸のラメの胴着だけをのこした。レジーヌはまた、床がいろんな種類の木の板をたがいちがいに組み合わせて張ってあるのにも気づいた。そして、マホガニーの脚がついた、背のない腰掛けが一つあるのを認めた。

それでおしまいだった。あかりがとつぜんに消えた。闇のなかから声が聞こえた。

「よろしい。きみはものわかりがよかった。いまからいっしょに連れて帰ってやる。さあ、きみの毛皮のマントまで残しておいてやるよ」

なにか軽い布切れで顔をくるまれたが、それは、女がつけていたレースのベールと同じものらしかった。それから、また自動車にのせられて、同じ急カーブを描く旅路が再びはじまった。

「ここだ」男は扉をあけながら耳打ちして、レジーヌを車から降りさせた。「きみも見るとおり、なにも重大なことはなかった。きみはかすり傷ひとつ負わないで帰れる。しかし、ひと言忠告を与えておくがね、それは、きみが見たり推量したりしたことを、ひと言ももらさないことだ。ダ

「いや」レジーヌは激しい声で答えた。

「とりあげるのはやさしいことだ。そうしようと思えば、自動車のなかでだってできたろう」

「いや、いや」レジーヌはすっかり興奮して熱にうかされたようにいった。「このチュニックはだめ……いや……」

男は告げた。

「おれは、それを手に入れるために、あらゆる危険をおかした。そして、いま手にはいった。抵抗しないがいい」

女優は渾身の努力でからだを固くした。男がすぐそのまぢかでささやいた。

「おれが自分で始末せんといけないのか」

レジーヌはいかつい手がコルスレをつかみ、肩の肉に触れるのを感じた。すると、うろたえてしまった。

「さわらないで。そんなことはさせません。……さあ、……ほしいものはなんなりと……みんなあげます。……しかし、わたしにさわらないで、あんたなんか」

男は少し遠のいたが、レジーヌのすぐうしろに控えていた。毛皮のマントがすべり落ち、レジーヌはそれが自分のものだったのを知った。そして、へたへたとそこへすわりこんだ。今では、自分がいる部屋を見ることができた。そして、宝石のコルスレと銀のチュニックのホックをはずしはじめていたベールをかけている女が、黒いビロードのバンドがついた、プラム色の服をきているのを見た。

「おれのダイヤは。持ってかえったか、レジーヌ。……命にかけて守ったんだろうな、おれのダイヤを……」
　宝石商は、貴重なコルスレや、チュニックが剝ぎとられているのに気づいた。そして、発作的に逆上してしまった。ジャン・デンヌリが命令した。
「黙っていたまえ。……このひとは休息を必要とするのがわからないのか」
「おれのダイヤ。おれのダイヤがなくなった。……ああ、ベシューがいてくれたら。おれのダイヤ」
「わたしがとりかえしてやるよ。静かにしていたまえ」
　長椅子の上で、レジーヌはけいれんし、うめき声をだして震えていた。デンヌリは、その顔や髪に、あまり強くおしつけないようにして、規則正しく接吻をはじめた。
「これはまた、なんたるこった」ヴァン・フーベンがわれを忘れて叫んだ。「きみはなにをしてるんだ」
「委せておきたまえ、委せておきたまえ」とジャン・デンヌリはいった。「このちょいとしたマッサージほど心の休まるものはない。神経の平衡がとりもどせて、血行がよくなり、からだじゅうの血管にぬくもりがまわって気持がよくなる。磁気療法のようなものだ」
　そして、ヴァン・フーベンの怒り狂ったような視線の下で、デンヌリは、そのここちよい仕事をつづけ、一方、レジーヌはふたたび生気をとりもどして、この気のきいた手当に、うっとりと身をまかせているようだった。

イヤは盗まれた。それっきりの話だ。あとは忘れてしまうんだね。つつしんで、きみに敬意を表するよ」
　自動車は、すばやく走り去った。レジーヌはベールをとり去り、そこがトロカデロの広場なのを知った。自分のアパートのすぐ近くだったが（レジーヌはアンリ・マルタン通りに住んでいた）そこまでたどりつくには、たいへんな努力がいった。足がからだの重みでくず折れそうで、心臓がどきどきして気が遠くなった。いまにも日まいがして、なにかの塊のように倒れそうだった。しかし、力が尽きかけたとき、誰かが駆けよってくるのに気がつき、そのままジャン・デンヌリの腕のなかに倒れ、デンヌリはレジーヌを人影もない通りのベンチに腰をかけさせた。
「待っていたんですよ」とデンヌリはたいへんにやさしくいった。「ダイヤを盗んだあとは、きっとあなたの住居の近くに連れかえるにちがいないと信じたのです。あなたをひきとめておく理由がどこにある。それは危なすぎる。しばらく休息なさい。……それから、もう泣かないことだ」
　レジーヌは、急に力が抜けて、やっと知り合ったばかりのこの男にたいして、たちまち全幅の信頼をおき、すすり泣いていた。
「ほんとにこわかったわ……」とレジーヌはいった。「いまもこわいわ。……それに、あのダイヤ……」
　まもなくデンヌリは彼女をうちに入れて、エレベーターにのせて、アパートまで連れて行った。アパートは泡をくってオペラから帰ってきていた小間使や、そのほかの召使たちがいた。そのうち、ヴァン・フーベンが目の色をかえてとびこんできた。

四分の三、からっぽになったんだもの。あんな投票なんて意味ないわ」
「まったく、あんたって、いつだって、ひとを立てて、自分は消えてなくなろうとするのね、アルレット。いくらそうしたって、あのひとは、べそをかかねばならなかったのよ、レジーヌ・オブリーは」
「ところが、そんなこと、ぜんぜんないわ。あのひと、わたしに会いにきてくれたのよ。そして、わたし、いうけれど、そりゃ気持よく接吻してくれたわ」
「接吻したのは≪やいた≫からよ」
「なぜ、わたしを嫉妬するというの。あんなに美しいのに」
ひとりの≪見習い子≫が夕刊を持ってきた。アルレットは、それをひろげるといった。
「おや、まあ、捜査の記事がでているわ。≪ダイヤモンド泥棒……≫」
「みんなに読んできかせてよ、アルレット」
「こう書いてあるわ。≪オペラの怪事件はいまだに下調査の段階をでない。検察庁においても、警視庁におけると同様、もっとも一般に認められている推測によれば、本事件はレジーヌ・オブリーのダイヤモンドを奪う目的をもって、かねてから準備されていたものと解される。美しい芸術家を誘拐した犯人は、面をかくしていたので、その人相は、だいたいすらも判明していない。配達員として、大きな花束をかかえてオペラ劇場にはいりこみ、ひとつの戸口にそれを放置していった人物が犯人と推定されている。小間使は、その人物を見た漠然とした記憶があり、明るい色のラシャの胴がついた半長靴をはいていたといっている。花束は造花で特別に燃えやすい材料

2 マネキンのアルレット

その一週間後の午後の終わりごろだった。一流のクチュリエ、シェルニッツのお客たちは、モン・タボール町の大きなサロンから、ぼつぼつ引き揚げかけていた。マネキンたちの控室では、モデルの展示がひまになったので、アルレットやその仲間のマネキンたちは、めいめい好きな仕事にとりかかることができるようになった。つまり、カードうらないをしたり、ブロットのゲームをしたり、チョコレートを齧ったりする仕事である。

「ねえ、アルレット」とマネキンのひとりが叫んだ。「たしかに、なんどカードをひいてみたって、あなたの運勢は、恋と幸福と財産しかでてこないわ」

「カードはほんとうのことをいってるのよ」とべつのひとりがいった。「だって、アルレットの運は、あのオペラのコンクールの晩からもう開けてきはじめたんだもの。一等賞をもらったんだもの」

アルレットはきっぱりといった。

「わたしには不相応よ。レジーヌ・オブリーのほうがわたしよりかよかったわ」

「冗談じゃないわ。みんな、あんたに投票したんだもの。ひとかたまりになって」

「あのひとたち、自分でなにをしているかわからなかったのよ。あの火事のはじまりに場内は、

フランのダイヤモンド。ひどいことをしやがる。えらい災難だ≫って。そして、床が焼けでもするように、かわるがわる片足でとびあがっているのよ。みんな、おなかをかかえていたわ」

アルレットは立ちあがって、ヴァン・フーベンのように愉快そうにとびはねた。しごく簡単な服をきていたが——黒のサージのローブで、胴をほとんどしめていない——オペラで豪奢な衣裳をつけていたときと同じくらいに優雅な曲線を描いていた。長身で、ほっそりとした肉体は、よく均斉がとれて、この世にこれほど完璧なものはあるまいと思われた。顔立ちは上品で、きゃしゃで、肌が艶々しく、髪がなだらかに波をうち、美しいブロンドの色をしていた。

「踊りなさいよ、アルレット、せっかく立っているんだから、踊りなさいよ」

アルレットはダンスができなかった。しかし、ポーズをとってステップを踏み、そのようすは、ファッションの展示のときの、またとない風変わりな演出のようだった。愉快な、優美なみもので、仲間のものたちは、いつまでも見飽きなかった。みんな、アルレットを賛美し、仲間のマネキンたちにとっては、アルレットは、贅沢と楽しい生活を約束された運命をもつ特別な人間だった。

「すてきだわ、アルレット」と彼女たちは叫んだ。「ほんとにうっとりするわ」

「あんたって、わたしたちみんなのうちで、いちばんいいひとよ。だって、あんたのおかげで、わたしたちのうちの三人が、コート・ダジュール（地中海海岸）に行けるんですもの」

アルレットは仲間のものたちの前に腰をおろし、いきいきとばら色に顔を染めて目を輝かせ、なかば確信のある口調で話しかけた。その話しぶりには、ほほえましいいくぶんかの興奮に加え

が塗ってあったらしく、容易に燃えあがった。かねて予想していた、この火事のはじまりによって不可避的に生じた恐慌状態を利用してはじめて、犯人は小間使の手から毛皮のマントを奪い、その計画を実行することができた。それ以上のことはなにも判明していない。レジーヌ・オブリーは、すでに数回にわたって尋問されたが、自動車が通った経路も明確にし得ず、誘拐者とその共犯者についての印象も語ることができない状態だからである。記憶しているのはただ二義的な二、三の枝葉だけで、貴重なコルスレをはぎとられた、私邸の説明にとどまっている≫

「わたし、こわいわ。そんなうちに、その男と女につかまって、ひとりきりでいるなんて。あんたはどう、アルレット」と若い娘がいった。

「わたしだって。でも、わたしはあばれてやるわ。……わたし、いざとなれば勇気があるのよ。そのあとでは気絶するだろうけれど」

「でも、その男、あんたは通りすがりに見たんでしょう、オペラで」

「見たって……なにも見ないと同じだわ。……影を見たのよ、もうひとつの影を抱えた。わたしは、それがなにかさえ考えてみなかったの。自分のことで手いっぱいだったんですもの。考えてもごらんよ、火事だというのに……」

「それで、あんたは、なにひとつ注意して見なかったのね」

「そんなことないわ、ヴァン・フーベンの顔を見たわ、舞台脇で」

「すると、あのひとを知っていたの」

「いいえ。でも、あのひと、大きな声でわめいているんですもの。≪おれのダイヤモンド。千万

「お金は？」
「よくわかんないわ。わたしには夢があるのよ、野心が。いつもよく、あんたたちに話すでしょ。わたしは大金持になりたいのよ……わたしのためでなく……むしろ、ほかのひとたちのために……あんたたちのためによ……わたしの望みは……」
「話してよ、アルレット」
アルレットはほほえみながら、声をひそめていった。
「ばからしい話よ……子供の考えのような。わたしの望みは、お金をたんと持ちたいの。わたしのためにではなくて、わたしが自由にできるように。たとえば、出資して、大きなクチュリエの経営者に、主人になるのよ。そこでは、新しい組織を作って、うんと福祉施設を作るのよ。……そして、なによりもまず、働く女たちのために結婚の支度金を作るの。……そうよ、あんたたちみんなが、好きな結婚ができるように」
アルレットは、そのばかげた夢をやさしく笑っていた。ほかの娘たちは大真面目だった。ひとりなどは目を拭っていた。
アルレットは先をつづけた。
「そうよ。結婚の支度金よ、げんなまのほんとうの結婚支度金だわ。……わたしは教育がないでしょ……卒業免状さえも持っていないの。でも、とにかく、数字をつけて、まちがいだらけの綴りで、自分の考えの覚書を書いてみたの。二十歳になると、みんな結婚支度金がうけとれるようにするのよ。……それから、最初に生まれた子にお祝いのお金をくれて……それから……」

て、悲しみもあり、皮肉があった。
「わたしは、あんたたちよりも、いいひとでもなんでもないことよ。あんた、イレーヌほどの器用さもないし、シャルロットほどまじめでもないし、ジュリーほど正直でもないし。あんたたちと同じように何人も愛人を持っているし……わたしが与えたいよりももっとたくさんのことを、わたしに求める愛人を……でも、わたしは、やっぱり、じっさいに与えたいよりも、より以上のものを与えるの。そして、いつかは苦しい思いをさせられるのがわかっているわ。だって、しかたがないでしょ。わたしたちと結婚してくれるものなんて、だれもいないんですもの、わたしたちなんかと。いつだってあまりきれいな衣裳をつけているもんで、みんな、わたしたちを敬遠するのよ」
「あんたは、なにを心配するのよ」ひとりの若い娘がいった。「カードうらないで、幸運を約束されているんですもの」
「どうやって幸運をつかむの。おじいさんの金持？　いやなこったわ。でも、わたしは成功したいのよ」
「なにに？」
「知らないわ。……わたしの頭のなかは、それで渦をまいているのよ。恋もしたいし、お金もほしいし」
「どちらもいっしょに？　あきれたわ。なんのために？」
「恋は幸福になるため」

まった。自動車が一台停まっていて、歩道にひとりの男が立っており、黒い影しか見えなかったが、明るい色の胴をした半長靴をはいていた。男はつかつかと進みでるとアルレットに声をかけた。アルレットは車にのりこんだ。男も同じように乗った。車は通りの向こうのはしのほうへ走り去った。

「変だわ」とひとりのマネキンがいった。「わたしは毎日、あそこの前を通るのよ。でも、家にお医者の看板がでているのなんか見たことがないわ。三番地の二のブリクー先生なんて、あんた知っている？」

「知らないわ。銅板がきっと表門の下にでているのよ」

「とにかく」と女監督がいった。「電話帳を調べてみればいい……それから、パリ興信録を……」

一同は隣の部屋に駆けつけて、熱にうかされたような手で、小さなテーブルの上にあった分厚な二冊の本をつかみ、大急ぎでページをめくった。

「三番地の二にブリクーという医者か、ほかのどんな医者でもいい、いるにしても、電話はないわ」とひとりの若い娘がいった。

そして、いまひとりの娘が、それに応じて、

「パリ興信録にも、ブリクーって医者は、モン・タボール町にも、ほかの町にもでていないわ」

動揺と不安があった。めいめい意見をのべた。話がどうも変だった。女監督はシェルニッツに報せるべきだと考え、主人はすぐやってきた。まだほんの若い男で、血色が悪く、げびていて、土方のような身なりをし、なにごとにも無感動をてらい、いつでも即座にそのときどきの事態に

「アルレット、電話ですよ」
アトリエの女監督がドアをあけて、若い娘を呼んだ。
アルレットは、とたんに青ざめ、心配そうに立ちあがった。
「ママが病気なの」アルレットはささやくようにいった。
クチュリエのシェルニッツの店では、家族の死亡とか病気とかいった重大な通知しか、使用人に伝達しないことを、みんな知っていた。また、アルレットが母親孝行で、私生児であり、元マネキンをしていた姉がふたりあり、どちらも男といっしょに外国へ駆落ちしたことを知っていた。
一同の沈黙のなかで、アルレットは足を踏み出しかねていた。
「いそぐんですよ」女監督はうながした。
電話は隣の部屋にあった。半開きになった戸口におしかけて、娘たちは、絶えいるような声に耳をすました。アルレットはとぎれがちに話していた。
「ママが病気なんでしょ。心臓なの？　でも、あなたは、どなた。……あなたなの、ルーヴェンの奥さんなの。……お声がまるっきりちがっていて……それで、お医者は？　なんとおっしゃって。ブリクー先生、モン・タボール町三番地の二なのね。もう先生にはそういってあるの。それで、わたしがお連れするのね。いいわ、すぐまいります」
ひと言もいわず、わなわな震えながら、アルレットは戸棚のなかの帽子をつかむと出て行った。仲間の娘たちが窓にかけつけて見ると、街灯のあかりのなかをアルレットが番地を見ながら駆けて行っていた。通りのずっとはしで、左手の三番地の二とおぼしい家の前でアルレットは立ちど

クチュリエのシェルニッツは受話器をかけて、出てゆきながら、
「そうする以外に、ほかには方法はない」と結んだ。

できごとは、アルレット・マゾールの場合も、レジーヌ・オブリーの場合と、ほとんど同じ順序で運ばれた。車のなかには、ひとりの女がいた。自称医師が紹介した。

「ブリクー夫人です」

女は厚いベールをつけていた。それに、夜になっていて、アルレットは母親のことしか考えていなかった。さっそく、医者のほうは見もしないでたずねた。相手はしゃがれた声で答え、おとくいのルーヴェン夫人から電話がかかってきて、隣家の婦人を大急ぎできて診てほしい、途中で患者の娘を拾って連れてかえってくれとのことだったといった。男はそれ以上のことはなにも知らないといった。

自動車はリヴォリ町を通って、コンコルドの広場のほうへ向かった。広場を横切るとき、女はアルレットに毛布をかぶせて首のまわりをしめあげ、肩を匕首で刺した。

アルレットはあばれたが、その恐怖には、喜びが混じっていた。というのは、母親の病気はおびき出すための口実にすぎず、誘拐したのは、まったく別個の理由があってのことにちがいないと考えたからである。それで、やがて、おとなしくなってしまった。アルレットはきき耳を立て、観察した。

レジーヌと同じことを、今度はアルレットが感得した。パリの市の境界内の疾走、同じ急カー

即応して採るべき正確な行動を発見できると称していた。
「考える必要はない。まっすぐに問題の核心をつく。よけいな文句はひと言もいわない」というのが口癖だった。
落ちつき払って、シェルニッツは受話器をはずすと番号を告げた。相手が出てくると、
「もし、もし、レジーヌ・オブリー夫人のお宅ですか。……レジーヌ・オブリー夫人にシェルニッツが、クチュリエのシェルニッツが話したいことがあると取り次いでください」
シェルニッツは待っていて、やがてまた、話しだした。
「さようです、奥さん、シェルニッツです、クチュリエの。あなたには、わたしの店のおとくいになっていただく光栄をまだ持ちませんけれど、この際、あなたにお話しすべきだと考えたのです。話というのはこういう次第です。わたしのところでマネキンとして雇っている娘のひとりで……もしもし、そうです、アルレット・マゾールのことなのです。そんなにいっていただいては、まったく恐縮いたします。ですが、わたしは申しあげておかねばなりませんが、あなたに投票しました。……あの晩のあなたのローブは……いや、まっすぐに問題の核心にはいらせていただきましょう。じつは、奥さん、アルレット・マゾールが誘拐されたと信ずべき理由があるのです。きっと、あなたをかどわかした人物と同じ人間です。それで考えたのですが、あなたがた、つまり、あなたも、あなたのご相談相手のかたがたも、事件に興味をお持ちになるだろうと……もしもし……ベシュー部長をお待ちなのですか。それはけっこう……そうなのです、奥さん、お役に立つかもしれない情報をもって、この足ですぐおうかがいします」

なり階段をかけのぼり、控えの間をひとつ通り抜けて客間にはいりこみ、しかも、用心してうしろにドアを閉めるだけの落ちつきを持っていた。
厚いかさのついた電灯がひとつ、まん丸い光の輪を投げかけていて、部屋の全体をほのかに明るくしていた。どうしよう? どこかに逃げ口はなかろうか。奥にふたつある窓のうち、片方を開けようとしてみたが駄目だった。今では、こわくなっていた。あの男女がまず客間を探すことからはじめれば、すでに扉の向こうまで来ているはずで、いつ、はいってきて、とびかかるかもしれないことがわかっていたからだった。
じじつ、ドアががたがたと鳴る音がきこえていた。なんとかして、かくれねばならない。アルレットは壁ぎわによせてあった肱掛椅子の背を踏台にして、大きな暖炉の大理石のマントルピースの上になんなくよじのぼり、鏡沿いに、その一方のはしまで行った。そこには高い書棚が立っていた。アルレットは大胆にも、青銅のカップに足をかけて、書棚の境板をつかみ、どうやってだかは覚えていなかったが、その上に匍いあがることに成功した。ふたりの悪党が部屋に押しこんできたときには、アルレットは書棚の上にうつ伏せになって、棚板でからだをなかばかくしていた。
悪党たちは、目をあげさえすればアルレットの背中の起伏が見えたはずだったが、それをしなかった。客間の床のほうばかり探しまわり、長椅子や、肱掛椅子のうしろや、カーテンの陰をのぞいてみていた。アルレットは向こう正面にある、大きな鏡のなかにうつっているふたりの姿を、はっきりと見ることができた。しかし、顔はぼんやりして見分けがつかず、言葉もよく聞こえな

プ。自分の番をしている女の手は見えなかったが、靴の片方をかいま見た。ひどく先がとがった靴だった。

ふたりの共犯者が、たいへんに低い声で、明らかに、アルレットには聞こえないと確信して、とりかわしていた会話のはしばしも聞くことができた。しかし、あるひとつの文句は、完全に全部きこえた。

「あんたはまちがっているわ」と女はいった。「まちがっているわ。どうしてもやるというんだったら、何週間か待つべきだったわ。……オペラの事件のあと、あんまりはやすぎるわ」

その文句の意味は、アルレットには、はっきりしているように思えた。レジーヌ・オブリーが司直に訴え出たと同じ人物が、自分をかどわかしたのだ。自称ブリクー医師はオペラの放火犯人なのだ。しかし、なんでまた自分を襲ったのだろう。自分はなにも持っていない。つけ狙われるようなダイヤのコルスレも、どんな種類の宝石も持っていない。そう思いつくと、アルレットは安心した。たいして恐れるものはもっていない。過ちがわかればすぐ釈放してくれるだろう。

門の重い扉の音がひびいた。レジーヌの冒険の思い出をたどっていたアルレットは、石を敷いた中庭にはいったのを察した。正面の踏段の前で、車からおろされた。それから玄関の石畳。

そのころは、アルレットはすっかり冷静さをとりもどし、自分の力を感じていたので、本能の呼び声に抵抗することができず、まったく不用心とも思われるような行動に出た。男が玄関の扉を閉めているとき、女が石畳で足をすべらせ、ほんの一瞬、アルレットの肩をはなした。アルレットは反省するひまもなく、頭からかぶされていた毛布をかなぐりすてて前方にとび出し、いき

アルレットは八時も聞いた。九時も、十時も。身動きもしないでいた。する勇気がなかった。男のおどし文句が、彼女をうずくまったまま押えつけ、おののかせていた。

夜中すぎになってはじめて少しは冷静になり、こうしてはいられないと感じ、隠れ場所から下におりた。青銅のカップが倒れて床に落ち、その音があまりにもすさまじかったので、若い娘は、化石したように立ちすくみ、苦悩によろめいた。けれども誰もやってこなかった。アルレットはカップを元の場所にかえした。

煌々(こうこう)としたあかりが外からさしこんでいた。窓のひとつに近づいてみると、庭園があり、目がさめるような明るい月の光のもとに、灌木に縁取られた芝生がひろがっていた。こんどは窓を開けることに成功した。

からだを乗りだしてみると、家のその側は、地面が盛り上がっているらしく、一階分の高さはなかった。アルレットはためらうことなくバルコニーをまたいで、砂利のうえにからだを落としたが、べつに痛くもなんともなかった。

雲で月が隠れるのを待っていて、アルレットは大急ぎで空地を横切り、うすぐらい灌木の植込みまでたどりついた。小走りに植込みに沿うて行くと塀に達したが、あかりをまっこうからうけて立っていて、それに乗り越えようとするには高すぎた。小さな、あずまや風の建物が右手の塀に沿ってあり、ひとは住んでいないらしかった。鎧戸(よろいど)がすっかりおろされていた。アルレットは、そっと近づいた。その小さな建物の前の塀に出入口があり、閂(かんぬき)をさして、錠前には大きな鍵がさしてあった。アルレットは閂をはずし、鍵をまわして、扉をひきよせた。

かった。ひどく低い、おしひそめた声で話していたからである。
「ここにはいない」とやがて男がいった。
「きっと庭にとびおりたのだろう」女が注釈をくわえた。
「そんなことはあり得ない。窓はふたつとも閉まっている」
「アルコーヴ（壁の凹みで、ベッドなどをおく）かもしれない」
左手の、暖炉とひとつの窓のあいだに、昔サロンによくついていたような小さな部屋がひとつあり、アルコーヴになっていて、あけたてのできる仕切りがしてあった。男は、その仕切りをあけた。
「誰もいない」
「すると？」
「すると、なにがなにやらだ。ことは重大だ」
「なぜ」
「もしも逃げ出したのなら」
「どうして逃げ出せる？」
「そうだ、まったく。ああ、あのあばずれ女め。つかまえたがさいご、目にものみせてやる」
ふたりは電灯を消して部屋からでて行った。
暖炉の振子時計が七時を打った。そのかんだかい、古風な小さな音が、金属音のように、はっきりとひびいた。

た。母親が心配して、注意深く不安そうに彼女を眺めていた。アルレットは、それにほほえみかけようとした。紳士が母親にいった。
「奥さん、まだ、なにもきかないで。だめですよ、お嬢さん、口をきいては。まあ、お聞きなさい。あなたの主人のシェルニッツが、レジーヌ・オブリーに、あなたが、あのひとと同じ情況で誘拐されたと知らせてきたのです。そしてすぐと警察に届け出ました。そのあとで、わたしを友人扱いにしてくれているレジーヌ・オブリーが、そのことを、わたしに知らせたので、さっそくこちらにきたような次第です。お母さんとわたしとふたりで、夕方からずっとお宅の前で待ちうけていました。レジーヌ・オブリーと同じように、あなたも釈放するだろうと期待をかけたのです。あなたが乗ってかえったタクシーの運転手に、どこから来たかをききますと、≪ヴィクトワール広場から≫といいました。そのほかのことは、なにも知っていませんでした。いや、動かないで、そのままにして。あなたの話は、夜があけてからゆっくりうかがいましょう」
若い娘は、悪夢のように悩ます思い出と、熱にゆさぶられてうめいていた。目を閉じて、ささやくようにいった。
「誰か階段をあがってくるわ」
じっさい、誰かが呼鈴をならした。母親が控えの間に出て行った。ふたりの男の声がひびき、その一方の声がいっていた。
「ヴァン・フーベンです、奥さん。わたしはヴァン・フーベン、あのダイヤモンドのチュニックのヴァン・フーベンです。あなたのとこの娘さんがかどわかされたとき、ちょうど旅行から帰っ

扉をあけて、通りにとび出すだけの時間しかなかった。うしろをちらとふりかえって見ると、走って追っかけてくる人影が見えた。

通りには人影はなかった。たぶん、五十歩くらい走ったときだろう、ふりかえって見ると、スピードを増して追ってくるように思われる影がみえた。恐怖がアルレットをとらえ、心臓があえぎ、足がすくむにもかかわらず、追いつかれてなるものかと意気込みを感じた。

無我夢中の感じ。とつぜん力が抜けて膝がくずれ、もうすこしで倒れかけた。しかし、そのときは、通行人があまたの賑やかな別の通りにはいりこんでいた。タクシーが一台通りかかった。所番地をいって乗りこみ、ドアを閉めたとき、うしろの窓から見ると、敵は別の車に吸いこまれて、その車はたちまち走りだした。

いくつもの通り……さらにまた別の通り……尾けてきているのだろうか。アルレットは、なにもわからなかった。わかろうと求めもしなかった。とたんに小さな広場にでて、停車したタクシーが並んでいた。アルレットはガラス窓を叩いた。

「運転手さん、停めて。ここに二十フランあるわ。急いで先をつづけて、わたしを尾けてきているひとをまいてちょうだい」

アルレットは別のタクシーにとびこみ、新しい運転手にもう一度、所番地をいった。

「モンマルトルのヴェルドレル町五十五番地よ」

危険は逃れたが、すっかり疲れて気絶してしまった。

正気づくと、自分の小さな部屋の長椅子の上にいて、そばには知らない紳士がひざまずいていてい

経をいらだてないようにしてやるんだ……あすの朝のことだ」
ヴァン・フーベンは戸惑いしていた。アルレット・マゾールの母親は、こんどの事件がなにがなにやら、さっぱりわからなかった。しかし、一同のそばに、誰よりもあきれかえって狼狽している人間がひとりいた。ベシュー巡査部長である。
ベシュー部長は、粋を気取った青白い顔の痩せた小男で、二本のでかい腕をそなえ、目をひんむいて、おそろしい幽霊にでも出会ったかのようにジャン・デンヌリを眺めていた。部長はデンヌリを知っているようでもあり、また知っていないようでもあり、この若々しい、微笑をたたえた面の下に、彼ベシューにとっては悪魔そのものである、別の顔がありはしないかと探しているようすだった。
ヴァン・フーベンが紹介した。
「ベシュー巡査部長だよ。……こちらはジャン・デンヌリさん……だが、ベシュー、きみはデンヌリを前から知っているようなようすをしている」
部長は話してみたかった。質問してみたかった。しかし、それができないで、相変わらず目を丸くして、妙な治療法をつづけている冷静そのもののような人物を眺めていた。

てごられたベシュー部長と、さっそく捜査にとりかかったのです。あちこちと警察署を走りまわったあげく、こちらへうかがいました。門番の話でアルレット・マゾールさんが帰られたと知り、ベシューとわたしは、さっそく娘さんの話をききにきたわけです」

「でも、あなた」

「これはたいへん重大な事件ですよ、奥さん。この事件は、わたしが盗まれたダイヤモンドの事件につながりがあります。同じ悪党です。……一分でもむだにしてはならない……」

そして、許しも待たないで、ヴァン・フーベンはベシュー部長を従えて小さな部屋にはいって行った。目の前にひらけた光景には、さすがの宝石商も、どはずれに面喰ったらしかった。友人のジャン・デンヌリが長椅子の前にひざまずき、そのかたわらに、若い娘が横たわっていて、ジャン・デンヌリはまじめくさって、熱心な態度で、娘の額や、まぶたや頬に、やさしく接吻していた。

ヴァン・フーベンは、へどもどしながらいった。

「きみか、デンヌリ。……きみといえば……いったい、そこでなにをしているんだ」

デンヌリは腕をのばして、静かにするように命じた。

「しっ。そんなに騒々しくしないで。……娘さんを落ちつかせているんだ。……こんなに心のやすまるものはない。ご覧、すっかり委せきっている……」

「しかし……」

「あす……あすだ……レジーヌ・オブリーのうちに集まろう。それまで、病人は休息だ。……神

をしたのは、わたしだけだ」
「アルレット、ヴァン・フーベンがいうことなんか気にしないでいいのよ」レジーヌが抗議を持ちだした。「このひとはぜんぜん教育がなくて、そのいうことなんか、まったく三文の値打もないの」
「それじゃ、誰がもっと教育があるかいってあげようかね、レジーヌ」ヴァン・フーベンはぷりぷりしていった。
「おっしゃいよ」
「それではいうがね、ゆうべ、わたしは、きみの大事なデンヌリが、アルレットさんの前にひざまずいて、十日ほど前にきみを生きかえらせた、あのちょいとした治療法を、アルレットさんに実験している現場を見たんだよ」
「そんなこと、いま、ふたりがわたしに話してくれたわ」
「えっ、なんだと。では、きみはやきもちをやかないのか」
「やきもちって」
「これは、これは。すると、デンヌリ君はきみをくどかなかったのか」
「白状すると、それに近いことはなすったわ」
「すると、きみは認めるのか……」
「デンヌリはすばらしい方法を心得ていて、それを実行しているんだわ。それは、このひとの義務よ」

3　紳士探偵デンヌリ

予定された会合は、レジーヌ・オブリーの居間で二時に開かれた。ヴァン・フーベンが行ってみると、デンヌリはまるでわが家のようにかまえて、美しい女優やアルレット・マゾールと笑い興じていた。三人ともたいへん愉快そうだった。アルレット・マゾールは少し疲れてはいたが、そのくったくのない、楽しそうなようすを見ると、これが、前の晩、あんな不安なときを過ごしてきた女とは思えなかった。アルレットはデンヌリから目をはなさず、レジーヌと同じように、そのいうことはなんでもうけいれ、デンヌリの愉快な話しぶりに笑い興じていた。

ヴァン・フーベンは、ダイヤモンドを失ったことでひどい打撃をうけ、人生が悲劇にみえて、がみがみ声で叫んだ。

「いったいぜんたい、ことの成りゆきは、きみたちにはそれほどおもしろいのかね、きみたち三人とも」

「わたしに、いわせると」デンヌリは答えた。「なにもそうあわてるほどのことはない。じっさい、万事なかなかうまくできている」

「なんたることを。かっぱらわれたのは、きみたちのダイヤじゃない。アルレットさんにいたっては、けさの全部の新聞が事件を書きたてている。たいした広告だ。このいまいましい事件で損

同じに、ジャン・デンヌリの顔をあながあくほど凝視し、声をはげましていった。

「ヴァン・フーベンさん、わたしが留守にしていたあいだ、あなたのダイヤモンド事件は、わたしの同僚のひとりに担任させてありましたが、今後わたしが捜査に参与することはもちろんで、その点、疑問の余地はありません。すでに、アルレット・マゾールさんの住居に出向いて取調べをする命令をうけています。しかし、まえもってきっぱりと申しあげておかねばなりませんが、わたしは、あなたのご友人の誰からも、公然だろうと、内密だろうと、断じて協力はうけません」

「そりゃ、はっきりしている」ジャン・デンヌリは笑いながらいった。

「きわめて、はっきりしています」

デンヌリはくそ落ちつきに落ちついていたが、驚きをかくそうともしなかった。

「これはしたり、ベシゥー君、じっさい、ひとは、わたしがきみにたいして厚意をもっていないと思うだろうよ」

「失礼ですが、そのとおりです」相手はぶっきらぼうにいった。

そして、デンヌリのそばによると、まっこうからのぞきこんでいった。

「わたしたちは、いままでに、一度も会ったことがないのは、たしかですね」

「あるよ、一度だけ。二十三年前、シャン・ゼリゼで。いっしょに輪投げをしてあそんだ……わたしはきみを足搦みにして倒し、きみがそれを根に持っているのが、よくわかる。ヴァン・フーベンさん、ベシゥー君のいうとおりですよ。われわれのあいだには協力はあり得ない。きみに自

「そして、快楽さ」
「なおさらいいじゃない、このひとにとっては」
　ヴァン・フーベンはなげいた。
「ああ、このデンヌリといったら。まったく運がいい。きみを好き放題にしおって……もっとも、どの女でもみんなそうだが」
「そして、どの男もみんなよ、ヴァン・フーベン。だって、あなたがこのひとをきらえば、あなたのダイヤはかえってくる見込みはないんですものね」
「そうかもしれん。しかし、わたしは、この男の協力は絶対に求めない決心だ。ベシュー部長が、ひと肌ぬいでくれると、それに……」
　ヴァン・フーベンは、その言葉をいい終わらなかった。ふりかえってみると、ベシュー部長が入口に立っていた。
「おや、きていたんだね、部長」
「つい今しがた」ベシューはいって、レジーヌ・オブリーに会釈をした。ドアは半開きになっていた。
「きみは、わたしがいったことを聞いたかね」
「聞きました」
「わたしの決定をどう思う」
　ベシュー部長はしかめ面をしていて、その態度には、どこか挑戦的なものがあった。前の晩と

デンヌリはひと言も口出ししないで耳を傾けていた。ときどき、レジーヌが相槌をうった。

「そのとおりよ……六段の石段……そうだわ、黒と白の石畳の玄関……そして、二階の正面の客間で、青い絹張りの調度」

アルレットが話し終わると、デンヌリは両手を背中で組んで部屋を大股に歩いて窓ぎわに行き、額をガラスに貼りつけ、かなり長いあいだ考えこんでいた。それから、歯のあいだでつぶやくように結論をのべた。

「難事件だ……じつに難事件だ。……しかしながら、いくらか光明はある……トンネルの出口を示す、最初のほのかな光が」

デンヌリは長椅子にかえると、若い女たちにいった。

「きみたちにもわかるだろうが、これほどよく似通った二つの事件が併行して行なわれ、手口が同じで、主役が同じ場合——敵の男女が同一人であることは否定できないので——この二つの冒険のどこが、たがいにちがっているか、まず、その点を発見しなくてはならない。それを発見したら、いっさいの確実なことをつきとめるまで、そこから目をはなしてはならない。ところで、よく考えてみると、かんじんな点は動機のちがいにあるように思われる。レジーヌ、きみの誘拐と、アルレット、きみの誘拐とは、それぞれ、ちがった動機でやったものなのだ」

デンヌリはちょっと言葉を切って笑い出した。

「わたしがいまいったことは、とるに足りないことのように見える。少なくとも、ラ・パリースの真理*(わかりきったこと)のように見えるだろう。しかし、わたしはあえて断言するが、そこがじつにも

由をかえしてやるよ。わたしはわたしで働く。きみたちはひきあげてよろしい」
「わたしたちにひきあげろって?」ヴァン・フーベンがいった。
「そうさ、われわれは、いま、レジーヌ・オブリーのうちにいる。きみたちを呼んだのは、このわたしだ。意見が合わないからには、おさらばだよ。帰りたまえ」
デンヌリは長椅子のふたりの女のあいだに、どさりと腰をおろして、アルレット・マゾールの手をとった。
「さあ、わたしの美しくて、かわいいアルレット。きみももう落ちついたろうから、時間のむだをしないことにしよう。あったことをくわしく話してほしい。どんな些細なことでも、むだということはない」
そして、アルレットがためらっていると、デンヌリはいった。
「このふたりの男のことは気にしないでいい。ここにいないものと考えるんだね。帰って行った。だから、アルレット、さあ、話したまえ。わたしは、きみと呼ぶことにするよ、なにぶん、わたしの唇を、きみの頰に触れたことがあるんだからね。じっさい、ビロードよりもやわらかだった。それで、わたしは、きみの愛人である権利を与えられたわけだ」
アルレットは赤くなった。レジーヌは笑って、アルレットに話すようにうながした。ヴァン・フーベンとベシュゥーは知りたかったし、その話を利用したかったので、蠟人形のように床に釘づけになっていた。そして、アルレットは、彼女もほかのものもデンヌリが求めるからには、とうてい抵抗できそうもない、いっさいの物語をした。

「しかし、誰かいいよったものはあるだろう、ピエールとか、フィリップが……」
アルレットは無邪気に抗議した。
「いいえ、オクターヴとジャックという名前でしたわ」
「まじめな青年だったかね、そのオクターヴとジャックは？」
「ええ」
「すると、あんな悪企みはできそうもない青年か」
「できそうもありません」
「それでは」
「それでは、どうなんですの」
デンヌリはアルレットの上からかがみこみ、しみ入るような力をこめて、やさしく、ささやいた。
「よく探してみるんだ、アルレット。きみの生涯の外部的な、はっきりと目に見える事実を思いだせというのではない。きみのこころを打ったこと、きみが愛したとか愛さなかったことを思いだすのではない。きみの意識をほんのかすかにかすめすぎたこと、いわば、忘れてしまっていることを思いだすのだ。なにか、少しく特別で、少しく異常なことがなかったかね」
アルレットは微笑した。
「いいえ、けっして……なんにも……」
「いや、ある。目的がなにもなくて、きみを誘拐することなんかあり得ない。たしかに、以前に

って重大な点だ。それでもって、事態はとたんに簡単になる。きみは、美わしのレジーヌ、いさかの疑いもなく、そこの律儀なヴァン・フーベンが、ありったけの涙をだして泣いているダイヤモンドが原因で誘拐されたのだ。その点、異論はあり得ない。そこにいるベシュー君自身も、わたしと同一意見なのを確信する」

ベシュー君は一言も口をきかず、演説のつづきを待っていた。ジャン・デンヌリは、もうひとりの女友だちのほうへ向き直った。

「きみのほうは、ビロードよりもやわらかな頬をした、かわいいアルレット、なぜ、苦労して、きみをとらえたりなどしたのだろう。きみの全財産は、たぶん、きみの手の凹みにすっぽりとのつかる程度のものにすぎないだろう、どうだね」

ビロードよりもやわらかな頬をしたアルレットは両方の手のひらを見せた。

「からっぽじゃないか」とデンヌリはびっくり声を出した。「すると、泥棒説は除外される。のこる唯一の動機として、恋か、復讐か、または、きみを使えば便利か、あるいはきみがいては邪魔になる、なにかの計画があり、それを実行するための方便としてきみをかどわかしたのだ。アルレット、失礼なことをいって勘弁してほしいが、恥ずかしがらずに答えてほしい。きみはいままでに恋をしたことがあるかね」

「ありそうもございませんわ」とアルレットはいった。

「恋されたことは?」

「わたしは存じませんわ」

「その男は、三月ほどまえ、ある午後、妹のかたをつれて、店にやってきたのです。その日は、慈善事業に寄付するためのファッションの展示会があり、それを見るためにたくさんのひとがきていました。わたしは、そのひとにちっとも気づかなかったのです。しかし、ひとりの友だちが教えてくれたのです。≪ねえ、アルレット、あんたは、とうとう征服してしまったわ、すてきな、すごくシックな男を。あんたを、あながあくほど夢中になって見つめていたわ。監督さんの話ではなにか社会事業をしているかたよ。うまくいったわねえ。アルレット、あんたは、お金をほしがっていたんだもの≫」

「お金をほしがるって、きみが」デンヌリが口をはさんだ。

「友だちが、わたしをからかって、そういっているんですのよ」アルレットはいった。「わたしが、アトリエの救済基金を、結婚支度の基金を作りたいといっていたものですから。要するに、夢物語ですわ。それから一時間ほどしてわたしがお店を出ますと、出口に、ひとりのりっぱな紳士のかたが待っていて、あとを尾けてくるのに気づきましたが、わたしは、たぶん、なんとかして、いいのがれができるだろうと考えました。しかし、地下鉄の駅まで行きますと、そのひとは、それっきり尾けてくるのをやめてしまいました。その翌日も同じことで、そのあとの日も毎日そうでした。でも、わたしの気のまわし損で、一週間ほどたつと、そのひとは、もうこなくなってしまいました。それから何日かたって、ある晩……」

「ある晩？……」

アルレットは声を低くした。

なにごとかがあって、ある行動が、きみには知らさないで、きみにたいしてとられたはずだ……よく探してみるんだよ」

アルレットは全力をあげてさがした。記憶のなかから、求められている眠った小さな思い出をひきだそうと、一所懸命になっていた。そして、ジャン・デンヌリはさらに説明した。

「誰かが、くらがりで、きみのまわりをうろついているのを感じたことはないか。なにか神秘めいたものに触ったように、不安なかすかな戦慄を感じたことはないか。わたしがいっているのは、現実の危険のことではなくて、≪おや、……どうしたのだろう……なにごとかしら……なにが起ころうとしているのかしら≫と考えるような漠然とした脅威のことだ」

アルレットの顔が少しくひきつった。目が一点を凝視しているようだった。ジャンが叫んだ。

「それだ。わかった。ああ、ベシゥーとヴァン・フーベンがここにいないのは残念だなあ……さあ、説明してくれ、アルレット」

アルレットは考え考えしながらいった。

「いつか、あるとき、ひとりの男のかたが……」

ジャン・デンヌリは、アルレットを長椅子から、いきなりかかえあげて、その前置きの言葉で夢中になって、アルレットといっしょに踊りはじめた。

「それでわかった。まるでお伽ばなしのようなはじまりだね。いつかあるとき……おお、きみは、じつに愛らしい、やわらかな頬のアルレット。それで、きみのその男のかたはどうした」

アルレットはまた腰をおろして、ゆっくりとした声であとを話した。

「ブルヴァールの散歩人種のようにか」ジャン・デンヌリが勢いこんで叫んだ。
「そうですわ」とアルレットは答えた。
ヴァン・フーベンとベシューはぽかんとしていた。すっかり感動したレジーヌがたずねた。
「だって、アルレット、あんた、忘れたの。オペラでわたしを襲った男も、そんな半長靴をはいていたわ」
「ほんとだわ……ほんとだわ……」とアルレットはいった。「わたしはうっかりして、そのことを忘れていたわ」
「それから、アルレット、あんたのもよ……ゆうべの男……偽医者のブリクーも……」
「そうだわ、ほんとだわ」若い娘は同じ文句をくりかえした。「わたし、そのふたつのことをいっしょにして考えなかったの。……いまになってはじめて、はっきりと思い出しただけなの」
「アルレット、あと、ひとふんばりだ。きみはその男の名前をいわなかった。知っているのか」
「ええ」
「なんという名前だ」
「メラマール伯爵」
レジースとヴァン・フーベンは思わず身震いした。ジャンはびっくりした身ぶりをしかけてそれを抑えた。ベシューは肩をすぼめ、ヴァン・フーベンが叫んだ。
「だって、そんなばかげた話があるものか。アドリアン・ド・メラマールだって……わたしは会ったことがあって知っている。慈善事業の委員会で、伯爵と隣合わせにすわったことがあった。

「それがですの。わたしは時々、家で夕食をすませて、後片づけをしたあと、母をうちにおいたまま、モンマルトルのずっと上に住んでいる友だちに会いに行くことがあるんです。友だちのうちに着く手前にかなり暗い小さな通りがあって、そこを曲がるのですが、十一時が鳴って帰ってくるころには、その通りには全然人影はございません。ところが、その通りで、三度もつづいて、一軒の建物の正面の凹みで、男のひとの影を見たのです。二度目までは、そのひとは身動きもしませんでした。しかし三度目には、隠れ場所から出てきて、わたしの行く手をふさごうとしました。わたしは叫び声をだして、駆けだしました。相手は追ってまではきませんでした。それからは、わたしはその通りは通らないようにしています。話というのは、それだけですわ」

アルレットは口をつぐんだ。ベシウーもヴァン・フーベンも、その話には興味がないらしかった。しかし、デンヌリはたずねた。

「きみはどういうわけで、そのふたつの小さな事件の話をしたのかね。そのあいだに関係があると思うのか」

「ええ」

「どんな」

「待ち伏せしていた男は、前にわたしのあとを尾けた男と同じにちがいないと信じているんです」

「しかし、なんに基づいて、そう確信するのかね」

「わたし、三度目の晩、モンマルトルの男がゲートルか、または、明るい色の胴がついている靴をはいているのを見てとるだけの余裕があったのです」

調査もせず、容疑もなく、令状も持たないで、ばかげたよた話をたねに、ひとを尋問できると思っているんですかね。そうですとも、ばかげたよた話ですよ。この半時間ばかりきかされた話はみんな、愚の骨頂ですよ」
デンヌリが呟くようにいった。
「こんな阿呆と輪遊びをしたなんて。後悔のかぎりだ」
そして、レジーヌのほうを振り向いた。
「きみ、気の毒だけれど、電話帳を調べて、アドリアン・ド・メラマール伯爵のうちを呼びだしてくれないか。ベシゥーをわずらわすまでもない」
デンヌリは腰をあげた。まもなく、レジーヌ・オブリーが受話器を渡し、デンヌリは話した。
「もしもし、メラマール伯爵のお宅ですか。こちらはデンヌリ男爵と申すものです。……メラマール伯爵ご当人ですか。伯爵、お邪魔をしてあいすみません。じつは、二、三週間まえ、あなたが新聞に出された広告を読んだのです。火ばさみの柄とか、銀の蠟燭さしとかはめこみ錠、半分にちぎれた青い絹の呼鈴のリボンとかを盗難にあわれたそうで……みんなくだらない品物だけれど、あなたには、特別な理由があってご執心とかで。……それにまちがいはございませんでしょうか。伯爵。……そうでしたら、わたしにお会いくだされば、その件について、いくらか情報をさしあげることができると思います。……きょう、二時ですか。……けっこうです。……あっ、もうひと言。そのさい、婦人をふたり連れて行くのをお許しねがいたい、その役割は、いずれ、その節説明します。……ご親切にいっていただいて、伯爵、まことに恐縮いたします」

りっぱな紳士で、わたしは握手をするのを光栄とするだろう。メラマール伯爵がわたしのダイヤを盗むなんて、ばからしい」
「でも、わたしはなにも、あのかたをどうのこうのと非難しているのではございませんわ」アルレットはうろたえていった。「わたしは名前をいっただけですわ」
「アルレットのいうとおりだわ」レジーヌがいった。「アルレットは、きかれて返事をしただけよ。しかし、世間で、メラマール伯爵や、あのかたといっしょに住んでいる妹について知っていることから判断すると、あのひとは、町であんたを待ち伏せしたり、わたしたちを、あんたとわたしを誘拐したりした人間でないことはあきらかだわ」
「伯爵は明るい胴の靴をはいているのか」ジャン・デンヌリがさいた。
「知りません。でも、そうね……ときどき……」
「ほとんど、いつでもだ」とヴァン・フーベンがはっきりといった。
その断定の言葉のあと沈黙がつづいた。それから、ヴァン・フーベンがまたいった。
「なにか、そこには誤解がある。くりかえしていうが、メラマール伯爵は申し分のない紳士だ」
「会ってみよう」とデンヌリはむぞうさにいった。「ヴァン・フーベン、きみは、ベシューという、警察の友人を持っているではないか。その男が、われわれを入れてくれるよ、その警察の男が」
ベシューは立腹した。
「すると、あんたは、そんなにして、ひとのうちにはいれると思っているんですかね。前もって

二分おくれて辞去した。しかし、三階の踊り場で、ふたりにまた会った。そこで、ベシューは、急にかんしゃくを起こして、ヴァン・フーベンの上着の襟をつかんでいた。

「いや、わたしは、これ以上黙ってみているわけにはいかない。あなたが、今の道をつづけてゆけば、結局、破滅となるのはわかりきっています。だめです。わたしは、あなたを詐欺師のくいものにしたくない。あなたは、あの男がなにものか知っているのですか」

　デンヌリが進みでた。

「あきらかに、わたしに関することだね。ベシュー君は、はらを割って話したいといわれる」

　デンヌリは名刺をさし出した。そして、

「航海士ジャン・デンヌリ男爵だね」とヴァン・フーベンにいった……。

「でたらめだ」ベシューが叫んだ。「きみは、男爵でもデンヌリでもない。デンヌリでないばかりか、航海士でもない」

「これはまた、ご丁重なお言葉で、ベシュー君。すると、わたしはいったい、誰なのかね」

「きみはジム・バーネットだ。ジム・バーネット当人だ。……いくら化けたってだめだ。かつらと、古ぼけたフロックコートを脱いだからといってもだめだ。社交界の男づらをしてスポーツマンを気取っていても、その皮を一枚めくった下になにがあるか、おれには見通しだ。きみだ。きみはバーネット探偵社のジム・バーネットだ。おれが十二たび協力し、十二たびだまされたバーネットだ。（「バーネット探偵社」参照）もう、こりごりだ。ひとにそういって警戒させるのがおれの義務だ。ヴァン・フーベンさん、この男のいうことを真にうけてはいけませんよ」

デンヌリは受話器をかけた。
「ベシゥー君がその場にいたら、どうすれば、ひとのうちに好き勝手にはいれるかわかるんだがなあ。レジーヌ、きみは電話帳で、伯爵がどこに住んでいるか見たかね」
「ユルフェ町十三番地よ」
「すると、フォーブール・サン・ジェルマンだ」
レジーヌがきいた。
「でも、その品物は、どこにありますの」
「わたしが持っている。広告がでたその日に、十三フラン五十という格安な値段で買ったのだ」
「なんでまた、伯爵に送り返しておやりにならなかったの」
「メラマールという名前が、あるとりとめのないことを思い出させたからだよ。むかし、十九世紀にメラマール事件というものがあったような気がするんだ。しかし、その後、調べてみるひまがなかった。だが、いまからでもおそくはない。レジース、アルレット、二時十分前に、パレ・ブルボン広場にきてくれ。会議はこれでおひらきだ」
会議は、まったく効果的だった。わずか半時間で、デンヌリには、地ならしをして、ついにノックすることのできるドアを発見するに充分だった。くらやみのなかに、ひとつの黒影がうかびあがり、問題はいっそうはっきりしたかたちで提起された。メラマール伯爵は、こんどの事件で、いかなる役割を演じているのか。
レジースはアルレットを昼食にひきとめた。デンヌリは、ヴァン・フーベンとベシゥーに一、

もうすでに、この男は、あなたをかなしばりにしてしまって、もはやあなたは、この男をふり切ることができなくなっている。あなたは、この男があなたのために働いてくれると正直に信じているんですか、ヴァン・フーベンさん。こやつは、自分のために働いているんですよ。ジム・バーネットだろうと、デンヌリだろうと、紳士だろうと、探偵だろうと、航海士だろうと、大泥棒だろうと、それはどうでもいい。こいつの眼中には自分の利益しかない。あなたがこの男を捜査に参加させられると、あなたのダイヤモンドはおじゃんになってしまいますよ」

「ああ、そんなことって、絶対にさせない」ヴァン・フーベンは、はらだたしそうに抗議した。

「この男がそんな人間だとしたら、これで手をひいてもらう。またとりあげられるためにダイヤを見つけるなんて、ご免だよ。デンヌリ、きみはきみの仕事をするがよかろう。わたしはわたしの仕事をする」

デンヌリは笑い出した。

「ところでね、さしあたりきみの仕事のほうが、わたしの仕事よりもはるかに興味があるんだ」

「わたしは、断じて……」

「断じて、どうしたのかね。あのダイヤについては誰だって手をつけていい。なくなったんだものね。わたしにも、ほかの誰彼と同じように、探す権利がある。それにさ、きみになんの文句がある。なにしろこの事件はわたしには興味満点だ、それに関係している女性が、これまたじつに美しい。レジーヌにしても、アルレットにしても。うっとりさせられる。……じっさい、ねえきみ、わたしはきみのダイヤを手に入れるまで、この勝負はあきらめないよ」

ヴァン・フーベンは、ひどく当惑してジャン・デンヌリを眺めていたが、相手はのんきそうにシガレットに火をつけていた。ヴァン・フーベンはたずねた。

「ベシュー君の非難は、ほんとうかね」

デンヌリは微笑した。

「たぶんね……わたしにはよくわからないんだ。デンヌリ男爵としての、わたしの書類はきちんとしている。だが、ジム・バーネットの名前にも関係がないとはいいきれないようだ。ジム・バーネットは、わたしの親友だったんでね」

「しかし、あの自動艇に乗っての世界一周旅行は、じっさいにやったのかね」

「たぶん。そのへんのことは、どうも記憶がぼんやりしていてね。しかし、そんなことは、いったい、きみになんの関係がある。きみにとってかんじんなのは、ダイヤモンドを見つけることだ。ところで、わたしが、きみの探偵がいうように、あのすばらしいバーネットなら、成功のための最上の保証だよ、ヴァン・フーベン君」

「盗まれる最上の保証ですよ、ヴァン・フーベンさん」ベシューはうなり声をだした。「そうです。この男は成功するでしょう。そうですとも、わたしたちは、十二回いっしょに働いて、そのたびに、この男は事件を解決して、犯人の首根っこを押えるか、あるいは、盗難品を見つけだしました。しかし、十二回ともこの男は、その盗難品の一部か全部を自分のポケットに入れてしまった。そうですとも、この男は、あなたのダイヤを見つけるでしょう。しかし、あなたの鼻先で、顎ひげの下で、そいつをくすねとってしまい、あなたは、はなをあかされてしまうでしょうよ。

歴史的な名前がかかげてあった。オテル・ド・ラ・ロシュフェルテ……オテル・ドゥルム……どれもこれも、ほとんど同じ作りで、わびしい外観をし、中二階がきわめて低く、表門が高くて、石畳が荒れた内庭の奥のほうに母屋（おもや）があった。オテル・ド・メラマールも、ほかの屋敷とべつにかわったところはなかった。

デンヌリが呼鈴を押そうとしたとき、タクシーが一台到着して、なかから次々と、ヴァン・フーベンとベシゥーが現われた。ふたりとも、かなりばつが悪そうだったが、それだけに、うわべはなおさら、いばりくさっていた。

デンヌリは、軽蔑したように腕組みをした。

「おやおや、まったく、いけ図々（ずうずう）しいな、このふたりのぼんちは。一時間ほど前は、わたしなんか犬もくわないようなあしらいをしておいて、いまになると、こうやって、あとからすがりついてくるとは」

デンヌリは、ふたりに背中をむけると、呼鈴をおした。一分ほどすると、門扉のひとつにとりつけられた出入口があいて、短ズボンに、栗色の長い上着姿があらわれた。すっかり腰がまがって、猫背の老人だった。デンヌリは名前を告げた。すると、老人が答えた。

「伯爵さまは、あなたさまをお待ちになっておられます。どうぞあちらへ……」

老人は指で、内庭の向こうにある、庇（ひさし）がつきでた表正面の石段を示した。しかし、レジーヌがとつぜんにたちすくんで、あえぐようにいった。

「六段だわ……六段の石段だわ」

「そして、おれは」ベシューがわれを忘れて、歯ぎしりしながらいった。「きみを豚箱に放りこむまで勝負をあきらめないよ、ジム・バーネット」

「すると、みんな大いに楽しめるというものだ。さよなら、同志諸君。幸運を祈る。たぶん、いつかまた会えるだろう。そんなこと、誰にもわからんものね」

そういって、デンヌリはシガレットを唇にして、とびあがるような小刻みな足どりで行ってしまった。

アルレットとレジーヌは、デンヌリが待っているパレ・ブルボンの閑静な小さな広場で、自動車からおりたとき、まっさおな顔をしていた。

「ねえ、デンヌリ」とレジーヌはいった。「あなたはまさか、わたしたちを誘拐した男が、メラマール伯爵だとは考えていないのでしょ」

「なぜ、そんなことをいうのだ、レジーヌ」

「わたしには、わからないわ……予感よ。わたしは、すこしこわいの。アルレットも、わたしと同じだわ。そうでしょ、アルレット」

「ええ、心臓がしめつけられるよう」

「それで、どうしたのかね」ジャンはいった。「伯爵が、きみたちふたりをかどわかした人物だったら、きみたちをとって食うというのかね」

ユルフェの古い通りはすぐ近くで、十八世紀の昔の建物が建ちならび、正面には、いろいろと

いた。一同は六つの石段をのぼった。

レジーヌ・オブリーがあえぐようにいった。

「玄関が黒と白の石畳になっていたら、わたしは気が遠くなってしまうわ」

「ちぇっ」デンヌリは舌打ちした。

玄関は黒と白の石畳になっていた。

しかし、デンヌリは、ふたりの連れの女の腕を乱暴につねり、彼女たちは、よろめく足をどうにか持ちこたえた。

「しっかりするんだ」デンヌリは笑いながら小言をいった。「そんなことでどうする」

「階段の絨毯も」レジーヌがつぶやくようにいった。

「同じだわ」

「同じだわ」アルレットがうめいた。「……そして、同じ手摺……」

「それで、どうした……」デンヌリがいった。

「でも、客間に見覚えがあれば……」

「かんじんなのは、そこへいってみることだ。伯爵が犯人なら、わたしたちをそこへ案内することに、たいして乗り気でないだろうよ」

「そのときは？……」

「そのときは、むりにでもそこへ通させるんだ。おい、アルレット、元気を出すんだよ。なにごとが起ころうとも、ひと言も口をきいてはいけない」

それに応じて、アルレットが、ささやくように、
「そうだわ、六段だわ……同じ石段だわ。……同じ内庭で……まさか、そんなこと……ここだわ
……ここだわ」といった。しかし、その声はレジーヌほどには、おろおろしていなかった。

＊ ラ・パリースは十六世紀のフランスの軍人で、パヴィアの戦い（一五二五年）で戦死したが、部下がその勇気をたたえて《戦死の十五分前まで、まだ、ラ・パリースは生きていた》という意味の小唄を作った。

4　刑事ベシュー

デンヌリはふたりの女の肱の下をつかみ、まっすぐにさせた。
「落ちついて。なんてことだ。しょっぱなから、きみたちがこんなにへばっては処置なしだ」
老人の執事は少しく前をはなれて歩いていた。ヴァン・フーベンはベシューといっしょに勝手放題に内庭にはいってきていたが、部長に耳打ちした。
「どうだ。おれは臭いと思った。やってきたのは運がよかったよ。……ダイヤに用心してくれよ。……デンヌリから目をはなしてはいけないよ」
一同は、大きな、大小さまざまな敷石をしいた内庭を横切って行った。左右は、隣の屋敷の、窓もない裸壁が仕切っていた。奥手には、高い窓がずらりと並んだ本館がいかめしく突っ立って

きょうもわたしが、あなたのために、ささやかなサービスをするにあたって、古い知名人士の人名録をひもといていますと、わたしたちは、遠いいとこ同士であることを発見しました。わたしの母かたの曽祖母は、スルダンという家の生まれですが、メラマール＝サントンジュ家の分家になるメラマール家の血統のひとと結婚していたのです」

伯爵の顔が明るくなった。あきらかに、この系図の問題に興味を持ったらしく、ジャン・デンヌリと熱心な会話のやりとりのあと、ふたりが血縁であることが、はっきりと確認された。アルレットとレジーヌは次第に落ちつきをとりもどした。ヴァン・フーベンはベシュウーに声をひそめていった。

「すると、なんだ、あいつはメラマールの縁者ということになる」

「わたしが、法王の縁者なのと同じことですよ」ベシュウーはいまいましそうにいった。

「そうだとすると、いけ図々しい奴だ」

「まだ、小手調べですよ」

一方デンヌリは、ますます快活になって、話をつづけていた。

「ところで、伯爵、いとこの兄さんというわけですが、あなたが我慢をしてきいてくださるのをいいことにして、おしゃべりをつづけていましたが、それではさっそく、偶然がどういうふうに役にたってくれたか話すとしましょう」

「どうぞ」

「偶然は、まず最初に、ある朝、地下鉄のなかで、わたしの日の前に、あなたの新聞広告をおい

そのとき、アドリアン・ド・メラマール伯爵が訪問客たちの前にあらわれて、一同を、ルイ十六世王朝時代の美しいマホガニーの調度で飾り、伯爵が書斎に使っているらしい、階下の一部屋に案内した。伯爵は半白の髪をした、たぶん四十五歳くらいな、なかなかしっかりした体格の、どちらかというと不愉快な、ひとずきのしない顔をした男だった。まなざしに、ときおり放心したような、おちつかぬ、少しくうつろな表情があった。

伯爵はレジーヌに挨拶をし、アルレットを見るとかすかにはっとしたようだったが、すぐいんぎんなものごしになった。しかしそれも、むしろうわべだけで、貴族の習性とでもいったものだった。ジャン・デンヌリは自己紹介をして、連れの婦人をひきあわせた。しかし、ヴァン・フーベンについても、ベシュウーについても、一言もつけ加えなかった。

ヴァン・フーベンは、少々必要以上に腰をかがめて、もったいぶっていった。

「宝石商のヴァン・フーベンでございます。……オペラ劇場でダイヤモンドを盗まれた、あのヴァン・フーベンで。こちらは、わたしの協力者のベシュウー氏です」

伯爵は、この訪問客の組合わせに、かなりおどろいていたが、批評がましいことはなにもいわなかった。会釈をして待っていた。

ヴァン・フーベンも、オペラ劇場のダイヤモンドも、ベシュウーも、いっさい伯爵にとっては、なんの意味もないかのように見えた。

そこで、デンヌリが口を開いたが、まったく自信満々で、当惑したようすはどこにもなかった。

「伯爵」とデンヌリはいった。「偶然というものは、いろんないたずらをするものです。じつは、

けばいいのですか、あなた、どうすれば手にはいりますか」
「わたしに請求なされればいい、単にそれだけのことです」
「えっ。……すると、あなたは、それを買ったのですか。いくらの値段で。倍にしておかえしします、三倍にして。なにしろ、わたしには大事なもので……」
デンヌリは伯爵をおちつかせた。「進呈しますよ、兄さん。みなで十三フラン五十で買ったのです」
「お宅にお持ちなのですか」
「ここにありますよ、わたしのポケットのなかに。うちに立ち寄って持ってまいりました」
アドリアン伯爵は、おくめんもなく手をさしだした。
「しばらくお待ちをおねがいします」ジャン・デンヌリは愉快そうにいった。「わたしは、ほんのわずかばかり報酬をいただきたいのです。……おお、ごくわずかな。なにぶん、わたしは好奇心が強くて、たいへんに好奇心が強いたちなのです……それで、それらの品物がおかれてある場所を拝見したいのです……それから、なんでまた、あなたが、そんなにその品物にご執心なのか」
伯爵はためらった。デンヌリの要求は、不謹慎であり、いささか不信を表明していたが、それにしても、伯爵のほうのためらいは意味深長だった。しかしながら結局、伯爵は答えた。
「やさしいご用です。どうぞ、わたしについて、二階の客間におあがりください」
デンヌリはふたりの若い女のほうにちらと視線をなげかけた。
≪そらね……ものは望めば、かならず達せられる≫といいたそうだった。

てくれたのです。白状しますと、そのときわたしが、これはとばかりびっくりしたのは、あなたが求められている品物の取りあわせと、それがいかにも、つまらないものばかりだったことでした。青いリボンのはしくれ、はめこみ錠、蠟燭さし、火ばさみの柄、そんなものは、どうも、新聞広告にはなりそうもないですものね。とにかく、わたしは、数分後には、そのことはすっかり忘れてしまって、おそらくは、それっきり思いだすこともなかったでしょうに、それが……」

話しぶりも巧みに、そこでひと休みしたあと、ジャンは先をつづけた。

「兄さん、あなたももちろんご存じでしょう。あの《蚤の市》を。このうえない雑多ながらくたを、これまたじつに愉快に、ごったがえしにかきあつめてある、あのおもしろい市場です。わたしといえば、あそこで、たびたびなかなかいいものを見つけだすので、とにかく、あそこを散歩して後悔したことは一度もありません。たとえばその朝は、古いルアン焼きの聖水盤のこわれたのをつなぎあわせて修繕したものですが、みごとな形をしたのをひとつ掘り出しました。……それから、スープ鉢をひとつと……指抜きをひとつと……要するに、意外なさずかりものをいろいろとね。ところが、そのときとつぜん、歩道の上にごったがえしに放りだされていた、がらくたの山のなかに、リボンのはしくれがあるのに目をとめたのです。……そうですよ、青い絹の呼鈴のリボンのはしくれで、すり切れて色のあせたしろものです。そのそばに、さしこみ錠と、銀の蠟燭さしと……」

メラマール氏の態度が、とたんに変わった。勢いこんでひどく興奮して、伯爵は叫んだ。

「それだ。思いがけないことだ。わたしが探しているのは、まさにそれです。しかし、どこに行

リュードを呼んでくれ」

フランソワが第一にやってきた。門番兼執事で、使用人といえば当人と同じくらいに老人で、もっと皺だらけの細君のゼルトリュードとたったふたりきりにちがいなかった。ゼルトリュード*は、夫のあとにつづいてすぐにやってきた。それから、伯爵がジルベルトと呼んだ女がはいってき、伯爵は、その女にせかせかといった。

「ジルベルト、このふたりの婦人が、おぐあいが悪いのだ」

ジルベルト・ド・メラマールは（伯爵の妹が、離婚して、旧姓にもどったのであるが）大柄な、褐色(かっしょく)の髪をした背の高い女で、若々しいととのった顔立ちだったが、身なりやものごしが、どこか少しく時世おくれだった。そして、兄よりもいっそうやさしみがあった。目が黒くてたいへんに美しく、きまじめな表情をしていた。デンヌリは、女がプラム色のローブに、黒のビロードのバンドをしているのに気づいた。

ジルベルトはその場の光景が腑におちないように思えたにちがいなかったが、どこまでも冷静さを保っていた。オー・デ・コロンでアルレットの顔をかるく湿すと、ゼルトリュードに看護をまかせて、ヴァン・フーベンがそばで一所懸命になって世話をやいていたレジーヌに近づいた。ジャン・デンヌリはヴァン・フーベンを押しのけて、かねて予想していたできごとをもっとよく観察できるようにした。ジルベルト・ド・メラマールが、かがみこんでいった。

「それで、あなたは？　ひどくお悪いのではないのでしょうね。ご気分はいかが」

ジルベルトは気つけ薬の小瓶(こびん)をレジーヌに嗅がせた。レジーヌはまぶたをあげて、女を眺め、

しかし、デンヌリはふたりの女を見て、その動転した顔つきに気づいた。客間は、彼女たちにとっては、苦しい試練をうけた、当の現場だった。そこに再びはいることは、おそろしい事実を確認することだった。ヴァン・フーベンにもまた、そのことがわかっていた。新しい段階が踏み越えられようとしている。ベシュー部長も、これまた胸をおどらせていた。部長は伯爵のすぐあとにつづいた。

「では」と伯爵はいった。「ご案内しましょう」

一同は書斎を出て、石畳の玄関の間を横切った。ひびきわたる足音のこだまが階段口をみたした。のぼりながら、レジーヌは段数をかぞえていた。二十五段あった。……二十五。正確に、同じ数である。レジーヌはまたもや気が遠くなり、こんどはさらにそれがひどくて足がよろめいた。

みんなレジーヌのそばにかけよった。どうしたのだ。気分でも悪いのか。

「いえ、いえ」レジーヌは目を閉じたままで、ささやくようにいった。「いえ、いえ……ただ、目まいがしただけです。ごめんなさい」

「腰をかけられたほうがいい」と伯爵はいって、客間のドアを押した。

ヴァン・フーベンとベシューは長椅子に腰をおろした。しかしアルレットは、なかにはいり部屋を見ると、叫び声をあげて、からだを旋回させると、気絶して肱掛椅子の上に倒れてしまった。

そこで一同は、あわてふためき、いささか滑稽な騒ぎがもちあがった。みんな、どうしたらいいかわからないでうろうろしていた。伯爵が大きな声で叫びたてた。

「ジルベルト……ゼルトリュード……はやく。気つけ薬だ……エーテルだ。フランソワ、ゼルト

そのとき、デンヌリが言葉をはさんだ。そのようすはいかにも快活で、こうしたできごとすべてに、なんの重要性もおいていないかのようだった。

「兄さん、あなたのおっしゃるとおりですよ。わたしのふたりの女友だちがとり乱したのは、いわば、見当はずれな、興奮といったようなものにいくぶん関係があり、とりのぼせたとでもいうよりほかにいいようがありません。これは、わたしがあなたにしなくてはならぬ、ここにくる前に申しあげておいた説明の一部をなすものです。しかし、その説明のほうはもう少し猶予をおねがいして、さっそく、わたしが手に入れた小さな品物の問題を片づけることにしましょう」

アドリアン伯爵は、すぐには返事をしなかった。あきらかに不安のまじった当惑の色を見せて、尻切れとんぼの文句をつぶやいた。

「いったい、これはどうしたというのですか。どう考えたらいいのですか。わたしにはてんで想像が……」

伯爵は妹を片脇へつれて行って、ふたりとも興奮してなにか話し合っていた。しかし、ジャンが伯爵のほうへ進みでて、親指と人差指のあいだに、羽をひろげた二匹の蝶がつながったかたちをした、銅製の小さな金属板をつまんでさしだした。

「これが、はめこみ錠ですよ、兄さん。あの机の引出しのひとつの錠がとれていますが、これがそうだと思います。ほかのふたつと同じものです」

デンヌリが自ら、その銅片を、その場所にあてがうと、ぴったりとはまり、錠前の内側の面の突起は、もとの孔に、きわめて自然におさまった。それがすむと、ジャン・デンヌリはポケット

黒いビロードのバンドをしたプラム色のローブと、それから手を眺めると、とつぜんに、いいようもない恐怖の叫び声をあげて立ちあがった。

「あの指輪だわ。三つの真珠。わたしに触らないで。あなたは、あの晩の女です。……指輪に見覚えがあります。……手に見覚えがあります……それに部屋も……青い絹張りの家具も……床も……暖炉も……壁掛けも……マホガニーの小テーブルも……おお、放っておいて。わたしに手を触れないで」

レジーヌはまだなにか、ききとれない言葉をつぶやき、さっきと同じによろめいて、またも気絶してしまった。そして、次にはアルレットが正気づき、自動車のなかで見た、先のとがった靴に気づき、かんだかい音色をした振子時計が鳴るのを聞くと、うめき声をだした。

「ああ、……あの時計の音は、同じだわ。同じ女だわ。……おお、こわい」

唖然として、誰も身動きもしなかった。その場の光景は、まるでヴォードヴィルの一場面のようで、なんの関係もない目撃者なら、ふきだしてしまいそうで、じっさい、ジャン・デンヌリの薄い唇はかすかにゆがんでいた。おもしろがっているのだ。

ヴァン・フーベンは、どう考えていいのか知ろうとして、デンヌリとベシューをかわるがわる見較べていた。ベシューはたちすくんでいる兄と妹とを、注意深くうかがっていた。

「なんの意味ですか、その言葉は」伯爵はつぶやくようにいった。「どの指輪のことですか、このご婦人はとりのぼせていられるらしい」

のと同じように尊いのです」

その説明はそれで、ひととおりの筋が通っていた。ジャン・デンヌリはまたいった。

「兄さん、あなたが、そういったものを大事にされるのは、もっともしごくです。わたしにも、家族の思い出の品を大切にする気持は、よくわかります。しかし、どうしてまた、このような品物をなくされたのですか」

「わからない」と伯爵はいった。「ある朝、あの蠟燭さしがなくなっているのに気づいた。それで、妹と丹念に調べてみたのです。すると、はめこみ錠もなくなっていた。そして、あのリボンのはしも、火ばさみの柄も」

「すると、盗まれたのですか」

「盗まれたのにちがいない、いちどに持って行かれたのです」

「それはまた。この菓子器とか、細密画とか、振子時計とか、銀器とか、いろんな値打ものをとってゆけたのに……それを選りに選って、いちばんつまらないものを盗んで行ったのですか。なぜでしょう」

「わたしには、わからない」

伯爵は同じ言葉を、そっけない口調でくりかえした。こういった質問は、伯爵には我慢がならず、この訪問の目的は、伯爵からいえば、すでにはたされていた。

「それはそれとして、兄さん」とジャンはいった。「わたしが、なぜ、わざわざふたりの女友だちをお宅に連れてきたのか、そして、なぜ、その婦人たちがあのようにとり乱したのか、そのわ

から、同じく銅の呼鈴のつまみがひとつ、はしからぶらさがっている青いリボンをとりだした。そして暖炉のかたわらに、同じ色のべつのリボンが垂れ、下方がちぎれているのを見ると、デンヌリは、そのそばに行った。ふたつのリボンのはしは正確に、ぴったりと合った。
「みんなうまくゆく」とデンヌリはいった。「次はこの蠟燭さしですが、兄さん、これはどこにおきましょう」
「あの燭台です」アドリアン伯爵は気むずかしそうな口調でいった。「枝が六本あったのです。それがご覧のとおり、いまは五本しかない……それにちがいない。あとは、あの火ばさみの柄が、ご覧のとおりにとれています」
「それはここにあります」とジャンはいって、手品師のように、次々と無尽蔵のポケットから、なんでもひきだした。「さて、そこで、兄さん、ひとつ約束を実行していただきましょうか。なぜ、こんなくだらないものが、あなたには大事なのか、どうして、いつもあるべきはずの場所からなくなったのか」
デンヌリがこうしたいろんな操作をしているあいだに、伯爵は落ちつきをとりもどす余裕を持つことができて、レジーヌの呪い言葉もアルレットのうめき声も忘れたらしかった。こんな愚にもつかぬ約束をとりつけた闖入者を一刻もはやく厄介払いしようとするかのように、言葉短に答えたからである。
「わたしは、先祖代々伝えられてきたものは、なんでも大切にするのです。おっしゃるとおり、どんなくだらないものであろうと、わたしたち、わたしと妹にとっては、このうえない珍しいも

「そんなことは、わたしはちっとも意に介しません」礼儀作法などを自慢にしないベシュウーはがなり立てた。

伯爵は再び妹のほうに近づき、ふたりはまたもや熱心に、早口になにか話し合っていた。ジルベルト・ド・メラマールは、兄と同じように興奮していた。突っ立って、たがいにささえあい、重大な攻撃を予感して、それに立ち向かおうとする人間のような態度で待ちかまえていた。

「そら、ベシュウーが鎖を切ってとびだしたよ」声をひそめて、ヴァン・フーベンがジャンにいった。「うん。ますます興奮してゆくのを見ていたよ。わたしはあの男をよく知っている。まず、抑えに抑えて、じっと目をつむる。それから、いきなり爆発だ」

アルレットとレジーヌも、からだを起こしてうしろにひきさがり、ジャンに守られていた。

それから、ベシュウーが宣告した。

「それに、長くはかかりません、伯爵。二、三の質問をしますから、それに、まっすぐに答えていただきたい。きのうは、あなたは何時に外出されましたか。それから、メラマール夫人も」

伯爵は肩をすぼめただけで、返事はしなかった。妹のほうは、いっそうすなおで、答えたほうがいいと判断した。

「兄とわたしは、二時にうちを出て、四時半、お茶の時間にかえりました」

「そのあとは?」

「どこにもまいりませんでした。夜は外出しないことにしています」

「それはまた、別個の問題です」ベシュウーは皮肉そうにいった。「わたしが知りたいのは、ここ

けを、たぶん、おききになりたいでしょう」

「いや」とアドリアン伯爵は、きっぱりといった。「それは、わたしには関係のないことです」

伯爵ははやく切りあげたかった。そして、出口のほうへ歩き出そうとするような身ぶりをした。

しかし、ベシューが進み出て、目の前に立ちはだかっていて、重々しい口調でいった。

「関係があります、伯爵。いますぐに明らかにしなくてはならぬ二、三の問題があり、明らかにされるでありましょう」

ベシューの介入には、いやおうをいわせぬものがあった。部長は、長い両腕をひろげて、出口をさえぎっていた。

「でも、あなたは、どなたですか」伯爵はかさにかかって叫んだ。

「ベシュー巡査部長です、保安部の」

メラマール氏は、その場にとびあがった。

「警官ですか、あなたは。なんの権利があって、わたしの屋敷にはいりこんだのですか。この家に、警官とは、メラマール邸に」

「伯爵、わたしはお宅をおうかがいした節、さっそく、ベシューというわたしの名前を名乗りました。しかし、ここで、わたしが見たこと、聞いたことの結果は、巡査部長という、わたしの職名を、その名前につけ加えざるを得ないことになりました」

「見られたこと……聞かれたことというと」メラマール氏は口ごもり、その顔が次第にゆがんでいった。「だが、事実上、わたしは、あなたが屋敷にはいられるのを承認したことはなく……」

横切ってにげた。そのことを母親の頭にかけて誓っている。そうだろう、アルレット・マゾール、きみは大事なお母さんの頭にかけて、そのことを誓うだろう」

デンヌリはヴァン・フーベンに耳打ちした。

「だが、奴さん、頭がどうかしてるよ。なんの権利があって予審判事の役をつとめるのかね。しかも、じつに哀れな判事だ。口がきけるのは奴さんだけだと思っている。……しかも、そのいっていることときては……」

ベシゥーは、じっさい、伯爵に顔をつきつけてわめきたてており、伯爵のたけだけしい目は、底知れない心の動揺を示していた。

「それだけでは、伯爵、それだけではないですよ。そんなことはなんでもない。まだ、ほかのことがある。この婦人……この婦人を……（ベシゥーはレジーヌ・オブリーを指さした）あなたは知っているはずだ、どうです。いつかの晩、オペラ劇場で誘拐されたのはこのひとだ。誰が誘拐したか。どうです。誰が、ここにこの客間に、この婦人を連れてきたのか。……この婦人は、調度にちゃんと見覚えがある。……そうでしょう、奥さん。この肱掛椅子……この小テーブル……この床……どうです、伯爵、誰がこの婦人をここに連れてきたのです。誰がダイヤモンドのコルスレをはぎとったのか。メラマール伯爵じゃないですか。その妹のジルベルト・ド・メラマールじゃないですか。証拠は。その真珠の三つある指輪だ……証拠といったが、証拠はありすぎるほどある。いずれ、予審廷できめてくれます、伯爵、わたしの上役が……」

ベシゥーはみなまでいい得なかった。メラマール伯爵はわれを忘れて、部長の喉頸をしめあげ、

で、この部屋で、八時から真夜中までの時間を、どのようにしてすごされたかです」

メラマール氏は怒りで、じだんだを踏んだ。そして、妹に口をきかぬように厳命した。ベシゥーは、いかなる力をもってしても、このふたりに口を開かせることはできないのを知り、すっかり激怒してしまって、もはや質問しようとはせず、満々たる自信をもって、はじめは声をおさえていたが、しだいに辛辣な、きびしい震え声になって、あらんかぎりの非難をまくしたてた。

「伯爵、あなたはきのうの午後、お宅にはおられなかった。妹さんも同様だ。モン・タボール町三番地の二の前におられた。ブリクー医師だと称して、若い娘を待ち伏せし、罠にかけて自動車につれこみ、妹さんが、その娘の顔を毛布でくるんで、ここに、この屋敷に連れてこられた。その若い娘は身をもってのがれ出た。あなたはそのあとを追っかけて町に出たが、つかまえることができなかった。どうです」

伯爵は唇をひきつらせて拳をにぎりしめ、床を足で、どんと蹴った。

「あんたは気違いだ。気違いです。気違いどもは、なにをいいだすかわかったものじゃない」

「わたしは気違いじゃない」部長は次第に芝居がかりになり、言葉づかいがおおげさになってわめきちらし、その派手な、下品な文句がデンヌリをおもしろがらせた。「わたしのいうことはありのままの真実だけです。証拠は、といわれるのか。そんなものは、ポケットにいっぱいある。あんたがよく知っていて、われわれの証人に立ってくれる。マゾール嬢はあの暖炉の上にあがった。そして本棚のうえに横たわっていた。そこの花瓶をひっくりかえした。あの窓をあけた。あの庭を

かえしてきた。
ことは手間どらなかった。およそ半時間もたち、その間にベシュウーは、ますます興奮して、デンヌリとヴァン・フーベンの前で演説をぶち、レジーヌとアルレットは、兄妹を同情をまじえた恐怖心でもって眺めていると、保安部長が刑事連を従えて到着し、それにひきつづいてまもなく、予審判事が書記や検事といっしょに乗りこんできた。ベシュウーの報告が実を結んだわけだった。
簡単な取調べがあった。老使用人夫婦が尋問された。この夫婦は屋敷の離れた翼に住んでいて、受持ちの仕事のこと以外にはかかわりがなかった。仕事がすむと、庭に面している自分たちの部屋か、台所にさがるのがつねだった。
しかし、ふたりの若い女の陳述はのっぴきならぬものだった。ふたりは、ただ単に、その覚えていることをそのまま話すだけでよかった。とくにアルレットは逃げだすときにとった道筋を話し、もう一度、出かけて行って見るまでもなく、庭や灌木の植込み、塀、独立して建ててある小さなあずまや風の住居、門、賑やかな通りにでる前にある寂しい通りなどの説明をした。いかなる疑問もあり得なかった。
それにまた新しい発見がひとつあった。それはベシュウーの功名で、それによって、もはや、いささかのためらいの余地もなくなった。ベシュウーは書棚のなかをひととおり調べてみていて、古風な装幀の古ぼけた四つ折り本がひと揃いあるのに気づいた。部長は怪しいと思った。一冊ずつとり出して調べた。ページはからっぽで、なかは箱になっていた。そのひとつからは銀糸のラメーの布切れ、いまひとつからはコルスレが出た。

息をつまらせて悪態をあびせながら、じだんだを踏んでいた。ベシゥーはそれをふりほどき、拳骨をふりあげ、なおも不遜な非難を加えはじめた。事実の証拠と、事件のなかで自分が演じている役割と、とくにその役割が、上役や公衆の前で自分に与える重要性にひきずられて、ベシゥーは、デンヌリがいったように、すっかり頭がどうにかなっていた。部長は自分でもそれを感じると、ぴたりと言葉を切り、玉のような額の汗をぬぐい、とたんに自分をとりかえして、たいへんにおごそかに口調をあらためていった。

「いや、わたしは自分の権利を逸脱していました。これは、わたしの権限外のことです。さっそく警視庁に電話をかけます。命令をうけとるまで、お待ちをねがいたい」

伯爵はその場にくずおれて、もはや自らを守ることもあきらめた人間のように、両手のなかに顔をうずめた。しかし、ジルベルト・ド・メラマールは部長の行く手をさえぎった。そして、息を詰まらせながらいった。

「警察が、警察がここに来るのですか……この屋敷へ。いいえ、だめです。……だめです。……そんなことってない。……こんなことになって……あなたにはそんな権利はない……罪悪です」

「お気の毒です、奥さん」部長は、勝利に酔って、たちまち丁重になっていった。

しかし、夫人は警官の腕にとりすがって哀願した。

「お願いでございます、あなた。兄もわたしもおそろしい誤解のいけにえです。兄には悪事は働けません……お願いです……」

ベシゥーはてこでも動かなかった。控室に電話があった。そこに行って電話をかけると、ひき

たった。そのかいはなかった。
「まあ、いい」ベシュウーはささやいた。「ヴァン・フーベンさん、あなたのダイヤは、まもなく手許にかえります。事態は好転です。わたしもうまく立ちまわった」
「ジャン・デンヌリもね。それは認めずばなるまい」ヴァン・フーベンが意見をのべた。
「あの男は中途で、大胆を欠いた」ベシュウーは反駁した。「わたしの攻撃で、すっかりことがきまったのです」

数時間後、ヴァン・フーベンは、オスマン大通りの豪勢なアパートに帰った。ベシュウー部長と料理店で夕食をすませ、ふたりとも気がかりなこんどの事件についてなお話し合うために、宝石商は部長を自分のうちに連れてきた。「おや」と、ヴァン・フーベンは、しばらく話をしていたあとでいった。「アパートの奥のはしで物音がきこえたような気がする。召使たちはあちらのほうでは休まないのだが」
ヴァン・フーベンは、ベシュウーといっしょに、長い廊下を渡って行った。そのはしに、大階段に面して、特別の出口がある小さな独立部屋があった。
「双方の部屋はたがいに完全に独立していてね」と宝石商はいった。「こちらのほうへは、ときどき、友人をとめるのだ」
ベシュウーは耳をすませた。
「たしかに、人声がする」

レジーヌがすぐと叫んだ。
「わたしのチュニックだわ……わたしのコルスレだわ」
「ダイヤはなくなっている」とヴァン・フーベンがもう一度盗まれたかのように泡をくらって、がなりたてた。「わたしのダイヤを、あんたはどうした、伯爵。ああ、はやく吐き出すんだ……」
メラマール伯爵は、その光景を、無関心のさまで眺めていたが、その表情には、どこか異様なものがあった。刑事が伯爵のほうに向きなおり、ダイヤモンドをもぎとったチュニックとコルスレを示したとき、伯爵は頭を左右にふり唇をひきつらせて、気味悪い微笑をうかべた。
「妹はいないのか、どこに行った？」伯爵はあたりを見まわしながら低い声できいた。
老女中が答えた。
「奥さまはお部屋だと存じます」
「わたしが、最後の挨拶をしたいと伝え、わたしの手本にならうようにすすめてくれ」
そして、いきなりポケットからピストルをひき出すと、こめかみに持って行き、引き金をひいた。
見張っていたデンヌリがとっさに、その肱をはねとばした。弾はそれて、窓のガラスを割った。
刑事たちがメラマール氏にとびかかった。予審判事は告げた。
「あなたに逮捕令状を執行します。メラマール夫人も連行するように……」
しかし、探してみたが、伯爵夫人は、その居間にも寝室にも見当たらなかった。屋敷じゅうを詮索した。どこを通って逃げたのだろう、そして、誰にたすけられて。
デンヌリは、夫人が自殺したのではないかとおそれ、ひどく心配して、先頭にたって捜査に当

「よくも、おまえさんは」
「そうさ、きみは庭に刑事を配置するのを忘れたんだ。それで、おれはそこから逃がしてやり、近くの通りでタクシーをつかまえて待っているようにいっておいた。下調べの儀式がすんだあと、おれは夫人と落ち合った。それからここへ連れてきて、いま看護してやってるところさ」
「しかし、誰が入れてくれた、あきれた話だ」ヴァン・フーベンが口を出した。「ここにはいるには鍵が必要だ」
「そんなものはいらないさ。お手々さえあれば、どこのドアだって、鼻歌まじりであけてみせる。そうやって、もう何度も、きみの住居は訪問したよ。それで、この離れ部屋が、メラマール夫人には、うってつけの隠れ家だと考えたんだ。ヴァン・フーベンがメラマール伯爵夫人をかくまおうとは、誰だって想像しないだろうものね。誰だって。ベシューでさえもさ。事件が解決するまで、夫人はきみの保護のもとに、ここでしごく安穏（あんのん）に暮らせる。世話をしてくれる小間使は、これはきみの新しい愛人だと思うだろう。なにぶん、レジーヌは、もうきみの手をはなれたものね」
「おれが逮捕する。警察に通報する」ベシューが叫んだ。
デンヌリは、はらをかかえて笑いだした。
「ああ、そいつは。これはまたおもしろい。おいおい、きみもおれと同様に、この婦人には手をかけられないことを知っているはずだよ。なにしろ、神聖だものね」
「おまえさんは、そう思っているのか」
「そりゃ、そうさ。おれが保護しているんだもの」

「おかしい。誰も鍵を持っていないのに」
ピストルを構えて、ふたりはさっとばかり、とびこんだ。そして、たちまちヴァン・フーベンが叫んだ。「これはこれは……」それに応じて、ベシューが別の叫び声を出した。「なんたることった」

長椅子の上に横たわった、ひとりの女の前にひざまずいて、ジャン・デンヌリが、例の鎮静療法により、額から髪にかけて、軽く接吻をつづけていた。

ふたりが近づいてみると、女はジルベルト・ド・メラマールで、目を閉じ、ひどく青ざめて、胸を波打たせていた。

デンヌリはいきり立って、新しい侵入者の前にたちはだかった。
「また、きみたちか。なんだって、ちきしょう、おとなしくしていられないんだ。ここへ、なにしにきたんだ、ふたりとも」
「なんだと、なにしにきたかというのか」ヴァン・フーベンがどなった。「だって、おれのうちだ、ここは」

そして、ベシューはむかっ腹を立てて、わめいた。
「おや、これはまた、図々しいにもほどがある。すると、伯爵夫人を屋敷からずらからせたのは、おまえさんだな」

デンヌリは、たちまち機嫌をなおして、くるりと向きをかえた。
「きみには、なにも隠しだてはできないよ、ベシュー。ああ、そうだよ、おれだよ」

＊ ラフィット社初版ではゼルトリュードがユルシュールになり、中途からゼルトリュードになっている。

5 はたして敵か

刑事事件の予審の詳細物語ほど退屈しごくなものはない。ことに、それがよく知られている事件で、誰も彼もその話をし、めいめいが、それについて、いちおうのはっきりした意見を持っている場合は、なおさらのことである。したがって、以下のページの関心事はもっぱら、公衆が知らなかった事実、司法当局が明らかにし得なかった事実を解明するにある。ということは、けっきょく、ジャン・デンヌリすなわちアルセーヌ・リュパンの言行を物語ることに帰着する。

捜査がいかにむだぼねだったかは、ただ、想起するだけでこと足りよう。老召使夫婦は、二十年このかた仕えてきた主人が罪人扱いにされたのをひどく憤慨するだけで、主人の容疑が晴れるような事実はなにひとつ申し立てることができなかった。ゼルトリュードは朝の用たしに出るほかは、台所をはなれることはけっしてなかった。呼鈴がなると――お客がほとんどないので、それは珍しいことだが――フランソワが、いそいでお仕着せをひっかけて、ドアを開けにゆくのがならわしだった。

綿密に調査した結果、秘密の出入口はひとつもないことが確認できた。客間に付属した小さな引込み部屋は、昔は寝台がおかれていたが、今は物置部屋として使われていた。どこにも怪しげ

ベシゥーは歯ぎしりしていた。
「すると、おまえさんは泥棒女を保護するのか」
「泥棒女だと。どうして、きみにはそれがわかる」
「なんだと。おまえさんが逮捕させた男の妹じゃないか」
「けしからんいいがかりだ。逮捕させたのは、おれではない。きみだよ、ベシゥー」
「おまえさんが手引きをしたからさ。文句なしに、犯人だからだ」
「どうして、それがわかる」
「おや、すると、おまえさんは、いまになっては確信がないのか」
「いっとくが、ないね」ジャン・デンヌリは皮肉たっぷりな口調でいった。「こんどのことには、ひどく辻褄のあわない点が多々ある。あの気位の高い男が泥棒だなんて。この誇り高い女が泥棒だなんて。おれには、髪以外には接吻できそうにもない女が。まったくだよ、ベシゥー、きみはいささか早まったのじゃないかと思うよ。かるはずみで、とんでもない厄介な事件にとびこんだのじゃないかと思うよ。責任重大だよ、ベシゥー」
ベシゥーはたじたじになり、青くなって傾聴していた。ヴァン・フーベンは、心配で心臓がしめつけられ、ダイヤモンドが、またもや闇のなかに消えてゆくように感じた。
ジャン・デンヌリは、うやうやしく伯爵夫人の前にひざまずき、耳もとでささやいた。
「あなたは無実なのでしょう。あなたのような婦人が盗みを働くはずがない。兄さんとあなたご自身について、真実をわたしに話すように約束してください」

窃盗と殺人のかどで有罪となった。そして、ユルフェ町の自邸でピストル自殺をとげた。皇帝は事件を揉み消してしまった。

このふたつのスキャンダルが想起されたことは深い感銘を与えた。たちまちひとつの言葉が現在の事件を照明し、事態を要約した。隔世遺伝である。メラマール伯爵兄妹は大きな財産は持っていなかったが、少なくとも暮らし向きは楽で、パリに邸宅を構え、トゥレーヌには別荘があり、人道的な仕事つまり、慈善事業に献身していた。したがって利欲のみでもって、オペラ劇場の事件やダイヤモンドの強奪を説明することはできなかった。そうだ、隔世遺伝だ。メラマールの血統には盗癖があるのだ。兄妹はそれを先祖からうけついだのだ。このふたりは疑いもなく、現在の資産以上のもっと高級な暮らしをするために、あるいは、たぶん、あまりにも強力な誘惑に負けて、盗みを働いたのであろうが、なによりもまず遺伝的欲求によって盗みを働いたのだ。そして、祖父のアルフォンス・ド・メラマールと同じように、アドリアン伯爵も自殺しようとした。これまた遺伝である。

ダイヤモンドについても、ふたりの女性の誘拐についても、ふたつのエピソードがあった時間をどのようにして過ごしたかも、書棚で発見されたチュニックについても、この事件の謎の面を構成するいっさいのことについて、伯爵はなにも知らないと断言した。そんなことは伯爵のあずかり知らぬことである。それは、伯爵にとっては、別の天体で起こったことのようだった。

伯爵が弁解しようとしたのは、アルレット・マゾールについてだけだった。伯爵は、そのいうところによれば、ある既婚の婦人と関係を持っていたことがあり、生まれた娘をたいへんに愛し

な個所はなく、仕掛けもなにもなかった。

内庭には、別の住居はひとつもなかった。自動車の車庫もない。伯爵に運転ができることは判明した。しかし、車を持っていたとすれば、どこにおいたのだろう。ガレージはどこにあるのか。あらゆる疑問にたいして、なにひとつ解答がでてこなかった。

一方また、メラマール伯爵夫人は姿を消したままだったし、伯爵は絶対の沈黙のなかにとじこもって、重要な点について弁明しないばかりか、私生活についてほんのすこしでも説明することを断わった。

しかし、ひとつの事実だけは記憶にとどめておかねばならない。というのは、その事実は、この事件の全体を支配するとともに、司法当局、新聞、公衆が、めいめいこの事件について、自然発生的に抱いた一般的考えの中核となっていたからである。その事実というのは、事の発端から、ジャン・デンヌリが嗅ぎつけて、詳しいことを知ろうと志したものであり、いっさいの批評を抜きにして話すと、次のようなものである。一八四〇年、当主の伯爵の曽祖父にあたるジュール・ド・メラマールは、メラマール一族のうちでももっとも有名であり、ナポレオンのもとで将軍、王政復古当時は大使だったが、窃盗と殺人のかどで逮捕された。そして、監房で、脳溢血で死亡した。

問題はさらに深く追及された。古文書を漁った。すると、二、三の記憶がよみがえってきた。そして、かなり重要な文書が日の光を見るに至った。一八六八年、上記のメラマールの息子で、アドリアン伯爵の祖父にあたり、ナポレオン三世の侍従だったアルフォンス・ド・メラマールは

いりこんでみると、きまってデンヌリが伯爵夫人の足もとにすわって、しきりと夫人を慰め、希望を与えるようにし、兄を死と汚辱から救いだすことを約束していた。しかし、けっきょく、デンヌリは、夫人からなんらの情報も、手掛かりになる言葉も、ひと言もひきだすことはできなかった。

また、ヴァン・フーベンが、レジーヌ・オブリーとよりを戻そうとして、料理屋にでも連れ出そうとすると、必ず、デンヌリが、そのそばでごきげんとりをしているところへ行きあたった。

「そっとして、ほっといてよ、ヴァン・フーベン」と美しい女優はいった。「わたしは、あんたの姿絵を見るのも嫌だわ、あの事件があってからは」

ヴァン・フーベンは性懲りもなく、デンヌリを片脇にひっぱって行っていった。

「ねえ、きみ、わたしのダイヤはどうしてくれる」

「いまは、ほかのことで頭がいっぱいだ。レジーヌとジルベルトがおれの時間を全部とっている。ひとりは午後を、ひとりは夜を」

「でも、朝は？」

「アルレットだ。すばらしいよ、あの娘は。しとやかで、頭がよくて、ものわかりがよくて、幸福そうで、それこそ、かわいくて、子供のように単純で、ほんとうの女のように神秘で。それに、どこまでも正直で。最初の晩、おれは、いきなり、あの娘の頬に接吻できた。いまでは、もうだめだ。ヴァン・フーベン、おれが好きなのは、アルレットだとわかったよ」

デンヌリはほんとうのことをいっていた。レジーヌにたいする出来心は、いまでは親身な友情

ていたが、数年前に死んでしまった。そのことを、伯爵は深く悲しんでいた。ところが、アルレットがその娘にたいへんよく似ていたので、なくした子供を思い出して、われにもなく、二度か三度、アルレットのあとを尾けて行った。しかしながら、アルレット・マゾールが非難したように、人通りのない通りで、アルレットに近づいて言葉をかけようとしたことは絶対にないと、強く否認した。

こうして二週間がすぎた。その間、ベシュー部長はひたむきに、意地になって、まったくむだな大活動をつづけていた。ヴァン・フーベンはそのあとをつけまわって、ぐちをこぼしていた。

「もうだめだ。すっかりかたなしだ」

ベシューは拳をにぎりしめて、つきだしてみせた。

「あんたのダイヤのことですか。ダイヤなら、わたしの手ににぎっているも同然ですよ。メラマール兄妹を押えてある。あんたのダイヤは必ずとりもどしてみせますよ」

「デンヌリの手をかりなくともだいじょうぶかね」

「死んでもご免です。あの男に口をきくくらいなら、すっかりしくじったほうがましです」

ヴァン・フーベンは叱りとばした。

「とんでもないことをいう。あんたは、わたしのダイヤモンドよりも、自尊心のほうを先にしている」

それに、ヴァン・フーベンは、毎日のように、ジャン・デンヌリに会って、相手をいらだたせることを怠らなかった。ジルベルト・ド・メラマールがかくれ住んでいる離れ部屋に宝石商がは

られたり、わたしのまわりには騒動がありすぎますわ。しがないマネキンの頭が変になるのもあたりまえですわ」

デンヌリはかぶりを振って、いやます愛情をこめてアルレットを眺めていた。

そのあいだ、検察庁では、予審はすこしも進捗していなかった。メラマール氏を逮捕して二十日たち、まだ、ものの役にもたたぬ証言を掻きあつめたり、なにひとつ獲物のない家宅捜査がつづけられていた。すべての手掛かりがまちがっていて、いっさいの仮説が誤りだった。アルレットをメラマールの屋敷から、ヴィクトワールの広場に乗せて行った、最初のタクシーの運転手すらも見つからなかった。

ヴァン・フーベンはやせこけていた。いまでは、伯爵とダイヤモンドの盗難のあいだになんらの結びつきも認めていなかった。そして、ベシゥーの能力を疑い、それを口に出してはばからなかった。

ある午後、このふたりはデンヌリが住んでいるモンソー公園の近くの屋敷の一階の扉の呼鈴を押した。召使がドアを開けて招じ入れた。

「さっさと退散しろよ」出てきたデンヌリがいった。「ヴァン・フーベンも、ベシゥーも、よくもまた、きみたちは恥知らずだなあ」

ふたりはとほうにくれていることを白状した。

「この事件は、どうもうまくいかない」とベシゥー部長は神妙に告白した。「運がない」

「きみのような、まぬけには運がないさ」とデンヌリは答えた。「よろしい。おれがふとっぱら

にかわっていた。ジルベルトに会うのは、打ち明け話をききだしたいという、あだな希望のためだけだった。しかし、アルレットとともに過ごす朝な朝なは、ジャン・デンヌリを恍惚とさせていた。アルレットには、一種特別の魅力があり、それは深い誠実さとともに、人生にたいするきわめて確固とした信念からくるものだった。友だちを助けてやりたいという空想的な夢は、アルレットがほほえみながら説明すると、実現可能の計画のように見えだした。

「アルレット、アルレット」とデンヌリはいつもいっていた。「きみほどはっきりした、そして、きみほどつかみどころのないひとに出会ったことがない」

「わたしが、つかみどころがないとおっしゃるの」とアルレットは答えていた。

「そうだよ、ときどき。わたしには、ただひとつの点だけをのぞいては、きみというものがすっかりよく理解できる。が、そのひとつの点が、わたしにはどうしてもわからない。不思議なことだけれど、最初きみと近づきになったころには、そんなものはなかった。それが、いまでは、謎が毎日のように大きくなる。感傷的な謎だろうね」

「そんなことってないわ」アルレットは微笑しながらいった。

「そうなんだ、感傷的……きみは誰かを愛していないかい」

「わたしが誰かを愛するって。わたしは、誰でもみんな愛しているわ」

「いや、いや、きみの生活には、新しいものがはいりこんでいる」

「新しいものがはいりこんでいるとおっしゃれば、そうかもしれないわ。誘拐されたり、感情をたかぶらせたり、取調べや尋問があったり、たくさんのひとから手紙をうけとったり、噂をたて

その給仕は、返事も取り次いだと白状した」
「それで、きみは、その手紙を取り次がせた男の正確な人相をきいておいたか」
「きいておいた」
「よろしい。ヴァン・フーベン、きみは車を持ってきているか」
「持ってきてる」
「じゃ出かけよう」
「どこへ」
「いまにわかる」

それから、三人がいっしょに乗りこんだ自動車のなかで、デンヌリが説明した。
「ベシュー、きみが見落とした点がひとつある。おれにいわせると、それは重大な点だ。事件が起こる数週間前に、伯爵が新聞に出した広告は、あれはいったい、なにを意味するか。あんながらくたを広告までして探すとは、どんな利害関係があるのか。また、ユルフェ町の屋敷には、ほかの値打ものがたくさんころがっているのに、選りに選ってあんなものをかっぱらうとは、どういう理由があってのことか。その疑問を解く唯一の方法は、そうだろう、あの蠟燭さしや呼鈴の紐や、その他のくだらんしろものを十三フラン五十という、ちゃちな値段でおれに売った、おかみさんにきいてみることだった。それで、おれはそうした」
「で、その結果は?」
「いままでのところでは陰性だ、だが、いま陽性になる、と望みをかけている。蚤の市のおかみ

のところを見せてやろう。しかし、絶対服従だよ、どうだ。カレーの市民*のように首に縄をつけて、下着一枚だぞ」
「わかった」ヴァン・フーベンはデンヌリの上機嫌につりこまれて、はやくも元気をとりもどして誓った。
「それで、きみはどうだ、ベシウー」
「なんでもいいつけてほしい」ベシウーは陰気くさい声でいった。
「きみは警視庁のほうはほうっておいて、もっぱら検察庁のほうにかかりきりにするんだ。それから、あの連中はでくのぼうで、ものの役にはたたんと宣言するんだ。そして、おれに保証するんだ」
「なんの保証を」
「忠実に協力する保証だ。で、向こうは、どういうことになっている」
「あす、伯爵と、レジーヌ・オブリーとアルレット・マゾールの対決尋問があるはずだ」
「おやおや。それじゃ、急がねばならん。発表しないでおさえてある事実が、なにかあるかね」
「ほとんどない」
「話してみたまえ」
「メラマールが手紙をうけとっていたのが監房で発見された。それにはこんなことが書いてあった。≪万事うまく片づく。その点保証する。元気を出せ≫と。おれが調べた。けさになって、その手紙は、伯爵に食事の差入れをしている料理屋の給仕の手をかりて渡されたことがわかった。

「この偶然の暗号は、われわれにとって大いに有望だ。おれのダイヤが、その≪プチ・トリアノン≫のどこかの秘密の引出しにあると信じて悪い理由はどこにもない。その場合、デンヌリ、わたしはきみを信用するが、きみはきっとじょうずにたちまわって……」

「きみに贈りものをするのを忘れないようにするんだろう。……もちろんさ、きみ」

自動車は、≪プチ・トリアノン≫から少し離れた場所にとめ、ベシューを店先にのこしておいて、デンヌリとヴァン・フーベンはなかにはいった。細長い店で、つまらぬ骨董品や、ひびのはいった壺や、縁のかけた陶磁器や、すり切れた毛皮類や、破れたレースがいっぱいに詰まり、要するに古道具屋の店を構成する、あらゆるものがあった。店の奥で、半白の髪をしてでっぷりとふとったトリアノン婆さんが、栓のとれた水差しを手に持った男と話していた。

ヴァン・フーベンとデンヌリは、なにか掘出し物でも探す好事家のようなかっこうで、ゆっくりと店内を歩きまわっていた。デンヌリは、横目でこっそりとその男を観察していたが、ものを買うためにいる客とはうけとれなかった。大男で、ブロンドの髪をし、強そうで、おそらく三十年配らしく、みかけが上品で、誠実そうな顔立ちをしており、なおしばらく話していたが、やがて栓のない水差しを下におくと、店内のいろんな骨董品をいちいち眺め、向こうもまた、デンヌリの見たところでは、新来の客をこっそりとうかがいながら、入口のほうへ歩いて行った。

ヴァン・フーベンは、こうしたふたりのだんまり劇には少しも気がつかず、トリアノン婆さんのそばまで近づいていたが、婆さんに話しかけてみるのもいいと考え、デンヌリのほうはそうしようともしないので、小声でいった。

には、事件の翌日、さっそく出かけて行って会ってきたが、あのしろものを百スー（五フラン）で売りつけた相手をよく覚えていた。女の古道具屋で、ときどきやってきては、同じような二束三文のしろものを、おかみにまた売りするんだそうだ。名前は、所書は、となると、そのおかみは知っていなかった。しかし、その古道具屋の女を連れてきた古物商のグラダンという男にきけば、わかるはずだといった。それで、おれは、左岸の、そのグラダンの店にかけつけた。ところが旅行ちゅうだった。きょう帰ってくる」

一行はまもなくグラダンの店に着いた。相手はためらうこともなく答えた。

「そりゃ、きっとトリアノン婆さんのことでしょう。店がサン・ドニ町にあって、《プチ・トリアノン》というので、みんな婆さんをそう呼んでいるんです。おかしな女でしてね、無口で、かなり奇妙な女で、くだらん品物をいろいろ売っていますが、その一方では、じつにおもしろい調度類を、どこで手に入れてきたのか存じませんが、わたしに売ってくれたことがあります。……なかでも、十八世紀のえらい黒檀細工師のシャピュイの刻印入りの純粋にルイ十六世王朝のマホガニーの調度なんかみごとなものでしたよ」

「その調度は売却しましたか」

「さようで、アメリカに送りました」

三人の男は、ひどく不審な思いでグラダンの店を出た。そのシャピュイの署名というのは、メラマール伯爵の屋敷にある大部分の調度類に見られたものだった。

ヴァン・フーベンは揉み手をした。

「すると、きみは怪しいとにらんでいたのか」
「ガラス戸越しに、あいつがなにものか見定めたのです」
「誰だ」
「監房にいるメラマール伯爵にまんまと手紙を届けさせた奴です」
「伯爵への手紙の差出人か。そして、奴はメラマールの屋敷で盗んだものを売りつけた女と話していた。いやはや、ベシュー、まったく、偶然の一致もばかにならんよ」
しかし、デンヌリの喜びは、長つづきがしなかった。オテル・コンコルディアでは、その男の人相に相当するものは、誰もはいってくるのを見うけていなかった。三人は待っていた。ジャンはしびれをきらした。
「いった所番地は、たぶん、でたらめだったのだ」とやがていい出した。「あいつは、われわれを《プチ・トリアノン》から追っ払いたかったのだ」
「なんで」
「時をかせぐためだ。……あそこへ引きかえそう」
デンヌリの見当はまちがっていなかった。サン・ドニ町にはいったとたんに、古道具屋の婆さんの店は、すでに閉まっていて、鎧戸をおろして、鉄柵をしめ、錠をおろしてあるのが見えた。
隣近所では、なんの手掛かりも得られなかった。みんな、トリアノン婆さんを知っていることは知っていた。しかし、誰ひとりとして、婆さんからひと言でもひき出し得たものはいなかった。十分ほどまえに、婆さんが、いつもの晩のように、ただ、その日は二時間ほどはやく、自分自身

「ときに、まさか、そんなこともあるまいとは思うけれども、もしかして、わたしが盗まれたあるものを、あんたのとこにまた売りしたものはいないだろうかね、たとえば……」
デンヌリは、連れのものが不謹慎な行動をするのを予感して、合図しようとしたが、ヴァン・フーベンはすでに先をつづけていた。
「たとえば、はめこみ錠とか、半分に切れた青い絹の呼鈴の紐とか……」
古道具屋のおかみは耳をたて、それから、さっきの男と目交ぜをした。男は、必要以上に少し度をすごしたいきごみかたでふり向き、眉根をよせた。
「いいや、そんなものはありませんよ」と女はいった。……「そこのがらくたの山を探してご覧なされ。……たぶん、間に合うものが見つかるかもしれませんよ」
男はちょっと待っていたが、もう一度、婆さんに、用心しろというような一瞥をくれておいて、やがて出て行った。
デンヌリは急いで入口に行った。男はタクシーを呼びとめてとびのり、扉口からのぞいて、運転手に低い声で所番地をいっていた。しかし、ちょうどそのとき、ベシュー部長が近づいて、車のそばを通りかかっていた。
デンヌリは、未知の男に見つからないように、しばらくのあいだじっとしていた。車が町角をまわると、ベシューといっしょになった。
「どうだ。聞いたか」
「聞いた。フォーブール・サン・トノレのオテル・コンコルディアです」

「十五分まえ。それ以上はたっていません」
「ひとりでか」
「いいえ」
「お母さんとか」
「いいえ、マゾールの奥さんは用たしにおでかけです。お嬢さんが外出されたことはまだご存じありません」
「すると、誰と出た」
「男のかたで、自動車で迎えにおいででした」
「ブロンドの大男か」
「そうです」
「前に見たことがあるか」
「この一週間ほど、ずっと夕食のあとで、マゾールさん母娘に会いにおいででした」
「名前を知っているか」
「知っています。ファジュロー、アントワヌ・ファジュローさんというかたです」
「ありがとう」
　デンヌリは失望と憤りをかくそうともしなかった。
「こんなことだろうと予想していたんだ」門番の住居から出ながら、デンヌリは歯ぎしりした。「ああ、まんまと乗じられた。ちきしょう。奴が事件の背後で糸をあやつっているのだ。だが、

で店を仕舞うのが見えた。どこへ行ったのか。住んでいる場所を誰も知っていなかった。
「いまにつきとめてやる」ベシューがうなるようにいった。
「きみにはつきとめられないさ」とデンヌリが断定した。「トリアノン婆あは、あきらかにあの男の手先なんだ。あの男は、おれがみたところ、仕事はちゃんと心得ている奴だ。攻撃をかわすだけでなく、攻撃を加えることも、あえて辞さない男だ。どうだ、ベシュー、攻撃してくると思うかね」
「そう思うね。だが、まず、奴は自分の身を守らねばならない」
「身を守る最善の方法は、攻撃することだよ」
「奴は、われわれには手だしができない。誰に攻撃をしかけるだろう」
「誰に攻撃をしかけるだろう……」
デンヌリは数秒間考えていた。それから、いきなり自動車にとびのると、ヴァン・フーベンの運転手を押しのけて自分でハンドルを握り、急発車したので、ヴァン・フーベンとベシューは辛うじて、ドアにすがりつく時間があっただけだった。みごとな腕前で、人混みをかきのけ、信号を無視して、全速力で、環状線の大通りをぶっとばした。そして、ルピック町を一気によじのぼった。アルレットの住居の前で停車。門番のうちへとびこむ。
「アルレット・マゾールは？」
「おでかけですよ、デンヌリさん」
「いつごろ……」

こうして、二十分間ほどのうちに、一度誘拐されたことのあるふたりの女性は、またもや、新しい罠、さらにおそろしい脅威を予告するように解される条件のもとで姿を消してしまった。

＊「カレーの市民」は東京上野の近代美術館にもロダンのその彫像があるが、カレーが英国軍に包囲されたとき英雄的な抵抗を試み、ウースタッシュ・ド・サン・ピエールほか、五人の市民がエドワード三世の人質となって、町を救った。

6 メラマール家の秘密

今度は、ジャン・デンヌリは、少なくとも外見だけは自制心を保っていた。怒りも見せない。呪い言葉も吐かない。しかし、どんな嵐が、その全生命をゆさぶっていたことか。

デンヌリは時計を出してみた。

「七時だ。夕食にしよう。さあ、あそこに小さなめしやがある。八時に行動開始だ」

「なぜ、さっそくとりかからないのです」とベシューがいった。

三人は安月給取りや、いくにんかのタクシーの運転手にまじって片隅に席をとり、デンヌリが部長に答えた。

「なぜって。おれは、まんまと裏をかかれたからさ。こんなこともあろうかと思って、それを防ぐために、盲めっぽうに動きまわった。それが手遅れだった。うけた打撃のひとつひとつが、ち

野郎、あの娘に手出しをしないといいが」
ベシウーが異議をとなえた。
「そんな目的のはずがない。前にも訪ねてきているんだし、あの娘は自分からついて行ったらしいもの」
「そうだ。しかし、なにが底にあるか、どんな罠が。なんでまた、あの娘は、その男のたびたびの訪問のことを、おれに話さなかったのだろう。要するに、いったい、なにを企んでいるのか、そのファジュローって奴は」
とたんにデンヌリは、はっと思いあたることがあり、自動車にとびのるがはやいか、通りを走って横切ると、郵便局にはいりこんでレジーヌに電話をかけた。つながるといきなりに、
「奥さんは在宅か。デンヌリからだ」
「奥さんは、つい今しがたおでかけです」小間使が答えた。
「ひとりでか」
「いいえ。アルレットさんとごいっしょです。あのかたが迎えにおいででした」
「前から外出することになっていたのか」
「いいえ、とっさにおきめになったのです。でも、アルレットさんからは、朝、お電話がございました」
「婦人連はどこに行ったか知らないのか」
「いいえ、旦那さま」

三人は歩いてモンマルトルの丘をくだり、オペラの広場のほうへ向かった。そして、ジャンは、その憤りを短い言葉でぶちまけた。

「そのアントワヌ・ファジュローって奴、手強い敵手だ。いまに手痛い目にあわせてやる。われわれが努力を分散させているあいだに行動したんだ、奴は……しかも、なんというエネルギーだ。いったい、どうしようというのか。何者なのか。横取りした手紙から考えられるように、伯爵の友人だろうか。それとも、敵だろうか。共犯者だろうか、競争者だろうか。それにしても、あのふたりの女を家からおびきだしたのは、なんの目的だろう。……いっしょに連れだして、どうしようというのか。なぜ、アルレットは、おれにかくしていたのか」

長いあいだ、デンヌリは黙りこんでいた。ときどき、地べたをどんと蹴り、よけようとしない通行人にぶっつかりながら、考えこんでいた。

とつぜん、ベシゥーがいった。

「あんたは、いまどこにいるか、わかっているんですかい」

「うん、コンコルドの橋の上だ」

「すると、ユルフェ町のすぐ近くですよ」

「ユルフェ町からも、メラマールの屋敷からも遠くない。わかっている」

「では？」

デンヌリは部長の腕をつかんだ。

「ベシゥー、われわれがいま手がけている事件は、いつもとちがって、手引きをしてくれる手掛

っとばかりずつ、よけいに痛手を負わせおった。おれは出直して考えなおさねばならない。そのファジュローって奴は、なんで、レジーヌとアルレットをうちから連れだしたのか。そんな男について想像できることは、おれを安心させるような性質のものではない」
「それで、あんたの考えでは、一時間のうちに……」
「ものごとはいつでも、時間の制限をつけておかねばならんよ、ベシゥー、そのことを、きみも心得ておくべきだ」
デンヌリは見たところ、まったく、心配などはしていないようだった。旺盛な食欲をもって食べ、まるで事件とは縁もゆかりもない話さえしていた。しかし、その動作は神経質で、頭は不安で緊張しているのが察しられた。じじつ、心底では、事態をきわめて重大だと考えていた。八時ごろ、いざ出かけようとしたとき、デンヌリはヴァン・フーベンにいった。
「電話で伯爵夫人のようすをきいてくれ」
一分くらいで、ヴァン・フーベンは、カフェーに設けられていた電話室からもどってきた。
「別状はない、と、わたしが夫人につけておいた小間使がいった。ぐあいもよくなっている。夕食をとったそうだ」
「じゃ、でかけよう」
「どこへ」とベシゥーがきいた。
「知らない。とにかく歩こう。行動する必要がある。ベシゥー、行動が必要だ」デンヌリは力をこめてくりかえした。「なにしろ、あのふたりとも、その男の手中にあることを考えると」

直面しなくてはならぬ事態を想像して、いよいよ心配がつのるかのようだった。
デンヌリはユルフェ町を避けて、屋敷をとりまく一団の家々を遠まわりし、うしろ正面の庭園を縁取る人通りの少ない通りに出た。無住の小さなあずまや風の住居の先に、アルレットが通って逃げ出した小さな門があった。ベシゥーがびっくりしたことには、デンヌリは、その門の鍵を、錠前の鍵も、安全門の鍵も、両方持っていた。そして、扉をあけた。目の前に半くらがりの庭園がひらけ、母屋の黒影がうかびあがったが、あかりはどこにも点っていなかった。鎧戸が閉めてあるのにちがいない。
アルレットと同じに、しかし、方向は逆に、三人は灌木の植込みの一段と暗い線にそい、母屋から十歩ばかりのところまで行ったとき、乱暴な手がデンヌリの肩をつかんだ。
「えっ、なんだ」デンヌリは、ただちに防禦姿勢をとって、低い声でいった。
「わたしだ」と声がいった。
「わたしとは誰だ。ああ、ヴァン・フーベンか……。どうした、あんぽんたん」
「わたしのダイヤ……」
「きみのダイヤだと?」
「どうやら、きみはいまに見つけるらしい。それで、誓ってもらいたいのだ……」
「うるさい」デンヌリはかんしゃくをおこしてつぶやくと、ヴァン・フーベンを突きのけたので、相手は植込みにつまずいた。「そこにいたまえ。邪魔っけだ。……見張りでもしてるんだ」
「きみは誓って……」

かりはなにもない。指紋もないし、身長体重の測定もないし、足跡もない……なにもない……頭の働きのほかなにもない、それと、直観だ。ところで、直観がおれをひっぱってきたのは、この方面だ、いわば、おれの知らないうちに。すべての問題が、あそこで起こった。まず最初にレジーヌが、次にはアルレットが連れて行かれたのは、あそこだ。そして、おれは、忘れようとしても、どうしてもあの石畳の玄関と、二十五段の階段と、客間が思いだされてならない……」

彼らは下院の建物沿いを歩いていた。ベシゥーが叫ぶようにいった。

「そんなことってあり得ない。そうでしょう、なぜまた、その男が他人のしたことをくりかえすのです、しかも、いっそう危険な条件のもとで」

「そこなんだ、ベシゥー、おれが頭を悩ましているのは。計画が成功するために、そんな危険をおかさねばならぬとしたら、その計画なるものは、なおさらおそろしいものにちがいない」

「しかし、そうやすやすとははいれませんよ、あの屋敷には」とベシゥーが抗弁した。

「ベシゥー、そう、おれを見くびるものじゃない。おれは、夜といわず、まっ昼間といわず、おかまいなしに、あの屋敷を天井裏から穴倉まで全部捜査した。しかも、フランソワ老人はちっとも気がつかなかったよ」

「しかし、奴は、アントワヌ・ファジュローは、どうやってはいるというのです。しかも、あのふたりの女まで連れて」

「フランソワの手引きでさ、もちろん」デンヌリはひやかした。

屋敷に近づくにつれてデンヌリは足をはやめ、あたかも、ものの姿がますますはっきりと見え、

壁掛けが、通風でかすかにゆれていた。ふたりは、それが動かなくなるのを待った。それから額を壁掛けにはりつけて、客間のなかをのぞいた。

そのとき目にした光景は、じっさい、びっくりするほど意外なものだったが、とびこんで行って、組み打ちを必要とするものとは思われなかった。アルレットとレジーヌは並んで長椅子に腰をかけ、部屋のなかを一方のはしから、別のはしまで行ったり来たりして歩いている、背の高いブロンドの男を眺めていた。《プチ・トリアノン》で出会った、メラマール氏に手紙を出した男だった。

三人の若い男女は、誰もひと言も口をきかなかった。ふたりの女は、べつに不安そうなようすもなく、アントワヌ・ファジュローは喧嘩腰でも、居丈高でもなく、見ていて不愉快でさえなかった。そこにいる三人は、なにか待っているとでもいったかっこうだった。耳をすましていた。三人の目は、階段の踊り場にある戸口のほうへたびたび向けられ、アントワヌ・ファジュローは、行ってドアを開け、きき耳をたててさえした。

「なにも心配はないの」とレジーヌが男にいった。

「ぜんぜん」と男はいった。

すると、アルレットがつけ加えた。

「しっかりと約束したのよ。べつにむりじいする必要はなかったの。でも、召使は、まちがいなくベルの音をきくかしら」

「われわれが鳴らしたときは聞こえた。それに、おかみさんがいっしょに庭にでている。ドアは

デンヌリはベシューとともにまた歩きだした。客間の鎧戸は閉めてあった。とにかくデンヌリはバルコニーによじのぼり、ちらと眺めて耳をすませ、それから、地面にとびおりた。

「あかりが点っている。しかし、なかはなにも見えない。物音もしない」

「すると、失敗か」

「ばかをいうな」

低い出入口があって、庭から地下室へ通じていた。デンヌリは階段を数段おりて、懐中電灯をともし、花鉢や椅子などがいっぱいにある広い部屋を抜けて、用心しながら玄関に出た。電灯がひとつ点っていた。誰もいない。ベシューに音をたてないように注意を与えて、大階段をのぼった。踊り場までのぼると、正面に客間があり、右手に誰もつかっていない寝室があった。デンヌリは、前に調べておいたので、そのことをよく知っていた。

なかにはいると、くらやみのなかをふたつの部屋を仕切る壁ぞいに進み、偽鍵(にせかぎ)をつかって、かたりとも、ことりとも物音ひとつたてないように、いつもは閉めきったままになっている二枚扉になった仕切戸を開けにかかった。デンヌリは、扉の反対側は壁掛けでかくされていて、その壁掛けは、ところどころ孔があいた布で裏打ちがしてあり、場所によっては、薄い布目の格子越しに向こうがすいて見えるのを知っていた。

床を行ったり来たりする足音が聞こえた。人声はなにもしない。

デンヌリは片手をベシューの肩にのせたが、それは接触を保って自分の感じを相手につたえ、勝手なまねをさせないようにするためのようだった。

「アントワヌ、あなたのご親切には、こころから感謝しています。むかしの友情を思って、わたしは、そのご親切をうけ入れます、……しかし、たいして希望はかけていません」
「信頼してほしい、ジルベルト」と男はいった。「こうして、ぼくは、もう、あなたを見つけだすことができただろう」
「どうやって」
「マゾールさんを通じてだよ。ぼくは、マゾールさんのうちにでかけて行って会って話し、きみのために力をかしてもらうことにした。ぼくから頼みこんで、レジーヌ・オブリーに、あなたの居所をきいてもらったのだ。ヴァン・フーベンが、あなたの隠れ場所をレジーヌ・オブリーさんに打ち明けて話していたんだ。けさ、ぼくにかわってあなたに電話をかけて頼んだのは、アルレット・マゾールさんだったんだ」
ジルベルトは、お礼のしるしに頭をさげ、それからいった。
「わたしは、こっそりと出てきたのよ、アントワヌ、きょうまで、わたしを守っていてくれたひとに知られないようにして。わたしは、そのひとに、まえもっていわないでは、なにごともしないって約束をしているのよ。あなたは、そのひとを知っている？」
「ジャン・デンヌリだろう。知っている。アルレット・マゾールさんからきいてね。アルレット・マゾールさんも、その男を度外視して、なにかすることをいやがっている。しかし、そうする必要があったのだ。ぼくらはすべてのひとを疑っているのだ」
「でも、あのひとを疑ってはいけないわ、アントワヌ」

みんな開けておいた」
デンヌリはベシゥーの肩をにぎりしめた。ふたりは、なにごとが起ころうとしているのか、来ると約束して、アルレットとレジースを誘いだした人物は、誰だろうかと怪しんだ。
アントワヌ・ファジュローは、若い娘のそばに来てすわり、ふたりは低い声で、興奮して、なにか話し合っていた。ふたりのあいだには、ある程度の親しい打ち解けたようすがあった。男がせきこんで、少しばかり必要以上に、まぢかにからだを乗り出してきても、アルレットは気にしなかった。しかし、ふたりはとつぜん、からだをひきはなした。ファジュローは立ちあがった。庭のベルが二度、つづけざまに鳴った。それから少し間をおいて、また二度鳴りひびいた。
「合図だ」とファジュローはいって、踊り場のほうへ急いで行った。
一分ほどたった。なにかいっている人声がきこえた。それから、ファジュローは、ひとりの婦人を連れて帰ってきた。デンヌリとベシゥーには、それが誰かすぐにわかった。メラマール伯爵夫人だった。
肩が、ひどい力でしめつけられたので、ベシゥー部長ははっと息をのんだ。伯爵夫人の出現に、ふたりの男はあっけにとられた。デンヌリは、あらゆる事態に対応する覚悟をしていたが、まさか夫人が隠れ家をすてて、敵が召集した、この集まりにやってくるとは思いもそめなかった。
夫人は青ざめて息をきらせていた。手がすこし震えていた。あの事件以来、はいったことのない部屋を不安そうに見まわし、そのおそろしい証言で、自分が逃げださねばならなくなり、兄の破滅をもたらした、ふたりの女を眺めていた。それから、連れの男にいった。

おいて、なにごとがあったのだろうか。この男はジルベルトを愛していたのだろうか。そして、現在、いかなる方法で、アルレットの同情を買い、その服従をかち得たのだろうか。

メラマール伯爵夫人は、かなり長いあいだ沈黙を守っていた。ようやく、つぶやくようにいった。

「わたしはどうすればいいの」

男はアルレットとレジーヌをさした。

「このふたり、あなたを告発した、このふたりを説き伏せて、納得してもらうのだ。ぼくは、自分ひとりの確信にもとづいて、このふたりに疑いを起こさせ、この集まりができるようにすることに成功した。ぼくの仕事を完成できるのは、あなたひとりだけだ」

「どうやって」

「話し合うのだ。この不可解な事件には、なおさら事件を不可解にするいろいろな事実があり、その事実にもとづいて、当局は断固とした決定をくだそうとしている。ところで、そこには……あなたが知っていることがある」

「わたしはなにも知らないわ」

「あなたはなにかを知っている……兄さんときみは、ふたりとも潔白なのに、なにも弁解しようとしない、それには理由があり、あなたは知っているにちがいない」

夫人は苦しさに堪えかねたようにいった。

「いくら弁解したってむだです」

「ぼくが求めているのは、弁解ではない、ジルベルト」男は熱のこもった声で叫んだ。「あなた

「ほかの誰にもまして疑っている。ついさっき、ある女商人のうちでその男に出会った。その女商人というのは、何週間もまえからぼくが探していた、きみの兄さんが盗まれた品物を持っていた女だ。その男も、ヴァン・フーベンとベシュー刑事をつれて、その店にきていた。そして、敵意をもった疑いの目で、ぼくを見ていたように思う。ぼくのあとを尾けようとまでした。どういうつもりなのだろうか」
「そのひとは、あなたを助けてくれることができるかもしれないわ……」
「断じてだめだ。どこの馬の骨か牛の骨かもわからない、あのぺてん師と協力するというのか。……あやしげな、ゆだんもすきもならないドン・ファンで、きみたちみんなを自由にあやつっている男と。だめ、だめ。それに、われわれは目的を異にしている。ぼくの目的は真相をつきとめることにあり、あの男の目的は、ゆきがけの駄賃にダイヤモンドをかっ払うことだ」
「どうして、それがわかるの」
「ぼくには察しがつく。そのはらのなかははっきりとわかる。それに、ぼくが聞いた特別な情報によると、ベシューもヴァン・フーベンも、あの男については、それと同じ意見を持っている」
「まちがった意見よ」とアルレットが断定した。
「そうかもしれない。しかし、ぼくは、それをほんとうだとして行動する」
デンヌリは熱心に耳を傾けてきいていた。相手が自分にたいして表明しているのと同じ憎悪を、こちらも本能的に猛烈に感じていた。その顔の真摯さ、その献身の誠実さを認めないわけにはゆかないだけに、なおさら相手を憎悪した。いったい、ジルベルトとこの男のあいだには、過去に

夫人は顔をあげた。
「死ぬって？」
男は夫人のうえからかがみこみ、重々しくいった。
「ジルベルト、ぼくは、あなたの兄さんと連絡した。あなたたちふたりを救い出すと書いた。すると、兄さんは返事をくれた」
「返事をくれたの、アントワヌ」夫人は感動に目を輝かせていった。
「ここに、その手紙がある。ほんの数語だけだ……読んでみたまえ」
夫人は、兄の筆跡を見、そして読んだ。
「ありがとう。火曜日の晩まで待つ。もしも……」
そして、夫人はすっかり絶え入りそうになってつぶやいた。
「火曜日……あすだわ」
「そうだ、あすだ。あすの晩、対決尋問のあと、アドリアン・ド・メラマールは釈放されるか、まもなく釈放されることにならないと、アドリアンは監房のなかで死んでしまうだろう。ジルベルト、あのひとを救うために、できるだけのことをしなくてはならぬとは思わないのか」
夫人は熱にとりつかれてわななき、ふたたび、われとわが身のうえにくずおれて、面を蔽った。
アルレットとレジーヌは、無限の同情をもって夫人を見守っていた。デンヌリは心臓をしめつけられるような思いがした。いままでいくたびかデンヌリは、夫人の抵抗と強情張りを、このように崩壊させようと試みてきた。今、夫人はようやく打ち負かされたのだ。そして、涙ながらに、

たちを弁解させないようにしている動機をきいているのだよ。目前の事実については、ひと言もいわない。それはそれでよかろう、しかし、あなたの精神状態、ジルベルト、あなたの魂の底にあること、そういうことのいっさいについて、ジャン・デンヌリがいくらきいても、あなたはひと言も話さなかった。いろいろなことのいっさいについて、ぼくは推察をし、そして、知っているつもりだ。なにしろ、ぼくはここで、親しくこの屋敷で、あなたのそばで暮らしてきたので、メラマール家の秘密がすこしずつしだいにわかってきたのはあたりまえだ。ぼくには、いっさいのことが説明できる。しかし、ジルベルト、それをいうのは、あなたの義務だ。なぜといって、あなたの言葉だけが、アルレット・マゾールさんとレジーヌ・オブリーさんを納得させることができるからだ」

膝に肱をつき、顔を両手のあいだにささえて、ジルベルトはささやくようにいった。

「なんの役にたちましょう」

「なんの役にたつかというのか、ジルベルト。ぼくは確かな筋から聞いて知っているが、あすは、このふたりが兄さんと対決させられる。そのとき、このふたりの証言が、もっとためらいがちで、もっと断定的でないとしたら、当局には、あとにはじっさいの証拠はなにも残らないではないか」

夫人はぐったりとなったままだった。こうした議論は、夫人にとってはなんの意味もない、むだごとに思われているに相違ない。夫人は、口に出してそういい、つけ加えていった。

「いえ……いえ……なんの役にもたちません。……黙っているに越したことはありません」

「そして、死ぬのか」と男はいった。

なことを」
夫人は言葉を切った。胸を打つ感動と思い詰めた口調をもって話し、それは、ただちに、ふたりの女の琴線に触れていった。アルレットは夫人のほうに歩みより、顔をひきつらせていった。
「それでは、奥さま……すると？」
「すると」と夫人は答えた。「わたしたちは、なにか知らないものの犠牲者ということになります。……秘密があるとすれば、それです。わたしたちを呪っているものです。お芝居で、悲劇のなかで、何代ものあいだ運命に迫害される家族のはなしがあります。わたしたちは、すでに四分の三世紀ものあいだ、絶え間なくしいたげられているのです。たぶん、最初は、ジュール・ド・メラマールは、のしかかった、おそろしい嫌疑にたいして、身を守ることもでき、守ろうとしたことでしょう。しかし不幸にも、憤りのあげく気違いのようになって、脳溢血をおこして牢屋で死んでしまったのです。そしてその二十五年後、息子のアルフォンスは、ちがった事柄で同じようにおそろしい嫌疑をかけられ、もはや抵抗することさえもしなかったのです。四方八方から追い詰められ、自分の無力を感じておびえあがり、父親がたどった苦難の道を思いおこして自殺してしまったのです」
ふたたび、ジルベルト・ド・メラマールは黙りこんだ。そして夫人と向かい合ったままおののいていたアルレットはふたたびいった。
「それで、奥さまは……おねがいです。どうぞ、先をつづけて話してください」
そこで、夫人はまた話しはじめた。

辛うじて聞きとれるほどの低い声で話しはじめた。

「メラマール家の秘密というものはありません。……秘密があるとすれば、それを明らかにして前の世紀の先祖たちや、兄やわたしが犯した過ちを償うようにするでしょう。ところで、兄もわたしも、なんの過ちも犯していません……。わたしたちふたりが潔白であるとともに、ジュールもアルフォンスもまた、わたしたちと同じように潔白でした。……その証拠は出せません。わたしには、だすことができません。すべての証拠が、わたしたちにとってはのっぴきならぬもので、ひとつとして、わたしたちに有利なものはないのです。……しかし、わたしたちは、盗まなかったことを知っています、わたしたちは。……そのことは、ひともよく知っています。そうでしょう。わたしは、アドリアンもわたしもこのお若い婦人ふたりを、ここへ連れてこなかったことを知っています。……ダイヤモンドを盗んだこともないし、チュニックを隠したこともありません。……わたしたちは、そのことをよく知っています。そしてまた、わたしたちの祖父も、その父も、それは同じだったことを知っています。家族のもの全部が、あのひとたちふたりとも、潔白だったのを、最初からよく知っています。それは神聖な事実であり、父がわたしたちに伝えてくれたものです。そして父は、そのことを、非難をうけた当人から聞いたのです。……廉潔と名誉とはメラマール家の家憲です。……わたしの家の歴史をどんなに昔にさかのぼってみても、汚点はひとつもございません。どうしてあのひとたちが、とつぜんに理由もなく、そんなことをしたのでしょうか。財産があり、名誉があったひとたちです。そして、どうしてまた、兄やわたしが理由もなく、一家の過去に背くようなことをするでしょう。……過去の先祖のかたみんなに背くよう

て、つづく不幸の連鎖を断ちきろうとしたのです。兄はメラマール家の最後の人間になるつもりなのです。兄はこわがっていたのです」

「でも、なにがこわいのですか」アルレットがうわずった声でたずねた。

「いまに起ころうとしていることが、パリに出て十五年たって起こったことが」

「だって、そんなこと、誰にも予測できないでしょ」

「それはそうです。しかし、陰謀は、ものかげで着々としてととのえられていたのです。敵が、わたしたちのまわりをうろついていたのです。わたしどもの住居の包囲が進められ、その輪は、しだいにせばめられていたのです。そして、攻撃がとつぜんにはじまったのですわ」

「どんな攻撃が」

「数週間まえに起きたことです。ちょっと見には、ごく自然なできごとのように見えますが、おそろしい予告だったのです。ある朝、兄は二、三のものがなくなっているのに気づいたのです。つまらない品物で、呼鈴の紐とか、蠟燭さしとかいったものでした。もっとりっぱな品物がほかにあるのに、わざわざそういったものを選んで、時が来たことを知らせようとしたのです……」

夫人はいちど言葉を切り、そして、あとをいった。

「時が来たことを……雷が落ちようとしていることを知らせるためだったのです」

これらの言葉は、いわば謎めいた恐怖をこめて語られた。その日はおろおろしていた。夫人の態度には、兄と妹とが、災厄のふりかかるのを待ちながらいかに苦しんだかが、まざまざと感じられた。

「それで、わたしの一家には、伝説が生まれたのです。……父親と息子とが住み、ともに、災難のために咽喉をしめあげられた、この不吉な屋敷にのしかかる呪いの伝説が。未亡人となったわたしたちの父の母は、これまたすっかり傷心のすえ、夫の思い出のために戦うかわりに、田舎にいた、さとの両親のもとに逃げだして、その息子、つまりわたしたちの父を育て、パリのおそろしさを教え、このメラマールの屋敷に、けっしてふたたび住まわないように誓わせ、田舎で結婚させ……そして、こんどは父をおしつぶしたかもしれなかった破滅から父を救ったのです」

「お父さんをおしつぶしたかもしれないとおっしゃるの……」とアルレットがきいた。「どうして、あなたにはそれがおわかりなのですか」

「わかりますわ、わかりますとも」伯爵夫人は興奮して叫んだ。「そうですわ、父も、ほかのひとたちと同じようにおしつぶされたことでしょう。だって、ここに、この屋敷には、死神がいるのです。このうちにいると、メラマール家の厄病神がわたしたちをとりかこみ、わたしたちをうちのめしてしまうのです。両親がなくなったあと、その厄病神にたいして戦うのは、兄とわたしの役目であり、わたしたちが宿命の掟に忍従することになったのです。最初の日から、わたしたちが希望に燃え、過去を忘れて、田舎からでてきて、ユルフェ町の門を越えた最初の日から、わたしたちは、忍びよる黒い危険の影を感じました。兄がとくにそうでした。わたしは結婚して離婚し、幸福でもあり不幸でもありました。しかし、アドリアンは、パリに出るとすぐと陰気になってしまいました。危険にたいする兄の確信は、それは固くて胸苦しいものであり、そのために、兄は結婚をしない決心をしたほどです。メラマールの家系を断絶させて運命の呪いをはらいのけ

事件発生以来おちこんでいた、あの自失状態にふたたび陥ってしまった。しかし、その物語がいかにも異常で、いくぶん病的だったことは、夫人の不幸が当然よびさました大きな同情と尊敬とを、いくらか減殺した。アントワヌ・ファジュローは、一言も口をきかないで聞き入っていたが、夫人のほうへ歩みよると、うやうやしくその手に接吻した。アルレットは涙をためていた。それほど感じやすいたちでもないレジーヌまでが、胸をうたれているようだった。

7 救い主ファジュロー

壁掛けのかげで、ジャン・デンマリとベシュウーは身動きもしないでいた。せいぜい、ときどき、デンマリの情け容赦のない指が部長をひねりあげただけだった。幕間とでもいうべきものを利用して、デンマリは連れに耳打ちした。

「きみはどう思う。これで事情が明らかになったじゃないか」

部長はささやいた。

「明らかになるにつれて、なにがなにやら、わからなくなる。メラマール家の秘密はわかったけれど、事件そのもの、二重誘拐、ダイヤモンドについては、いままでどおりでなんにもわからない」

「まさに、そのとおりだ。ヴァン・フーベンも運がない。しかし、もうすこし辛抱しよう。ファ

夫人はなおもつづけて話し、その言葉は、夫人の表現をかりると、《雷》が不意に落ちかかったときの傷心と悲痛の精神状態を、あらわに示していた。

「アドリアンは戦おうとしました。なくなった品物を求める新聞広告をだしました。兄のいうところでは、そうすることによって運命をなだめようとしたのです。屋敷がうばわれたものをとり戻し、それらの品が、一世紀半の昔から占めていた場所にふたたびおさまると、メラマールの一族を迫害する神秘な力は、もはやわたしたちにはむかうこともないだろう、というのです。あだな希望です。すでにまえもって呪われているものに、なにができるというのでしょう。ある日、それまで、わたしたちが一度も会ったこともないおふたりが、ここにはいってこられて、わたしどもがなにも知らないことについて、わたしたちを非難された。……そして、それでおしまいでした。弁解もなにもできないでしょう。わたしたちは、たちまち手も足も出なくされて、がんじがらめにされてしまいました。みたび、メラマール家のものは、理由すらも知らないで、うちのめされたのです。ジュールやアルフォンスと同じ闇に、わたしたちは包まれたのです。そして、同じ結末が、わたしどもの苦難にとどめをさすでしょう……自殺が、死が。……わたしたちの物語は、いまお話ししたとおりです。そうであるからには、あきらめて祈るよりほかはありません。反抗することは神を瀆すとほとんど同じことです。命令が与えられているからです。しかしそれにしても、なんという苦しみ、なんという重荷を、わたしたちは、この一世紀にわたって、になないつづけてきたことでしょう」

これで、ジルベルトの不思議な打ち明け話は終わりに達した。そして、話し終わったとたんに、

れを否定することはできないわ」
「それはそうだ。しかし、伯爵とメラマール夫人があんたを連れてきたのは確かですか」
「奥さんの指輪に見覚えがあります」
「どうして、その証明ができますか。底を割っていえば、当局は推定だけにたよっている。予審では、最初の容疑から一歩も進んでいない。われわれはよく知っていますが、判事は迷っているのです。あんたがいくぶんかためらいがちに、≪この指輪は、わたしが見たのによく似ています。しかし、もしかすると、真珠の並べかたがちがっていたかもしれません≫といってくだされば、よろしい。そうすれば、情況はまるっきりかわってきます」
「しかし」とアルレットがいった。「そのためには、メラマール伯爵夫人が対決尋問の席に出られることが必要でしょう」
「夫人は出られる」とアントワヌ・ファジュローはいった。
その言葉は思いもよらないことだった。ジルベルトはおろおろして立ちあがった。
「わたしがでるって……わたしがその場にいなくてはならないの」
「いなくてはならない」ファジュローは、いやおうをいわせぬ口調でいった。「もはや逡巡したり逃げまわっているときではない。あなたの義務は、非難を真正面からうけて立ち、かたっぱしから申し開きをして、あなたたちふたりを麻痺させている恐怖と、ばかげたあきらめをふるい落として、兄さんをひきずり、兄さんにもまた戦わせるようにすることです。あなたは、今夜はこの屋敷で眠られるがいい。そして、あのジャン・デンヌリが心得違いをして、あなたをここから

ジュローの手のうちを拝見しよう」
じじつ、アントワヌ・ファジュローは、ジルベルトのそばをはなれて、若いふたりの女のほうに向き直っていた。物語の結論はこの男がつけるべきであり、同時に、その計画も説明しようとしていた。ファジュローはたずねた。
「アルレットさん、ジルベルト・ド・メラマールがいったことを、きみはすべて信じますね」
「ええ」
「あなたも、奥さん」男はレジーヌにいった。
「ええ」
「すると、おふたりとも、あなたがたの確信にもとづいて行動する用意がありますか」
「ええ」
ファジュローは先をつづけた。
「そうだとすれば、ぼくたちは慎重に、成功することだけを念頭において、ということは、メラマール伯爵を自由なからだにすることだけを念として行動しなくてはならない。そして、あんたたちには、それができる」
「どのようにして」とアルレットがいった。
「それはきわめて簡単です。あんたたちの陳述を緩和するのです。いままでのようにきびしい非難をしないようにして、断定をぼかして、疑いをまじえるのです」
「だって」とレジーヌが異議をとなえた。「わたしがこの客間に連れこまれたのは確かだし、そ

誰もいない。したがって、その方面では、完全に自由行動がとれる。その自由に行動ができる場所で、ふたつの事件の役者たちは活躍したのだ。そこへ、奴らは、あなたたちふたりを連れてきたのだ。お嬢さん、あなたは、そこを通って逃げたのです」

アルレットは異議をとなえた。

「そんなことって、ありそうもないことですわ」

「じっさい、ありそうもない。しかし、ありうることです。そして、その可能性にさらにもっともと思われる性格を与えているのは、謎の事件が三度とも同じ条件のもとで起こったという事実です。メラマール邸が、そのような配置になっているために、ジュール・ド・メラマールも、アルフォンス・ド・メラマールも、アドリアン・ド・メラマールも破滅させられたという確率が多分にある」

アルレットは軽く肩をすぼめた。

「すると、あなたの想像では、三度もくりかえして同じ陰謀が、新しい悪人たちによって行なわれたとおっしゃるのですか。その別々の悪人たちは、三度とも、同じように屋敷のそういった配置に気づいたというわけですか」

「そうです、別の悪人たちです、しかし、事情を知っている悪人です。メラマール家の秘密というものがあり、それは恐怖と敗北主義の秘密であり、数世代にわたって引き継がれたものです。しかし、表にあらわれたところでは、それは貪欲と、略奪と、危険を伴わない攻撃の秘密であり、敵方の一味を通じてひきつがれているのです」

逃げださせたことなどは忘れて、自分の場所にふたたび帰るのです。そして対決尋問が行なわれるときには、でかけてゆくのです。勝利はまちがいなしだ、しかし、それにはまず、勝利をのぞまねばならない」

「だって、わたしは逮捕されるでしょう……」と夫人はいった。

「そんなことはない」

その言葉は、いかにも激しく投げつけられ、アントワヌ・ファジュローの顔には、いかにも固い信念が現われていたので、ジルベルト・ド・メラマールは服従のしるしに面を伏せた。

「奥さま、わたしたちがお助けしますわ」と、今度はアルレットまでが興奮していった。ことの成り行きを見ているうちに、論理的で明晰なその精神が目をさましたのである。「しかし、わたしたちの善意志だけで足りるかしら。わたしたちはかわり番こにここに連れてこられて、この客間に見覚えがあるし、本棚からは、銀のラメのチュニックが見つかったし、裁判所では、メラマールの奥さまと兄さまが犯人でないと認めてくれるかしら。すくなくとも、共犯者だと認めないかしら。この屋敷に住んでいらして、あの時間、うちを留守になさらなかったとすれば、見られたはずだ、二度のできごとを目撃されたはずだと考えないかしら」

「ふたりは、なにも見なかったのだ。なにも知らなかった」とアントワヌ・ファジュローがいった。「屋敷の配置をよく思いうかべて見なくてはならない。三階の左手に、庭に面して、伯爵と伯爵夫人の部屋があり、ふたりは、そこで夕食をとり、晩をそこで過ごすのだ。……右手には、庭に面して、使用人たちの部屋がある。……一階と二階には誰もいない。庭にも付属建物にも、

に祟りをする、なにか厄病神にとりつかれているとでも考えるほか仕方がなくなり、その間、相手かたでは、いいつたえにより、習慣により、誘惑にまける人間が相次いで出現して、目前に提供されている行動場所を利用して、ここで、その仕事をやってのけ、わざわざ自分たちが通りすぎた証拠を残しておくといったわけなのです……あの銀のラメのチュニックのような。そうして、メラマール家のものに非難が集中する。そうして、きみたち、アルレット・マゾールさんやレジーヌ・オブリーさんのようないけにえが、自分たちが閉じこめられた場所を覚えていて確認するということになる」

　アルレットは、満足しないようすだった。その説明は巧みに組みたてられていて、ジルベルトが話した事情に不思議なくらいによく照応していたが、どこかに《無理》な点があり、対立する異論をいろいろ持ちだし得たし、多くの重要な事実が説明されないであいまいなままで残され、賛成するには抵抗を感じた。しかし、とにかく、ひとつの説明であることにはかわりはなく、多くの点で、真相からあまりかけはなれていないという印象をうけた。

「そうかもしれませんわねえ。でも、あなたが想像なすっていることは……」

　ファジュローは訂正した。

「ぼくの確信することです」

「あなたが確信なすっていることは、たとえ当局に話しても、当局としては、それを認めるか却下するか、どちらかですわねえ。誰が当局に話すのですか。当局にまずその話をきかせて、そして、それをどうしても信じないではいられないようにするだけの確信と誠実さを、誰が持ってま

「でも、なんでまた、その人たちはこの屋敷にくるのでしょう。この屋敷に連れてくるような不用心なことはしないでも、自動車のなかで、レジーヌ・オブリーのダイヤのコルスレは充分剝ぎとれたはずでしょう」

「不用心、いやいや、慎重です。他人に罪をきせて、自分は罪をまぬがれるためです」

「しかし、わたしは、なにも盗まれなかったのよ。わたしからは、なにも盗むことができなかった、なにも持っていないのですもの」

「その人物は、おそらく恋のために、きみを追いまわしていたのでしょう」

「でも、そのために、同じように、わたしをここに連れこんだとおっしゃるの」

「そうです、他人に疑いを転嫁するために」

「それだけで、充分の理由になるかしら」

「それはならない」

「すると?」

「すると、ふたつの家系のあいだの憎悪、敵対心ということも考えられる。その一方が、ぼくたちにはわからない理由で、一方のものの迫害をこととしているのだ」

「そうだとすれば、メラマール伯爵や奥さまは、ご存じのはずでしょう。そのことを」

「いや、知らないのです。そして、そこが弱味で、宿命的に敗北させられることになるのです。敵味方は、一世紀のあいだ相並んで生きていた。しかし、一方は相手を知らない。そして相手かたは知っていて行動し、陰謀を企てているのです。その結果、メラマール家のものは、自分たち

「でも、わたしは心配ですわ」とアルレットがいった。「あなたのご希望どおりの……わたしたちみんなが望むとおりの結果になるかどうか」

ファジュローは落ちつき払って、結論をつけた。

「ぼくが全責任をとります。アドリアン・ド・メラマールは、たぶん、あすの夕刻すぐ、拘置所を出るということにはならないでしょう。しかし、事態はすっかりかわって、当局としては、思いきってメラマール夫人を逮捕するわけにはゆかなくなり、兄さんも、釈放されるときまで生き抜くだけの希望をたもてるようになります」

ジルベルトは、また手をさしのべた。

「もう一度お礼を申しますわ。わたし、以前はあなたを誤解していました。恨まないでくださいね」

「恨んだことなんか一度もないよ、ジルベルト、きみのために働けるのは幸福すぎるくらいだ。ぼくがきみのためにつくしたのは過去の思い出のためだ。また、正しいことだから、そうしたのだ。それからまた……」

ファジュローはいちだんと声を低くして、重々しい態度で、

「世の中には、ある特定のひとの目の前でするると、いっそうの感激をもってやれる行為がある。そういう行為は、元来はごく自然なものであっても、そのときは一種の手柄といった性質をおびてきて、自分の働きを見ていてくれるものの尊敬と愛情を得るよすがになる」

このちょっとした台詞は、きわめてあっさりと、どこにも気取りがなく、アルレットに敬意を

すか」
「ぼくが持っている」ファジュローは大胆にいいきった。「ぼくひとりだけに、それができる。ぼくは、あす、メラマール夫人といっしょに、昔の友人として出頭します。ぼくは正直に白状して、ちっとも恥ずかしいとは思いませんが、夫人さえ許してくだされば、その友人という肩書は、ぼくが夫人にたいして持っている感情に、もっとぴったりした肩書によろこんでかえてもよろしい。ぼくは、夫人から断わられた結果、数年間、旅に出ていて、夫人の災難がはじまったときちようど帰ってきたばかりであり、夫人と、その兄さんの無実を立証することを心に誓い、夫人の隠れ家を見つけて、屋敷に帰るように説伏したことを証言します。

そして、検察側が、いままでほど断定的でないきみの陳述や、レジーヌ・オブリーさんの疑惑によって動揺をきたしたとき、ぼくは、ジルベルトの打ち明け話のことを話し、メラマール家の秘密をあかして、そこから当然出てくる結論を述べます。成功は疑いなしです。しかし、よくおわかりでしょうが、アルレットさん、最初の第一歩を踏みだしてもらわねばならぬのは、きみであり、レジーヌ・オブリーさんです。あなたたちにはっきりした決心がつかず、ぼくの説明の矛盾と欠点しか目にはいらないとすれば、ジルベルト・ド・メラマールをよく見てください。そして、このような婦人が泥棒になれるかどうか、とくと考えてみていただきたい」アルレットにはためらいはなかった。はっきりと断言した。
「わたしは、あすは、あなたが教えられた線に沿う申立てをします」
「わたしも、そうしますわ」とレジーヌはいった。

とばされた。
ベシューも、意見を求めようとして、たいして、それ以上の幸運にはめぐまれなかった。
「要するに、あの男はそれほどいけ好かない奴でもないようだ」
「ばか」デンヌリは舌打ちした。
「なぜ、ばかですかね。あんただって、あの男に、ある程度の誠意は認めるでしょう。あいつの説は……」
「ばかのうわぬりだ」
部長は、その形容詞でたじたじになった。
「そりゃ、わかっています。あの男とはトリアノンの店で出会ったのだし、おかみと目くばせをしていたし、あの婆あは、あとでずらかってしまったし。それにしても、話はすっかり辻褄が合うようじゃないですか」
デンヌリはとり合わなかった。庭園から出ると、ふたりの従者を厄払いしてタクシーのほうへ駆けだした。ヴァン・フーベンはデンヌリがダイヤモンドを持っているものと思い込んで引きとめようとしたが、まっこうから一撃をくらって、いざこざはけりがついた。十分後には、ジャンは、自分のうちの長椅子にからだをのばしていた。
これは、とりのぼせてもはや自制心がないことを感じ、なにか、ばかげたことをしでかすおそれがあるときのデンヌリの戦術だった。いま自分の思いどおりの行動をとるとしたら、こっそりアルレット・マゾールのうちへ出向いて、あの若い娘に釈明を求め、アントワヌ・ファジュロー

表明するために述べられたものだった。しかし、そのとき部屋にいた人たちの位置の関係上、デンヌリには、めいめいの顔が見えず、その言葉はジルベルト・ド・メラマールに向かっていわれたものと、デンヌリは信じた。

ただほんの瞬間デンヌリは真相に疑いを持ち、そのため、ベシューはふたつの肩甲骨のあいだに、堪えがたいほどの痛みを感じさせられた。部長には、人間の指に、こんな、やっとこのような馬鹿力があるとは思いもよらないことだった。幸いにして、その苦痛は長くはつづかなかった。

アントワヌ・ファジュローは、しつっこいことはいわなかった。呼鈴を鳴らして、老人の召使夫婦を呼びよせると、翌日演じなくてはならぬ役割と、しなくてはならぬ返事について、こまごまとした指示を与えた。デンヌリの疑いは晴れた。

デンヌリと部長とは、なお数分間、聞いていた。しかし、話はすんだらしかった。レジーヌは、アルレットにいっしょに帰ろうと誘っていた。

「退散しよう」とデンヌリは小声でいった。「この連中には、もうなにも話し合うことはないようだ」

デンヌリはアントワヌ・ファジュローとアルレットにたいして、むかっ腹を立てて出て行った。寝室と玄関の間を通り抜けながら、不機嫌を発散させるために、どたばた音を立てて、聞かせてやりたい欲求にかられた。

とにかく、外に出ると、デンヌリは、その不機嫌をヴァン・フーベンにふり向けた。ヴァン・フーベンは植込みの茂みからとびだしてダイヤモンドを請求し、いきなり、したたか拳骨でつき

「なにを」
「裁判所はしてやられた」
「きみのようにか」
「わたしのように。わたしのように、いや、それはちがう。……しかし、白状すると……」
「ほかの連中と同様、きみも丸めこまれたというのだろう。ファジュローが、黒を白といいくるめて、きみたちを煙にまいてしまったというのだろう。話をきこう」
「なにもかもみんな、定められた順序どおりにいった。対決、それから尋問。アルレットとレジーヌが、だんまりをきめこんだり否認したりするもんで、予審判事は、すっかり泡をくってしまった。そこへ、伯爵夫人とファジュローがまかり出て、予定計画どおりというわけですよ」
「ファジュローを立役者としてね」
「そうですよ。いや、じつにみごとな役者ぶりで、雄弁で、手ぎわがよくて」
「そんなことはどうでもいい。おれには、あいつのことは、よくわかっている。第一流のへぼ役者だ」
「たしかに……」
「結論は。免訴か。伯爵は釈放されるのか」
「あすか、あさって」
「ベシゥー、きみにとっては、たいした痛事だね、可哀そうに。逮捕した責任はきみにあるものね。それはそうと、アルレットはどんなようすだった。相変わらずファジュローのいいなりか」

を警戒するように忠告したいところだった。無駄な遠出である。かんじんなのは、まずその夜の会見の各段階を逐一思い出してみて、月並みな自尊心の印象とか、漠然とした嫉妬心がおしつけてくる見解とはちがった、ひとつの意見をひきだすことだ。

「あの男は、みんなを掌中に握っている」とデンヌリは、いまいましげにひとりごちた。「トリアノンでのできごとがなかったら、ほかの連中と同様に、おれまでもその仲間に加えたろうとさえ思われる。……それに、いや、いや、あまりにもばかげている、奴の話は。……司法当局はおそらく尻馬にのるだろう。おれは、そうはいかない。あんな話はなりたたない。では、なにが望みなのだろう。なんでまた、メラマール一族のために世話をやくのか。……それに、どうして、陰から出てきて、危険をものともしないかのように大胆な行動を開始したのだろう。当局はあの男のことを調べるだろう。その経歴を洗いあげるだろう。しかもなおかつ、それをおかして奴は動きだした……」

デンヌリはまた、アントワヌ・ファジュローがアルレットを巧みにたらしこんで、どういう方法を使ったのかは知らないが、不可解な支配力を、アルレットにたいして持っているように思われるのが癪だった。そして、デンヌリの影響力をはばみ、しかも、アルレットがデンヌリを袖にして行動しているほどに、その支配力は強く、デンヌリに反対の行動さえとらせている。それはデンヌリから見れば屈辱であり、がまんならないことだった。

翌日の晩、ベシューがひどく興奮してやってきた。

「やられた」

ーにきてください。大至急」

戦いがはじまっていた。デンヌリは元気いっぱいででかけた。いまでは考えがさらにはっきりとまとまり、情況がいままでほどに混沌としたものでなくなっていた。

カフェ・ロシャンボーで、ベシゥーのそばに腰をおろしたとき、部長は、屋内のガラス仕切りのそばに陣取って、通りを見張っていた。

「まさか、愚にもつかんことで、おれに手間をかけさせたのじゃあるまいね」

ベシゥーは、成功すると、いかにももったいをつけて大きなつらをし、大げさな口のききかたをするのが癖で、まず切り出した。

「わたしの捜査と併行して……」

「おい、おい、派手な文句はやめてくれよ、きみ。事実だけたのむ」

「それではと、トリアノン婆さんの店は、あくまでも閉まったままなので……」

「店がひとりでにあくまでも、どうこうするものか。忠告するが、電報流でやってくれ……それとも、黒ん坊の片言で」

「それではと、店は……」

「それはもう聞いた」

「あんたもうるさいな、まったく」

「いったい、きみは、なにをいいたいんだね」

「あの店の賃貸契約はロランス・マルタンという女の名義になっていることを、あんたに知らそ

「伯爵夫人に、旅行にゆくといっていたのを聞きましたよ」とベシゥーはいった。
「旅行にゆく?」
「そうですよ。しばらく、田舎の友人のうちで休養するんだそうです」
「たいへん、けっこうだ」このニュースによろこんだジャンはいった。「じゃ、また、ベシゥー。アントワヌ・ファジュローとトリアノン婆さんの情報があったら教えてくれるようにしてくれ。おれはひと眠りする」
デンヌリの睡眠は、一週間のあいだシガレットをふかしつづけることで、それが中断されるのは、ヴァン・フーベンがダイヤモンドを請求して死ぬといっておどかすときと、レジーヌがかたわらにすわって、なにか話そうとすると、瞑想の邪魔をするなと一言のもとにはねつけられるときと、ベシゥーが電話に呼び出すときだけだった。部長は次のようなカードを読みあげた。
「ファジュロー。——旅券の記載によれば二十九歳。フランス人を両親として、ブエノス・アイレスに生まる。両親とも死亡。三月前パリに到着、シャトーダン町モンディアル・ホテルに居住。競馬、自動車競走界に多少の知己あり。その私生活、過去については情報なし」
さらに一週間、デンヌリは家から一歩も出なかった。考えつづけていた。ときどき、愉快そうに揉み手をしたり、心配そうに部屋のなかを歩きまわっていた。やがてある日、また電話がかかってきた。
ベシゥーからで、せきこんだ声で、デンヌリを呼びたてた。
「すぐ来てください。一刻も猶予せずに。ラ・ファイエット町をのぼったカフェー・ロシャンボ

です。その女との金の授受は、まもなくルクルスー氏の事務所で行なわれることになっている。ルクルスー氏は有権者の世話をするために、毎日、事務所に出張っているんです。すでにふたりの刑事が隣の部屋にかくれていて、買収の現場をおさえることになっています」
「女は名前をいったのか」
「名前は名乗らなかったが、偶然、ルクルスー氏は、昔、その女とかかりあいがあって、女のほうでは、それを忘れていたんです」
「そして、それがロランス・マルタンだったのか」
「ロランス・マルタンです」
デンヌリはよろこんだ。
「そいつはよかった。ファジュローをトリアノン婆さんに結びつけている連累の糸は、これで、ロランス・マルタンまでのびた。なにしろ、ファジュロー氏のぺてんを立証するものは、なんでも、おれにとっては愉快だ。それで、その市会議員の事務所はどこだ」
「この向かいの家の中二階です。窓がふたつしかない。奥に小さな待合室があって、事務所と同じく、玄関に面しています」
「いうことは、それだけか」
「いや、まだある。しかし、時間がない。いま二時に五分まえで……そして……」
「とにかく、話してみろ。アルレットのことじゃないのか」
「そうです」

うと思ったんで」
「そら、それでは、なにも演説をぶつ必要はないじゃないか。すると、そのロランス・マルタンというのが、あの女商人か」
「いいや。公証人に会ってみたんですがね。ロランス・マルタンは、まだ五十歳を越えていない」
「すると店を又貸ししたか、ほかの人間に代わってやらせてるわけだね」
「そうですよ。あの婆さんにやらせているらしい。……あの女は、わたしの考えじゃ、ロランス・マルタンの姉です……」
「そのロランス・マルタンというのは、どこに住んでいる」
「それがわからない。賃貸契約は十二年まえのもので、それに書いてある所番地はいんちきときてる」
「あの女は、どうやって賃貸料を払っているのだ」
「たいへんな老人で、びっこの男が仲立ちをしているんです。それで、わたしも困っていたところ、けさになって、耳寄りな聞きこみがあったのです」
「きみにとっては幸運にもね。それで、要するに、どうなのだ……」
「要するに、けさになって、わたしは警視庁で、ある女が市会議員のルクルスー氏に五万フラン出すから、近く、ルクルスー氏が提出することになっている報告書の結論をかえてくれと申し込んだことを知ったのです。ルクルスーというのは、かなり評判がかんばしくない人物で、最近、スキャンダルがあったもんで、名誉回復をしようと思って、そのことをすぐと警察に届け出たの

「それじゃ、いいます。アルレットは自分のうちの隣の通りで誰かを待っていたんですよ」
「誰さ」
「ファジュローを」
「嘘をつけ」
「わたしは見たんですよ。ふたりはいっしょにでかけた」
ベシゥーはやっとデンヌリの手を振りほどいて、車道を横切った。しかし、家のなかには、はいらなかった。ためらっていた。
「いや」と部長はいった。「ここにいよう。マルタンのあとを尾けるほうがいい、上の罠にかからなかった場合のことを考えて。あんたはどう思う」
「そんなことは、おれにはどうだっていい」デンヌリはますます興奮して、力をこめていった。
「かんじんなのはアルレットのことだ。きみは母親のところへあがってみたのか」
「ちえっ」
「よく聞け、ベシゥー、きみが返事をしないなら、おれはロランス・マルタンに警告してやるよ。きみはアルレットの母親に会ったのか」
「アルレットはパリをはなれなかった。毎日でかけて行って、夕食どきにしか帰ってこない」
「嘘だ。おれをからかうために、そんなことをいっているのだ。……おれはアルレットを知っている。……あの女にはできない、そんな……」
七分か八分すぎた。デンヌリは黙りこんで、歩道を足で叩きつけるようにして、通行人と鉢合

「そうだろう。どうしたんだ」
「きのう、見かけたのですよ、あんたのアルレットを」とベシューはいったが、その声には、ひやかすようなひびきがあった。
「なんだと。あの女はパリをはなれたと、きみはいっていたじゃないか」
「はなれなかったのですよ」
「そして、きみが出会ったというわけか。それは確かかい」
ベシューは答えなかった。とつぜん、中腰になると顔をガラスにはりつけた。
「そら。マルタンが……」
じじつ、通りの向かいがわで、ひとりの女がタクシーからおりて、運転手に支払いをしていた。背の高い大女で、下品な身なりをしていた。顔がきつくて、しなびてみえた。たぶん、五十歳くらいだろう。そして、扉を大きく開け放ってあった入口の廊下に姿を消した。
「あの女だ。たしかに」とベシューはいって、出てゆきかけた。
デンヌリが、その手首をつかんで引きとめた。
「なんでまた、きみはひとをからかうのだ」
「とんでもない。からかったりなどしませんよ」
「そうとも、さっき、アルレットのことで」
「だって、向こうのうちへ駆けつけねばならない、いやはや」
「返事をするまではなさないよ」

建物の門番があがってきて叫びたてていた。店子たちが駆けつけてきていた。
事務所の中央の長椅子の上に、ルクルスー氏が額に孔をあけ、顔を血まみれにして横たわり、断末魔の苦しみをしていた。
手短に刑事たちはベシューにいきさつを報告した。そして、ひと言も口をきき得ないで死んでしまった。
申し入れをくりかえしてのべ、紙幣をかぞえているのが聞こえた。マルタンという女が、ある報告に関連した身構えをしたとき、ルクルスー氏は、ことを急ぎすぎて、ひとを呼ぶ心得違いをしてのけた。部屋にはいると、たちまち危険を察した女は、閂をさしておいたにちがいなかった。刑事たちがとびこもうとすると、扉はしっかりと閉まっていた。
そこで、刑事たちは退路を断つつもりで、玄関に出た。しかし、そこの扉もまた、外からは錠もおろせず、閂もさせないのに、ぴたりと閉められていて、てこでも動かなかった。そして、ちょうどそのとき、銃声がひびきわたった。
「しかし、そのときは、そのマルタンという女は、すでに外に出ていた」とベシューが異議をとなえた。
「すると、あの女が殺したのではないということになる」ひとりの刑事が答えた。
「では、誰だ」
「玄関のベンチにすわっているのをわれわれが見た、あのみすぼらしい男の老人かもしれない。面会を求めて、ルクルスー氏は、あの女の訪問客のあとで会うはずになっていた」
「共犯者だ、きっと」とベシューがいった。「しかしどうやって玄関の扉をしめたのだろう」

わせをしながら、行ったり来たりしていた。ベシゥーは入口に目を釘づけにして見張っていた。すると、とつぜん、女がでてくるのが見えた。女はふたりをちらっと眺め、それから、すこし急ぎすぎる足取りで、目に見えて不安そうに、べつの方向へ遠ざかって行った。

ベシゥーは、そのあとを追った。しかし、女は地下鉄の階段口までくると、いきなり、その丸天井の下に吸いこまれ、ちょうど列車が駅にはいってきたまぎわに切符をきらせて、ホームにはいりこむことができた。ベシゥーはまかれてしまった。次の駅に電話をかけようと考えることは考えたが、間に合うまいと思って、勝負を投げた。

「しくじった」部長はデンヌリといっしょになるといった。

「そりゃそうさ」とデンヌリはベシゥーが失敗したことにいささか満足してひやかした。「きみはなすべきことと、真反対のことをやったんだ」

「なすべきこととは」

「最初から、ルクルスー氏のうちにはいりこんで、きみ自身でマルタンを逮捕することさ。そうしないで、きみはアルレットのことでおれをじらし、おれの質問に答えて、のらりくらり逃げ口上をならべ、あげくのはて、うえであったことに責任を負う羽目になった」

「なにかあった?」

「行ってみるさ。だが、じっさい、きみの策略はなっとらん」

ベシゥーは中二階の市会議員の事務所にのぼって行った。見ると大混乱で、大騒ぎになっていた。見張り役のふたりの刑事は、まるで気違いのようにわめき立て、興奮しておろおろしていた。

ユ・デュ・マレ町の延長に関する報告……次は……。
「どう考えます？」このできごとで、ひどくとほうにくれ、行ったり来たりそこいらを歩きまわっていたベシューがたずねた。「けしからん事件ですよ、まったく」
「どの事件が」
「だって、この殺人事件は……」
「おれはさっきいっておいたろう、きみの事件なんかおれにはどうだっていいと。この賄賂とりの常習者が殺されようと、きみがぼけなすのようにいっぱいくわされようと、それがいったい、おれにとってどうだというんだ」
「しかし」とベシューは一家言を持ち出した。「もしロランス・マルタンが人殺しで、あんたがその共犯者だとにらんでいるファジュローが……」
デンヌリは舌打ちして、荒々しい口調でまくしたてた。
「ファジュローも人殺しだ……ファジュローは大泥棒だ……ファジュローがおれの爪にかかってみろ、それこそ目にもの見せてやる。奴がおれの爪にひっかかるのは確かだ、それこそ、おれの名前が、ほんとうの名前が……」
デンヌリは、そこでぴたりと言葉を切って、帽子をかぶると、ぷいと出て行った。
タクシーがヴェルドレル町のアルレットのうちへ連れて行った。三時に十分まえだった。
「ああ、デンヌリさん」マゾール夫人がびっくり声をだした。「ほんとに長いあいだ、お目にかかりませんでしたわねえ。アルレットが心配しはじめているところでしたよ」

「犬釘のはしくれさ、扉の下からさしこんだのだ。いくら押してもあかないように」
「で、どうした、あの男は。誰も出会わなかったのか」
「出会いましたよ、わたしが」門番女がいった。「鉄砲の音がきこえたので、住居からとび出したんです。すると、上からおりてきていた年寄りが、ゆっくりと声をかけたのです。≪上で、とっくみあいをしているよ。あがってみなさい≫って。たぶん、あの男ですよ、やっつけたのは。でも、どうして、そのときは、そんなことを疑えましょう。ひとのよさそうな、よぼよぼ爺さんで……からだをしゃんとしているのもおぼつかなくて……それに、びっこをひいて」
「びっこをひいていた?」ベシゥーが叫んだ。「たしかか」
「たしかもたしか、まちがいなしですよ。それも、ひどいびっこで」
ベシゥーはつぶやいたくようにいった。
「そやつがロランス・マルタンの相棒だ。女があぶないと見て、ルクルスー氏を片づけたのだ」
デンヌリは、机のうえにつみあげられている書類の表紙を、目の隅でじろじろと調べながら、話を聞いていた。そして、やがてたずねた。
「きみは、報告というのは、なんに関するものか知らないかね、ロランス・マルタンがほしがっていたものはなにか」
「いや。ルクルスー氏はまだ、はっきりしたことはいっていなかった。しかし、あの市会議員が担当していた報告のうちのひとつの趣旨を修正してもらいたいというのが、話の根本だった」
デンヌリは表題を読んでいった。屠殺場に関する報告……地区市場に関する報告……ヴィエイ

のでございます。アルレットは気立てのいい子で、友だちの世話を、それはよく見てやるのでございますのよ」

「で、その若い娘というのは、遠くに住んでいるのですか」

「わたしはその所番地を存じません」

「そりゃ残念だ。アルレットに会って話せたらうれしかったのですが」

「でも、それはやさしいことですよ。アルレットは、その手紙を、ほかの反古紙といっしょに、紙屑籠にすてたはずでございます。おりよく、まだ燃していません。……そら……これにちがいありません。そうでした。思い出しましたよ。セシル・エリュアン……ルヴァロア・ペレでクルシー大通り十四番地でした。アルレットは、そこへ四時ごろ行くことになっています」

「きっと、そこでファジュローさんと落ち合うことになっているのでしょう」

「なんとしたことを。アルレットは、男のかたと外出することを好きません。それに、ファジュローさんは、たびたびここへおみえですもの」

「ああ。たびたびくるのですか」デンヌリはうわずった声でいった。

「ほとんど毎晩おみえになります。ふたりして、アルレットがたいへんに興味を持っている、あのいつもの話をするんです、そら……あの結婚支度基金のことを。ファジュローさんが大きな資金を出そうといっておられるのですよ。それで、ふたりして数字をならべたり……計画をたてたりしているんですの」

「すると、金持なのですね、ファジュローさんは」

「あのひとは今、お宅にいられないのですか」
「はい、毎日いまの時間、散歩にでるんでございますのよ。あなたが出会われなかったのがふしぎなくらい」

8 放火犯人マルタン姉妹

アルレットとその母親はたいへんによく似ていた。マゾール夫人の顔は、年齢と苦労とでやつれてはいたが、いまだに残っているみずみずしさと、ゆたかな表情から察して、娘よりももっと、ととのった美しさを持っていたろうと思われた。三人の子供を育て、うえのふたり姉妹の行状がもとの悲しみを忘れるために、夫人は精一杯働き、いまだに古いレースの修理の仕事をしていて、その腕がきわめてすぐれ、いまでは多少の貯えもできているほどだった。
デンスリは、ぴかぴかとみがきあげられ、こざっぱりしたアパートにはいりこんでいった。
「娘さんは、もうすぐおかえりになるとお考えですか」
「それが、とんとわかりかねます。アルレットは、あの事件があってからというもの、自分がしていることをなにも話しません。わたしが心配するのをいつもおそれていて、いろんな噂が身のまわりに立つので、それをひどく気にしています。しかし、きょうは病気のマネキンを見舞いにゆくとか申していました。まだ若い娘さんで、けさ、娘に手紙をよこして、世話をたのんできた

走らせた。レジーヌはちょうど、うちから出かけようとするところだったが、快活に答えた。
「わたしがアルレットにはらを立てたのですって。とんでもない。でも、アルレットのほうは、たぶん、そうかもしれないわ」
「それにしても、なにごとがあったのかね」
「ある晩、わたし、あのひとのうちに、ちょいと挨拶に立ちよったのよ。すると、メラマールの友だちのアントワヌ・ファジュローがきていたの。そして、おしゃべりをしていたのよ。アルレットは二度か三度、わたしにいじわるをしてみせたの。それで、わたしは、わけがわからないいま帰ってしまったわ」
「ほかには、なにか」
「なにもないわ。ただね、デンヌリ、あなたが少しでもアルレットに気があるんだったら、ファジュローを警戒なさいよ。あのひとはたいへん熱々のようだわ。そして、アルレットもけっして無関心ではないことよ。じゃ、さようなら、ジャン」
こうして、デンヌリはどこへ行っても、アルレットとファジュローを結んでいる関係について、さらに多くのことを教えられた。目ざめはいかにもとつぜんだった。デンヌリは、アントワヌ・ファジュローがアルレットをだまくらかしていることに、はっと気がつき、同時に、アルレットが彼の、デンヌリの心のなかに、重要な地位を占めていたことに気づいた。
しかし、それにしても、ファジュローがアルレットのあとを追いまわし、アルレットを愛しているにしても、そのことは疑いの余地はないが、アルレットのほうは、はたしてファジュローを

「たいへんなお金持です」

マゾール夫人の話しぶりは、きわめて自然だった。娘が、母親の感情をいたわろうとしてメラマール事件の話は母親に伏せているのは明らかだった。そこで、デンヌリは、また言葉をついだ。

「金持で、気立てがよくて」

「たいへんに気立てがよくて」とマゾール夫人も認めた。「わたしどもに、それは親切にしてくださいます」

「ゆくゆくは結婚ということに……」ジャンはゆがんだ微笑をうかべていった。

「おお、デンヌリさん、冗談をおっしゃっては。アルレットは、そんな、めっそうな望みは……」

「わかりませんね」

「いえ、いえ。第一、アルレットは、いつも、あのかたにたいして愛想がいいとはかぎりません。あの娘はかわりました、わたしの可愛いアルレットは、ああいったできごとがあってからというもの、たいへんに神経質になって、すこし気まぐれになって。あの娘がレジーヌ・オブリーさんと仲たがいしたのをご存じですか」

「まさか」デンヌリはびっくりした。

「そうなんですのよ、理由もないのに。理由があったとしても、わたしにはいわないで」

この仲違いは、デンヌリを驚かせた。すると、なにごとがあったのだろう？

ふたりは、まだあと、少しのあいだ話し合った。しかし、デンヌリは急いで行動したかったし、アルレットをその行く先に訪ねるには時刻がはやすぎたので、レジーヌ・オブリーのうちへ車を

の女が、このへんぴな車庫の屋根裏部屋のひとつに住んでいるというのが、いかにも異様で、デンヌリは、とたんに、これはアルレットにたいしてしかけられた、なにかの罠だという予感がし、今度の事件をめぐってうごめき、想像もつかぬほど矢つぎばやに、つぎつぎと攻撃を加えている不気味な悪党の一味のことを思いおこした。午後はやく、市会議員の買収の企て、それから殺人。その二時間後、アルレットをおとし穴にひきよせる陰謀。その実行の手先として、ロランス・マルタン、トリアノン婆さん、びっこの老人。首領として、アントワヌ・ファジュロー。

こうしたすべての事柄が、デンヌリには、じつに強力な印象をもって立ちあらわれ、疑問はたちまちのうちに吹きとんで、屋内からなんの物音も聞こえてこないところから見ると、一味のものは、すでにそこにきているのだとしか考えられず、いちばん簡単な方法は、なかにはいって行って、自分が罠にかかることだと結論した。

デンヌリはできるだけそっと扉をあけようとした。鍵がかかっていた。そのことは、なかには誰もいないことを確認させた。

大胆にも、もしかすれば戦わねばならぬ危険すら考えもせず、デンヌリはきわめて簡単な仕組みだった錠前を合鍵であけた。扉を押して、首を突っこんだ。じっさい、誰もいなかった。道具類。ばらばらの部分品。十個あまりのガソリン罐が積み重ねてある。要するにすたれた修理場を、ガソリン置場にかえたものらしかった。

デンヌリはさらに扉を押した。肩がくぐりぬけた。さらに押した。そのとき、いきなり、胸のまっこうに、とほうもなく強力な衝撃をうけた感じがした。それは仕切壁にとりつけられていた

愛しているのだろうか。苦しくも悩ましい疑問だった。そう疑ってみるだけでも、デンヌリには、アルレットにたいする、このうえない侮辱のよう思われ、自分にとっては堪えがたい屈辱だった。

自分の誇りが傷つけられたという感情の激動のなかから生じたこの疑問は、たちまちにしてデンスリの生活の核心そのものとなってしまった。

《四時に十五分まえだ》とデンスリは、指定された場所から少しはなれてタクシーからおりながら考えた。《ひとりでくるだろうか。ファジェローがついてくるだろうか》

クルシー大通りは、最近、ルヴァロア・ペレ通りを区切って命名されたもので、労働者街のはずれにあり、あたりは空地が多くて、セーヌ河に近く、いくつかの小さな工場や特殊施設があった。長い煉瓦塀のあいだに、狭いきたない路地が通じていて、その突き当たりにある半分崩れた柵に、タールで十四番地という数字が記されているのが見えた。

数メートルの野ざらしの通路があり、古いタイヤや使いものにならない自動車の車体が一面にころがっていて、そのまんなかに栗色をした木造のガレージのような建物があり、外側にとりつけた階段をのぼると、天井部屋に行けるようになっていた。その天井部屋は、通路のがわには窓がふたつしかついていなかった。階段の下には扉がついていて、《ノックしてください》と書いてあった。

デンスリはノックしようとはしなかった。じっさいは、ためらっていた。外でアルレットを待つという考えのほうが論理的に思われた。しかし、そのほかにも、なにかとらえどころのない印象が心中に忍びこんできて、デンスリをひきとめていた。場所がどうも胡散くさく、若い、病気

「おまえさんは、ほんとうに、こやつだと思うかい」
「そうだよ、こやつだよ、店までわたしを追いかけてきたのは」
「ジャン・デンヌリだね、すると」ロランス・マルタンはつぶやくようにいった。「わたしたちにとっては危険な男だよ。たぶん、この男は、ベシュ－といっしょにラ・ファイエット町の歩道にいたんだね。運よく、こちらは見張りをしていて、わたしは、この男の足音が近づいてくるのを聞いたんだよ。たしかに、マゾールの小娘と落ち合う約束だったんだ」
「お前さん、こやつをどうするつもりだい」古道具屋の婆さんはささやいたが、デンヌリには、自分の言葉は聞こえないと思いこんでいるらしかった。
「そんなことはいわないでもわかっている」ロランスはひそひそ声でいった。
「すると?」
「それはそうさ。あいつにはおあいにくさまさ」
ふたりの女は目交ぜした。ロランスは、暗い、きかぬ気らしい精悍な顔をしていた。そして、つけくわえていった。
「それにしても、なんで、わたしらの仕事におちょっかいをするんだろう、こやつは。最初、おまえさんの店にきて……それからラ・ファイエット町へ……そのつぎにはここへ……まったく、この男は、わたしたちのことを知りすぎている、いまに訴えでるだろう。パパにきいてごらん」
ロランス・マルタンがパパと呼んだ男の意見はきくまでもなかった。きびしい面をして、どんよりした目を持ち、皮膚が年のせいでこちこちになった、このひどく年をとった男には、このう

金属棒で、発条で動くようになっていて、扉が一定の限度まで開くと、言語道断な激しい力でとび出す仕掛けになっていた。

数秒間、デンヌリは息が詰まってふらふらし、いっさいの抵抗力をなくしていた。積み重ねたガソリン罐のうしろに陣取って待ち伏せしていた相手には、それだけで充分だった。そして相手というのは、ふたりの女と、ひとりの老人にすぎなかったが、ゆっくりとデンヌリの手足を搦めて、猿ぐつわをかませ、鉄の仕事台によせかけてすわらせ、しっかりと台にくくりつけた。

デンヌリの予想はまちがっていなかった。罠はアルレットにたいして仕掛けられたもので、まず最初に、デンヌリがうっかりして落ちこんだのだ。デンヌリはトリアノン婆さんとロランス・マルタンに見覚えがあった。男の老人のほうは、びっこはひいていなかったが、べつに注意してみないでも、右足がすこしよろめいているのがわかり、必要の場合、そのよろめきを強くして、いつもびっこをひいているように、ひとに思いこませていたにちがいない。この男が市会議員殺しの犯人なのだ。

三人の共犯者たちには、いささかのあわてたようすもなかった。こうした悪事には慣れているらしく、思いがけないデンヌリの攻撃をかわし得たことは、一味にとっては、ごくあたりまえのできごとであり、重要な勝利とは見ていないらしかった。

トリアノン婆さんは、デンヌリのうえからかがみこんで見ていたが、やがて、ロランス・マルタンのそばにひきかえした。ふたりはなにか話し合っていたが、デンヌリには、そのほんのはしばしが聞きとれただけだった。

われの身のデンヌリを怖じ気づかせた。老人は、現実の生命を持っているという感じはどこにもなく、むしろ、自動的な、製造された生命を持ち、前もって命令されている行為をそのまま実行しているといってよかった。顔は角張っていて、彫りが荒けずりだった。意地が悪いというのでもなく、残忍だというのでもない。ざっと下彫りした石の塊といったようすだった。

そのうち、表に指示されているとおりにノックする音がきこえた。

入口に身をよせてうかがっていたロランス・マルタンが扉を開けて、訪れた女を外においたまま、うれしそうな、感謝するような口調でいった。

「マゾールさんでございましょう。ご親切に、わざわざおいでくだすって、ほんとにありがとうございます。娘はうえにおります。すっかり病気なもんで。どうぞ、おあがりください……あなたに会えて、娘もさぞかしよろこぶことでございましょう。あなたと同じクチュリエにいたのでございますよ、二年まえ、リュシエンヌ・ウダールの店に。覚えておいでではございませんか。ああ、娘のほうは、あなたのことをけっして忘れないでいます、あの娘は」

アルレットがなにか答えていたが、なにをいっているのかはききとれなかった。明るい、ほがらかな声で、どこにも不安なひびきはなかった。

ロランス・マルタンは上へ案内するために出て行った。古道具屋が、内から呼びかけた。

「わたしもいっしょに行こうか」

「それには及ばないよ」とロランスはいったが、その口調には《誰の手もかりる必要はない……それくらいのことは、わたしで充分やってのけられる》という意味がふくまれていた。

えもない、おそろしい解決法があるにちがいなかった。どうみても野蛮きわまる部類の人物だ。それに、動きまわって、なんともまだ説明がつかない準備をはじめているのを見て、デンスリは、《パパ》は即座に死刑を決意して、ルクルスー氏を殺したのと同じように、冷酷無残に自分を殺すだろうと判断した。

それほどにせっかちでない古道具屋の婆さんは、たいへんに低い声で、なにかくどくどと口説きたてていた。ロランスはじりじりして、いきなりに、

「ばかをいうのはおよし。おまえさんたら、いつだって中途半端だ。しなくてはならぬことはしなくてはならない。くうか、くわれるかだよ」

「とじこめておけば、それでよかろうに」

「たわ言をいうものじゃない。こんな男はなにをしでかすか、わかったものじゃない」

「では……どうする……」

「あの小娘のようにさ、わかっている……」

ロランスは耳をすまし、板仕切りにあいていた孔から外をのぞいた。

「きたよ……路地の向こうはしを……さあ、めいめい、仕事にかかろう、わかったね」

三人とも口をつぐんだ。デンスリは、真正面から見て、三人がいちじるしくよく似た顔つきをしているのに気づいた。ことに、同じように決断力のある表情をしているのが目立っていた。あきらかに、悪事や犯罪にかけては積極的で、率先して実行に当たるのに慣れた者どもだった。デンヌリは、ふたりの女は姉妹で、老人はその父親であることを疑わなかった。とくに老人が、捕

落ちつき払って、ロランスは紐のはしくれをさしだした。

「そんなことはわけないことだよ。おまえさんが、あの娘の首のまわりに、これをまきつけさえすればいい。……咽喉に切り傷をつけるほうが好きなら話はべつだけれど」ロランスは、そういって、小さな匕首を持ちだした。「わたしは、そのほうの仕事はひきうけないよ。なんしろ、平気でやれる仕事じゃないものな」

トリアノン婆さんは身動きもしなかった。そして、いよいよ出かける瞬間まで、三人は口ひとつきかなかった。しかし、階上にいるアルレットは手も足もでなくしてあったので、ふたりの女がたがいに《パパ》と呼んでいた男は、さっそく時をうつさず、また仕事をつづけ、仕組みがととのっていくにつれておそろしい脅威がしだいに形をとって、苛酷な、奇怪きわまる現実が、デンヌリに、いやおうなしにのしかかってきた。

作業場のぐるり一面に、老人はガソリン罐を二列に並べていた。罐がどれもいっぱいなのは、老人の力の出しぶりを見て知ることができた。老人は、そのうちいくつかの口をあけて、ガソリンを羽目板や床に一面に撒き、入口に通じる床板三メートルくらいの長さだけをのこした。こうして、作業場の中央に達する通路を残しておき、その中央の一カ所に、のこりの罐を積みあげた。

その罐のひとつのなかに、ロランス・マルタンが持っていて差し出した長い紐をひたした。それから、ふたりして、その紐を通路に沿うて伸ばしておいた。老人は紐の一方のはしをほぐしてポケットからマッチ箱をとり出し、ほぐした紐のはしに火をつけた。火がつくと立ちあがった。

こうした操作は、きわめて整然ととりはこばれ、それをやった男は、長い生涯を通じて、同じ

のぼるにつれて階段が軋る音がきこえた。その一歩ずつが、アルレットを危険へ、死へ近づけていた。

けれどもデンヌリは、まだそれほど切実な恐怖は感じていなかった。いきなりに彼を、デンヌリを殺さなかったという事実は、犯罪計画の実施には、ある程度の時間を必要とすることを示していて、その遅延が、多少の希望をいだかせた。

天井の上を歩く音がし、それから、とつぜん、絹を裂くような叫び声……そのあと、また叫び声がつづいて、しだいにかよわくなっていった。そして、あとは静寂。戦いは長くはかからなかった。デンヌリは、アルレットが自分と同じようにしばりあげられて、猿ぐつわをかまされたのだと考えた。≪可哀そうな娘≫とこころのうちでいった。

まもなく、また階段が軋り、ロランス・マルタンがはいってきた。

「済んだよ」と告げた。「わけはなかった。ほとんどすぐ、目をまわしてしまってさ」

「それはよかった」古道具屋がいった。「すぐに正気づかないといいがね。そうすれば、最後のまぎわまで、なんにも知らないですむ」

デンヌリは戦慄した。一味が欲している結末と、おそらくはアルレットが味わわされる苦痛をこれほどはっきりと告げ知らせる言葉はなかった。デンヌリの予感はじつにぴったりと当たっていて、そのことは、たちまち古道具屋の婆さんを襲った発作的な反抗で、すぐと確認された。

「だってさ、そうだろう、なにも、あれを苦しませる必要はない、あの小娘を。なんでまた、あの娘をはやく片づけてしまわないのだね。あんたはどういう考えなの、パパ」

ファジュローとその三人の共犯者の結びつきは、たくさんのれっきとした根拠があって、議論の余地のない真実と見てよい。しかし、一味の首領はファジュローであり、老人はその計画を実行する手先でしかあり得ないが、そのファジュローがなぜこのような憎むべき殺人を命令したのか。いままでは、ファジュローの計画は、あの若い娘を恋していて、それを手に入れるのが目的と思われていたが、相手を殺すことを企てるほどに、変わってきたのだろうか。

紐は燃えていた。小さな火の蛇は目標に向かって匍いつづけていた。その情け容赦のない線は、なにものも、これを曲げることはできないだろう。上では、アルレットが気絶して、いずれにしても、まったく無力にされて、死を待っていた。アルレットは最初の炎が燃えあがるまで正気にはかえらないだろう。

《あと七分、あと六分》……デンヌリは恐怖におののきながら考えていた。

ほんのわずかばかり紐をゆるめることができたのが、関の山だった。しかし、猿ぐつわはとれた。叫ぼうと思えば叫ぶことができたろう。アルレットを呼んで、自分をアルレットのほうに導いていったやさしい感情のありったけを、いままでは自分でも知らなかった、そして、いっさいのものが身のまわりで崩壊しようとする瞬間まで深い意識を持たなかった、この愛情が持つありったけの清新さと素直さを、アルレットに話すこともできたろう。しかし、言葉がなんの役に立とう。アルレットが眠っているのであれば、まぢかに迫った恐ろしい脅威と現実とを告げ知らせたところで、なんの役に立とう。

それにまた、そうだ、デンヌリは自信を失いたくなかった。奇跡はそれを必要とするときに起

ような種類の仕事をしょっちゅう手がけてきたにちがいなく、その行為自体よりも、それをいかに完璧に仕上げるかをいっそう楽しんでいた。いわば、一種の《道楽仕事》だった。なにひとつ、うっちゃりぱなしにしてなかった。三人の共犯者たちは、いまでは、のんびりと立ち去りさえすればよかった。

そして、うしろの扉の錠前の鍵をまわしたあと、三人がしたのは、まさに、それだった。仕掛けはととのっていた。不可避的に、悪魔の所業は達成されるだろう。掘立小屋は乾いたかんな屑のように燃えあがるだろう。そして、アルレットは消えてなくなり、あとには身許を確かめるすべもない、黒焦げになったいくらかの焼屑が灰のなかから見つかるだけだろう。わざと放火したのかもしれないという疑いすら持たれるかどうか怪しいものだ。

紐は燃えていた。デンヌリは、破局が起こるのは十二分か十五分のうちだと推定した。

デンヌリは、最初の瞬間から、わが身を解きはなつ骨の折れる仕事をはじめ、筋肉をひねったり、細くしたり、ふくらましたりしていた。しかし、結び目は努力すればするだけひきしまって、紐が肉にくいこむように巧みにできていた。並みはずれた器用さ、こういった場合にそなえて、かねてから鍛練していた、あらゆる訓練にもかかわらず、間に合うように目的は達しられそうもなかった。この世にありそうもない奇跡が起こらないかぎり、爆発はかならず起こるだろう。

デンヌリは地獄の苦しみを味わっていた。おろかしくも罠にかけられ、どうすることもできないのに絶望し、不幸なアルレットが断崖のふちにおかれているのを知って絶望し、また、このおそろしい事件について、なにひとつ知っていないことにむかっぱらを立てていた。アントワヌ・

に達した瞬間、足で蹴とばした。靴底で炎を踏み消すと、用心して中央に積みあげてあったほかの罐を分散させた。

ジャン・デンヌリは、からだを自由にするために努力を倍加した。ファジュローのおかげで実質的に自由になったという負い目を持ちたくなかったし、この男にかがみこんで縄目を断ちきる身ぶりをすることもしてもらいたくなかった。いずれにせよ、相手がそばにやってきて、「おお、きみだったのか」といったときには、ジャンは枷をはらいのけていたが、

「ありがとう。あと数秒で、お陀仏になるところだった」といわざるを得なかった。

「アルレットは？」とファジュローがきいた。

「二階だ」

「生きてるか」

「生きてる」

ふたりはとびだして、外の階段をかけのぼった。

「アルレット、アルレット。ぼくだ」とファジュローが叫んだ。「もう心配はないよ」

扉は、車庫の扉と同様に、苦もなく押しやぶられた。狭い屋根裏部屋にはいると、若い娘はベッドに皮帯でしばりつけられて、猿ぐつわをかまされていた。

ふたりは大急ぎで、アルレットの縄目を解いた。若い娘はうつろな目でふたりを眺め、ファジュローが説明した。

「ぼくたちは、それぞれべつの方面から報せをうけて、ここで落ち合ったんだ。遅すぎて、あの

きる。いままでも、いく度か、四方八方から追い詰められて手も足もでず、情け容赦のない死を待つばかりのとき、ふしぎな偶然によって救われてきたではないか。あと三分残っていた。もしかすれば、老人がとった手段に、なにか手抜かりがあったかもしれないではないか。もしかしたら、すでに罐までとどいている紐の火が、金属面をのぼって行く中途で消えないものでもない。

全力をこめて、デンヌリはからだを固くして肉にくいこむ紐をひきちぎろうとした。なんとしたって、アルレットがそこにいる。最後の手段として、腕と胸部にあらんかぎりの超人的な力をこめた。紐がちぎれはしないだろうか。奇跡は、当人からは、デンスリからは起こらなかった。べつの方面から、ジャンが、たしかに予想もしなかった方面からやってきた。あわただしい足音が、とつぜん、路地のほうからひびいてきて、声が叫んだ。

「アルレット、アルレット、アルレット」

その音調は誰か救いにかけつけたもののひびきを持ち、即座の解放を告げて、勇気を与えようとするものだった。扉がゆすぶられた。開けることができないので、足で蹴ったり拳骨で叩きつけていた。板が一枚はずれて、その孔から手を入れて、錠をさぐっていた。

デンヌリはもがく腕を見ると叫んだ。

「だめだ。体当たりだ。錠前は支えきれない。急いでくれ」

じじつ、錠前ははねとんだ。扉は半分ぶちこわされた。誰かが作業場にとびこんできた。アントワヌ・ファジュローだった。

ひと目で、ファジュローは危険を見てとり、ガソリン罐にとびかかり、紐の炎が、罐の上の縁

ジャンは、いままで、このときほど深く、この競争者を憎悪したことはなかった。ファジュローが、ふたりとも、アルレットと自分を救ってくれたと考えるだけで、癪でたまらなかった。このうえない激しい屈辱を感じた。アントワヌ・ファジュローが事態を支配し、すべてのことが、その有利に転回していた。

「思ったよりも、アルレットは落ちついている」ファジュローは低い声でいった。「どんな危険をのり越えたか悟っていない。知らさないでおかねばならない」

ファジュローは、すでに前からデンヌリと直接関係があったかのように、ふたりはめいめい相手がたが知っていることはすべて心得ていると認めているかのような口のききかたをしていた。自分がしてやったことを思い出させるような、優越をてらうようすはどこにもなかった。いつもの冷静な態度と、なかば微笑をうかべた、ひと好きのする顔つきを保っていた。ふたりのあいだには闘争と競争心があることを思わせるようなしるしは、少なくとも、ファジュローの側には、なにもなかった。

しかし、腹立たしさを抑えかねたジャンは、相手が公然の敵であるかのように、ただちに決闘の態度に出て、強くファジュローの肩を押しつけながら、

「話し合おうじゃないか。またとない機会だ」

「うん、しかし、低い声でやろう。喧嘩の声をきけば、あれが辛い思いをするだろう。まったくぼくは驚き入っているが、きみが求めているのは喧嘩だと、ひとは思うだろうよ」

「いや。喧嘩じゃない」デンヌリは、その言葉とは矛盾する挑戦的な態度でいった。「わたしが

けしからん奴どもの首根っこを押えることはできなかった。奴らは、きみをひどい目にあわさなかったかい。こわかっただろうね」
ファジュローは、こうして、おそろしい殺人計画や、自分がやってのけた救済の仕事は黙っていた。
アルレットは答えなかった。目を閉じた。手がわなないていた。
やがてまもなく、アルレットがささやくように話すのがきこえた。
「ええ、こわかったわ。……またもや、こんなに襲われて……誰が、わたしにこんなに恨みがあるんでしょう」
「このガレージにおびきよせられたのだね」
「女のひとよ。……ひとりしか見なかった。その女は、わたしをこの部屋にあがらせて、押し倒して……」
そして、アルレットは、いまは男がふたりまでいるにもかかわらず、なおも、おそいかかる恐怖もあらわにいった。
「最初のときと同じ女よ。……おお、それはたしかだわ、同じ女だったわ。……動きかたや、しめかたや、声でわかったわ。……自動車の女よ……あの女……あの女だった……」
アルレットは、たちまち力が尽きて、口をつぐみ、休息したがった。ふたりの男は、しばらくアルレットをそのままにしておいて、屋根裏部屋の前の階段の上にある狭い踊り場にでて、たがいに向かい合って立った。

ンヌリは、さらに辛辣な口調でつづけた。
「すると、きみの目的は、わたしの目的と同じだというのか」
「事実が、それを証明している。ぼくは、きみと同じく、ダイヤモンドを盗んだ人間たち、ぼくの友人であるメラマール家の人たちを迫害し、アルレット・マゾールをつけまわしている人間どもを見つけようと努力している」
「その人間たちの仲間に、あの古道具屋の婆さんがいるのか」
「そうだ」
「しかし、なぜあの婆さんときみは、あんなに目で合図し合って、わたしを警戒させたのだ」
「あの目つきを警告と解釈するのは、きみのひとり合点だ。じっさいは、ぼくは観察していたのだ」
「そうかもしれない。しかし、あの女は店を閉めて姿を消した」
「ぼくたちみなを、あやしいとにらんだからだ」
「すると、きみの考えでは、あの女は一味なのか」
「そうだ」
「そうだとすれば、あの女は市会議員のルクルスー殺しにかかりあいがあるのか」
アントワヌ・ファジュローはびっくりした。ほんとうに、あの殺人事件を知らなかったようすだった。
「なに。ルクルスー氏が殺された？」
「せいぜい三時間ほどまえのことだ」

求めるのは、欲しているのは、事態を明白にすることだ」
「なんについて」
「きみの行動について」
「ぼくの行動ははっきりしている。なにも隠すことはない。そして、ぼくがきみの質問に答えるのは、ぼくのアルレットにたいする愛情が、きみのあの娘にたいする友情を思い起こさせるからだ。なんでもきいてくれたまえ」
「うん。まず最初に、きみは、わたしが《トリアノン》の店で、きみと会ったとき、あそこでなにをしていた？」
「きみは知っているはずだ」
「わたしが知っている？　どうして」
「ぼくを通じて」
「きみを通じて？　きみと話すのは、これがはじめてだよ」
「ぼくが話すのを、きみがきいたのは、これがはじめてではない」
「では、どこで」
「メラマールの屋敷で、きみがベシゥーといっしょにぼくを尾けてきた晩に。ジルベルト・ド・メラマールとの打合わせのあいだ、きみたちは、ふたりとも、壁掛けのうしろで盗みぎきをしていた。きみたちが隣の部屋にはいってきたとき、壁掛けがうごいた」
デンヌリはいささかたじろいだ。すると、この男は、なにひとつ見逃していなかったのだ。デ

「それは司直の手でやってくれる。ベシュー部長がいまでは三人とも知っている。奴らは、部長の手をのがれることはできない」

「そうねがいたい」とファジュローはいった。「あいつらは三人とも、おそろしい悪党だ。豚箱に放りこまないと、いつかは、アルレットを抹殺することに成功する」

ファジュローのいうことはすべて、深い真実の表現のように思われた。躊躇することなく、すべての質問に答え、あったできごとと、それを説明するきわめて自然な態度のあいだには、いささかの矛盾もなかった。

《じつに狡い奴だ》とデンヌリは考え、あくまで相手を非難しようと意地になりながらも、そのいかにも筋の通った話と率直さにどぎまぎしていた。

心の底ではデンヌリは、アルレットの新しい災難はこれすべて、ファジュローとその三人の共犯者が仕組んだものであり、ファジュローがアルレットの目に命の恩人とうつるようにするためだったと推定していた。しかし、そうだとすれば、なぜ、こんな演出をしたのか。なぜまた、アルレットに焼き殺そうとした現場を目撃させて震えあがらせなかったのか。なぜまた、ファジュローは自分が救いの手を差し伸べた事実を、鼻高々と自慢するのをさし控えるような、やさしい心遣いをしたのか。

むきだしに、デンヌリはファジュローにいった。

「きみは、あれを愛しているのか」

「かぎりなく」と相手は熱をこめて答えた。

「三時間？　ルクルスー氏は死んだのか。なんとも、おどろき入った」
「きみは、あの男をよく知っていたんだね」
「名前だけだ。しかし、ぼくたちの敵が、あの男に会いに行くはずで、あの男を買収して、なにかやらせようとしていたことは知っていた。ぼくは奴らの意図について不安を抱いていた」
「あの事件に手をつけたのは、奴らの一味だと、きみは確信するか」
「確信する」
「すると、奴らは金を持っているんだな。千フラン札を五十枚も提供するといえば」
「それはそうさ、ダイヤをひとつ売ればいい」
「奴らの名前は？」
「知らない」
「教えてやろう、少なくとも一部だけは」デンヌリは相手を観察しながらいった。「古道具屋の婆さんの妹で、ロランス・マルタンという女がいる、あの店を又貸しした女だ……それから、たいへんに年をとって、びっこをひく男がいる」
「そいつだ、そいつだ」アントワヌ・ファジュローがせきこんでいった。「その三人だろう、きみがここでまた会ったのは、そして、きみをしばりあげたのは」
「そうだ」
ファジュローは顔を曇らせた。そして、つぶやくようにいった。
「なんとも運がなかった。……知るのがおそすぎた……でないと、奴らをひっ捕えてやったのに」

「そして、マゾール夫人は、自分の娘は、男と逢引なんかできないと思いこんでいる。とんだ興ざましだ」

アントワヌ・ファジュローは大真面目でいった。

「ぼくたちは、たとえ母親が知っても、充分満足できるような場所と、ひとの前で会うことにしている」

「ああ、そうか。それは誰だね」

「メラマールの邸宅で、ジルベルトと、あのひとの兄さんが立ち会ってくれている」

デンヌリは腑におちなかった。メラマール伯爵が、ファジュロー氏とアルレット、私生児で、マネキンで、道を踏みちがえた同じくマネキンのふたりの姉を持つアルレットの恋の保護者になるとは。なんでまた、こんなとうてい信じられないような度量を見せたのだろう。

「すると、あのひとたちは、事情を知っているのか」とジャンはいった。

「そうなんだ」

「そして、賛成しているのか」

「全面的に」

「それは、おめでとう。そんな後ろ立てがあれば、きみたちも幸いだ。それに伯爵は、たいへんきみにたいして恩義がある。それに、きみはあの家の古くからの友人だものね」

「それにまた、ほかの理由もある」とファジュローはいった。「ぼくたちの親交を新たにした、べつの理由が」

「そして、アルレットは、きみを愛しているのか」
「と信じている」
「なんで、そう信じるのだ」
ファジュローはやさしく、べつに得意になりもせず微笑して答えた。
「それは、このうえなくりっぱな愛情のあかしをくれたからだ」
「どんな」
「ぼくたちは婚約をした」
「えっ。婚約したって」
デンヌリは、その言葉を、うわべは冷静を装っていうのに絶大な意志の力を必要とした。痛手は深刻だった。拳をにぎりしめた。
「そうなんだ」とファジュローは肯定した。「昨夜」
「マゾール夫人は、さっき会ったとき、ぼくにそのことは、なにもいわなかった」
「まだ知らないのだ。アルレットが、まだ知らせたくないというのだ」
「けれども、そうと知れば、よろこぶだろう」
「そりゃそうだ。しかし、アルレットは、すこしずつ母親に、その心構えをさせていきたいのだ」
「すべて、母親ぬきで、ことを進めてか」
「そうだ」
デンヌリは神経質に笑いだした。

9　アルレットの婚約

アントワヌ・ファジュローの話は、ジャン・デンヌリにとっては、矢つぎばやな意外事の連続といってよかった。アルレットとの関係、思いがけない結婚、メラマール一家がふたりに示した同情、想像もつかなかった屋敷の買収、次々と意外な局面の転換だったが、それがすべて日常生活のごくありふれたできごとのように告げ知らされた。

こうして、デンヌリが事態をより健全に判断するために、とはいっても、かくべつその重大性を見破っていたわけでもなく、わざと事件から遠のいていたあいだに、敵は与えられた猶予期間をすばらしく巧みに利用して、戦いの歩武をいちじるしく遠くまで進めていた。しかし、この男は、はたして敵だろうか。ふたりの恋の競争心は、双方にとって、しんじつ、戦いの展望を含むものだろうか。デンヌリは、確実な証拠はなにひとつ持たず、ただ自分の直観によってのみ導かれているのを、告白しないわけにはいかなかった。

「売買契約の調印はいつかね」と冗談めかしていった。「結婚式はいつだ」

「三、四週間のうちだ」

デンヌリは、この男の喉頸をしめあげてやれたら、さぞ愉快だろうにと思った。すき勝手に、自分の、デンヌリの意志に反して、世間にのさばっているこの闖入者の喉頸を。しかし、そのと

「聞かせてもらえるかね」
「もちろん。メラマール伯爵と妹の伯爵夫人は、きみにも理解できるように、あのもうすこしでとんでもない目に会うところだった事件について、どちらもおそろしい思い出を持っている。一世紀このかた、あの一家にまつわりつき、家族があの屋敷に住むと、たちまち働きかけるように思われる呪いのために、断固とした決心をすることになったのだ」
「どんな。もうあの屋敷には住みたくないというのか」
「メラマールの屋敷を持ってすらいたくないというのだ。あの屋敷が不幸をひきよせるのだ。それで、売り払うことにしたのだ」
「まさか」
「すでに売り払ったも同然なのだ」
「買い手が見つかったのか」
「そうだよ」
「誰だね」
「ぼくだ」
「きみが?」
「そうだ。アルレットとぼくは、あそこに住むつもりでいる」

同盟が締結された。デンヌリはこれほど満たされない憎悪心と復讐の欲求をこめた握手をひとに与えたことがなく、一方また、その敵が、これほどの真心と率直さで、その提言をうけいれたこともなかった。

三人はいっしょに車庫の前にまたおりた。アルレットは疲れすぎて歩けなかったので、ファジュローに車を持ってきてくれるように頼んだ。そして、ジャン・デンヌリとふたりきりになると、すぐ、そのひまを利用していった。

「わたしは、あなたにたいしてすまない思いをしていますの。あなたに知らせないでいろんなことを、あなたに不愉快だったにちがいない、いろんなことをして」

「なぜ、不愉快なんだね、アルレット。きみは、メラマール氏とその妹を救いだすのを手伝ったきみにいいよって、きみはあの男との婚約を承知した。それはきみの権利だよ」

……それは、わたしも望んだことではなかったかね。一方また、アントワヌ・ファジュローは、

アルレットは黙りこんでしまった。夜になろうとしていた。デンヌリには、アルレットの美しい顔が辛うじてみえていた。そして、たずねた。

「きみは幸福なんだろうね」

アルレットはうなずいた。

「あなたがわたしにたいする友情を持ちつづけてくだされば、それこそ申し分なく幸福ですわ」

「わたしがきみにたいして持っているのは、友情ではないよ、アルレット」

アルレットが答えないので、デンヌリは重ねていった。

き、アルレットが起きあがって、まだ顔色が悪く熱気があったが、とにかく元気になって姿を現わすのが見えた。

「行きましょう」と、アルレットはいった。「これ以上、ここにいたくないわ。そして、どんなことがあったかも知りたくないし、お母さんにも知らせたくないの。もっとあとで、あなたたちからお話をうかがいますわ」

「もっとあとで。それがいい」とデンヌリはいった。「しかし、それはそれとして、わたしたちは、攻撃にたいして、いままでにやったよりも、もっとうまく、きみを守らねばならない。そうするには、方法はひとつしかない。それは、われわれふたり、ファジュローとわたしが協力することだ。どうだ、きみは賛成するかね、ふたりが力を合わせれば、アルレットに危険はない」

「たしかにそうだ」とファジュローは叫ぶようにしていった。「そして、ぼくのほうは、すでに真相にあまり遠くないところまできている、それは確実だ」

「われわれが、ふたりでかかれば、全部の真相が見つかるだろう。わたしが知っていることはきみに話す。きみが知っていることは、なにひとつ隠さないで、わたしにいってくれ」

「なにひとつ隠さないよ」

デンヌリは、きわめて自然な身ぶりで手をさしのべ、ファジュローも、それに劣らず熱意をこめた身ぶりで応じた。

「わたしはきみを誤解していたよ」とデンヌリはいった。「アルレットが選んだ男が、アルレットにふさわしくないはずがない」

は、必要な場合、いつでもまた会ってくれることと、きみたちと同じように、わたしもメラマールの屋敷に出入りができるように取り計らってほしいことだ」
「約束しますわ……」
ファジュローがかえってきていた。
「もうひと言」とジャンはいった。「きみは、ほんとうに、わたしの友だちかい」
「しんそこからの」
「では、また近いうちに、さようなら、アルレット」
車が路地の入口に停まっていた。ファジュローとデンヌリはもう一度握手をかわし、アルレットは婚約者と立ち去った。
「やってみるさ、奴さん」ふたりが遠ざかって行くのを見守りながら、ジャンはひとり言をいった。「やってみるさ。おれは、きみよりも、もっと手強い奴を屈服させた。神かけて、きみには、おれが好きな女と結婚させないよ。メラマールの屋敷には住まわせないよ。ダイヤのコルスレを返させてやるよ」
十分後、ベシューは、デンヌリが同じ場所で考えこんでいるのを、不意にやってきて驚かせた。
部長はふたりの部下をつれて、息を切らせながら駆けつけた。
「聞き込みがあったんですよ。ロランス・マルタンは、ラ・ファイエット町から、ここいらあたりにやってきたにちがいない。最近になって、あの女は、この近辺に車庫のようなものを借りうけたのです」

「わたしがいう意味は、きみには、よくわかっているだろうね、アルレット」
「わかっていますわ」とアルレットは低い声でいった。「でも、信じられませんの」
そして、デンヌリがからだを近づけるのを見ると、急いで、つけくわえた。
「いえ、いえ。そのはなしはもうしないことにいたしましょう」
「きみはひどく、ようすが変だよ、アルレット。ふたりが知り合った最初のころから、わたしはそういったろう。そして、いまでも、きみのそばにいると、なにか隠しているような印象をうける、なにか秘密を……こんどの事件を不可解にしている、いろんなできごとに関係がある、なにかの秘密を」
「わたし、なにも秘密は持っていませんわ」とアルレットはきっぱりといった。
「いや、ある。わたしは、その秘密からきみを解放してあげる、同時に、きみの敵からも解放してあげる。わたしは、いまでは、その敵をみんな知っていて、動きまわるのを目に見ている……見張っている。……そのうちのひとりを特に。アルレット、それがいちばん危険で、ずるい奴だ……」
デンヌリは、ファジュローをもうすこしで非難するところだった。うすくらがりのなかで、アルレットが、その言葉を待っているのを感じた。しかし、その言葉は、口に出さなかった。証拠がなかった。
「解決はまぢかにせまっている」とデンヌリはいった。「しかし、無理をしてはいけない。アルレット、きみはきみの道を進むがいい。わたしがきみに求めるのは、ひとつの約束だけだ。それ

発表で、この事件がコルスレ事件に関係があり、捜査中の古道具屋の婆さんの店の借主の名義がロランス・マルタンになっており、そのロランス・マルタンが、ルクルスー氏が面接していた女と同一人だとわかると、一時下火になっていた世間の関心は一度にたかまった。

ひとびとは、ロランス・マルタンとその共犯者であり、人殺しである、びっこをひく老人の話でもちきりだった。犯罪の動機については全然説明がつかないままだった。ロランス・マルタンが金を提供して変更させようとしたのは、どの報告の内容だったのか、正確に知ることは不可能だったからである。しかし、すべてのことが、いかにも巧妙に仕組まれ、犯罪の経験を重ねた人間によって行なわれたように思われるので、ひとびとは、その一味は、ダイヤモンドのコルスレ事件のからくりをしたのと同一人であり、またメラマール伯爵とその妹にたいして、謎の陰謀を企てた奴と同一人であることを疑わなかった。ロランスと男の老人と古道具屋の婆さんのおそるべき三人の棒組は、たちまちにして有名になった。そして、その逮捕の日は迫っているように思われた。

デンヌリは、メラマール邸で、毎日、アルレットと会っていた。ジルベルトは、ジャンが夫人を脱出させた大胆さと、その演じた役割を忘れていなかった。したがって、デンヌリはアルレットの口添えもあり、夫人や伯爵から最上の歓待をうけた。

兄妹は、ふたたび人生にたいする自信をとりもどしていたが、パリを退去し屋敷を売却する決意は決定的となっていた。ふたりは同じようにパリから離れたい欲求を感じ、古い家族伝来の家を犠牲にするのは、敵意を持つ運命にたいする義務のように考えていた。

「きみってすご腕だね、ベシゥー」とデンヌリはいった。
「なぜ」
「いつでも、けっきょくは目標に到達するからさ。遅すぎるのは、事実だがね。……でも、要するに到達することはする」
「どういう意味ですかね」
「なんでもない。ベシゥー、きみが、奴らを手をゆるめずに追及しなくてはならぬということをのぞいては。奴らをたぐってゆけば首領がわかる」
「すると首領がいるんですか」
「そうだよ、ベシゥー。そして、奴には、おそろしい武器がある」
「どんな」
「正直ものの弁舌(べんぜつ)さ」
「アントワヌ・ファジュローですか。すると、あんたは、やっぱり、あの男を疑っているんですか」
「疑う以上だよ、ベシゥー」
「ところで、小生、いまここにいるベシゥー部長は、あんたに宣言しますがね。あんたは明きめくらですよ。わたしは、ひとの人相見にかけては一度だってまちがったことはない」
「おれの人相についてもね」デンヌリはひやかしながら立ち去った。
市会議員ルクルスーの殺害と、その事件が起こった情況とは、世論を沸騰させた。ベシゥーの

アルレットは、幸福な結婚をするという立場から将来を眺めたり、いまから住もうとしているメラマールの屋敷を、新婚の住居として考えているようすはどこにもなかった。ファジュローと話し合うとき――それが、きまってふたりの会話の主題の全部だったが――まるで博愛事業の本部の設計をする話でもしているかのようだった。じじつ、メラマール邸は、アルレットの計画では、《結婚支度基金》の本部になることになっていた。そこでは、基金運営の幹部会議が開かれる。アルレットが世話を見るマネキン嬢たちの読書室がある。シェルニッツの店のマネキン、アルレットの夢が実現するわけだった。若い娘としてのアルレットの夢は、すこしも問題ではなかった。

それを第一に笑っていたのはファジュローだった。

「ぼくは社会事業と結婚するのだよ」といっていた。「夫じゃない、会社の一株主だよ」

会社の一株主。この言葉は、デンヌリの心中では、アントワヌ・ファジュローをめぐってのすべての考えの発展の中核になっていた。こんなに広大な計画、邸宅の買収、会社の設立、その施設整備は、莫大な財産があることを示していた。その財産はどこから来たものだろう。ベシゥー部長がアルゼンチンの領事館や公使館について調べた情報は、たしかにファジュローという一家が二十年ほど前にブエノス・アイレスに居をさだめ、その十年後、父も母も死んだことを確証していた。しかし、同人たちは、なにひとつ財産を持たず、当時まだ、ほんの年端もゆかぬ少年だった息子のアントワヌをフランスに帰国させねばならなかった。そのころ、メラマール兄妹が、かなり貧しいと知っていた、そのアントワヌが、どうして急に富裕になったか。どうして……ご

しかし、長いあいだ堪えしのび、いまだに残っていた不安は、若い娘や、友人のファジュローと接触することによって、しだいに消えていった。アルレットは一世紀このかた、いわば見すてられていたその住居に、その雅致と、青春と、ブロンドの髪の明るさと、その生まれつきの精神の均衡と、情熱のほとばしりをもたらしていた。アルレットは、知らぬまに、きわめて自然に、ジルベルトや伯爵から愛されるようになっていた。デンヌリは、伯爵や夫人がファジュローの意図、自分たちが恩人と考えている男の意図を支持するのは、いいことをするのに力をかしているのだと信じている理由がわかった。アルレットを幸福にしてやりたいと願ったからなのだ。

ファジュローのほうは、これまたたいへん陽気で、いつも上機嫌で、天真爛漫で、無頓着で、伯爵兄妹に深い影響力を持ち、アルレットも同じ程度に影響をうけているらしかった。まったく、この男は、下心がなくて、満々たる自信をもち、安心しきって人生に身を委ねてゆくタイプの人間だった。

そしてまた、デンヌリは、どんなに不安を抱き、注意して、アルレットを観察していたことか。アルレットとジャンのあいだには、ルヴァロアの車庫の前でかわした愛情をこめた会話にもかかわらず、どこか気詰まりなものがあり、ジャンは、それをとり去ろうとする努力はなにもしなかった。そして、ジャンは、その気詰まりなものはアルレットにもあり、それはジャンとはかかわりなく、ジャンを度外視しても存在するもので、アルレットは、恋をして結婚がまぢかに迫っている女として、ごく自然な幸福感をそのまま素直にうけ入れていないのだと、強いて信じようとしていた。

いるのだ。ところで、ファジュローほどの力量の男なら、いずれまもなく、バーネットとアルセーヌ・リュパンとが同一人なのを見破るだろう。その場合、奴はおれを告発する。どちらが相手を倒すか。リュパンかファジュローか≫

そのあいだ、ジルベルトは出発の準備をととのえていた。四月二十八日木曜日（いまは十五日だった）メラマール一家は屋敷を明け渡さねばならなかった。そのとき、メラマール氏は売渡し契約に署名し、アントワヌは小切手を渡す。アルレットは母親に婚約を知らせ、公示が行なわれ、式は五月のなかばごろに挙げられるだろう。

また少しの時がすぎた。デンヌリとファジュローのあいだのたがいの憎悪心は激しく、うわべだけの友情をもってしては、いつもそれを抑え得るとはかぎらなかった。ときには、われ知らず、ふたりは敵としての態度をまる出しにし、ファジュローは大胆にも、ヴァン・フーベンをメラマール家のお茶の席に連れてきて、ヴァン・フーベンはジャンにたいして冷淡しごくの態度を示した。ヴァン・フーベンはダイヤモンドの話を持ち出して、アントワヌ・ファジュローが泥棒の手掛かりをつかんだと断言し、その口ぶりがいかにも威し文句めいていたので、デンヌリは、ファジュローが彼を、デンヌリを巻き添えにするつもりではないのかと怪しんだ。

戦いはまぢかに迫っていた。デンヌリの考えは、ますます強固になる現実を土台にしており、すでに戦いの日時を決定していた。しかし、先手を打たれはしまいか。そこへある劇的な事件が起こり、デンヌリには、問題にとって不吉な前兆のように思われた。

く最近、ヴァン・フーベンのすばらしいダイヤモンドを盗んだためでないとすれば。

毎日、午後と夕方、デンヌリとファジュローのふたりは、たがいに離れることがなかったといってよかった。毎日、ふたりはメラマールのうちで、お茶をのむことにしていた。ふたりとも、元気いっぱいで、快活で、明けっぱなしで、大げさに友情と同情のしるしを示し合い、時と場合によってはたがいに、おまえよばわりをして、双方とも相手をべた賞めにほめていた。しかし、デンヌリは、どんなにか、ぞっとするような目で、競争相手を盗み見していたことか。そして、ときどきファジュローの鋭い目が、魂の奥底までも突き刺すように、どんなにか自分をさぐっているのを感じたことか。

当の事件は、ふたりのあいだでは、けっして問題にされることはなかった。デンヌリが前に要請した、しかも、もし、ファジュローのほうから申しでたら断わったにちがいない協力については、ひと言も話にはでなかった。じっさい、それは目に見えない攻撃、暗黙の反撃、うわべだけのみせかけの連続であり、情け容赦を知らぬ決闘で、たゆみない激しさをもって継続されていた。

ある朝、デンヌリはラボルド広場の近くで、ファジュローとヴァン・フーベンが、いかにも親しそうに腕を組んで歩いているのを見かけた。ふたりはラボルド町を通って、一軒のとざされた店の前で立ちどまった。ヴァン・フーベンが指で、≪バーネット探偵社≫と出ている看板をさして見せた。ふたりは興奮してしゃべり合いながら遠ざかって行った。

≪そうなのだ≫とジャンは考えた。≪あのふたりの悪党は棒組になったのだ。ヴァン・フーベンはおれを裏切って、デンヌリとは、元のバーネットにほかならないことをファジュローに話して

そう遠くはなかった。ちょうどそのとき、大通りをふたりの自転車乗りの警官が通りかかったので、デンヌリはひと声高く口笛を吹いて注意をひき、助けを呼んだ。

≪ばかな真似をした≫と、デンヌリは考えた。≪こんなことにかかり合って、なんの役に立つ≫

警官が近づいてくると、デンヌリは、発見したことの説明をした。女の着衣をすこし剝がしてみると、肩の下に突き刺さった匕首の柄が見えた。手は冷たくなっていた。三十分か四十分くらい前に死んだにちがいない。ぐるりの砂は、被害者があばれたかのように、足跡が乱れていた。だが、雨がひどく降りだしていて、その足跡を消していた。

「自動車が必要だろう」と警官のひとりがいった。「そして、署に運ばねば」

ジャンが助力を申し出た。

「死体を大通りまで運んでください。わたしが、車をもってかえってきます。駐車場はすぐ近くです」

デンヌリは駆け出した。しかし、駐車場にくると、タクシーに乗りこむかわりに、運転手に教えて、警官のところに送りつけるだけでとどめた。自分のほうは、急ぎ足で反対の方角に遠ざかって行った。

≪度をすごすことはない≫とデンヌリは自分で自分にいいきかせた。≪おれの名前をきくだろう。取調べのために呼び出されるだろう。平和に暮らしている人間にとっては、とんだ迷惑だ。それにしても、どこの畜生があの婆あを殺したのだろう。あの婆さんが会う約束をしたアントワヌ・ファジュローだろうか。ロランス・マルタンが姉を厄払いしようとしたのだろうか。いよいよ明

デンヌリは、ファジュローが住んでいたモンディアル・パラスの門衛を買収していて、その男を通じ、それにまた、けっして監視の手をゆるめることのなかったベシューを通じても、ファジュローが手紙を一度もうけとったことがなく、訪問客があったためしのないことを知っていた。それが、ある朝、ファジュローのもとに女から電話がかかってきて、ごく簡単な短い話がかわされ、そのはしくれを小耳にはさんだことを、デンヌリは門衛から知らされた。その晩十一時半に、シャン・ド・マルス庭園の《この前と同じ場所で》落ち合おうというのだった。

その夜十一時に、ジャン・デンヌリはエッフェル塔の足もとや庭園のなかをぶらつきまわった。月も星もない夜だった。長いあいだ探したが、ファジュローには行きあわなかった。真夜中すぎだったにちがいないが、そのときになってはじめて、デンヌリは、ひとつのベンチの上に、黒い塊があるのに気づき、頭をほとんど膝の上までたれて、からだをふたつに折った女の姿のように思えた。

「おや、なんたることだ」とジャンは思わず叫んだ。「こんなにして、青天井で眠る奴もないものだ。……そら、雨も降りだした」

女は身動きもしなかった。デンヌリが懐中電灯を手にかがみこんで見ると、女は帽子もかぶらず、半白の髪をして、袖なしマントを地べたにひきずっていた。頭を持ちあげると、すぐまたがくりと垂れた。デンヌリはとっさに見てとった。まっさおに、死人のようにまっさおになった古道具屋の婆さん、ロランス・マルタンの姉だった。

場所は、中心となる通路からは離れたところで、植込みの茂みのなかだったが、士官学校から

にとびつくだろう。

ところで、じじつ、そういうことになった。ダイヤモンドについての捜査をつづけるという口実で、アントワヌ・ファジュローは、ヴァン・フーベンを紹介したと同じく、ベシューをメラマール家に連れてきた。デンヌリにたいする、部長の固苦しい四角張った態度から見て、もはやいささかの疑いの余地もなかった。ベシューにとっては、デンヌリは、とたんにリュパンになっていた。リュパンにしてはじめて、ベシューがバーネットのやりとげるのを見たような功績をあげることができる。リュパンにしてはじめて、ベシューが手玉にとられたように、ベシューを手玉にとることができる。そこで、ベシューとしては、遅滞なく、警視庁の上司とも相談の上、ジャン・デンヌリの逮捕の準備をしなくてはならなかった。

そういうわけで、毎日、事態は険悪になっていった。シャン・ド・マルスの事件のあと、不安そうで、めいりこんでいるように見えたファジュローは、いつもの上機嫌をとりもどしていたが、わざとそうしているのかどうかは知らず、ジャンにたいして、どこか生意気な態度をとり、横柄ぶりが見えすいていた。勝利の全装置を動かすには、指一本あげさえすればいい人間のように、勝ち誇ったようすが見えた。

売買契約の調印に先立つ土曜日、ファジュローはデンヌリを片隅で引きとめていった。

「ところで、きみはいったい、これをどう思う」

「これをってなにを？」

「もちろん、リュパンの介入さ」

らかになった、ひとつのことは、一味のあいだにいざこざがあるということだ。その推定の上に立つと、すべての説明がつく。ファジュローの行動も、その計画も、みんな……≫

翌日、正午版の新聞は、ひとりの老婆がシャン・ド・マルスの庭園で殺害されていたことを数行で報道した。しかし、夕方には、局面は急転直下した。被害者は、サン・ドニ町の古道具屋の婆さんにほかならなかった。つまり、ロランス・マルタンとその親父の共犯者である。……そして、婆さんのポケットのひとつから紙切れが見つかり、それには、ぞんざいに、あきらかに筆跡をごまかして、次の名前が記されていた。≪Ars. リュパン≫。そのほか、自転車乗りの警官は、死体のそばにいて、こっそり逃げ出して行った男のエピソードを物語った。疑う余地はない。アルセーヌ・リュパンが、ダイヤモンドのコルスレ事件に関係を持っている。

ばかげたことだった。そして世間は案の定、反撥した。アルセーヌ・リュパンはけっして人殺しをしない。どこの馬の骨だって、アルセーヌ・リュパンの名前くらい書くことができる。しかし、ジャン・デンヌリにとっては、それはひとつの警告だった。リュパンの幻(まぼろし)を呼び起こしてきた事実は、いかに意味深長か。脅迫は直接的だった。≪勝負をあきらめろ。おれを自由にしておけ。でないと、おまえを告発する。おれはいっさいの証拠を握っており、それをたどって行けば、デンヌリからバーネットへ、バーネットからリュパンにさかのぼる≫

そんなことをするよりも、もっといい方法があるではないか。ベシュー部長に知らせるだけで充分ではないか。ベシューは終始不安を感じていて、デンヌリの権威に屈服しているのも、腹の虫を抑えてそうしているだけで、こんなすばらしい敵討ちの機会があるとなれば、むさぼるよう

「というと、どういう条件だ？」
「こちらがみんなもらう、相手にはなにもやらない」
ファジュローはまっこうからどやしつけられたように、とびあがった。
「なんだと。なんといった」
「わたしは、リュパンのいつものやり口にふさわしい返答の公式を、あの男に進呈している。すべてをリュパンに、他人にはなんにもやらない、というのだ」
今度はファジュローがほがらかに笑った。その顔つきがいかにも誠実そうで、デンヌリをいらだてた。アントワヌが発散している、あらゆるひとの同情をこの若い男にひきよせる《いい子》の印象は、デンヌリには、これ以上不愉快なものはなかった。そして、デンヌリが、いままた、そのような変な不快感をいだいたときは、おりもおりちょうど、ファジュローがあえて挑発者として行動してもさしつかえないほど、自分は強いとうぬぼれているときだった。デンヌリは、ときをおかず剣を交えていいと判断した。そして、とたんに、冗談口調から敵意の口調にうつっていった。
「わたしたちふたりのあいだには、なにもいうことはない。あっても最小限でいい。ふたことか、みことで足りる。わたしはアルレットを愛している。きみも愛している。きみがあくまでアルレットと結婚しようとすれば、わたしはきみをやっつけてやる」
アントワヌは、その剣幕に啞然としたようだった。しかし、べつにあわてるでもなく答えた。
「ぼくはアルレットを愛している。だから結婚するだろうよ」

「なんだ、そのことか。わたしは、その点についてはむしろ懐疑的だね」
「いずれにせよ、あの男には容疑が重なっていて、身辺近くまで糸はたぐられているらしく、つかまるのは時間の問題らしいよ」
「そんなことは、じっさいに起こってみないでは、誰にもわからんだろう。あの人物はひと筋なわではいかないものね」
「ひと筋なわではいかないにしても、ぼくにいわせると、こんどこそ、どうやって切りぬけるか拝見したいものだ」
「正直にいって、わたしは、あの男のことなんかべつに苦に病んでいないよ」
「それは、ぼくだって同じさ。そのことはわかっていてほしいね。ぼくはただ無関係な傍観者として話しているだけだ。ぼくがあの男の立場なら……」
「あの男の立場なら？……」
「外国にずらかるね」
「それはアルセーヌ・リュパンの流儀ではないよ」
「すると、ぼくなら、取引きを承知するだろう」
「誰と？　なにについて？」
「ダイヤモンドの持ち主とさ」
「たしかに」とデンヌリは笑いながらいった。「リュパンについて知られていることから判断して、その取引きの条件をきめるのは、わけないだろう」

の戦いに従事していたことか。その全注意力を、いまだに不明のままでのこされていた、最後の諸点に傾注し、その熟考のはての結論に従って行動していた。これほどまでに深刻な、準備体制の完成の必要と、敵を前にして最悪の事態に直面する覚悟を感じたことは、かつてなかった。

二度の夜間探検で、いままで欠けていた情報のあるものが入手できた。いろんな事実の全体のつながり、事件の底にある心理がしだいにはっきりと見極めがついていった。メラマール兄妹が、その一面しかかいま見ていなかった、メラマール家の秘密と呼ばれているものの正体がわかった。伯爵とその妹の敵に、これほどの力を与えている、謎の理由を知った。そして、アントワヌ・ファジュローが演じている役割をはっきりと見てとった。

≪これでよし≫水曜日、目がさめると、ジャン・デンヌリは、われとわが心に叫んだ。≪しかし、奴もまた＜これでよし＞と考えているにちがいないことをよく知っていなくてはならない。思いもよらない危険にぶつかるかもしれないことを心得ていなくてはならない。当たって砕けろだ≫

デンヌリは早目に昼食をすませ、それから散歩した。まだ熟考を重ねていた。セーヌを渡り、でたばかりの正午版の新聞を買い、機械的にひろげると、すぐ欄の頭のセンセーショナルな見出しにひきつけられた。立ち止まって、ゆっくりと読んだ。

≪アルセーヌ・リュパンを追い詰める輪はさらにせばめられて、事件は新しい方向に進展し、最終的解決が予想される。周知のとおり、若々しい外貌をしたりっぱな一紳士が、数週間前、ある古道具屋の女主人についての情報をさぐり、その女主人を発見すべく努力していた。

「すると、拒絶だね」
「拒絶だ。きみには命令を与えるなんらの権利もない。そんな命令に従う理由は、ぼくにはない」
「よかろう。では再会の日をきめよう。次の水曜日が売買契約調印の日だったね」
「そうだ。午後六時半だ」
「わたしも列席する」
「なんの名目で」
「メラマール伯爵兄妹は、その翌日出発する。わたしはお別れの挨拶にくる」
「むろん、きみは歓迎されるだろう」
「では水曜日に」
「水曜日に」

この会談を終わると、デンヌリはぐずぐずしてはいなかった。あと四日。なにはおいても、この期間のあいだは、ごくささいな危険すらもおかしたくなかった。そこで、くらやみのなかに《もぐりこんだ》。どこにもその姿は見られなかった。ふたりの保安部の刑事が住居の前をうろついていた。ほかの刑事たちはアルレット・マゾールの家を見張り、べつの刑事たちはレジーヌ・オブリーの家を、またべつの一隊はメラマール家の庭園を縁取る通りの警戒に当たっていた。ジャン・デンヌリの手掛かりはどこにもなかった。

しかし、この四日間、デンヌリはパリに持っていた設備万端ととのった隠れ家のひとつに身を潜め、あるいは、デンヌリにしてはじめてできるような巧みな変装をして、いかに熱狂的に最後

ローから出たものであることは疑いない。ファジュローが事件のすべての糸を握り、ベシュー部長を踊らせているのだ。

《ちきしょう》とデンヌリは歯ぎしりした。《この払いはさせてやるぞ……しかも、高価に》

デンヌリは、からだの動きがぎごちなくなり、すでに追い詰められたかのように、気が落ちつかなかった。通行人が自分の仮面を剝ぐ警官のように見えた。ファジュローが勧告したように逃亡すべきだろうか。

デンヌリは、いつでも支度ができている三つの逃亡方法を考えてためらっていた。飛行機か、自動車か、すぐ目の前にあるセーヌ河の古びた快速船か。

《いや、そいつはばかばかしすぎる》と考えた。《おれほどの男が、いざ行動の時間になって、しりごみする手はない。困ったのは、いずれにしても、そうしなくてはならないが、このデンヌリというりっぱな名前におさらばをすることだ。残念だ。この名前は明るくて、いかにもフランス的だ。それにまた、紳士航海士も、これで廃業になる》

しかしながら、デンヌリは無意識に、その本性に従って、メラマール邸の庭園に隣接する通りをうかがっていた。人影はない。警官の姿はどこにもない。屋敷をぐるりとまわった。ユルフェ通りにも、同じく怪しいものはなにもいない。そこで、デンヌリは考えた。ベシューとファジュローは、デンヌリには危険に直面する勇気がないと信じたか――これは、ファジュローがひそかに欲していたところにちがいない――それとも、邸内であらゆる準備をととのえているのか、どちらかだ。

この紳士はついにその女の住所を知り得たが、右はサン・ドニ通りの古道具屋の女主人にほかならなかった。ところが、この紳士の人相風采は、自転車警官がシャン・ド・マルスで、老婆の死体のそばにいる現場をおさえ、やがて逃亡して、その後消息を絶った人物の人相風采と正確に一致する。警視庁当局は、その人物がアルセーヌ・リュパンであることを確信している≫

（以下第三ページ）

第三ページの≪最新ニュース≫欄（締切り後に插入する、フランスの新聞の慣例）には、≪熱心な一読者≫と署名した小記事が載っていた。

≪目下当局が追及している風采のりっぱな紳士の姓は、各種の情報によると、デンヌリである。このデンヌリは、自動艇で世界一周を試みたと自称し、昨年、その帰着を歓迎した航海士ジャン・デンヌリ子爵ではないだろうか。一方また、有名な、バーネット探偵社のジム・バーネットはアルセーヌ・リュパンと同一人であると信ずべき根拠がある。もし、しからば、リュパン＝バーネット＝デンヌリの三位一体は、長くは捜査の手をのがれ得ず、このとうてい許しがたい人物が社会から放逐される日の近いことを期待してよい。そのために、ベシュー部長に全幅の信頼を持とうではないか≫

デンヌリは腹立たしそうに新聞をたたんだ。≪熱心な読者≫の結論が、アントワヌ・ファジュ

デンヌリは呼鈴を鳴らした。

10 鉄拳一閃

「こんにちは、フランソワ」デンヌリは足も軽く内庭にはいって行きながらいった。
「こんにちは、旦那さま」と老人の召使は答えた。「旦那さまは、わたしどもを、お見かぎりでしたね、ここしばらく……」
「まったく、そうだったね」とジャンはいった。フランソワとはよく冗談口をきくのがならわしで、デンヌリは、この老人はまだ自分を警戒するように告げられていないのだと考えた。「まったく、そうだったね。家庭の事情があったんだ……田舎の叔父の遺産相続の問題が……ちょいと百万くらいの」
「そりゃ、けっこうなことで、お祝い申しますよ」
「なにをいう、わたしはまだ、うけとるかどうか決心がつかないでいるのだよ」
「そんなことって、旦那さま」
「ところが、そうなんだ。百万は百万でも、借金なのだ」
ジャンには、この無邪気な冗談が気に入った。それで、自分の精神が完全に自由なことがわかった。しかし、ちょうどその瞬間、屋敷の窓のひとつのチュール地のカーテンがさっとすばやく

その考えがデンヌリを鞭打った。卑怯ものとそしられたくなかった。ポケットをさぐり、うっかりして、ピストルとか短刀とか、因縁をつけられる道具を入れておきはしなかったか確かめた。それから、正門に向かって歩きだした。

のっぴきならぬ最後の逡巡。陰気でくらい、メラマール邸の正面の壁が、監獄の壁のように見えた。しかし、すこしばかりあどけない、すこしばかり悲しそうな、アルレットのほほえむまぼろしが心をよぎりすぎた。あの娘を、守ってやりもしないで引き渡してしまおうというのか。

デンヌリは、心のなかで冗談口をたたいていた。

≪だめだよ、リュパン、心得ちがいをするもんじゃない。アルレットを守るためには、なにも罠にはまる必要もないし、おまえの貴重な自由を危険にさらす必要もない。そうとも。ほんのちょいとした書きつけを伯爵の手ににぎらせて、メラマールの秘密と、アントワス・ファジュローがその秘密をたねに演じている役割を、伯爵に知らせてやるだけでいい。四行もあれば充分だ。それ以上は一行もいらない。しかし、じつをいうと、あの扉の呼鈴をならして悪いという法はどこにもない。その理由は簡単だ。そうすればおまえが愉快な思いができるからだ。おまえは冒険が好きなんだ。おまえが求めているのは戦いだ。おまえが欲しているのはファジュローとの一騎打ちだ。おまえは、あるいは、その戦いで倒れるかもしれない。――向こうは、おまえを迎える用意万端できているからね、あの悪党どもには――しかし、すばらしい冒険を試み、敵の陣地で、武器ももたず、ひとり身で、唇に微笑をうかべて、敵と相対するのは、それまた愉快のかぎりじゃないか……≫

いる決闘も、少しも勘づいていなかった。
　これに反して、ヴァン・フーベンの握手は氷のように冷たかった。明らかに、この男は知っていた。ファジュローはといえば、身動きもせず、ふたつの窓のあいだに腰をかけたまま、写真帳をめくっていた。そのようすが、あまりに気取っていて軽蔑に満ちていたので、ジャン・デンヌリは、いきなり、まっこうから切りこんで叫んだ。
「ファジュロー氏は幸福にひたりきっていて、わたしが目にもはいらないらしい。……それとも、見たくないのかな」
　ファジュロー氏は今直ちには決闘にはいらない、そんなことはわかりきっているというように、かすかな、どちらつかずの身ぶりをした。しかし、ジャンにはそうはいかなかった。前もって考えておいた言葉をいい、自分が欲する動作をやってのけるのを阻止できるものはなにものもなかった。偉大な名将のように、奇襲の利益をいつでもわがものとして、敵の計画の裏を掻かねばならぬと信じていた。攻勢は、勝利のなかばだ。
　しばらく顔を見せなかったわけを話し、伯爵兄妹の出発について、あれこれとたずねたあと、デンヌリはアルレットの手をとっていった。
「そして、きみは、わたしの大好きなアルレット、きみは幸福かね。完全に幸福で、なんのわだかまりも心残りもなく幸福かね。きみが当然、そうあっていいように幸福かね」
　この打ち解けた口のききかたは、こうした今の場合、常軌を逸しており、ひとを啞然とさせた。一同は、デンヌリがある決意をもって行動しているのであり、そこには、平和的なものはなにも

おろされるのが見えた。しかし、はやいといってもベシュー部長の顔を見とどけるだけのひまはあった。部長は控えの間に使われている階下の一室で見張っていたのである。
「見たところ」とジャンはいった。「部長がでばっているらしいね。相変わらず、ダイヤモンドの捜査か」
「相変わらずですよ、旦那さま。わたしの考えでは、どうやら、まもなく新しい事実がでてきそうですよ。部長は部下を三人も配置しています」
ジャンは愉快になった。もっとも屈強な連中のなかから選びだした三人の壮漢……護衛隊として申し分はない。……なんという幸運だ。これほどの警戒があれば、こちらの警戒がさらに厳重になるというものだ。司法当局の代表者がいなくては、こちらの計画はかたなしになる。
デンヌリは玄関の六つの石段をのぼり、さらに階段をのぼった。客間には、伯爵、その妹、アルレット、ファジュロー、それに同じく別れを告げにきたヴァン・フーベンが集まっていた。のんびりした空気で、みんな、いかにもおたがいに理解し合っているようすをしており、デンヌリは、この和やかな親和に今からひと波瀾生じさせるには、二、三分で足りると考えると、また軽いためらいを感じた。
ジルベルト・ド・メラマールが愛想よくジャンを迎えた。伯爵は快活に手をさしだした。一同から少しくはなれておしゃべりをしていたアルレットが、会えたのがいかにもうれしそうにジャンのほうへやってきた。たしかに、この三人のものは《最新ニュース》欄の記事を知らず、ジャンがポケットに持っていた夕刊新聞を読んでいず、ジャンに向けられている非難も、準備されて

「まったく、とんでもないことで……」とヴァン・フーベンがいいかけた。
「もっと、とんでもないのは」とデンヌリがヴァン・フーベンの言葉をさえぎってやさしくいった。「わたしたちの大好きなアルレットが、自分の慈善的な考えの犠牲となって、愛のない結婚をすることです。だって、それが実情なのです。メラマール伯爵、あなたは、そのことを認識されなくてはいけない。まだ時間があるからです。アルレットはアントワヌ・ファジュローを愛していません。あの男にたいしては、ほんのわずかな同情さえも持っていません。そうだろう、アルレット」

アルレットは抗議をすることもなく、顔を伏せた。伯爵は腕をくみ、憤慨に息を詰まらせていた。あれほど礼儀正しくて、控え目なデンヌリが、どうしてまた、こんな不作法なことができるのだろう。

しかし、そのとき、アントワヌ・ファジュローがジャン・デンヌリのそばまで進みでていた。いつもの無頓着な、いい子の表情はなくしてしまい、怒りと、そして、おそらくはつかみどころのない恐怖の作用による奇妙な結果として、思いもよらない意地悪そうな表情になっていた。
「なんでお節介をする」
「わたしに関係があるからだ」
「ぼくにたいするアルレットの感情が、きみに関係があるというのか」
「もちろんだ。アルレットの幸福が危殆に瀕している」
「そして、きみにいわせると、アルレットは、ぼくを愛していないというのか」

のもないのを悟った。
ファジュローは、自分のほうから、自分が選んだ瞬間に攻撃をしかけるため、あらゆる準備をととのえていたはずだったが、この不意打ちをくらって色を失い、立ちあがった。
ジルベルトと伯爵は感情を傷つけられて、つんとしていた。ヴァン・フーベンは呪い言葉を吐いた。二人とも、口出しをする前にためらって、アルレットを眺めていた。しかし、若い娘のほうは、少しも気にしていないようだった、当人自身は。ほほえみをたたえた目をジャンのほうにあげて、別格扱いの特権を認めている友人でも眺めるように、ジャンを見守っていた。
「わたしは幸福だわ」とアルレットはいった。「わたしの計画が全部実現するんですもの。そのおかげで、たくさんの友だちが、めいめいの気に入った結婚ができますわ」
しかし、デンヌリは、この静かな、落ちついた肯定で満足するために戦端を開いたのではなかった。そこでくいさがった。
「きみの友だちのことをいっているのではないよ、アルレット。きみのことを、きみが、自分の心の命じるがままに結婚する、個人的権利のことをいっているのだよ。こんどの場合、そうなのか、アルレット」
アルレットは顔を赤らめて、答えようとはしなかった。
伯爵がたまりかねて口を出した。
「その質問には、じっさい、驚き入ったよ。それはアントワスとそのいいなずけ以外には、誰にも関係のないことがらだ」

った。

≪……有名な、バーネット探偵社のジム・バーネットはアルセーヌ・リュパンと同一人であると信ずべき根拠がある。もし、しからば、リュパン＝バーネット＝デンヌリの三位一体は長くは捜査の手をのがれ得ず、このとうてい許しがたい人物が社会から放逐される日の近いことを期待してよい。そのために、ベシュー部長に全幅の信頼を持とうではないか≫

沈黙は厳粛だった。その告発は伯爵とジルベルトを恐怖でうちのめした。ジャンは微笑していた。

「それじゃ、きみのベシュー部長を呼びたまえ。だって、メラマール伯爵、あなたもお知りになっておく必要がある。アントワヌが、このうちに、ベシューとその部下の岡っ引きをつれこんだのは、わたしだけが目標なのですものね。わたしはきょうの訪問のことを前もって告げておきました。わたしが約束に忠実なことは、みんな知っています。おい、ベシュー君、はいれよ。きみはまるで、ポロニヤス（「ハムレット」の）のようにそこの壁掛けのうしろで、もぞもぞしているじゃないか。きみほどの腕がある警察官に似合わないことだよ」

壁掛けがかきわけられた。ベシューがはいってきた。固い決意をもった顔をしていたが、そのようすから見て、適当と判断した瞬間でないと、その全能の権力を行使しないつもりらしかった。

ヴァン・フーベンは、辛抱しきれなくて、あえぎながら部長のそばに駆けよった。

「ベシュー、挑戦に応じるんだ。あいつを逮捕したまえ。あいつがダイヤモンド泥棒だ。吐きだ

「そうだ、いうまでもない」
「それで、きみの意図は？……」
「この結婚を阻止するにある」
アントワヌは思わずとびあがった。
「ああ、よくもきみは……よろしい、それならそれで、ぼくも反撃する、ぼくだって。容赦はしないぞ。いまにわかる……」
ファジュローは、意を決したように、デンヌリのポケットからのぞいていた新聞を奪いとり、伯爵の目の前にひろげてわめいた。
「さあ、伯爵、これを読んでごらんなさい。この男がなにものかわかるでしょう。とくに、第三ページの記事を読んでごらんなさい。……容疑ははっきりしています……」
そして、いつもの無頓着ぶりとはうってかわった、狂気じみた激情を爆発させて、自分自身で、いっきに《熱心な読者》の執念深い考察を読みあげた。
伯爵とその妹は、あっけにとられて耳を傾けていた。アルレットは、いまにも泣きだしそうな目でジャン・デンヌリを見つめていた。
デンヌリのほうは、びくともしなかった。ただ単に、相手の言葉のきれまをねらって、
「読む必要はないよ。なぜ暗誦しないのだね。だって、そのりっぱな告発状を書いたのはきみじゃないか」と投げつけただけだった。
ファジュローは古い雄弁法の口調で、指をジャンのほうにつきつけて、最後の文章を読み終わ

伯爵はとびかかろうとするファジュローをひきとめ、ダイヤモンドのことをいいつのっていたヴァン・フーベンを黙らせた。そこで、ジャンは先をつづけた。

「わたしが、問題の記事をすでに読んだあと、その新聞をポケットに入れたまま、そして、ファジュローにそそのかされたベシューが令状を持って待っているのを知りながら、なにもそうする義務もないのに、ここに参りましたのは、わたしが冒す危険は、わたしたちの大好きなアルレットが冒そうとしている危険……あなたや、メラマール夫人が同じく冒されようとしている危険にくらべれば、はるかに小さいと思われたからです。わたしがなにものであるかは、ベシューとわたしのあいだの問題です。われわれはその問題は別途にきまりをつけます。アントワヌ・ファジュローがなにものであるか、それがいま、大急ぎで解決しなくてはならぬ問題です」

今度は、メラマール氏もファジュローを制止することはできなかった。ファジュローは喘ぎながら、わめきたてていた。

「それじゃ、ぼくはなにものだ。返答したまえ。返答してみろ。ぼくは誰だ、きみにいわせると」

ジャンは指折りかぞえはじめるかのように口を切った。

「きみはコルスレの泥棒だ……」

「嘘だ」とアントワヌがさえぎった。「ぼくが、コルスレの泥棒だなんて」

ジャンは冷然としてつづけた。

「きみはレジーヌとアルレット・マゾールを誘拐した男だ」

「嘘だ」

させねばならん。なにしろ、あんたは、ここでは大将だ」

メラマール氏が割ってはいった。

「ちょっと待っていただきたい。わたしのうちでは、なにごとも冷静に、秩序をもって行なわれるようにしてほしい」

それから、デンヌリに向かって、

「あなたは、いったい何ものなのですか。わたしは、この新聞記事の告発にたいする反駁を、あなたに求めているのではない。あなたをまだジャン・デンヌリ子爵として遇すべきであるかどうか、正直にいっていただきたい……」

「それとも、怪盗アルセーヌ・リュパンとして遇すべきかどうか」とデンヌリが微笑しながら、口を挟んだ。

そして、デンヌリは若い娘のほうを振りかえった。

「きみは楽にしたまえ、わたしの大好きなアルレット。きみはすっかり動転している。その必要はない。腰をおろしたまえ。そして、なにごとが起ころうとも安心しているがいい、すべて丸くおさまる。なにしろ、わたしが努力しているのは、きみのためなのだから」

それから、また、伯爵のほうへ向きなおっていった。

「メラマール伯爵、わたしはあなたのご質問には答えません。というのは、問題は、わたしがなにものかを知ることでなく、ここにいるアントワヌ・ファジュローがなにものであるかを知るにある、という理由からです」

ヌ・リュパンだ」

われを忘れ、アルセーヌ・リュパンという名に酔わされたように、ファジュローは、いよいよ強く叫び、手をデンヌリの肩にかけて握りしめていた。

デンヌリは、一歩もあとにひかず、おだやかにいった。

「そんなにがなりたてては、みんなの耳がつんぼになる。アントワヌ、いつまでも、そのままにしてはおけないよ」

デンヌリは言葉を切った。相手はわめきたてるのをやめなかった。

「きみには気の毒だがね」とジャンはいった。「最後の警告だ。調子をさげたまえ。でないと、きみにとっては、はなはだ不愉快なことが起こる。まだ、やめないのか。よろしい、きみがそう望むんだな。覚えていてほしいよ、わたしのほうは、できるだけの我慢をしたことをね。用心しろよ……」

ふたりはたがいに胴体が触れ合うほど近づいていた。そのあいだの空間を、デンヌリの鉄拳が弾丸のはやさでもって弧を描き、ファジュローの顎の尖端にとんだ。

ファジュローはよろめき、傷ついたけもののように足を折って膝をつき、からだいっぱいにのびてしまった。

この騒ぎのなかで、興奮のわめき声とともに、伯爵とヴァン・フーベンはジャンをひきとめようとし、一方、ジルベルトとアルレットはアントワヌの看護をしようとしていた。デンヌリは両腕を広げると、四人ともいっしょに押しのけ、近づかせぬようにしておいて、せきこんだ声でべ

「この客間の品物を盗んだ男だ」
「嘘だ」
「シャン・ド・マルスで死んでいた古道具屋の婆さんの一味だ」
「嘘だ」
「ロランス・マルタンとその父親の共犯者だ」
「嘘だ」
「最後に、きみはこの四分の三世紀以来、メラマールの一家を迫害してきた、執念深い一族の相続人だ」
アントワヌは怒りに震えていた。告発のひとつごとに声を高めた。
「嘘だ、嘘だ、嘘だ」
そして、デンヌリが話し終わったとき、ファジュローは、その前に、居丈高になって立ちはだかり、とんがり声で、とぎれとぎれに息を詰まらせながらいった。
「嘘だ。……口から出まかせをいっている。……きみはアルレットを恋していて、嫉妬に狂っているんだ。……それと、最初から、きみがなにを企んでいるか、ぼくがはっきりと知っているもんで、ぼくを憎んでいるのだ。きみはおそれているのだ。そうとも、きみはおそれているのだ、ぼくが証拠を握っているのを知っているものだから。……ありたけのいっさいの証拠を……（ファジュローは上着の紙入れの場所をたたいていた）バーネットとデンヌリは、アルセーヌ・リュパンだという、いっさいの証拠を。……そうだ、きみはアルセーヌ・リュパンだ。……アルセー

「メラマール伯爵、司法当局の利益のために、しばらく辛抱してください。アントワヌ・ファジュローにたいして加えられた非難がまちがっていたら、いまにすぐ、それと判明するでしょう。いずれにせよ、いまから起こることについては、私が全責任をとります」

それは、デンヌリにいっさいの行動の自由を許すことを意味した。デンヌリはそれを利用して、ただちに思いもそめなかったような、それこそ肝をつぶす行動をやってのけた。ポケットから、褐色がかった液体がはいった小さな瓶をとりだすと、その半分を、かねてすっかり用意してあった湿布の上にそそいだ。クロロフォルムの匂いが発散した。デンヌリは、そのマスクをアントワヌ・ファジュローの顔にあて、紐で頭のぐるりをからめて、それを顔に固定させた。

ことはいかにも無法で、伯爵としては許しがたく、強く反対したために、またもやベシューが一所懸命にメラマール兄妹をなだめなくてはならなかった。アルレットは、どう考えていいかわからず、目に涙をうかべて、たちすくんでいた。ヴァン・フーベンはいきりたっていた。

一方、もはや後へひけなくなったベシューは、力説した。

「伯爵、私は、この人物をよく知っています。われわれは待つ必要があることを、私は断言します」

やがて、ジャンは腰をのばすと、伯爵のそばによっていった。

「心からお詫びします、伯爵。しかし、わたしとしましては、一時の気紛れでやったり、無用の暴力を振るったのではないことを信じていただきたい。真相というものは、しばしば特殊の手段によって発見しなくてはなりません。ところで、このたびの事件の真相は単なるからくりの秘密

シゥーを呼んだ。
「手伝ってくれ、ベシゥー。おい、古い戦友。ちょっと手を貸してくれ。きみはよく知っている。わたしの働きぶりをたびたび見ているし、わたしが、でたらめな行動はせず、ガラスを割るには、それだけの重大な理由があることを、きみは知っている。この事件では、わたしの目的は、きみの目的と同じだ。手伝ってくれ、ベシゥー」
部長は、どこを吹く風かといったさまで、業の判定をし、原因を知らないでは決定をくださない審判官のように、その場の光景を見守っていた。ことの成り行きは、どう見ても、どっちみち部長の利益になるように展開し、いま行なわれた死闘は、ふたりの戦い手をもろともに、手足をしばりあげて、部長に引き渡してくれそうだった。そこで、古い戦友という呼びかけにも、部長はまったく風馬牛だった。ベシゥーは、現実主義者として行動することに、しっかりはらをきめていた。
部長はデンヌリにいった。
「あんたは、わたしの部下が三人、下にいることを知っているかね」
「知っているよ。それを、この無頼漢の一味にたいして使うように、きみに期待しているんだ」
「そして、たぶん、あんたにたいしてもね」部長はひやかした。
「もしも、きみの良心がそう命令すればね。きょうは、きみはすべての切り札を持っている。容赦なく、きみの思うとおりをやるがいい。それはきみの権利で、義務だ」
ベシゥーはデンヌリの意志に従いながらも、自分の熟慮の結果にもとづくかのように告げた。

「よろしい」
「じゃ、意見一致だ。ただ……」
「ただ、なんかね」
「とことんまで、わたしといっしょに歩くことだ。もし、今夜の六時になって、わたしが約束のすべてをはたさず、ということは、メラマール家の秘密を明らかにし事件のすべてを解明し、一味を引き渡さなかったら、わたしは名誉にかけて誓う、そのときは、手首をさし出して鉄の手錠をうけ、きみを手伝って、わたしがなにものか、デンヌリか、ジム・バーネットか、それともアルセーヌ・リュパンか、知れるようにしてやる。それまでは、わたしは、世間のあらゆるひとが気をもんでいる悲劇的な事件を解決する手段を心得ている人物としてとどまっている。ベシュー、きみはこの近くに、警視庁の車をなにか持ってきていないか」
「すぐ近くにある」
「それを持ってこさせてくれ。それから、きみは、ヴァン・フーベン、きみの車は？」
「運転手に四時にくるようにいっておいた」
「何人乗れる？」
「五人」
「きみの運転手は無用だ。かえらせるがいい。きみ自身が運転するんだ」
デンヌリはアントワヌ・ファジュローのそばに引き返し、調べて、脈を見た。心臓は正常に動いていた。呼吸は正しく、顔色も普通だった。デンヌリはマスクをしっかりとしめ直して、それ

す。それが、あなたの家族に、あなた自身に、多くの災難をもたらせたのです。……われわれですが、債券……メンフォール家の秘密……わたしは、それをよく知っています。あなたはそれを知って、その気になりさえすればいい。……いい分けだけ、わたしを信用していただけないでしょうか。わたしには、それが大事なのです。……いい分け、それだけしか求めません——

デンクリはメンフォール氏の返事を待とうともしなかった。その申し出は、老紳士だけにむけてのものだった。デンクリはヴァン・フーバンのほうを振りむいて、うってかわった、そっけない口調でいった。

——きみはだ、きみはわたしを裏切った。だが、それはいわないことにする。きょう、きみは、この男が盗んだダイヤモンドがほしいかね。もしも、ほしいなら、がみがみいうのはよしたまえ。この男が今にかえしてくれる——

あとは、パンウー警部が残っていた。デンクリは冷淡にいった。

——つぎはきみの番だ、パンウーよ。獲物についてのきみの分け前はこういうことになる。まずわたしは、きみに事件の真相を献上する。その真相なるものは、警視庁の連中みんなが、きみをせっついて、いまだにそのかいがなかったもので、きみはできたてのほやほやを連中にサービスしたがよかろう。次には、アントワヌ・ファンユコーを、きみに進呈する。この男がまっすぐに歩けないようなら、死骸としてきみに引き渡す。そして、最後のしめくくりとして、ヨランス・マルタンとその父親を、きみに献上する。いま四時だ。かっきり六時に、きみはその全部のものが手にはいるだろう。それでいいかね——

「目をあけているんだぞ……その男もだが、いざという場合には、デンヌリのほうを、もっと警戒するのだ。……おさえたからには、のがしてはならない。わかったか」

それから、ベシューはデンヌリといっしょになった。メラマール氏は電話をかけて、公証人に取り消しを申し入れていた。ジルベルトはマントを着て、帽子をかぶっていた。そして一同は、アルレットとともに、ヴァン・フーベンの自動車に乗りこんだ。

「チュイルリの先で、セーヌを渡るんだ」ジャンが命令した。「そして、リヴォリの通りをまっすぐに行きたまえ」

みんな黙りこんでいた。ジルベルトとアドリアンのメラマール兄妹は、どんなにか不安な胸をおどらせて、成り行きを待っていたことか。なんでまた、こうして自動車ででかけるのか。どこに行くというのか。真相は、どうやってわかるのか。

デンヌリは、おしひそめた口調で、聞いている人々に教えるというよりも、むしろひとり言でもいっているようにつぶやいた。

「メラマール家の秘密。どんなにか、わたしはこれに頭を悩ましたことか。わたしは、最初から、レジーヌとアルレットがかどわかされたときから、われわれが直面している問題は、すでに遠い過去によってしか、現在の説明がつかない種類のものだという直観があった。……わたしは、いままで、そのような問題に何度となく心をうばわれ、何度も解決してきた。今度の事件では、ひとつの点が、すぐに問題外だとわたしには思われた。それはメラマール伯爵と夫人とは、犯人ではあり得ないということだった。そうだとすれば、べつの人間が、その計画を実行するために、

から、結論をいった。
「二十分のうちに正気づく。ちょうど、わたしが必要とする時間だ」
「なにをするために」とベシューがきいた。
「行かねばならぬ場所に行きつくために」
「というと？」
「いまにわかる。でかけよう」
誰も、もはや抗議をしなかった。デンヌリの権威が全部のものを制圧していた。しかし、それ以上に、おそらくは、アルセーヌ・リュパンの人柄が及ぼす巨大な作用に影響されていたのだろう。あの冒険家の伝説的な過去、すばらしい功績が、デンヌリ自身から放射される威信につけ加わっていたのである。ふたつが合わさってひとつの力となり、どんな奇跡でも行ない得ると、ひとびとをして考えさせたのだ。
アルレットは目を丸くして、この不思議な人物を眺めていた。
伯爵兄妹は狂気のような希望で、胸をおどらせていた。
「デンヌリ君」ヴァン・フーベンがとつぜん振り向いていった。「わたしはけっして意見をかえたことはなかったよ。きみだけが、盗まれたものを、わたしにとり戻してくれることができる」
一台の自動車が内庭にはいってきた。ファジュローがそれに運びこまれた。三人の刑事が、そのぐるりに席をとった。ベシューが低い声で刑事たちにいった。

す」

デンヌリはまた沈黙した。伯爵は辛抱しきれなくなって、じりじりしていた。知るとなったら即刻知りたい、わがままな欲求にとりつかれてもだえていた。ジルベルトもまた、ひどく胸苦しい思いをしていた。デンヌリは兄妹にいった。

「おねがいです。……メラマール家の人たちは一世紀以上も待ったのです。あと数分間くらいは待っていただきたい。メラマール家の人々と、それを解放する真相のあいだには、もはや、世界じゅうのなにものも介入することはできません」

デンヌリはベシュー部長のほうを振りむいてからかった。

「きみにはわかりはじめたかね、どうだ、わが旧友のベシュー君。せめて、ごくかすかな光明くらいは見えださないかね。そうか、まだそこまで行かないのか。残念だ……なかなか美しい、独創的な、風味のある、測り知れない、水晶のように透明で、夜のように暗い秘密だよ。しかし、そうだろう、もっともすばらしい秘密というものは、コロンブスの卵のようなものだ。……そこを考えなくてはならない。左へ曲がった、ヴァン・フーベン。もうすぐだ」

車は狭い、不規則な、こみ入った通りをぐるぐるとまわった。ずいぶんと古い、商業や小工業地区で、あちらこちらに倉庫や、古い建物内に設けられた工場があった。ときどき、煉鉄のバルコニーや高い窓、また、大きく開いた門を通して、鎖の手摺がついた、広い階段が見えた。

「スピードをおとしな、ヴァン・フーベン。よろしい……右側の歩道沿いにそっと停めてくれ。あと数メートルだ。着いたよ」

ふたりの屋敷を利用したのだと考えざるを得ないではないか。アントワヌ・ファジュローの説が、それだった。しかし、ファジュローの狙いは、ひとがそれを信じて、司法当局が、その方向に迷いこんでくれることだった。ところが、一方また、アルレットやレジーヌが、客間に連れこまれ、たのを、伯爵兄妹や、フランソワ夫婦が気づかなかったということを、はたして認め得るだろうか」デンヌリは、しばらく沈黙していた。アドリアン・ド・メラマールは、顔をひきつらせて、デンヌリをのぞきこみ、口ごもりながらささやいた。

「話して……話してくれたまえ……おねがいだ」

デンヌリはゆっくりと答えた。

「いや……あなたが真相を知らねばならぬのは、言葉を通じてではありません。せきたてないでいただきたい……」

そして、デンヌリは先をつづけた。

「しかしながら、真相はきわめて簡単です。どうして、それが探し求めている人たちの精神に、まるで、逃げてゆく影のように、一度も思いうかべられなかったのか不思議なくらいです。わたしが真相のきらめきを捕えたのは、思い起こした二、三の事実の衝撃の結果でした。なんでしたら、それにつけ加えて、あなたが被害者となられた、あの奇妙な盗難が、わたしに真相を暗示したといってもいい。一見不可解に思われる、あのなんの重要性もないくだらない品物の紛失事件です。あれには、じつに重大な意味があったのです。そうでしょう、要するに、じっさいの価値のないものを、ひとが盗んだとすれば、それは、盗んだ当人にとっては特別な価値があるからで

った。正当な理由もなく、一同は、なにか異常なことが起こるのを待ちうけていた。そうとは意識し得ないで、しかも、避け得ないことが起こるのを観念していた。なにしろアルセーヌ・リュパンは、彼らがいまだに知らない風景をかくしているカーテンにいま手をかけていたからである。

やがて、デンヌリは鍵をまわして、からだをひらき、一挙に、一同をなかにはいらせた。

ジルベルトは、あっけにとられて叫び声をあげ、兄によりかかった。伯爵はよろめいた。

ジャン・デンヌリはふたりを支えてやらねばならなかった。

11 浮かれ女ラ・ヴァルネリ

不可解な奇跡。メラマール邸の正面内庭を出て十分後、一同はメラマール邸の正面内庭のなかにいた。しかも、セーヌ河を渡り、河は一度しか渡らなかった。しかもまた、出発点にふたたび戻れるような円を描いて車を走らせた覚えはなかった。しかもまた、ユルフェ町からおよそ三キロメートルの距離、ということは、つまり、昔のパリでいえば、ほとんどアンヴァリードからヴォージュ広場までの距離を走ったあと、メラマール邸の正面内庭にはいりこんでいた。

そうだ、奇跡だ。ふたつの映像をひきはなし、精神をふたつの異なる場所に、かわるがわる落ちつけるためには、論理と理性の力を必要とした。場所の一瞥、本能的な思考をもってしては、ふたつの光景は、ひとつのものとしかうけとられず、かしこと、ここと、アンヴァリードの近く

デンヌリは車をおりて、ジルベルトとアルレットに手をかしてたすけおろした。
警官の車がヴァン・フーベンの車のすぐうしろにきて停まった。
「連中はまだ動いてはいけない」とジャンはベシゥーにいった。「アントワヌはやっぱり眠っているかどうか確かめてくれ。そして、二、三分たってから運ばせてほしい」
そのとき一同がいた場所は、陰気な通りで、西から東に向かって走り、左手は、ペーストや食用罐詰工場の貯蔵庫に使われている建物で縁どられていた。右手には、どれも同じような、よく似た、貧相な構えの四棟の小さな家が並び、窓にはカーテンもなく、窓ガラスも汚れて、ひとが住んでいるとは思えなかった。二枚扉になっているひとつの表門の扉に、低い出入口が仕切られているのが見えた。以前は緑色だったのがいまはすっかり剝げて、破れた選挙ポスターがそここにまだ垂れさがっていた。
伯爵とジルベルトは、なんのことか見当がつかず、不安げに眺めていた。あそこで、なにをしようというのだろう。ここまで誰に会いにきたのか。
謎の言葉のときあかしが、この場所自体に、誰ひとりとしてくぐったことがありそうもない、この門のうしろにありえようとは、どうして想像できよう。
デンヌリはポケットから上品な、長い、ぴかぴか光る、近代的な鍵をとりだして、安全鍵の上方にある鍵孔にさしこんだ。
そして、連れのものを眺めて、にやりとした。彼らは四人とも、青くなって顔をひきつらせていた。じっさい、四人の生命は、彼らを支配している人物の一挙一動にかかっているかのようだ

「同じだわ」とアルレットはいった。
疑う余地もなく同じ玄関の石段であり、一同はそのほうに歩いて行った。ユルフェ町の玄関の石段とまったく同じ石段で、同じ段が六つあり、上には、ガラスがたがいちがいになった同じ庇(ひさし)がでていた。そして、謎の家の内部にはいって行くと、同じ産地の、同じ並べかたをした、同じ石畳の玄関の間があった。
「歩くと同じ音がする」と伯爵は、向こうの自分のうちにはいったときひびくのと同じように、ひびく声でいった。
伯爵は階下のほかの部屋を見たかった。デンヌリは時間にせきたてられて、それを許さず、一同に同じ絨毯がしかれ、同じ細工の鉄の手摺がついた二十五段の階段をのぼらせた。踊り場……向こうのうちと同じに、正面に三つの扉……それから、客間……。
そして、一同の困惑は、正面内庭にはいったときに劣らず大きかった。ひとつの部屋の隅々にまでも鬱積している同じ雰囲気ばかりでなく、調度や骨董品までが完全に同一だった。いろんな布類の同じ古びかた、壁掛けの同じニュアンス、床板の同じデザイン、同じシャンデリア、同じ枝付き燭台、箪笥の同じ錠前、同じ蠟燭さし、呼鈴の、同じように半分に切れた紐。
「ここだよ、アルレット、きみをとじこめようとしたのは。どうだ」ジャンはいった。「まちがいっこなしだろう」
「たしかにここで、また向こうのうちだわ」アルレットは答えた。
「ここなのだ、アルレット。きみがよじのぼった暖炉があり、きみがうつ伏せになっていた書棚

と、ヴォージュ広場の近くとに、同時に存在した。
そして、それは次の事実からきていた。ふたつの場所にあるものが同じもので、線や色が完全に同一であり、ふたつの正面内庭の奥にたっている、ふたつの邸宅の正面が同じであるばかりでなく、とくに、経た時が作り出したもの、同じ雰囲気、同じ魂があって、それが限られた狭い長方形の屋敷の四壁のあいだを、近くの河からくる、少しばかり湿気を帯びた空気に浸って漂っていたからである。
明らかに、同じ石切場から運ばれ、同じ大きさに、同じ切りかたで切られた石でできていたが、それに加えて、ひとつひとつの石は歳月によって同じ色を帯びていた。そして、風雨は、ところどころ雑草のうねでとりまかれた同じ石畳に、同じ年を経た様相を与え、屋根には、同じ緑を帯びた錆が見えていた。
ジルベルトは、すっかり絶え入りそうになってつぶやいた。
「まあ、こんなことってありうることでしょうか」
そして、迫害された家族の歴史が、アドリアン・ド・メラマールの目に浮かんできた。
デンヌリは一同を玄関の石段のほうにひっぱって行った。
「ねえ、アルレット、わたしがきみたちをメラマールの内庭に連れて行ったときの感動を思い出してごらん。あのとき、きみとレジーヌは、すぐに、あそこにあったのがきみたちがのぼらせられた、玄関の六つの石段だと認めた。ところが、それはこの内庭で、ここにあるのが、ほんものの石段なのだ」

い、アントワヌはからだをもぞもぞ動かしはじめていた。デンヌリはマスクをほどき、窓から投げすてた。それからジルベルトに向かって、
「失礼ですが、奥さん、その帽子とマントを脱いでいただけませんか。あなたは、ここにおいでになるのではなく、お宅に、ユルフェ町のお宅においでになるものと考えていただかねばなりません。アントワヌ・ファジュローにたいしては、われわれはユルフェ町からはなれなかった、ということにしておくのです。そして、とくに念をおしていっておきますが、みなさんとも、いまから、わたしが申しあげることに矛盾するようなことは、ひと言もおっしゃらないでいただきたい。みなさんはすべて、わたし以上に、われわれがいっしょになって追及している目的の達成に、重大な利害関係をお持ちです」
アントワヌはさらに深い息をした。うるさくまつわりつく厄介な眠気(ねむけ)を追い払うためかのように、手を額に持っていった。デンヌリはアントワヌから目をはなさないでいた。伯爵は口に出していってみないではいられなかった。
「すると、この男は子孫なのか、問題の一族の……」
「そうです」デンヌリは答えた。「あなたが、かねがね予感されていた、その一族の。一方にはメラマール家というものがあり、片方にはそれを迫害する、目に見えない、未知の一族がある、とあなたは考えられた。それは当たっていましたが、それだけでは、まだ不充分だった。謎は完全でなかった。つまり、わたしが事件の解釈と呼ぶものだけでなく、事件の背景そのもの、事件を構成する各部分、事件を組みたてている道具だてのひとつひとつを解きほぐしてはじめて謎は

もある。こちらへきて、きみが逃げ出した窓をごらん」
その窓を通して、ジャンは庭を見せた。灌木の植込みがあり、隣人の目からかくすために、高い塀で囲まれていた。向こうのはしに、すたれた、小さな、あずまや風の建物がたっていて、塀が一段と低くなり、アルレットがあけることのできた、小さな通用門がうがたれていた。
「ベシゥー」とデンヌリは命令した。「ファジュローをここへ連れてきてくれ、きみの自動車を玄関前まで入れて、それから、刑事たちは待たせておいたほうがいい。いまに連中を必要とするだろう」
ベシゥーは急いで出て行った。正門の扉はユルフェ町のと同じ軋り音をたてた。自動車が内庭にはいると、同じような地響がした。
また二階にひきかえそうとして、ベシゥーは部下のひとりに、早口でいった。
「きみは、ふたりの同僚を下の玄関に配置するんだ。そして、きみ自身は警視庁までひと走りして、応援の刑事を三人ほどよこすようにしてくれ。大至急だ。きみが連れてきて、その三人は、あそこに扉が見えている地下室におりる階段の上の段にすわらせておいてほしい。たぶん、その三人の必要はないだろう。だが用心するに越したことはない。そして、とくにいっておくが、警視庁ではひと言も説明してはならん。一網打尽の手柄は全部、われわれのためにとっておくのだ。わかったね」
アントワヌ・ファジュローは肱掛椅子の上におかれた。デンヌリは扉をしめた。
要求した二十分の余裕は、そのときはたいして超過しているはずはなかった。そして、じっさ

「思い出した」といった。「きみは変装しているが、じつはリュパンだってことを、ぼくが見破ったために腹を立てたのだ」

デンヌリは情けなさそうなようすをした。

「なんだ。きみはまだ、そんなことをいっているのか。きみはたった十分間しか眠っていなかったが、そのあいだに、事態はすっかりかわってしまった。リュパンとか、バーネットとか、まったく古い話さ。ここにいる誰も、そんなばかげた話には、もはや興味はないよ」

「では、なんに興味があるんだ？」アントワヌは、いままでは自分の友人だったが、いまでは、自分から視線を避けている人々の冷淡な顔をうかがいながらたずねた。

「なんに興味があるかというのか」ジャンが声をはげましていった。「きまってるじゃないか。きみの物語だよ。きみの物語とメラマールの物語だけだ。このふたつは、じっさいは、ひとつなんだものね」

「ひとつだと？」

「そりゃそうさ。たぶん、きみも聞いておけば、なにかの役に立つだろう。だって、きみは、その一部を知っているだけで、全体のことは知らないものね」

ふたりのあいだに、こうした言葉がかわされているあいだ、一座のひとびとは、めいめい、デンヌリから要求された、だんまりと相槌役をつとめていた。みんな共犯者になって、誰ひとりとして、ユルフェ町の客間から出たようなようすはしていなかった。多少の疑いが、アントワヌ・ファジュローの心に忍びこんだとしても、ジルベルトとその兄を見ただけで、その屋敷にいるの

説明できるのです。アルレットとレジーヌは、あなたのうちの客間にある品物を現実に見た。しかしながら、その目が見たのは、じっさいは、ここにある品物だったという事実を、じっくりとよく考えねばなりません」

デンヌリは言葉をきり、すべてが、自分の望みどおりになっているかどうかを確かめるためかのように、あたりを見まわした。そして、この緊張した空気のなかで、一同がいやおうなしに、一定の精神状態におかれているさなかで、アントワヌ・ファジュローはしだいに、その自失状態から正気づいていった。クロロフォルムの麻酔は軽微だった。アントワヌは急速に、すべての意識を、少なくとも、なにごとが起こったかを思い返してみるに充分な意識をとりもどした。拳骨の一撃をくらったことを思い出した。しかし、その瞬間以後のことはまっくら闇で、記憶になかった。そのあとあったことは何ひとつ弁別できず、自分が眠っていたことも想像できなかった。

ファジュローは、まるで夢でも見ているように、ぽつりぽつりといった。

「どうしたんだろう。ぼくはひどく疲れたような気がする。だいぶ時間がたったのだろう、あれから……」

「なあに、そんなことはない」とデンヌリが笑いながら答えた。「十分くらいだ。それ以上ではない。しかし、われわれも、いささかあきれかけていたところだ。そうだろう、手痛い拳骨を一発くらって、十分間もリングのうえで気絶している拳闘選手なんてめったにないものね。勘弁してくれ。わたしも、あんなにきつく打とうとは思わなかったんだ」

アントワヌは怒りに燃える一瞥を、デンヌリに投げつけた。

「あなたがたの家族の歴史を、少しばかり昔にさかのぼらねばならぬのをお許しねがいたい。なにぶん、悪の根源は、あなたがたがお考えになっているよりも、はるかに遠いのです。そして、あなたがたは、ふたりの無実な先祖が悲劇的な死をとげられた、ふたつの日付にこだわっていられるが、そのふたつの日付は、十八世紀も四分の三をすぎたころ、ということは、あなたがたの邸宅が建てられてすでに、そうですね、二十五年もたった時代ということになりますね、そのころ起こった、いささか感傷的な小さな恋愛事件によって決定されたものであることを、あなたたちはご存じなかった」

「そうです」と伯爵は認めた。「家の正面の石のひとつに、一七五〇年という日付がきざんであります」

「ところが、一七七二年に、あなたの先祖のフランソワ・ド・メラマールというひと、つまり、将軍で大使だったかたの父親で、監房で亡くなられたかたの祖父に当たるかたが、模様がえをされて、現在見られるとおりにされたのでしたね」

「そうです。そのときの仕事の勘定書は全部、いまもわたしが持っています」

「フランソワ・ド・メラマールというかたは、当時、富裕な財政家の娘で、たいへんに美しいアンリエットという婦人と結婚されたばかりのときで、その夫人を熱愛し、夫人からも深く愛され、夫人にふさわしい、りっぱな環境を与えようと思い立たれた。そこで、金を使われたというわけですが、それかといって、むだな浪費をされたのではなく、見識をもって、一流の芸術家たちをお雇いになった。フランソワとやさしいアンリエットは、そのひとは夫人をいつもそう呼んでお

は確かだと思いこむのに充分だったろう。

「それでは、さっそく話したまえ」とファジュローはいった。「きみが見て、解釈した、ぼくの物語なるものを拝聴したいものだよ。そのあとは、ぼくの番だ」

「わたしの物語をするのか」

「そうだ」

「きみがポケットに持っている証拠書類にもとづいてか」

「そうだ」

「そんなものは、もうないよ」

アントワヌは紙幣挾みを探した。そして歯ぎりして呪い声をはいた。「ちきしょう、盗んだな」

「さっきもいったとおり、時間がなくて、わたしのことなんか構っておれない。問題はきみだけだ。それでたくさんだ。さあ、謹聴しろ」

アントワヌは自制した。腕を組み、アルレットを見ないように顔をそむけて、どこ吹く風かといった、軽蔑したような態度をよそおった。

その瞬間から、デンヌリにとっては、アントワヌはもはや存在しないかのようだった。話しかけたのはジルベルトと、その兄に向かってだった。メラマール家の秘密を、その全体にわたって詳細に説明するときがきた。デンヌリは不必要な文句を並べることなく、正確な言葉で、事実を解釈して仮説を立てるというようなやりかたではなく、議論の余地のない記録に基づいて、歴史を述べるように、その話をすすめた。

そういうわけで、伯爵は、当時はユルフェ町から見ればパリの反対がわの場末にあり、金持のブルジョワや、大貴族が競って別荘をたてていた昔の沼沢地に、あらゆる点で、ユルフェ町の邸宅そっくりそのままの邸宅を建て、自分の邸宅の調度とそっくり同じ調度で飾りつけをしたのです。この貴族の気紛れ仕事は、誰にも見つからないように、外部をちがえてありました。しかし、一歩フォリ・ヴァルネリ（狂恋のヴァルネリの意）の、伯爵は新しい住居をそう呼んでいたのですが、フォリ・ヴァルネリの正面内庭に足を踏み入れると、自分が思いどおりにととのえた環境のなかで、生活がふたたび始まる思いをすることができた。扉まで同じ音をたてて閉まったのです。

内庭にはいると、同じ産地の石畳を足に感じ、同じ段数の玄関の石段があり、玄関の間は同じ石畳、各部屋には、同じ家具、同じ品物がおいてある。その趣味、その習慣に反するものは、もはや、なにひとつない。伯爵はふたたび、自分の屋敷にいると同じ気分になれる。同じようにして時をすごす。分類し、目録をつくり、明細表を作成する仕事をつづけるのです。その偏執ぶりは徹底したもので、どんなつまらない品物でもすぐ、どこそこにあるとわかり、いつもの場所にないと我慢ができなかった。

洗練された趣味、鋭敏な官能の愉悦、しかし、ああ、それが伯爵に破滅をもたらし、数世代にわたって一族の運命を悲劇的なものにしたのです。フランソワ・ド・メラマールの道楽の話は口から口へつたえられ、しだいにサロンや閨房を流れはじめました。みんな、その噂をするようになった。マルモンテルや、ガリアニ神父、俳優のフルリ（三者とも十八世紀中葉のひと）は、その回想録や書簡のなかで、それとはなしに、伯爵の逸話のことをほのめかしています。あげくのはて、それまでフ

られたのですが、どちらもたいへんに幸福だった。若い夫には、自分の妻より美しい女はどこにもいないように思われた。屋敷の内部を飾るために、自分が選び、または注文した美術品や調度類にまさる趣味、雅致をそなえたものは、どこにもないように思われた。そして、それを並べたり目録を作ったりして毎日をすごしていられた。

ところが、その平穏な、うちとけた、楽しい生活は、子供の教育に没頭されていた伯爵夫人のほうには、いつまでもつづいたとしても、やがて、フランソワ・ド・メラマールのがわでは、いくぶん掻き乱されるようになった。運悪く、伯爵は舞台女優のラ・ヴァルネリという女に惚れこまれたのです。その女は、まだ若くて、かわいらしくて、才走っていて、女優としての才能はきわめてわずかだったけれど、たいへん大きな野心を持っていた。外見上は、なんの変化もなかった。フランソワ・ド・メラマールは、妻にたいして全幅の愛情と尊敬を持ちつづけ、よくいっていたように、その生活の八分の七を妻のために捧げていた。しかし、毎朝十時から午後一時まで散歩するとか、有名な画家のアトリエを訪ねるとかいった口実で、愛人のところへ昼食に出かけていたのです。そしてどこまでも用心していたので、やさしいアンリエットは、そんなことはなにも知らなかったのです。

浮気な夫の満足心を損うことが、ひとつだけあった。それはフォーブル・サン・ジェルマンのまんなかにあるユルフェ町のなつかしい屋敷と、愛玩する骨董品からはなれて、なにひとつ目を楽しませてくれるもののない、下品な家にすわっていなくてはならないことでした。妻にたいして不貞を働くことは後悔しないのに、住居にたいして不実であることは苦しくてたまらなかった。

亡命の決心をしかねていたメラマール伯爵を密告し、熱月（革命暦十一月）の少し前に、断頭台に送り、やさしいアンリエットも運命をともにしました」
デンヌリは言葉を切った。一同は、この珍しい物語に熱心に耳を傾けてはいたが、ただひとりファジュローは、てんで無関心だった。メラマール伯爵が口出しした。
「その祖先の私生活の話は、わたしどもには伝わっていません。しかし、口伝えで、じっさい下っ端女優のヴァルネリという女が曾祖父を、その妻といっしょに密告したことは知っていました。そのほかのことは、すべてあの騒ぎでわからなくなってしまい、わたしの家の古文書には、勘定書とか、詳細な目録しか伝わっていません」
「しかし、その秘密は」とデンヌリはまた話しはじめた。「マルタンの妻となった女の記憶のなかに生きていたのです。未亡人になって（というのは、フーキエ・タンヴィルの友人だった男は、やがて、今度は自分が断頭台にのぼったからです）ラ・ヴァルネリは、元のフォリ・ヴァルネリに居をかまえて、結婚によって生まれたひとり息子といっしょにすっかり引き籠ったきりの生活をおくり、息子にメラマールの名前にたいする憎悪心を植えつけたのです。フランソワとその妻が死んだだけでは、ラ・ヴァルネリは飽きたらず、メラマール家の長男のジュール・ド・メラマールが、ナポレオンの軍隊にはいり、のちには王政復古時代、重要な外交官の地位を得たのが、この女にとっては怒りと恨みを新たにする原因となりました。その破滅をはかることに執心して、一生隙をうかがっていたところ、ジュール・ド・メラマールは功なり名遂げて、再びユルフェ町の屋敷を開いたので、ラ・ヴァルネリは腹黒い陰謀を企て、ジュールは監獄にはいらねばならな

ランソワが巧みにかくしおおせてきていたラ・ヴァルネリの耳にも、その話がはいったのです。

それまで恋人にたいして絶対の支配力を持っていると信じていたラ・ヴァルネリは、ひどく傷つけられて、自分と伯爵夫人のどちらかというのではなく、ふたつの屋敷のどちらかを選べと迫りました。フランソワはためらうことなく、ユルフェ町の屋敷を選び、グリム（十八世紀の文人）がわれわれに伝えている、あのすてきな手紙を愛人に書き送ったのです。

《わたしは十年としを取った、美しいフロランドよ、きみもまたそうだ。すると、わたしたちはあわせて二十年の関係をもったことになる。二十年もたてば、おたがいにお辞儀をして立ち去るほうが好ましいではないか》

そういうわけで、フランソワはラ・ヴァルネリにお辞儀をして立ち去り、ヴィエイユ・デュ・マレ町の屋敷は女に残し、愛玩した骨董品には別れを告げたのです。自分の屋敷にかえれば、同じものがまた見られるので、それほどなごりおしくもなかった。そして、今度はアンリエットひとりきりに惜しみない愛情をささげました。

ラ・ヴァルネリは狂気のように怒った。ある日など、ユルフェ町の屋敷に押し掛けていったが、幸いにもアンリエットは留守で、大暴れにあばれるので、フランソワは、力まかせに突きとばし、悪口といっしょに外に追い出してしまった。

そのとき以来、ラ・ヴァルネリは、もはや復讐（ふくしゅう）することしか考えなかった。三年後、革命が起こりました。器量も醜くなり、気もすさんでいたけれど、まだ金持だったラ・ヴァルネリは、革命にひと役買い、フーキエ・タンヴィル（恐怖時代の検事で、後、断頭台にのぼる）の取巻きのマルタンという男と結婚し、

デンヌリは話しつづけた。「そういうわけで、ただふたりの人間だけが、十八世紀の最後の二十五年を二十世紀の最初の年々に結びつけているのです。まるまる一世紀をへだてて、フランソワ・ド・メラマールの愛人は市会議員ルクルスーの殺害犯人に手をかしたのです。ラ・ヴァルネリが、その犯人に命令したのです。恨みを吹きこんだのです。

　仕事はふたたび、新しい推進力を得たのです。しかし、ドミニック・マルタンが持っている遺伝的、本能的憎悪心には、新しいひとつの力が結びついています。それは現在までは働いていなかったもので、金銭的な欲求です。侍従武官アルフォンス・ド・メラマールにたいして加えられた一撃には、横領と詐欺とがあわさっていました。しかし、それによって得た利益は祖母からの遺産と同様、いっさいがっさい、ドミニックは、たちまちのうちに浪費してしまった。そこで、やりくり算段と泥棒で暮らしていた。ただユルフェ町のこの屋敷は閉鎖されて、固く門がとざされ、メラマール家は、一世代以上も地方に疎開していたので、ドミニックは、もはやこの屋敷が提供してくれるアリバイを利用するような企てをするわけにゆかず、大規模な事件にはなにひとつ手だしができなかったばかりでなく、先祖伝来の敵を攻撃することは、なおさらのこと不可能でした。

　その当時、ドミニックがどんな生活をしていたか、また、その指揮下にはいった一味のものがやってのけた、たいしてみいりもない悪行の詳細については、わたしは確かなことは知りません。ドミニックは、そういう仕事をはじめた当初に、たいへん正直な女と結婚して、その女は悲嘆のあげく死んでしまったらしく、三人の娘があとにのこりました。ヴィクトリーヌ、ロランス、フ

かった。
ジュール・ド・メラマールは積み重なる、恐ろしい不利な証拠に打ち負かされてしまった。自分では犯さなかったが、自分の屋敷の客間を舞台にして行なわれた犯罪のために告発されたのです。客間も自宅のもの、ならべてあった家具も自分のもの、かかっていた壁掛けも自分のものと認定されたのです。こうして、ラ・ヴァルネリは、二度、復讐したのです。
その二十年後、その女は、ほとんど百歳近くなってから死にました。息子は母親に先立って墓にはいっていたけれど、ドミニック・マルタンという十五歳になる孫が残っていた。ラ・ヴァルネリは、その孫に憎悪心を植えつけ、犯罪人に育てあげたのです。ドミニックは、同じものがふたつあるメラマール家の屋敷の秘密を利用して、どんなことができるかを、ラ・ヴァルネリを通じて知ったのです。そして、今度は自分が、巧妙きわまりないからくりを編み出して、ナポレオン三世の侍従武官アルフォンス・ド・メラマールを自殺させたのです。アルフォンスは、ユルフェ町の屋敷の客間としか考えられない客間で、ふたりの女を殺害したかどで告発されました。このドミニック・マルタンが、現在、当局で捜査中の不届ききわまる老人で、ロランス・マルタンの父親なのです。そして、真の惨劇がはじまるのです」
デンヌリの表現をかりると、真の惨劇がはじまろうとしていた。いままでのところは、前置きであり、準備にすぎなかった。いまや、すべての物語が伝説の様相をおびる遠い昔の時代を出て、今日の現実にはいろうとしていた。登場人物は、なお現存していた。彼らが行なった悪事は、直接の傷口を、ひとびとに感じさせていた。

ファジュローです≫」

自分の名前が呼ばれたので、アントワヌ・ファジュローは、それまで自分の家族の陰惨な物語に、だんだん興味がわいてくるのをかくしかねているていだったが、かるく、顔を振りむけて、肩をすぼめ、あざけるようにいった。

「そのよたばなしは、いったいなにかね。どこでそんなけしからん話を仕入れてきた。ラ・ヴァルネリだと。ヴィエイユ・デュ・マレ町の屋敷だと……そんな、ばからしいことは聞いたこともないね。……まったく、きみは発明の才があるよ」

デンヌリはアントワヌの差出口にはとり合わなかった。整然と、話をつづけた。

「アントワヌ・ファジュローはフランスにきましたが、過去については、ひとが知っていて話してくれるだけのことしか知っていなかった。つまり、たいしたことは知っていなかった。りっぱな若者で、聡明で、母親を愛し、母親が教えこんでくれた道義に従って暮らすことしか求めていなかった。祖父や伯母たちは、アントワヌに、正面からぶっつかることを用心して避けるようにした。時間をかけることにし、そのうちにまもなく、この青年が、天分はあるけれど、ものごとに無頓着で怠けもので、放蕩の傾向が強いことを見破った。放蕩心については、祖父や伯母たちは、それをたしなめるどころか、かえって奨励するようにした。≪愉快に暮らすことだ、おまえさん。世間に出て、ためになる知り合いをたくさん作るんだ。金を使うんだね。なくなれば、またどこかで見つかる≫といいきかせたのです。アントワヌは金を使い、遊びまわり、借金を作り、しだいに知らないうちに身を持ちくずすようになってしまった。そして、ある日とつぜんに、伯

エリシテという、その三人の娘は大きくなり、ラ・ヴァルネリの屋敷で、どうにかこうにか暮らしを立てていました。ヴィクトリーヌとロランスは、はやくから父親のくらやみ仕事の手伝いをしていたのです。しかしフェリシテは、母親の誠実な性質をうけつぎ、父親のいうことをきくよりも家出したほうがましだと考え、ファジュローという、律儀な男と結婚し、それについてアメリカにわたりました。

それから、十五年ほどたちました。仕事はなかなかうまくゆかない。それでも、ドミニックとふたりの娘は、なんとしたって、先祖の唯一の遺産であるその古い屋敷を売ることを承知しなかった。譲渡はおろか、抵当に入れることも欲しなかったのです。屋敷は自由にしておいて、そこに住み、最初の機会に利用できるようにしておかねばならない。そうして、そう望んだのも当然でした。いまひとつの屋敷、ユルフェ町の屋敷は、また門が開かれた。アドリアン・ド・メラマール伯爵とその妹のジルベルトは過去のおそろしい教訓を忘れて、パリにきて住むようになった。ふたりがその屋敷に住んでいるのを利用して、ジュールとアルフォンスにたいして成功したことを、このふたりにたいして、ふたたび試みられないものだろうか。

ちょうど、そういったときに、運命の手が働きかけたのです。アメリカに移住した、ドミニックの娘のひとりフェリシテは、その夫と同じように、ブエノス・アイレスで死んでしまった。ふたりの結婚から、息子がひとり生まれていた。十七歳になっていた。貧乏だった。どうすればいいか。その息子はパリを知りたい欲望にとりつかれた。そして、ある日、ぶらりと祖父や伯母のうちを訪ねて行った。扉が半分ひらく、≪なんの用ですか。どなたですか≫――≪アントワヌ・

ファジュローにとっては、なによりもまず、それは先の利益を見越しての仕事だった。そして、目的を達するまで頑張り、金に不自由がないように見せかけ、いつも財布をいっぱいにしていなくてはならなかったので、伯母を説き、ドミニック老人がかんかんになって怒ったにもかかわらず、女優ヴァルネリの家財道具の一部を売らせたのです。そして、一年のあいだ、こっそりと伯爵夫人のご機嫌とりをつづけた。その苦労はだめになってしまった。当時、伯爵は、ファジュローを少しも信用していなかった。メラマール夫人は、ある日、ファジュローがあまり大胆なふるまいをしたので、召使を呼んで、門のそとに追い出してしまわれた。

これでファジュローの夢は崩れてしまったわけです。またはじめから出直さなくてはならない、しかも、どんな条件のもとで。どうやって、貧困から脱けだせるか。屈辱と怨恨が、ファジュローのうちにのこっていた母親の影響の残りを粉砕してしまって、その裂け目から、ヴァルネリの血統のあらゆる悪い本能がはいりこんできた。ファジュローは仕返しをすることを誓った。時期の到来を待つあいだ、ファジュローはいろんな職業に手をだし、旅歩きをし、詐欺をはたらき、失敗をくりかえし、財布をからっぽにしてパリにでてくると、祖父とおそろしい大喧嘩をしてまで、家具を売りとばしていた。シャピュイの刻印のある、それらの家具が売られて外国に送り出されたことは、ベシゥーとわたしとが、ある骨董品店で、その証拠を見つけたじゃないですか。

屋敷はだんだんからっぽになってゆきました。そんなことはかまわない。肝心なのは、客間や、階段の外見や、玄関の間や、内庭を保存して、手をつけないようにしておくことである。おお、その点になると、マルタン姉妹は、じつに強硬だった。ふたつの客間の相似性は絶対に完全でな

母たちはアントワヌに向かって、破産した、働かねばならないと告げたのです。ふたりの姉妹の姉のほうのヴィクトリーヌは、これは働いているではないか。サン・ドニ町で古道具屋をしているではないか。

アントワヌは気乗りがしなかった。働く。二十四歳にもなって、もっとましな、することはないものか。自分のように器用で、人好きがして、美貌の青年が、そして、人生が、厄介な取越し苦労をさらりと洗い流してくれた人間が。そこで、ふたりの姉妹は、アントワヌに過去の話をしてきかせ、フランソワ・ド・メラマールとラ・ヴァルネリの物語をし、ふたつの似通った屋敷の秘密を明かし、人殺しのことには触れないで、なにか儲け仕事ができるかもしれないことを教えたのです。ふた月ほどのち、アントワヌは巧みに手をまわして、メラマール伯爵夫人とその兄のアドリアンに自己紹介をし、うまく立ちまわって、ユルフェ町の屋敷に出入りするようになりました。これで、仕事はすっかり見つかったわけです。伯爵夫人は離婚したばかりのときでした。美しくて、金持だった。伯爵夫人と結婚しようと思いたったのです」

論告がそこまで達すると、ファジュローは激しい口調で抗議した。

「ぼくはきみのばかげた中傷を反駁しようとは思わない。それは自分を卑しくすることだ。しかし、ぼくにはとうてい看過できないことがひとつある。それは、ぼくのジルベルト・ド・メラマールにたいする感情を、きみが曲解していることだ」

「わたしはそんなことはないとはいわない」ジャンは、直接には答えないで、相手に譲歩した。「若いファジュローは、場合によっては、少しくロマンチックで、誠実なときもある。しかし、

頭脳のなかで、大胆不敵な襲撃計画が芽生えた。ダイヤモンドのコルスレを盗もうというのです。

まったく、すばらしい。アントワヌ・ファジュローはその計画に夢中になった。二十四時間のうちに全部の準備をととのえた。その晩になると、ファジュローは舞台脇に忍びこみ、造花の花束に火をつけて、レジーヌ・オブリーをかどわかして、盗んだ自動車に放りこんだ。まったく手練の早業で、あとは自動車のなかで、コルスレを強奪すれば、それでいいはずだった。しかし、ロランス・マルタンは、それ以上のことを望んだ、ロランスのほうは。ラ・ヴァルネリの曽孫の女は忘れてはいなかった。この冒険に、祖先伝来の意味をそっくり与えるために、強奪はヴィエイユ・デュ・マレの客間で、メラマール家のものと同じ客間で行なうことを望んだのです。じっさい、事件が発覚して捜査の手がユルフェ町に伸び、ジュールとアルフォンスのふたりのメラマール家の先祖にたいして成功したことが、現在の伯爵にたいしてもくりかえされる絶好の機会ではないか。

そういうわけで、現実の盗みはラ・ヴァルネリの客間で行なわれた。伯爵夫人のように、ロランスは、小さな三つの真珠を三角形にならべた指輪をさした手をみせびらかした。伯爵夫人のように、黒いびろうどを飾ったプラム色のローブを着ていた。アントワヌ・ファジュローは明るい色のゲートルをつけていた。……二時間ののち、ロランス・マルタンはメラマール邸に忍びこみ、銀のラメのチュニックを書棚の中の一冊にかくし、数週間後、わたしが連れて行ったベシュー部長によってそれが発見されて、抜きさしならぬ証拠となった。伯爵は逮捕された。妹さんは逃げ出した。三度、メラマール家はその名誉を傷つけられたのです。スキャンダルであり、刑務所で

くてはならない。でないと、罠を仕掛けたとき見破られる心配がある。姉妹はフランソワ・ド・メラマールの明細書と目録の写しを持っていました。ふたりは、ただひとつの品物でも欠けることを承知しなかった。

ロランス・マルタンが、とくに熱心だった。ロランスは父親とラ・ヴァルネリから譲られたユルフェ町の屋敷の鍵、つまりメラマール邸の鍵を持っていました。数回も夜、ロランスはメラマール邸に忍びこんだのです。そういうわけで、メラマール氏は、ある日、二、三の小さな品物が紛失しているのに気づかれた。ロランスがやってきたのです。ロランスは、自分の同じ呼鈴の紐が半分なくなっていたので、メラマール邸の客間の呼鈴の紐を切りとった。蠟燭さしと簞笥のはめこみ錠を盗んだ。自分のうちの客間の同じものが紛失していたからです。そのほかの品物も同じことです。なんの値打もない獲物。本質的価値の見地からすれば、たしかにそうにちがいない。しかし、姉のヴィクトリーヌというものがいる。古道具屋であるこの女にとっては、あらゆるものに価値がある。ヴィクトリースは、その品物の一部を蚤の市に流し、偶然が、わたしを導いて蚤の市に行かせ、また、捜査をつづけているうちに、別の偶然が、わたしをヴィクトリーヌの店に連れてゆき、そこでファジュローを見かけることになった。

そのころには、事態はなにもかも悪化していた。マルタン姉妹のうちには一スウもなくなっていた。腹一杯ものも食べられない始末だった。売るものはほとんどなにもなく、残っているもののそばでは、祖父が目を光らせている。いったいどうなることか。そこに、ちょうどオペラ劇場で、大宣伝をして、慈善興行が行なわれることになった。ロランス・マルタンの発明の才がある

かしながら、ぼくはファジュロー君の誠実そうな風采に、一度もごまかされたことはなかった。伯母のヴィクトリーヌの店で会った最初から、ぼくはこの男をわれわれの敵だと考え、あの夜、ベシューといっしょに壁掛けのうしろにかくれてその話をきいたとき、わたしの疑惑は確実性となった。ファジュロー君はひとつの役割を演じていた。今だから白状するが、まさにわたしがこの男に会ったそもそもの最初の日から、その行動は、わたしを面食わせた。というのは、とたんに、この敵が当人自身と矛盾しており、わたしがこの男の計画だと考えたものと矛盾しているように思われだしたのです。見ていると、メラマール兄妹を攻撃するかわりに弁護し、ある意味では陣営を変えてしまったのですものね。すると、なにごとがあったのだろうか。おお。それは、じつに簡単なことだった。アルレットが、わたしたちの美しいやさしいアルレットが、この男の生活にはいりこんできていたのです」

アントワヌは笑いながら、肩をすぼめた。

「いよいよもって滑稽だ。おい、デンヌリ、アルレットにぼくの性質をかえることができたのかね。そして、ぼくがきみに先立って追跡し、追い詰めていた悪党たちの一味となるように、ぼくをすることができたのかね」

デンヌリは答えた。

「アルレットは、すでに少し以前から、この男の生活にはいりこんでいたのです。覚えておいででしょうが、メラマール伯爵、あなたは、かつてお持ちになっていて、いまは亡くなった娘さんと、アルレットがじつによく似ているのにひかされて、数回、そのあとを尾けられた。ところで、

あり、やがては自殺、そして、ラ・ヴァルネリの子孫たちは、罰しられないですむ」
誰もジャンの説明に言葉を挟むものはいなかった。デンヌリは、いつもよりさらに淡々とした口調で、手で言葉の拍子をとりながら話しつづけ、一同は、ひとこまひとこまが論理的に明確に展開されてゆく、陰惨な事件をもう一度、身をもって生きる思いがしていた。
アントワヌは笑い出した。その笑いは、かなり自然なひびきを持っていた。
「たいへんにおもしろい。筋がよく通っている。ほんものの新聞小説で、山場もあるし、場面の転換もある。敬意を表するよ、デンヌリ。しかし、不幸にしてぼくに関するかぎりでは、マルタン一家とのいわゆる血族関係のことはいうに及ばず、きみが話している、その第二の屋敷についても、ぼくはぜんぜん知らず、きみの空想のなかに存在するだけで、残念だが、きみがぼくに割り当てた役割は、ぼくの真の役割とはまったくちがっている。ぼくは誰もかどわかしたことはないし、ダイヤモンドのコルスレなんか盗んだこともない。ぼくの友人のメラマール兄妹や、またアルレット、ベシューや、きみ自身が、ぼくの行為について目にし得ることは、これすべて誠実、利害超越、援助、友情以外のなにものでもない。デンヌリ、きみは見当ちがいをしているよ」
ある面においては正当な抗議で、伯爵とその妹の胸を打たないではおかなかった。ファジュローの外部的行動は、いつでも非難の余地はなかった。それにまた、ファジュローが第二の屋敷の存在を知らないということもあり得ることだった。デンヌリはひるむことなく、相変わらず間接的に答えた。
「ひとの顔つきには騙されることがあり、ものごし、態度は、判断をあやまらす場合がある。し

ルレットの同情を勝ち得、アルレットはよろこんで過ちを正すことを承知したのです。アントワヌはアルレットと協力し、あなたの妹さんの感謝をうけ、妹さんを説いて身柄を当局に引き渡すことを同意させ、弁護計画をさずけて、あなたとともに妹さんを救い出しました。一方、とまどったわたしは、考え直すのに時間を費やし、その間、アントワスはあなたの客間で、まるで自分のうちのように振舞っていたのです。アントワヌは守護神のようにたてまつられていた。アルレットの気高い夢を実現させてやるために何百万フランもの資金を出そうと申し出た。(それくらいの金は、アントワヌにとってはなんでもない)そして、深淵から助け出してやった人たちの後ろ立てで、アルレットから、結婚の約束をとりつけたのです」

12　アルセーヌ・リュパン

アントワヌはそばによってきていた。その行動は、ただひとつの行為だに、闇に包まれたままに残されることなく、ことごとく容赦なく、あかるみにさらけだされ、その皮肉な、無関心な態度は失われかけていた。それにまた、忘れてならないのは、アントワヌ・ファジュローは、クロロフォルムで、肉体的消耗状態におかれ、神経組織が攪乱されていて、なによりもまず、戦っている相手の真の力も、また自分について、どの程度調べあげているかも知らなかったことである。ファジュローはジャンの前に棒立ちになって、やり場のない怒りに震えながら、自分よりも強力

アントワヌは、直接、自身で、または伯母を使って、あなたを監視していたので、あなたが尾けていられたアルレットに気付き、遠くからそのあとを追って住居まで行き、くらがりのなかをうろつき、ある晩など、アルレットが外出したときに、ひきとめようとまでした。最初の好奇心は、もっと切実な感情となり、会うたびごとに、それが募っていった。アントワヌ君は、そのロマンチックな夢を、自分の一八仕事にまじえることのできる感傷的な青年であることを忘れないでもらいましょう。しかし、同時に、この恋する青年は、中途半端でとどまっているのを好まなかった。レジーヌの誘拐で大胆になったアントワヌは、もはや、ためらうことはしなかった。ロランス・マルタンと相談し、ロランスはその行為を危険だと考えたけれど、ついにアルレットを誘拐したのです。

アントワヌはこうしてアルレットを閉じこめておき、自分の手許において、いつかアルレットが疲れてくるのを利用するつもりだったのです。その希望はあだになった。アルレットは脱出してしまった。そのとき、アントワヌは、ほんとうに絶望を感じた。そうです、数日間、真実に悩んでいました。愛されるようになりたいと思った。そして、ある日とつぜん、すべての計画をくつがえして、アルレットとその母親に会いに行ったのです。メラマール家の古い友人という振れこみだった。そして、伯爵と伯爵夫人は無実なのだと断言したのです。アルレットに、この無実を立証する手伝いをしてくれないかと求めたのです。

おわかりでしょう、メラマール伯爵、アントワヌが、この新しい演出によってどんな利益をひきだそうとしたか、そして、どのように、それをやってのけたか。アントワヌは一挙にして、ア

だ。連中にとっては神をけがす行為とも思われる破壊を甘受するくらいなら、どんなことでもやってのけられる。そこでロランス・マルタンは、かなりいかがわしい評判のあった市会議員と交渉を重ねた。罠におちて、ロランスは逃げだし、ドミニック老人はルクルスー氏をピストルの一撃で倒した」

「そんなことは、なにもぼくの知ったことではないではないか」アントワヌは抗議した。「あの殺人事件をぼくに教えたのは、きみだ」

「そうかもしれない。しかし、殺人犯人はきみの祖父であり、ロランス・マルタンはその共犯者なのだ。そして、当日その足ですぐ、彼らはきみが愛し、彼らが憎悪している女性の攻撃に向かった。じっさい、きみがアルレットを知らず、祖父や伯母たちの意志に反して結婚しようとしなかったならば、きみは一家の利害を裏切るようなことはなかったろう。アルレットには、とんでもない災難だった。誰かが邪魔になると、きみたちは、その人間を抹殺してしまうのだ。人里はなれたガレージにおびきだされて、アルレットは、きみが間に合うように来なかったなら、彼らがつけた火によって、生きながら焼き殺されるところだった」

「すると、アルレットの友人ということになるではないか」ファジュローはわめいた。「あの悪党たちのしんからの敵ということになるではないか」

「そうだ。しかし、その悪党たちは、きみの家族なのだ」

「嘘だ」

「きみの家族だ。きみは、あの日の晩、連中とひと悶着おこした。その証拠をわたしは握ってい

な力に圧倒されて、最後まで聞いているほかはなく、憤りをこめて口のなかでもぐもぐといっていた。
「嘘だ。きみはあさましい男だというほかはない。嫉妬からして、ぼくに噛みついているのだ」
「そうかもしれない」デンヌリは、いきなりファジュローのほうへ向き直り、いままで避けていた、直接の決闘をうけて立ちながら叫んだ。「そうかもしれない。わたしもまたアルレットを愛しているのだから。しかし、きみは、わたしを敵としてしか見てこなかった。いまになると、きみの真の敵は、きみの昔の仲間なのだ。敵はきみの祖父であり、伯母たちなのだ。彼らはどこまでも過去に忠実で、断固としてその立場をかえないのに、きみはといえば、きみは再生しようとした」
「そんな仲間など、ぼくは知らない」とアントワヌ・ファジュローは叫んだ。「といって悪ければ、敵としてしか知らない。あの連中を追っ払うために、ぼくは戦ってきたのだ」
「きみは、連中が邪魔になるから、わが身があやうくなるのが心配だから、連中を無力にしたいから戦ったのだ。しかし、彼らのような悪党たちは、というよりもむしろ偏執狂たちは、なにものをもってしても、武器をすてさせることはできなかった。そこへ、マレと呼ばれている地区の通りのいくつかを拡張する市の計画があり、ヴィエイユ・デュ・マレ町もその計画にふくまれていた。それが実施されれば、新しい通りはラ・ヴァルネリの屋敷を横断することになる。ところで、それはドミニックにも、その娘たちにも、とうてい容認できないことだった。その古い住居は断じて手を触れてはならないものである。それは彼らの肉体の肉であり、彼らの血管の血なの

ていたので、きみは七首のひと振りで、それを片付けてしまった」
アントワヌはよろめき、まっさおになった。あの恐ろしい瞬間のことを持ちだされて、動転してしまった。額からは汗がしたたっていた。
「それ以後は、きみには、世のなかになにもこわいものはないように思えた。みんなから好かれ、メラマール氏と夫人の相談相手となり、ヴァン・フーベンの友人で、ベシゥーの助言者となり、事態を意のままにあやつることができた。きみはどんな意図を持っていたか。まず過去から解放されて、ラ・ヴァルネリの屋敷の収用に応じてこれをとり壊してしまう。マルタン一家と完全に縁を切って、適当な機会を見て、応分の償いをしてやる。ユルフェ町の屋敷を買収する。そうして、ふたつの敵同士の家族を、きみの身をもって結合させ、悔いもなく恐怖もなく、この住居とこの調度を楽しもうというのだ。《髻玉の家》はもはや存在しないので、泥棒や詐欺の手段に使われることもない。それがきみの目的なのだ。
それには、ただひとつ障害があった、わたしという。きみは、わたしの敵意を知り、アルレットにたいするわたしの感情も承知していた。そこで、極度に慎重に、なにごとも運まかせにしておかないように警戒措置をとり、わたしをなんとかして罪に陥れようとした。それがきみの身の安全をはかる最善の方法ではないか。攻撃することはわが身を守ることになるではないか。そして、わざわざアルセーヌ・リュパンの名を紙切れに書いて、古道具屋の婆さんのポケットにすべりこませておいたように、きみは、この新しいバイオリンをひくことにした。アルセーヌ・リュパンすなわち、ジャン・デンヌリだ。そして、そのことを新聞で発表した。ベシゥーをわたし

る。その席で、きみは彼らの罪を責め、人殺しはいやだとわめきたてたが、そんなことは、なんのやくにもたたない。きみはアルレットの髪の毛一本にでも触れることを許さないといったが、そんなことは、なんのやくにもたたない。きみはどこまでも祖父と伯母たちの一味であることにかわりはない」

「追剝ぎの一味なんかじゃない」ファジュローは抗議をしたが、うける攻撃ごとにその陣地をゆずっていた。

「そうだとも。いっしょに悪事を働き、盗みをすれば一味だ」

「ぼくは盗みは働かない」

「きみはダイヤモンドを盗んだ。そのうえに、きみはそれをひとり占めにして、かくしてしまった。彼らが分捕品の分け前を要求したとき、それを断わった。それもまた、まるで、とつぜん発狂したようにきみたちがいがみ合うようになった原因だ。当局に追い詰められ、おびえあがった彼らは、きみが連中を司直の手に引き渡しかねないと信じて、屋敷をすてて、郊外に持っていた小さな住居に身をかくした。しかし、彼らはきみを押えた手をゆるめなかった。ダイヤモンドが欲しいのだ。そして、先祖代々の屋敷を救いたいのだ。連中はきみになんども手紙を書き、電話をかけてきた。ふた晩つづけて、きみたちはシャン・ド・マルスで会合した。話はまとまらない。きみは分け前を断わり、結婚をあきらめることを断わった。そこで、三人は、うむをいわせぬ論法を使うことにした。きみを殺そうとしたのだ。庭園のくらやみで死闘が展開された。けっきょく、若くて強いきみが勝利者となり、ヴィクトリーヌ・マルタンは、あまりにきみにしがみつい

それから、きみに助かる道を残しておいてやりたかったからだ」
「どんな？」
「ダイヤモンドをかえすのだ」
「だって、そんなものは、ぼくは持っていない」アントワヌ・ファジュローは憤りを爆発させて叫んだ。
「持っている。ロランス・マルタンは、そのことで、きみを責めている。きみはかくしている」
「どこへ」
「ラ・ヴァルネリの屋敷へ」
アントワヌは必死だった。「すると、きみは知っているのか、そのありもしない屋敷を。きみはその謎の、空想の住居を知っているのか」
「そりゃそうさ。ロランスが、報告を担当した市会議員を買収しようとしたとき、そして、その報告は、ある通りの拡張工事に関するものであることをわたしが知ったとき、その通りを心得ていたわたしには、前に内庭があり、うしろに庭園がある大きな屋敷を見つけだすのは、なんでもなかった」
「それでは、なぜきみは、その屋敷へ、われわれを連れてゆかないのだ。ぼくをとっちめて、かくされたダイヤモンドを要求するというのなら、なぜわれわれは、ラ・ヴァルネリの住居にいないのだ」
「その住居にいるよ」デンヌリは静かにいった。

にけしかけた。われわれふたりのうち、どちらが勝名乗りをあげるか。ふたりのうちどちらが先に相手を逮捕させるか。きみは公然と、わたしを挑発するほど勝利を確信している。いまはすでに時間の問題だ、分秒の問題だ。われわれはたがいに向かい合って、警察の目の前に立っている。ベシゥーはわれわれふたりのどちらかを選びさえすればいい。危険は切迫しており、わたしは、もののたとえにいうように、土俵にのぼり、きみに一発必中の拳骨をくらわす必要を感じた」

アントワヌ・ファジュローはぐるりを見まわし、つっかい棒を、同情を探した。しかし、伯爵もその妹も、ヴァン・フーベンも同じく、きびしい目で、アントワヌを観察していた。アルレットは放心のていで、ベシゥーは獲物をおさえた警官のてこでも動かぬようすをしていた。

ファジュローは、身のうちを寒いものが走ったが、とにかくも立ち直り、まだ、敵にはむかっていこうとした。

「きみには証拠があるか」

「やまとある。一週間以来、わたしはマルタン父娘を尾けまわし、その家探しをすることに成功した。わたしはロランスがきみに書いた手紙や、きみがロランスに書いた手紙を持っている。古道具屋の婆さんのヴィクトリーヌ・マルタンが書きとめた日記ともいうべき、心覚えの手帳も持っている。それにはラ・ヴァルネリの話、きみたち一家のみなのものの話が物語られている」

「それでは、なぜそれを、いまだに警察に差しださないのだ」アントワヌは指でベシゥーをさして、口ごもりながらいった。

「まず最初に、みんなの前で、きみの悪辣な恥多き行ないを、きみに認めさせたかったからだ。

「ここなのだよ。家は包囲されている。ベシゥーが、われわれといっしょに、むこうの屋敷からやってきた。部下のものが庭や地下室にひかえている。ここだよ、アントワヌ・ファジュロー。ドミニックやロランスがふたりとも、古い運命的な住居に執着して、ときおり帰ってくるのは、ここなのだ。きみは見たいかね、どうだ。あのふたりの逮捕に立ち会いたいのか」
「あのふたりに会うって？」
「そうさ。あのふたりが姿を現わすのを見れば、きみも、彼らが自分の屋敷に帰ってきたのであり、われわれがいるのは、ヴィエイユ・デュ・マレ町であって、ユルフェ町ではないことが納得されるだろう」
「それで、あのふたりを逮捕しようというのか」
「少なくとも」デンヌリはひやかした。「ベシゥーがいやがらないかぎりはね……」
暖炉の上の振子時計が、小さな、にぶい音で六時を打った。そして、デンヌリが告げた。
「六時だ。きみも知っているとおり、あのふたりは、時間にきちょうめんだ。わたしは、この前の晩、あのふたりが、かっきり六時に、うちのなかをひとまわり散歩する足音を聞いた。アントワヌ、窓からのぞいてみるがいい。ふたりは、いつでも庭園の奥からはいってくる。見たまえ」
アントワヌは、窓に近づき、われ知らず、チュール地のカーテンを通して外をながめた。ほかのものもまた、椅子からからだを乗りだして、じっとして、不安そうに、外を見ようとした。
と、無住の小さなあずまや風の建物のそばにある、前にアルレットが通って逃げた小門の扉がそっと押された。まず最初にドミニック、そのあとからロランス。

「なんだと?」
「教えてやるが、きみを眠らせて、メラマール氏や夫人といっしょにここに連れてくるには、少しばかりのクロロフォルムがあれば、それで充分だった」
「ここは?」
「そうさ、ラ・ヴァルネリのうちだ」
「だって、われわれはラ・ヴァルネリのうちにはいない。ユルフェ町にいる」
「われわれは、きみがレジーヌを剝ぎとり、アルレットを連れこんだ客間にいるんだよ」
「そんなことってあるものか……そんなことってあるものか」アントワヌは夢中になって、どもりながらいった。
「どうだい」デンヌリはからかった。「ラ・ヴァルネリの曾孫で、ドミニック・マルタンの孫のきみに、完全な錯覚を起こさせる必要があったんだ。きみはまんまと罠にかかったんだよ」
「そんなことってない。きみは嘘をついている。そんなことって、あり得ないことだ」ファジュローは言葉をつづけ、いろんな品物について、ありもしない差異を識別しようと努めていた。
ジャンは容赦なく先をつづけた。
「ここなんだよ、きみがマルタン一家と住んでいたのは。ここなのだ。屋敷全体、ほとんど、からっぽになっている。しかし、この部屋は調度がすっかり揃っている。階段と内庭は昔のままの面影をのこしている。ここがラ・ヴァルネリの屋敷なのだ」
「嘘だ、嘘だ」アントワヌは身もだえして、あえぎながらいった。

にまで苦しめてきた一族の代表者だった。それが、くらやみの過去から抜けだして、もう一度メラマール家のものを追い詰め、もう一度屈辱と自殺とに追いやるために、攻撃をかけてきているように思われた。

ジルベルトは椅子から滑り落ちて、膝をついた。伯爵は夢中になって、拳を握りしめていた。

「あなたにお願いしておきますが、動いちゃいけませんよ」とデンヌリはいった。「きみもだ、ファジュロー」

「あのふたりを見逃してやってくれ」ファジュローは懇願した。「監獄に入れられると、自殺する。なんどもそういっていた」

「それがどうした。いいかげん、悪事を働いてきたんじゃないか」

今では、一同は十五歩か、二十歩はなれて、正面からふたりを見ることができた。ふたりとも同じきびしい表情をしていたが、娘のほうが、父親よりももっと残忍そうで、いっそう強い印象を与えた。父親の角張った顔は、いっさいの人間味が剝ぎとられて、もはや年齢の想像もつかなくなっていた。

とつぜん、ふたりは立ちどまった。物音がしたのだろうか。なにかが、どこかで動いたのだろうか。それとも、本能的に危険を感じたのだろうか。

安堵して、ふたりは同時にまた歩きだした。

そして、いきなり一群の猟犬が、ふたりに襲いかかったようなものだった。三人の男がとびかかって、ふたりの咽喉と手首をひっつかみ、逃げだしたり、抵抗したりする身ぶりひとつするす

「ああ、おそろしいことだ……」アントワヌはささやくようにいった。「まるで悪い夢を見ているようだ」
「夢ではないよ」デンヌリがからかった。「現実だよ。マルタン氏とマルタン嬢とは、屋敷をひとまわりおひろいになる。ベシュー、気の毒だが、きみの部下たちをこの部屋の階下に配置してくれないか。知っているね。古い花鉢がおいてある広間だ。とくに、音をたてないようにしてほしい。少しでもやばいと感じたら、マルタン氏とマルタン嬢は、影のように消えてなくなるだろう。いっておくけれど、この屋敷にはからくりがしてある。庭園のかげに、秘密の出口がついていて、あの寂しい通りのほうへのび、隣の厩舎に出るようになっている。だからして、窓から十歩くらいのところまで近づくのを待たないといけない。そのとき、とびついて縛りあげ、広間に入れておくのだ」
ベシューは大急ぎで出て行った。下から、騒々しい物音がきこえてきた。それからあとは静寂。向こうからは、父親と娘が、犯罪人のあの足取りで、一歩一歩かぞえるようにして進んできていた。おそらく不安はなにも感じていないのだろうが、いっときも注意を怠らず、目と耳を絶えまなく働かせて、全神経を緊張させているのが想像できた。
「おお、おそろしいことだ」アントワヌがまたくりかえしていった。
しかし、誰よりも、ジルベルトの感情の動揺は頂点に達していた。いいようのない苦悩をいだいて、ふたりのあさましい人間のゆっくりした足並を見守っていた。夫人もその兄も、ユルフェ町の自分の屋敷の客間にいるような気がしていて、ドミニックとロランスは、自分たちをあんな

に、それを拒絶している」
ありったけの力をふりしぼって、アントワヌは立ちあがった。
「どうすればいいのだ」
「ダイヤモンドはどこにある？」
そして、アントワヌがためらっているので、ヴァン・フーベンがわれを忘れて手荒く突きとばした。「ダイヤモンドだ、すぐ出せ。……でないと、わたしが、きさまをたたきのめしてやる」
「時間を失ってはならない、アントワヌ」デンヌリが命令した。「くり返していうが、屋敷は包囲されている。ダイヤモンドだ、すぐ出せ。……でないと、わたしが、きさまをたたきのめしてやる」

はるかに大勢いる。ベシュゥーはいま部下たちを配置しているさいちゅうだ。きみが考えているよりも、はるかに大勢いる。ベシュゥーの手から救い出してもらいたいなら話すのだ。ダイヤモンドは？」
デンヌリが一方の腕をとらえ、ヴァン・フーベンが残りの片方をつかまえていた。アントワヌがたずねた。
「そうすれば、自由の身になれるのか」
「わたしが保証してやるよ」
「ぼくはどうなるのだ」
「アメリカに行くがいい。ヴァン・フーベンがブエノス・アイレスに十万フランを送ってくれるだろう」
「十万。二十万でも」ヴァン・フーベンは叫んだ。守らないのは承知のうえで、なんでも、約束するつもりだったろう。……「三十万でも」

きも与えなかった。叫び声ひとつたてなかった。数秒後には、地下室のほうへひきずられて行った。姿が見えなくなった。長いあいださがし求められ、先祖代々、とほうもないかずかずの悪行を重ねて罰されることのなかった、出没自在なドミニックとロランスは、こうしてついに司直の手に押えられた。

沈黙のひとときがあった。ジルベルトはひざまずいて祈っていた。アドリアン・ド・メラマールは墓石がとりのけられ、やっと深々と呼吸できるように感じた。やがて、デンヌリがアントワヌ・ファジュローの上からかがみこんで、肩をつかんだ。

「次はきみの番だよ、ファジュロー。きみは最後の子孫だ、呪われた一族を代表する最後の。そして、ほかのふたりと同じように、百年以上もたった借金を支払わねばならない」

もはや、いままでのファジュローにあったような、みた目にも幸福そうな、いかにも無頓着なようすは、どこにも残っていなかった。数時間でもって、うちひしがれた、破滅の相貌になってしまっていた。恐怖にふるえていた。

アルレットが近づいて、デンヌリに哀願した。

「救ってあげてください、お願いです」

「救うことはできないよ」デンヌリが答えた。「ベシューが見張っている」

「お願いです」若い娘はくりかえした。……「あなたには、そうしようと思うだけでできます」

「ところが、この男は、そうしてほしくないのだよ、アルレット。ひと言いいさえすればいいの

三人とも頭を宙にあげて探していた。やがて、ヴァン・フーベンが、絶え入りそうな、力ない声で、うめくようにいった。
「わたしにはなにも見えない……下のほうの飾り緒の鎖はちぎれている。それっきりだ」
「すると、どういうことになる……」とジャンがいった。
ヴァン・フーベンは椅子をもってひきかえしてきて、それをシャンデリアの真下において、その上によじのぼった。すると、ほとんど同時に平衡を失って、転がりかけた。それから、せきこみながらいった。
「むしりとられている。……またもや、盗まれてしまったんだ」
アントワヌ・ファジュローは肝をつぶした。
「いいや……これはまた……そんなはずはない。……ロランスが見つけたのかしら……」
「そうだ、それにちがいない」ヴァン・フーベンは、なんといってよいか言葉も見つからずうめいた。……「きみは、ダイヤをふたつおきにおいたのだね」
「そうだ……誓ってもいい」
「それじゃ、マルタン父娘がみんな盗んだのだ。……そらね、針金がひとつひとつ、鋏で切られている。……これで破滅だ……こんなことって見たこともない。……やっと見つかると思った瞬間に……」
ヴァン・フーベンは、とたんに口がきけるようになって、駆け出して、玄関のほうへ出てゆき、わめき立てた。

アントワヌはまだためらっていた。

「ベシューを呼ぼうか」ジャンがいった。

「いや……いや……待ってくれ。……そうだ。……それじゃ、よかろう。……承知する」

「話せ」

低い声で、アントワヌは一語一語区切りながらいった。

「となりの部屋の……寝室のなかの」

「冗談じゃない」ジャンがいった。「その部屋はからっぽだ。家具はみんな売り払ってある」

「シャンデリアが残っている。マルタン爺さんは、なによりも、あれに執着していたんだ」

「それで、きみはダイヤをシャンデリアのなかにかくしたのか」

「いいや。垂れさがっている飾り緒のいちばん小さいガラス玉をいくつかとりかえたのだ……正確にふたつ目にひとつずつ。そして、ダイヤを細い針金で結んで、誰が見てもシャンデリアのほかの垂れ飾りと同じに、ガラス玉の穴に紐を通して房にしたものと思いこむようにしたのだ」

「あきれた。きみのやったことは、なかなかどうして手際がいい」デンヌリは叫んだ。「わたしは、きみをまた見直したよ」

ヴァン・フーベンに手伝わせて、デンヌリは壁掛けを押しのけ、扉をあけた。寝室は、じっさいからっぽで、天井から切子ガラスの飾り緒をつらねた、十八世紀風のシャンデリアがつるしてあるだけだった。

「おや、なんだ」デンヌリがびっくりしていった。「ダイヤはどこにある」

にいった。

「よろしい。どうやら、ファジュロー君は、あらゆることにもかかわらず、まだみなさんの同情をひいているようです。それにしても、あまり、ぱっとしないですね、ファジュロー君。まるで死刑を宣告されたようなようすをしている。ベシゥーがこわいのかね。ベシゥーもかわいそうに。きみは、どうしたらあの部長を厄介払いできるか、どうすれば網の目をくぐって逃げられるか、どうすれば刑務所に行くかわりにベルギーに行って、のうのうとりっぱなベッドのなかで眠れるようにできるか、教えてもらいたいかね」

デンヌリは揉み手をした。

「そうだ、ベルギーだ、しかも、今夜のうちに。……どうだい。この案はきみの気に入るかね。それではと、わたしが三度床を叩くよ」

デンヌリは足で、三度、床を叩いた。三度目の音で、ドアがいきなり開いて、ベシゥーが、さっとばかり現われた。

「誰も通さない」部長が叫んだ。

デンヌリは冗談口を叩いており、合図をするとともにベシゥーがとびだしてきたのがひどく滑稽に思われて、笑いを禁じ得なかったが、ほかのものにとってはそうはいかず、すっかりあわてていた。

ベシゥーはドアを閉め、こうした場合、いつでもそうだが、悲壮味をたたえ、おごそかに、

「命令は絶対だ。わたしの許可なくしては、誰も、この屋敷から出さない」

「泥棒だ。泥棒だ。用心してくれ、ベシュー、奴らは、おれのダイヤを持っている。口を割らしてくれ、その悪党どもに。……手首をねじあげて、やっとこで親指の爪をつぶしてやるだけでしゃべる」
デンヌリは客間に引き返して、壁掛けを元にもどし、アントワスに顔をつきつけていった。
「きみはダイヤモンドを、このうちに置いたことを誓うかね」
「あの夜すぐにだ。一週間ほど前。その日はあのふたりが、内にいないのを知っていた。最後にきたときにはまだあそこにあった」
アルレットが進みでて、ささやいた。
「ジャン、このひとを信じてあげて。このひとは、ほんとうのことをいっていると、わたしは確信するの。そして、このひとが約束を守ったのと同じに、あなたも、約束を守ってください。このひとを救ってあげてください」
デンヌリは答えなかった。宝石の紛失に狼狽したようすで、歯のあいだで、くりかえし、つぶやいていた。
「おかしい。……どうもわからない。ダイヤを持っているのなら、なぜあのふたりはここに引き返してきたのだろう。……奴さんたちは、今度は自分で、どこにかくしたのだろう……」
しかし、そのできごとは、それ以上長く、デンヌリの注意をひきつけておくことはできなかった。そして、メラマール伯爵とその妹が、アルレットと同じように熱心に、アントワヌのためをはかってやってくれるようにせきたてるので、デンヌリは、急に表情をかえて微笑しながら三人

ラマール伯爵や伯爵夫人や、アルレットのたっての希望を容れて、わたしはファジュローにたいして寛大な処置をとる決心をした」
「あんたが、この男について、あれほどの悪態をついたあとでか」ベシューがひやかした。「あんたがしたようにして、この男の仮面をはぎ、徹底的にやっつけたあとでか」
「それがどうしたというのかね。この男は、いつかわたしの命を救ってくれた。それは忘れてはならん、それだけは。それに、この男は悪人じゃない」
「大泥棒だ」
「おお。せいぜい半泥棒だよ。巧妙だが偉大さがない。器用だが天才がない。流れにさからって泳ごうとする。要するに、正直もんの候補者だ。助けてやろうよ、ベシュー。ヴァン・フーベンは、この男に十万フランくれる約束をした。わたしは、アメリカのある銀行の現金出納係の地位を世話してやる」
ベシューは肩をすぼめた。
「へらず口をたたくな。わたしはマルタン父娘を拘置所につれてゆく。車には、まだ席がふたつあいている」
「そりゃ、けっこうだ。きみもゆっくりできる」
「ファジュロー……」
「きみは、この男に手を触れることはならん。アルレットにとって、とんでもないスキャンダルになる。わたしはそんなことはいやだ。われわれはそっとして、放っておいてくれ」

「そいつはいい」デンヌリは楽々と腰を下ろして賛成した。「わたしは権威というものが好きでね。きみのいうことは愚の骨頂だが、きみは、それを確信をもっていう。ファジュロー、聞いたかね。きみは散歩に行きたいなら、まず指をあげて部長の許可を求めなくてはならない」

たちまち、ベシューは怒りだして叫んだ。

「あんた、冗談はいいかげんしてもらおう。われわれはいっしょに始末をつけねばならぬ勘定がある。あんたが考えているよりも、ことは重大なんだ」

デンヌリは笑いだした。

「かわいそうにベシュー、きみはへんてこだよ。なんでまた、すべてのことを芝居がかりに扱うのかね。きみがいうことによって、情況は底抜けの喜劇になっているというのにさ。ファジュローとわたしのあいだの話は、すっかり片づいた。したがってきみが大探偵を演じて、令状をふりまわす必要はなくなった」

「あんたはなにをほざいているのかね。片づいたとは、なにが片づいたのかね」

「全部だよ。ファジュローはダイヤモンドをわれわれに引き渡すことができなかった。しかし、当局はマルタン老人とその娘をおさえているので、いずれきっとそれも手にはいるだろう」

ベシューは臆する色もなく宣言した。

「わたしはダイヤモンドなんか、くそくらえだ」

「だからきみは下品だ、というんだよ。婦人の前で、そんな汚ない言葉を使うなんて。とにかくここにいるわれわれはみんな意見の一致を見た。ダイヤは、もはや問題にしないことにする。メ

ではないか。アントワヌは不安もうすらいだようだった。アルレットは、その苦悩にもかかわらず、ふきだしそうになっているのが目に見えていた。

ベシウーは口調に力をこめていった。

「マルタン父娘はだ。刑事がひとりと目を光らせたヴァン・フーベンが監視している。階下の玄関の間には、部下のうちでもいちばん屈強な、三人のものがひかえている。庭園には、同じく屈強なのが、べつに三人いる。いっしょにきてその面を見るといい。青白い腑抜け男とはものがちがうのがわかるだろう。そのうえ、連中はみんな、あんたがずらかろうとでもすれば、犬のようにうち殺す命令をうけている。それにまた、命令は絶対的だ。わたしが呼笛をひとつ吹けば、みんな駆けつけてくる。そうなると、ものをいうのはピストルの銃口だけだ」

デンヌリはかぶりを振った。相変わらず、びっくり仰天をよそおってくりかえしていった。

「きみはわたしを逮捕しようというのか。デンヌリという名前の紳士を、有名な航海士を逮捕しようというのか……」

「ちがう。デンヌリではない」

「では、誰だ。ジム・バーネットか」

「それもちがう」

「では……」

「アルセーヌ・リュパンだ」

デンヌリは、ぷっとふきだした。

「ああ、そんなことといっても」ベシューはますますいらだってきて叫んだ。「すると、あんたには、わたしがいったことがわからないのか。車には、マルタン父娘のほかにまだ席がふたつある、それですっかり満員になる」
「それで、きみはファジュローを連れてゆくつもりなのか」
「そうだ……」
「それから、誰だ」
「あんただ」
「わたしを。すると、きみはわたしを逮捕したいというのか」
「逮捕する」ベシューは、荒々しく手をデンヌリの肩にかけた。
デンヌリはびっくり仰天をよそおった。
「だって、まるで気違いだ。監禁しておくべきだ。なんたることだ。わたしは、今度の事件をすっかり解決してやった。まるで、苦役囚のように骨を折った。あらゆる恩恵をきみにほどこしてやった。ドミニック・マルタンを引き渡してやったし、ロランス・マルタンを引き渡し、メラマール家の秘密を引き渡し、世間をあげての名声を贈り物とし、いっさいの発見をしたのはきみだということを許し、昇進の道さえもひらいてやり、警部補かなにかに任命されるようにしてやった。それを、きみのわたしにたいするお礼のしかたといったら、これだ」
メラマール伯爵とその妹とは、ひと言もいわず耳を傾けていた。いったい、このとほうもない男はどうするつもりなのだろう。冗談口をききながらも、いうことはりっぱに理屈が通っている

「この飾り彫りをまわすだけで、錠がおりるのだ。きみは誰も出ないように命令したが、わたしの命令は、誰も入れないようにするにある」
「部下がドアは叩き割る。なんでもぶちこわす」ベシューはわれを忘れてわめいた。
「じゃ、呼ぶさ」
ベシューはポケットから、小さい輪のついた警察呼笛をとり出した。
「きみの呼笛はやくにたたないよ」とデンヌリはいった。
ベシューは力いっぱいに吹いた。なんの音も出ない。割れ目から噴出する空気のほか、なにもない。
デンヌリはいよいよ愉快そうになった。
「いやはや、じつにおもしろい。それで、きみは戦おうというのか。しかし、ねえ、きみ、もしも、わたしがリュパンだとしたら、必要な警戒措置もとらないで、警官の一隊と連れだってこのうちに来ると、きみは思うかね。きみの裏切りと忘恩をかねてから見通していなかったと思うかね。ところで、くりかえしていうが、この家は細工がしてあって、わたしは、そのからくりを全部知っているんだ」
そして、いまでは、ベシューにすっかり腹を立てて、デンヌリはまっこうから浴びせかけた。
「ばかものが。きみは、まるで気違いのように冒険にとびこんでいる。部下さえぐるりに集めておけば、わたしをおさえたものと、ひとり合点している。さっききみに教えてやった秘密の出口、ラ・ヴァルネリとマルタン父娘が使っていた出口だって、誰も、ファジュローさえも知ってはい

「きみはアルセーヌ・リュパンを逮捕しようというのか。ああ、そいつはまた、笑止千万な。だって、きみ、アルセーヌ・リュパンは逮捕できっこなしだよ。デンヌリなら、そういうこともいえるだろう、せいぜい、ジム・バーネットくらいなら、逮捕できるかもしれない、たぶん。しかし、リュパンは。おい、きみはよく考えてみなかったのか、リュパンとは、なにを意味するか……」

「ほかの人間とべつに変わったところのない人間を意味する」ベシューは叫んだ。「そして、分相応に扱ってやるよ」

「リュパンとはね」デンヌリは言葉に力をこめていった。「なんぴとによっても、ことに、きみのような鈍物によっては、けっして愚弄されることを許さない人間を意味する。自分自身にしか従わず、自分が好きなように楽しみ、生活して、司法当局と充分協力はするが、自分流儀に、つねに正しいやりかたで協力する人間を意味する。さっさと退散しろ」

ベシューはまっ赤になっていた。怒りに震えていた。

「おしゃべりはたくさんだ。おれについてこい、ふたりとも」

「そんなことはできないよ」

「部下を呼ばねばならないのか」

「この部屋から呼んだのでは、聞こえないよ」

「いまにわかる」

「これは大泥棒の巣窟で、家には細工がしてあることを思い出すんだね。証拠がみたいか」

デンヌリはひとつの羽目板の小さな飾り彫りをまわした。

や風の小さな建物のほうへ、秘密の出口がある人通りの少ない例の通りのほうへ駆けつけながら、なおも呼笛を吹きつづけ、そのけたたましいひびきが空気をつんざいていた。
窓からは、メラマール氏とその妹がからだを乗りだして、なにごとが起こるかと待ちかまえ、眺めていた。
「捕まりはしないでしょうね。ほんとにこわいことですわ」
「いえ、いえ」ジルベルトが感動をかくそうともせずにいった。「いえ、いえ、夜になりかけています。捕まりっこありませんわ」
二人とも、ふたりの男の救済を衷心から望んでいた。泥棒であり強盗であるファジュローの救済と、不思議な冒険家であるジャン・マリの救済を。二人はデンマリの人物については、なんらの疑いも持っていなかった。この人物は、このたびの事件を通じて、誰しも警察に対抗して、その味方をしないではいられないような行動のしかたをしてきた。
せいぜい一分間ばかりたったった。アルレットがまたいった。
「あのひとたちが捕まるとすれば、こんなおそろしいことはございませんわ。でも、そんなことはないでしょうね」
「絶対にない」アルレットのうしろから、愉快そうな声がいった。「つかまえるのは、ありもしない地下道の出口を見付けるのよりも、もっとむずかしい」
昔の引込み部屋の仕切り戸がまた開いていた。ジャン・マリが、そこから出てきた。ファジュローもいっしょに。

なかった、わたしが発見したのじゃないか。自由だよ。わたしは自由に勝手に出てゆける。ファジュローもね。なにものも、それを引きとめることはできない」

ベシューのほうに向いたまま、デンヌリはうしろにいたファジュローを、暖炉とひとつの窓のあいだの壁際まで押して行った。

「アントワヌ、あの古い引込み部屋にはいるのだ、そして、右手を探せ……羽目板が全部はずせる。……わかったね」

デンヌリは用心深くベシューを見張っていた。部長はピストルをとりだそうとした。デンヌリが、その腕をつかんだ。

「じたばたするんじゃない。むしろ大いに愉快がったほうがいい。……じつに滑稽じゃないか。きみときたら、なにひとつ見越していなかった。……かくされた出口さえも、わたしがきみの呼笛をちょろまかして、べつのと取り換えておいたことさえも。それ、ここにあるこれがきみのだ。もう使ってもいいよ」

デンヌリはくるりと身をひるがえすと姿を消した。ベシューは仕切りに体当たりをくれた。爆笑が、その拳骨の音に答えた。それから、なにかを動かす音、なにかが軋るのが聞こえた。

ベシューは狂気のようになってはいたが、ぐずつきはしなかった。いたずらに拳骨を傷めて無駄な時間はついやさなかった。呼笛を拾いあげると、窓に向かって駆けつけ、開けるが早いか、とびおりた。

庭園におりたつと、たちまち部下がとりまき、部長は呼笛を吹いた。そして、すたれたあずま

「なんともお礼の言葉もございませんわ。あなたが、わたしたちのためにしてくだすったことは」と夫人はいった。「そして、わたしたちの名前と家族の名誉のために。心からお礼を申します」

「ではまた近いうちに、アルレット」とデンヌリはいった。「きみもお別れのあいさつをしたまえ、ファジュロー。いずれ、アルレットが手紙を出すよ、ブエノス・アイレスの現金出納係アントワヌ・ファジュローあてに」

デンヌリは、テーブルの引出しのひとつから、ゴム紐でとめた小さなボール箱をとりだしたが、それについては何も説明をせず、最後の挨拶をして、ファジュローをうながして出て行った。メラマール兄妹と若い娘は、遠ざかって行くふたりを目送していた。

玄関には誰もいなかった。内庭の中央に、いよいよ濃くなる夕闇のなかに二台の自動車がうかびあがっているのが見えた。一台は警視庁のもので、なかにはしばりあげられたマルタン老人とその娘がいた。ヴァン・フーベンがピストルを握って、運転手といっしょに、その見張りをしていた。

「勝利だよ」デンヌリはヴァン・フーベンのそばまで行くと呼びかけた。「戸棚のなかに、共犯者がひとりひそんでいたのをつまみだした。そやつがダイヤをくすねたんだ。ベシゥーと部下たちが、いま、その男を追っかけている」

「それで、ダイヤは？」ヴァン・フーベンはなんの疑念ももたずわめきたてた。

「ファジュローが見つけたよ」

「いま持っているのか」

そして、デンスリは相変わらず笑みをたたえ、ほがらかだった。
「秘密の出口なんかない。とりはずしのできる羽目板もない。しまる錠前もない。この座敷ほどまともで、細工のない古いうちって、どこにもない。ただね、わたしはバシューの神経を極度に興奮させて、なんでも、病的に軽信するようにもっていき、反省力をなくしてやっただけだ」
そして、落ちつき払って、アントリスに言葉をかけ、
「どうだい、ファジュロー、まるで、芝居のひと幕のようだろう。ものごとはよく準備してかからねばいけない。舞台の仕度がすっかりできたら、あとは絶対の自信をもってことを進めるだけだ。そういうわけで、バシューは発条(ばね)のようにはねあがって、わたしがほのめかしておいた方向へ、しゃにむにとびだして行き、警察の連中はことごとく、隣の観台(さじき)のほうへ駆けつけた。いまに、隣の入口を叩きこわすことだろう。みたまえ、芝生を一目散に駆け出しているよ。さあ、行こう、ファジュロー、もはや一刻も猶予はならない」
デンスリはいかにも落ちつき払い、その口ぶりは確信に満ちていた。その身辺からは、いっさいの動揺が消えていた。危険の脅威は、もはや影だに残っていなかった。一同は、バシューと刑事たちが、裏の通りを駆けだしてゆき、あちらこちらの門をたたき破っているところを想像した。
伯爵はデンスリに手をさしのべて、たずねた。
「わたしに、なにかすることはありませんか」
「いいや、伯爵。まだ一分か二分、通路は自由です」
デンスリはシルバルトの前に腰をかがめ、夫人も同じく手をさしのべた。

真夜中少しすぎに国境についた。

「とめてくれ、そこで」ジャンがいった。「税関から二百メートルほど手前で。わたしは、厄介なことが起こらないように、ファジュローを案内して行く。一時間ほどたってから、またここで、きみと落ち合う。そしてすぐパリにひきかえそう」

ヴァン・フーベンは一時間待ち、二時間待った。そのときになってはじめて、匕首の一閃のように、疑念が胸をつらぬいた。出発以来、ヴァン・フーベンは、なぜデンヌリがこのような行動にでているのか、彼、ヴァン・フーベンは、ボール箱を奪い返そうとされたとき、どうやってそれに抵抗するかを考えていた。しかし、一瞬たりとも、ボール箱のなかみは、ダイヤモンド以外のものかもしれないことは考えてみなかった。

自動車のライトのあかりで、手を震わせながら、ヴァン・フーベンはなかみを調べてみた。ボール箱には五、六十個の切子ガラスがはいっていた。あきらかに例のこわれたシャンデリアからとってきた切子ガラスだった……。

ヴァン・フーベンは、同じスピードでもって、まっすぐにパリにひきかえした。デンヌリとファジュローにだまされ、ふたりをフランスの国外に運ぶだけの目的のために利用されたことがわかり、もはや、マルタン老人とその娘のロランスが口を割るのに望みを託する以外に、ダイヤモンドを見つける希望はなくなっていた。

しかし、パリにかえって新聞を読むと、その前の晩、マルタン老人は首を吊り、娘のロランスは毒をあおいでいた。

「持っている」デンヌリは引出しからとり出した、蓋が半分あいているボール箱を見せながらいった。
「ありがたい。おれのダイヤだ。渡してくれ」
「渡すよ。しかし、その前に、アントワヌを助けてやろう。それが条件だ。きみの自動車で送ってほしい」
いったんダイヤモンドが見つかったとなると、ヴァン・フーベンは、誰とでも棒組になるつもりだった。三人は内庭を出ると、ヴァン・フーベンの車にとびのった。さっそく発車した。どこに行くのかと、ヴァン・フーベンがきいた。
「ベルギーだ。時速百キロだ」
「よしきた」とヴァン・フーベンはいって、ボール箱をデンヌリからふんだくり、ポケットにしまいこんだ。
「よかろう、きみの好きなようにしたまえ」とジャンはいった。「しかし、警視庁からの手配電報が届くまえに国境を通過しない場合は、わたしは、そいつをまた取り戻すよ。まえもっていっておく」
ダイヤモンドがポケットにあるという考え、それを失うことの心配、デンヌリが及ぼす不可抗力的な作用、そういったものがいっしょになってヴァン・フーベンを無我夢中にし、スピードを最大限に維持して、村を通過するときですら速度をおとさず、国境にたどりつくこと以外になにも考えられなくしてしまった。

ンは、たちまちにして、この事件の偉大な主人公、歴史的謎を解き、そっくり同じようなふたつの屋敷の秘密を明らかにし、ラ・ヴァルネリの経歴をあばき、メラマール兄妹を救い、犯人を司直の手に引き渡した英雄になった。ベシューは端役、リュパンに翻弄され、いささか同情に値するヴァン・フーベンと同じく、無邪気にも、あの茶番劇めいたベルギー国境への逃亡にたいして、あらゆる便宜を供与した、間が抜けた三下役人に転落した。

ところで、世間が、新聞よりも先走り、警察の上を越して、事件に新風を吹きこんだのはダイヤモンドの紛失の一件を、文句なしにアルセーヌ・リュパンの仕業に帰したことだった。リュパンは、あらゆることをしてきて、すべての準備をし、いつでも成功するのだからして、リュパンが全部をポケットに入れたのは明白のように思われた。これは、ベシューも、ヴァン・フーベンも、メラマール兄妹も、ほんのちらとでも考えてみなかったことだったが、大衆は、たちまちまるでひとつの信条のように、その事実を認めた。そして、おそらくは、これは筋が通っていたろう。このたびのいろんなできごとの結末として、この最後の瞬間のかっぱらいほど愉快千万なものはなにものもないからである。

ベシューの切歯扼腕は頂点に達した。部長は自分が洞察力を欠いたことを認めないですますには、あまりに頭がするどすぎた。そして、大衆が自然発生的に宣言している真実の前から逃避しようとは露さら考えなかった。そこで、ヴァン・フーベンのうちへ駆けつけて、非難と嘲笑とで相手をうんざりさせた。

「どうですね。最初からいっておいたじゃありませんか。あの悪魔はダイヤモンドを見つけるだ

エピローグ　アルレットとジャン

悲劇的なできごとが相次いで起ったこの一日のしめくくりをした二重自殺事件によってひき起こされた深い感動は、いまもって、ひとびとの記憶に残っている。そのできごとの大部分は大衆に知れわたっていたが、ひとびとの推測し、または推測しようとつとめていた、残りのできごとのほうが、極度に世間の好奇心をそそりたてていた。マルタン父娘の自殺は数週間このかた世論を沸騰させた事件の終わりであり、過去百年のあいだ、数回にわたり、じつに合点のゆかない条件のもとで、くりかえしては提起された、ひとつの謎の終わりだった。そしてまた、運命がメラマール一族に課した長い苦難の終わりでもあった。

予期しなかった、しかし、きわめて当然なことではあるが、ベシュー部長は、この一日から汲みとるはずだった精神的職業的利益をうけることができなかった。すべての関心はデンヌリに、ということは、アルセース・リュパンに向けられた。要するに、全新聞、そして、それにひきつづいて警察は、二つの名前の下に、唯一の、同一の人物しか見ていなかったからである。リュパ

すっかり破産ですか」
「そんなことはない」と相手は思わず釣りこまれて正直にいった。
「それだったら、残っているもので満足しなさい。わたしのいうことを信じるがいいです。もうあのダイヤのことは考えないことですよ。二度とお目にかかることはないでしょうよ」
「あのダイヤをあきらめるなんて。二度とお目にかかれないなんて。だって、そりゃ、けしからん考えだ。そうだろう、なにしろ、警察は捜査を続行するんだろう」
「熱意なんか持たないでね」
「でも、きみは？」
「わたしは、もう手をひきますよ」
「予審判事は？」
「事件は棚上げでしょうね」
「けしからん話だ。なんの権利があって？」
「マルタン父娘は死んでしまったし、ファジュローに対しては、はっきりした容疑はなにもない」
「リュパンをどこまでも追及したら」
「それで、どうするというのです」
「見つけるのだ」
「リュパンは見つかりませんよ」
「アルレット・マゾールのほうをさぐったら、どうだろう。リュパンは、あの娘に惚れこんでい

ろう、そして、あんたは、ヴァン・フーベンは二度とダイヤのお目にかかれないだろうって。われわれの努力はすべて、例によって例のごとく、奴へのご奉公になるだけだろうって。奴は警察といっしょに働いて、あらゆる協力を得、あらゆる門戸をひらかせて、あげくのはて目的を遂したときには、それが奴のおかげだったことは、わたしも認めますがね、くるりと身をひるがえして、場金をさらってずらかってしまった」

ヴァン・フーベンは、心身ともに疲れはてて病気になり、病床に就かねばならなくなっていたが、せきこんでいった。

「すると投げだすのか。もう探してもだめなのか」

ベシューは自分の失望落胆を白状し、恥じ入るようにいったが、そこには一応、けなげさがなくもなかった。

「あきらめねばなりませんよ。あの男が相手では手も足も出ない。あいつには、計画の実行に当たって、くめども尽きない発明の才と精力がある。マルタン屋敷に秘密の出口があると、わたしに思いこませ、一方の口から、わたしを出しておいて、別の口からポケットに手をつっこんでのうのうと出て行ったやりかたなんか、あれは天才ですよ。戦うのはばからしい。わたしのほうは、あきらめますよ」

「だが、おれはあきらめない」ヴァン・フーベンは起きあがって叫んだ。

ベシューはいった。

「もうひとつ、ききますがね、ヴァン・フーベンさん。あんたは、あのダイヤモンドの紛失で、

りがおそろしい謎の影を駆逐してくれて、過去にたいする病的な屈従から解放され、幸福で明朗で、すでに、ユルフェ町の古い屋敷を若返らせ、生気を与える計画をたてていた。そして、その晩ただちにアルレットは、誰にも告げず、自動車で出発した。

のんきで平和な二週間がすぎた。アルレットは、この平穏無事と、孤独の生活のなかでふたたび生まれかわり、七月の輝かしい太陽のもとで、すがすがしい血色をとりもどした。信頼できる召使たちにかしずかれ、庭園から一歩も出ることなく、セーヌのほとりの花盛りの菩提樹の木陰のベンチの上で夢見ごこちに暮らしていた。

ときどきひと組の相愛の男女をのせた小舟が、河の流れを通りすぎた。ほとんど毎日のように、老人の百姓が近くに停泊している川蒸気につながれていた小舟でやってきて、川底の泥に蔽われて眩く岩のあいだで釣りをしていた。アルレットは、さざ波のまにまに踊る浮子を目で追いながら、その老人とおしゃべりをしたり、釣鐘の形をした、大きな麦藁帽子の下にある、人のよさそうな老人の横顔や、とんがり鼻や、萱のようにもじゃもじゃひげがはえた顎を眺めておもしろがっていた。

ある午後、近づいて行くと、老人は口をきかないように合図をしたので、アルレットは、そっとそのかたわらに腰をおろした。長い竿の先で、浮子が、ぴくりぴくりと沈んだりまた浮いたりしていた。魚がくいつこうとしていた。きっと警戒心を起こしたのだろう。木製の独楽はまた動かなくなった。アルレットは愉快そうに、相手にいった。

「きょうはだめね。不漁だわ」

る。きっとあの家のあたりをうろつくだろう」
「それも考えましたよ。いま刑事が見張っています」
「見張ってるだけか」
「アルレットはずらかりましたよ。どこかフランスの国外でリュパンと落ち合ったものと想像されます」
「ちきしょう。おれもついていないわい」ヴァン・フーベンは叫んだ。

アルレットはずらかってはいなかった。リュパンと落ち合ってもいなかった。だが、あまりにも多くの感動に疲れ、まだクチュリエの店にかえるだけの元気がなく、パリの近郊の林に囲まれ、庭が花咲き乱れるテラスとなって、セーヌの岸までくだっている、美しい小住宅で休養していた。

じじつ、ある日、アルレットは、いつかの晩のレジーヌ・オブリーにたいする無愛想な態度の詫びをいうために美しい女優に会いにいった。レジーヌはいまでは、たいへんな売れっ子になって、大きな劇場のレビューの主役を演じる準備をしていた。ふたりの若い女はたがいに相手の腕にとびこみ、レジーヌは、アルレットの血色が悪くて、憂わしそうなのを見て、その理由をたずねもしないで、自分の持ち家だった、その小住宅を憩いの場所として、アルレットに提供したのである。

アルレットは、さっそくその申し出を感謝してうけ入れ、母親にそのことを告げた。翌日、アルレットは、メラマール家に暇乞いに行った。見ると、メラマール伯爵兄妹は、ジャン・デンヌ

ちが」
「それで、きみは姿を消したのか」
「そうですわ。……わたしはこわいの。わたしのために、あなたが罠におちてほしくないの。お行きになって」
アルレットはおろおろしていた。デンヌリの手をとり、目をうるませていた。そこで、デンヌリはやさしくいった。
「安心していいよ。わたしを見つける望みなんかまるで持っていないので、探しもしていない」
「わたしの身のまわりでは、そうではないわ」
「なぜ、きみの身のまわりを探すのだね」
「だって、みんな知っているんですもの……」
アルレットはまっ赤になった。デンヌリが、あとの文句をいった。
「わたしが、きみを愛していて、きみに会わないでは生きてゆけないことをだろう」
アルレットは、小舟のベンチの上でからだをひき、ジャンの冷静ぶりで、すでに自分も落ちついてきて、今度は、おどおどすることもなく、
「黙っていて……そんなことはおっしゃらないで……でないと、わたしが行ってしまいますわ」
ふたりはたがいにまともに眺め合っていた。アルレットは、デンヌリがたいへんに若々しいのに、以前よりもはるかに若々しいのに驚いた。百姓の老人の上っ張りの下から、襟首を丸出しにしているところは、ちょうど自分の年配、彼女くらいの年配に見えた。デンヌリは、自分をまっ

「いや、それどころか、たいへんりっぱな猟ですよ、お嬢さん」と老人はささやいた。
「でも」とアルレットは土手にある、からっぽの魚籠をさしていった。「一尾も釣れていないわ」
「そんなことはない」
「では、なんで？」
「たいへんに美しい、かわいい、アルレットが釣れていますよ」
アルレットは最初、その意味がわからず、《アブレット》（コイの一種）というところを、アルレットといったのだろうと思った。しかし、するとどうして、自分の名前を知っていたのだろうか。
誤解は長くはつづかなかった。老人がまたくりかえしていった。
「美しい、かわいいアルレットがやってきて、釣針にかかりましたよ……」
アルレットには、とっさにわかった。ジャン・デンスリだった。老人の百姓と話をつけて、一日かわってもらったのにちがいなかった。
アルレットは怖じ気づいて、口ごもりながらいった。
「まあ、あなたは。あなたは、おかえりになって……おお、お願いです、お行きになって」
相手は顔をかくしていた大きな麦藁帽子の釣鐘をとりのけて、笑いながらいった。
「だって、なんでまた、わたしはかえらねばいけないのかね、アルレット」
「こわいのよ……お願いです……」
「なにがこわい」
「あなたをさがしまわっている人たちが。……パリのわたしの家のまわりをうろついている人た

いたものとはそぐわなかった。
やがて、アルレットはきいた。
「あのダイヤモンドは、あなたが持っておいでなのでしょう」
「ああ、それがきみの気がかりだったのか、アルレット。なぜ、もっとはやくいわなかったのだ」
デンヌリはまた、その本性がにじみ出た少しくあいまいな微笑をうかべていった。
「わたしだよ、じつは。あの前の晩、シャンデリアについているのを見つけたのだ。わたしは、そのことが人に知られず、嫌疑がマルタン父娘にかかることを望んだのだ。あの事件のなかでのわたしの役割は、はっきりしていた。わたしは、世間が真相を見破ろうとは思っていなかった。……その真相がきみにとっては不愉快なのだろう、アルレット」
若い娘はつづけた。
「でも、あのダイヤは、おかえしになるのでしょう」
「誰に」
「ヴァン・フーベンに」
「ヴァン・フーベンに?　断じて」
「でも、あのひとのものだわ」
「そんなことはない」
「だって……」
「ヴァン・フーベンは、コンスタンチノープルに旅行したとき、あれを向こうのユダヤ人の老人

こうから眺めている、アルレットの真剣な目に、たちまち少し気おくれがして、ためらっていた。いったい、この娘はなにを考えているのだろう。
「どうしたのかね、わたしのかわいいアルレット。わたしに会えたのが、ちっともうれしくないようだね」
アルレットはそれには答えなかった。そこで、デンヌリはまたいった。
「説明してくれ。ふたりのあいだには、なんだか気詰まりなものがある。わたしは、そんなことは、ぜんぜん予想もしていなかった」
真面目な、もはや、かわいいアルレットの声ではない、もっと考え深い、守勢に立った女の声で、アルレットはいった。
「ただひとつ、おたずねしたいことがあります。あなたは、なぜ、おいでになりましたの」
「きみに会うためだよ」
「ほかにも理由がございます。わたしはそれを確信しています」
しばらく間をおいて、デンヌリは白状した。
「それじゃいおう、そうだよ、アルレット、ほかにも理由がある。……それはこうだ。きみはわかってくれるだろう。わたしはファジュローの仮面を剝ぐことによって、きみのすべての計画を、けなげな女の、よいことをしたいというすべての美しい夢をうちこわしてしまった。そして、わたしはきみの努力をつづけさせる手段を与えるのが自分の義務だと信じた……」
アルレットはうわのそらできいていた。デンヌリがいっていることは、アルレットが期待して

かりの成功に酔ってしまって、なんでもやりさえすれば成功するように思ったのです」
「なぜ、考えをかえたのだ」
「わたしは、まだ若すぎるんです。まず働いて、よいことをするにふさわしい人間にならねばいけません。わたしの年ごろでは、まだ、その権利はございません……」
ジャンはからだをすりよせていた。
「アルレット。きみが断わるのは、たぶん、その金がほしくないからだろう……わたしを非難しているからだろう。……そして、きみがそう考えるのはもっともだ。……きみのように、まっすぐな性質では、ひとがわたしについていっている二、三のことに気を悪くするのも当然だ……そして、わたしは、それをべつに否認もしない」
アルレットはせきこんで叫んだ。
「否認なさらないでいいの、お願い。わたしは、なにも知らないし、知りたくもないんです」
あらゆる証拠から見て、ジャンの秘密の生活が気にかかってしかたがなく、アルレットを苦しめているのだ。真相を知りたくてたまらないが、それ以上に、アルレットをひきつけると同時に、こわい思いをさせている謎を突きやぶりたくないのだ。
「きみは、わたしがなにものか知りたくないのか」とデンヌリはいった。
「わたし、あなたが誰だか知っていますわ、ジャン」
「誰だね?」
「あなたは、いつかの晩、わたしをうちに連れてかえって、頰に接吻してくださったかたですわ

から盗んだのだよ、何年かまえに。わたしはその証拠を持っている」
「では、そのユダヤ人のものですわ」
「その老人は絶望して死んでしまった」
「だったら、その家族のものですわ」
「家族は誰もいない。名前もわからないし、生まれた場所もわからない」
「けっきょく、あなたがご自分で持っていられるほかはないというわけ？」
デンヌリは笑いながら答えたいところだった。
《そうだ。わたしにも、いくらかその権利がありはしないかね》と。
けれども、デンヌリはこう答えた。
「あの事件を通じて、アルレット、わたしは真相しか求めなかった。メラマールの兄妹を解放してやることと、アントワヌを破滅させて、きみから遠ざけたいと思うほか他意はなかった。ダイヤモンドは、きみの仕事に、きみがしたいというどんな仕事にだって役立つだろう」
アルレットはかぶりを振って、きっぱりといった。
「わたしはほしくないわ。……なにもほしくございません……」
「なんでまた？」
「わたしは、ほんとに、すべての野心をすててしまいましたの」
「そんなことって。きみは元気をなくしたのか、きみは」
「いいえ。わたしは考え直しましたの。あまりに、ことを急きすぎるとさとりました。わずかば

見ていました。……メラマールの奥さまにも。……でも、誰よりもレジーヌに。……わたしはレジーヌがひどくねたましくて、誇りから、悲しみから、わたしは黙っていましたの。たった一度だけ、わたしはレジーヌにすげなくしました。しかし、あのひとには、そのわけがわからなかった……そして、あなたにも、ジャン」

「でも、わたしは一度だって、レジーヌを愛したことはなかったよ」とデンヌリは叫ぶようにいった。

「でも、わたしはそうと信じていたのです。そして、あまりに不幸だったので、アントワヌ・フアジュローの申し出を承知したのです……くやしさから……腹立たしさから。……それに、あのひとは、あなたやレジーヌのことについて、わたしに嘘の話をしていたのです。メラマールさんのお宅で、またあなたにお会いしたときはじめて、少しずつ、わたしはわかりはじめたのです」

「わたしがきみを愛していたことがわかったのだろう、アルレット」

「ええ。わたしは、それまでなんどか、そんな気がしたことはございました。あなたは、そのことをあのかたたちの前でおっしゃいました。そして、わたしには、それが真実だと思われたのです。あなたのすべての努力、おかされている危険もすべて……わたしのためだったと。わたしをアントワヌの手から解放することは、あなたご自身のために、わたしを征服するためだったことがわかったのです。しかし、そのときは、もう手おくれでした。……わたしよりももっと強い、周囲の事情が、わたしをひきずっていっていたのです」

ジャンの感激は、いかにもやさしく、どこまでもしとやかに物語られる、この告白のひと言ご

……それはやさしくて、けっして忘れることのできないようなやりかたで」
「なにをいう、アルレット」デンヌリは感動をこめていった。
アルレットはまたもや、すっかり赤くなった。しかし、目を伏せもしないで答えた。
「わたしは、自分でかくしおおせないことをいっていますのよ。わたしの生活を支配していて、ほんとうだから、正直にいって、ちっとも恥ずかしくないことをいっていますのよ。あなたは、わたしにとっては、そんなかたなのです。ほかのことは、どうだっていいのです。あなたはジャンなのです」
デンヌリはささやいた。
「すると、きみはわたしを愛してくれているのか、アルレット」
「ええ」とアルレットはいった。
「きみがわたしを愛してくれる……わたしを愛してくれる……」デンヌリは、アルレットの告白にあわてて、そのような言葉のほんとうの意味をわかろうと努めるかのように、同じ文句をくりかえした。「きみがわたしを愛してくれる……それがきみの秘密だったのだね、たぶん」
「ええ、そうなの」アルレットはほほえみながらいった。「メラマール家の大きな秘密がございました……それから、あなたが謎のアルレットと呼ばれていた女の秘密がございました。そして、それは、ごく簡単な愛の秘密でしたわ」
「しかし、なぜ、きみは打ちあけてくれなかったのだ」
「わたしは、あなたを信用していなかったのです。……あなたがレジーヌに愛想よくなさるのを

「あなたは、わたしの一生を台なしになんか、なさらないわ、ジャン。いつか、わたしがどんなになろうと、そんなことはどうだっていいの。そうよ。将来のことを話すのはよしましょう。ある一定の期間よりさきのことは考えないことにしましょうよ……そして、わたしのぐるりに線をひくことのできる一定の輪のそとのことは……それから、わたしたちの友情以外のことは」
「わたしたちの恋、という意味だろう」
アルレットはがんばった。
「わたしたちの恋のことを話すのはよしましょう」
「すると、なにを話すべきなのかね」ジャンは不安そうに微笑しながらいった。アルレットの言葉のはしばしに、ジャンは一喜一憂していた。「なんのことを話すのかね。わたしに、どうしてほしいのかね」
アルレットは、声をひそめていった。
「まず第一に、ジャン、いまから、わたしをきみとよばないでほしいの」
「そりゃまた、変な考えだね」
「ええ……でも、きみって呼ぶのは、ごく親密な間柄のことですわ。……そして、わたしの望みは……」
「きみの望みは、わたしたちはおたがいに遠ざかりたいというのだろう、アルレット」ジャンは心臓をしめあげられる思いでいった。
「逆だわ。近しくしなくてはいけないのよ、ジャン。……でも、友だちとしてで、きみとかおま

とにたかまっていった。
「こんどは、わたしのほうがこわくなったよ、アルレット」
「なにがこわいの、ジャン」
「自分の幸福が……そしてまた、きみが幸福になれないのではないかと、こわいのだ……アルレット」
「なぜ、わたしが幸福になれないの」
「だって、わたしは、きみにふさわしいものをなにひとつ、きみにくれてやることができないもの、アルレット」
そして、低い声でつけ加えた。
「誰だって、デンヌリとは結婚しない。……バーネットとも、そして……」
アルレットはジャンの口に手をおいた。アルセーヌ・リュパンの名を聞きたくなかったのだ。バーネットの名前も、おそらくはまた、デンヌリの名前さえも。アルレットにとっては、この男はジャンという名前で、それ以外には、なにものでもなかった。
アルレットはひと言ひと言に力をこめていった。
「アルレット・マゾールと結婚するひともいないわ」
ジャンは抗議した。
「いるとも、いるとも。きみはこの世でいちばんすばらしいひとだ。そして、わたしには、きみの一生を台なしにする権利はない」

いた。しかし、同時にまた、アルレットがあまり深くものを考えたりしていず、なにを約束しようとしているか、あまり知りたがっていないことを、デンヌリは感じた。そして、その要求はどこまでも真面目で、率直で、デンヌリ自身もまた、近い将来の神秘なベールをはぎとろうとは求めなかった。

「なにを考えているの、ジャン」とアルレットがきいた。

「ふたつのことを。まずあのダイヤモンドのことだ。あなたはわたしが持っているのが気に入らないのだろう」

「ええ、たいへんに」

「ベシューに送ってやろう。そうすれば、あの男が発見したという手柄になる。わたしには、あの男にそれくらいの償いはしてやってよい義理がある」

アルレットは礼をいって、かさねてきいた。

「あとひとつ、あなたが気にしていらっしゃるのは？ ジャン」

ジャンは大真面目でいった。

「大問題なんだ、アルレット」

「どんな？ わたし、胸がどきどきするわ。心配ごとなの」

「いや、そういうわけではない。しかし、なかなか解決がむずかしい」

「どんなことなの」

「わたしたちの旅行のことだ」

えとか呼ばないの。そんな権利は、どちらも持たないで、いつまでも持つことはないようにするのよ」

ジャンはため息をついた。

「あなたは、ずいぶん、むずかしい要求をする。きみはもはや……いや、あなたはもはや、わたしのかわいいアルレットではないのか。とにかく、努力してみるよ。まだ、なにかしてほしいことがあるかね、アルレット」

「たいへんに無遠慮な要求がひとつあるわ」

「話してごらん」

「ジャン、あなたの生活の何週間か……二月か……三月、大気のなかで、自由に……不可能かしら、そんなこと。……ふたりの友だちがいっしょに美しい地方を旅行するのは。休暇が終われば、わたしはまた仕事にかえりますわ。でも、わたしには休暇が必要なの……その幸福が……」

「わたしのかわいいアルレット」

「笑わないでしょ、ジャン。わたし、こわかったの……ほんとにお針子めいていて、子供っぽくて、わたしの望みは。どうかしら、わたしと仲よく、月の光や、夕陽のなかに逃げだすのは、あなたのお時間を無駄使いすることになるかしら」

デンヌリは色を失っていた。そして、若い娘のしめった唇、ばら色の頬、丸い肩、しなやかな胴体を見つめていた。甘美な希望をあきらめなくてはならないのだろうか。アルレットの澄んだ目の底には、恋人同士のあいだにはめったに見られない、純粋な友情の美わしい夢がほの見えて

「だって、そんなことって。わたしがかえらないのを見ると、ひとはなんというでしょう。それに、レジーヌは？　そして、この小舟は、あなたのものではないのでしょ」
「なにも心配はないよ。のんきにかまえていていいんだ。あなたの隠れ家を教えてくれたのは、レジーヌなんだ。小舟も、釣鐘帽子も、上っ張りも、わたしが買ったものだ。万事どうにかなる。あなたは休暇がほしいんだし、なにもおくらす手はない」
アルレットは、それ以上なにもいわなかった。仰向けにころがって、目を空にあげた。ジャンは櫂をつかんだ。一時間ほどのち、一艘の快走船に横づけになり、年寄った女が出迎え、ジャンが紹介した。
「ヴィクトワールだ。わたしの年とった乳母だよ」
快走船は、内部が二つの住居にくぎられていて、みた目にも、こざっぱりと明るく、きれいにととのえてあった。
「こちらが、あなたのうちだ。気兼ねしないでいいよ、アルレット」
ふたりは夕食のとき、またいっしょになった。それから、ジャンが錨をあげるようにいいつけた。モーターの音が、かすかにうなっていた。そして、船は河をすぎ、運河を通り抜けて、古い町のほうへ、美わしいフランスの風光のほうへと向かって行った。
その夜、たいへんにおそくなって、アルレットはひとりで、甲板の上に横たわっていた。そして星や、おりから空にかかっていた月に向かって、しんみりとした、なごやかな喜びに満たされた、甘美な思いと夢を託していた。

「まあ、どうして。旅行はできないの」
「いや、そうじゃない。だが……」
「おお、話して、お願い」
「それがね、こうなんだ、アルレット。わたしたちはどんな身なりをしていると思う。わたしといえば、フランネルのシャツをきて、青い上っ張りをひっかけ、麦藁帽子をかぶっている。アルレット、あなたは、アコーデオンのようにひだがついた金巾のローブを着ている」
アルレットはからだをゆすぶって大笑いをした。
「ああ、ほんとに、ジャン、わたしは、あなたのそこがすきなのよ……あなたの陽気さが。あなたを眺めていると、ときどき、考えさせられるの。≪なんて、このひとはつかみどころがなくて、複雑なのだろう≫って。そして、こわくなるの。それが、あなたの笑いで、みんな吹きとばされてしまうのよ。その思いがけない陽気さのなかに、あなたの全部があるんだわ」
ジャンはからだをアルレットのほうにかがめて、その指の先にうやうやしく接吻していった。
「ねえ、アルレット、旅行はもうはじまったよ」
見ると、じっさい、そばの河岸の木々がうしろにすべっているので、アルレットはあっけにとられた。彼女が気がつかないうちに、ジャンはもやい綱を解き、小舟は流れのまにまに、おし流されていた。
「まあ」とアルレットはいった。「どこに行くの」
「たいへんに遠くへ。もっと、もっと遠くへ」

検印
廃止

訳者紹介　1901年広島県生まれ。1923年東京外語卒。
現住所，東京都三鷹市上連雀2-7-19。
主な訳書，ヴァン・ダインの全作品，クイーンの国名シリーズ，その他ミステリー，SFの諸作品他多数。

謎の家

1973年7月20日　初版

著者　モーリス・ルブラン
訳者　井上（いのうえ）勇（いさむ）

発行所　(株)東京創元社
代表者　秋山孝男
(162)　東京都新宿区新小川町1―16
電話　(268)　8231―5
振替　東京　1565
工友会印刷・本間製本

作者紹介

モーリス・ルブランは一八六四年、フランスのルアンで生まれた。父親は船主で、家庭内の文学的雰囲気に包まれて育った彼はコルネーユ中学に学び、二十七歳のころには新聞記者であったらしい。処女作は一八九二年に《ジル・ブラス》紙に書いた中編小説である。その後、一九〇四年までは心理小説と中編小説とを書いている。リュパン登場のきっかけはピエール・ラフィットの懇請によって、しぶしぶ彼が主宰する雑誌《ジュ・セ・トゥー》の一九〇五年七月号に第一編を載せたことからである。一九〇七年、読者を熱狂させた短編をあつめて「怪盗紳士リュパン」が刊行されて以来、一九三四年まで、つかまらない神出鬼没の怪盗、城館やサロンしか荒らさぬ謎の男、変装の名人で名探偵、敢然と悪に立ち向かう侠盗アルセーヌ・リュパンは五十余の冒険を経験する。世紀の英雄を生んだルブランは物語作家としての功績によってレジオン・ドヌール勲章を授けられ、一九四一年に七十六歳の生涯を閉じた。詳細については既刊「怪盗紳士リュパン」「リュパン対ホームズ」「奇巌城」「二つの微笑を持つ女」などの解説、あとがきを参照のこと。

クィン氏の事件簿	クリスティ	一ノ瀬直二訳	240
秘密組織	クリスティ	一ノ瀬直二訳	220
二人で探偵を	クリスティ	一ノ瀬直二訳	220
アクロイド殺害事件	クリスティ	大久保康雄訳	220
ポワロの事件簿1	クリスティ	小西宏訳	180
ポワロの事件簿2	クリスティ	小西宏訳	180
パーカー・パインの事件簿	クリスティ	小西宏訳	170
ミス・マープルと13の謎	クリスティ	高見沢潤子訳	200
七つのダイヤル	クリスティ	中村能三訳	220
青列車の謎	クリスティ	長沼弘毅訳	220
オリエント急行の殺人	クリスティ	長沼弘毅訳	200
謎のエヴァンス	クリスティ	長沼弘毅訳	190
三幕の悲劇	クリスティ	西脇順三郎訳	200
ABC殺人事件	クリスティ	堀田善衛訳	200
大空の死	クリスティ	松元寛訳	200
茶色の服を着た男	クリスティ	向後英一訳	220
フレンチ油田を掘りあてる	クロフツ	井上勇訳	180
見えない敵	クロフツ	井上勇訳	260
黄金の灰	クロフツ	井上勇訳	240
英仏海峡の謎	クロフツ	井上勇訳	190
殺人者はへまをする	クロフツ	井上勇訳	220
山師タラント	クロフツ	井上勇訳	240
二重の悲劇	クロフツ	井上勇訳	240
ポンスン事件	クロフツ	井上勇訳	220
フレンチ警部とチェインの謎	クロフツ	井上勇訳	220
チョールフォント荘の恐怖	クロフツ	石田貞一訳	200
二つの密室	クロフツ	宇野利泰訳	190
クロイドン発12時30分	クロフツ	大久保康雄訳	220
海の秘密	クロフツ	向後英一訳	190
樽—たる—	クロフツ	大久保康雄訳	260
フレンチ警部最大の事件	クロフツ	長谷川修二訳	180
フレンチ警部と紫色の鎌	クロフツ	井上勇訳	190
フローテ公園の殺人	クロフツ	長谷川修二訳	200
蜘蛛と蝿	クロフツ	山口午良訳	200
クロフツ短編集1	クロフツ	向後英一訳	200
クロフツ短編集2	クロフツ	井上勇訳	170
月長石	コリンズ	中村能三訳	400
ブラウン神父の童心	チェスタトン	福田・中村訳	200
ブラウン神父の知恵	チェスタトン	福田・中村訳	200
ブラウン神父の不信	チェスタトン	福田・中村訳	200
ブラウン神父の秘密	チェスタトン	福田・中村訳	200
ブラウン神父の醜聞	チェスタトン	福田・中村訳	200
木曜の男	チェスタトン	吉田健一訳	180
赤後家の殺人	カーター・ディクスン	宇野利泰訳	240
爬虫類館の殺人	カーター・ディクスン	中村能三訳	220
シャーロック・ホームズの冒険	コナン・ドイル	阿部知二訳	220
回想のシャーロック・ホームズ	コナン・ドイル	阿部知二訳	200
シャーロック・ホームズの生還	コナン・ドイル	阿部知二訳	220
ホームズの最後のあいさつ	コナン・ドイル	阿部知二訳	180
緋色の研究	コナン・ドイル	阿部知二訳	120
四人の署名	コナン・ドイル	阿部知二訳	120
バスカヴィル家の犬	コナン・ドイル	阿部知二訳	160
恐怖の谷	コナン・ドイル	阿部知二訳	160
毒入りチョコレート事件	バークリー	高橋泰邦訳	190

創元推理文庫目録

本格推理小説

便宜上、同一作家の作品は同一個所にまとめてあります

書名	著者	訳者	価格
ベンスン殺人事件	ヴァン・ダイン	井上勇訳	240
カナリヤ殺人事件	ヴァン・ダイン	井上勇訳	240
グリーン家殺人事件	ヴァン・ダイン	井上勇訳	260
僧正殺人事件	ヴァン・ダイン	井上勇訳	240
カブト虫殺人事件	ヴァン・ダイン	井上勇訳	240
ケンネル殺人事件	ヴァン・ダイン	井上勇訳	220
ドラゴン殺人事件	ヴァン・ダイン	井上勇訳	200
カシノ殺人事件	ヴァン・ダイン	井上勇訳	170
ガーデン殺人事件	ヴァン・ダイン	井上勇訳	220
誘拐殺人事件	ヴァン・ダイン	井上勇訳	220
ウインター殺人事件	ヴァン・ダイン	井上勇訳	140
グレイシー・アレン殺人事件	ヴァン・ダイン	井上勇訳	170
連続殺人事件	ディクスン・カー	井上一夫訳	170
皇帝のかぎ煙草入れ	ディクスン・カー	井上一夫訳	200
盲目の理髪師	ディクスン・カー	井上一夫訳	220
髑髏城	ディクスン・カー	宇野利泰訳	200
緑のカプセルの謎	ディクスン・カー	宇野利泰訳	220
アラビアンナイトの殺人	ディクスン・カー	宇野利泰訳	250
帽子収集狂事件	ディクスン・カー	田中西二郎訳	240
曲った蝶番	ディクスン・カー	中村能三訳	190
カー短編集1	ディクスン・カー	宇野利泰訳	200
カー短編集2	ディクスン・カー	宇野利泰訳	200
死者はよみがえる	ディクスン・カー	橋本福夫訳	200
Xの悲劇	クイーン	鮎川信夫訳	220
Yの悲劇	クイーン	鮎川信夫訳	220
Zの悲劇	クイーン	鮎川信夫訳	190
レーン最後の事件	クイーン	鮎川信夫訳	220
エラリー・クイーンの事件簿1	クイーン	青田勝訳	220
ローマ帽子の謎	クイーン	井上勇訳	220
フランス白粉の謎	クイーン	井上勇訳	240
オランダ靴の謎	クイーン	井上勇訳	240
ギリシア棺の謎	クイーン	井上勇訳	260
エジプト十字架の謎	クイーン	井上勇訳	240
アメリカ銃の謎	クイーン	井上勇訳	220
シャム双子の謎	クイーン	井上勇訳	200
チャイナ橙の謎	クイーン	井上勇訳	200
スペイン岬の謎	クイーン	井上勇訳	220
ニッポン樫鳥の謎	クイーン	井上勇訳	200
エラリー・クイーンの冒険	クイーン	井上勇訳	220
エラリー・クイーンの新冒険	クイーン	井上勇訳	240
生者と死者と	クイーン	井上勇訳	240
中途の家	クイーン	井上勇訳	220
ハートの4	クイーン	長谷川修二訳	240
ドラゴンの歯	クイーン	宇野利泰訳	240
クリスチィ短編全集1	クリスチィ	厚木淳訳	220
クリスチィ短編全集2	クリスチィ	厚木淳訳	220
クリスチィ短編全集3	クリスチィ	宇野利泰訳	220
クリスチィ短編全集4	クリスチィ	宇野利泰訳	220
クリスチィ短編全集5	クリスチィ	宇野利泰訳	220
シタフォードの謎	クリスチィ	鮎川信夫訳	200

書名	著者	訳者	価格
思い乱れて	ボワロ&ナルスジャック	大久保	170
ハンマーを持つ人狼	マスタスン	井上勇訳	200
非常線	マスタスン	鷲村達也訳	180
殺人四重奏	ミッシェル・ルブラン	鈴木豊訳	160
未亡人	ミッシェル・ルブラン	鈴木豊訳	220
贋作モンタージュ写真	ミッシェル・ルブラン	望月・三輪訳	220
まちがえた番号	ミッシェル・ルブラン	鈴木豊訳	220
怪盗紳士リュパン	ルブラン	石川湧訳	160
リュパン対ホームズ	ルブラン	石川湧訳	180
水晶の栓	ルブラン	石川湧訳	180
奇巌城	ルブラン	石川湧訳	160
リュパンの告白	ルブラン	井上勇訳	180
リュパンの冒険	ルブラン	南洋一郎訳	220
二つの微笑を持つ女	ルブラン	井上勇訳	240
金三角	ルブラン	石川湧訳	240
虎の牙	ルブラン	井上勇訳	340
カリオストロ伯爵夫人	ルブラン	井上勇訳	240
緑の目の令嬢	ルブラン	石川湧訳	200

書名	著者	訳者	価格
オルヌカン城の謎	ルブラン	井上勇訳	240
カリオストロの復讐	ルブラン	井上勇訳	200
謎の家	ルブラン	井上勇訳	200
バール・イ・ヴァ荘	ルブラン	石川湧訳	近刊

国際スパイ

便宜上、同一作家の作品は同一個所にまとめてあります

書名	著者	訳者	価格
暗い国境	アンブラー	菊池光訳	220
あるスパイへの墓碑銘	アンブラー	小西宏訳	190
三十九階段	ジョン・バカン	小西宏訳	100
殺し屋テレマン	ハガード	杉浦安訳	200
ダイヤモンドは永遠に	フレミング	井上一夫訳	200
カジノ・ロワイヤル	フレミング	井上一夫訳	180
007号の冒険	フレミング	井上一夫訳	180
ムーンレイカー	フレミング	井上一夫訳	200
ロシアから愛をこめて	フレミング	井上一夫訳	220
秘密諜報部員	モーム	竜口直太郎訳	200

スリラー サスペンス

便宜上、同一作家の作品は同一個所にまとめてあります

書名	著者	訳者	価格
黒いカーテン	アイリッシュ	宇野利泰訳	120
暁の死線	アイリッシュ	稲葉明雄訳	200
アイリッシュ短編集1	アイリッシュ	宇野利泰訳	200
アイリッシュ短編集2	アイリッシュ	宇野、田中訳	200
アイリッシュ短編集3	アイリッシュ	井上博基訳	220
目には目を	アルレー	安堂信也訳	170
大いなる幻影	アルレー	安堂信也訳	160
死者の入江	アルレー	安堂信也訳	100
黄金の檻	アルレー	安堂信也訳	180
わらの女	アルレー	安堂信也訳	190
泣くなメルフィー!	アルレー	安堂信也訳	130
死の匂い	アルレー	望月芳郎訳	180
連鎖反応	カサック	諏訪正訳	100
その子を殺すな	ノエル・カレフ	宮崎嶺雄訳	200
名も知れぬ牛の血	ノエル・カレフ	宮崎嶺雄訳	180

書名	著者	訳者	価格
死刑台のエレベーター	ノエル・カレフ	宮崎嶺雄訳	200
網にかかった男	クェンティン	井上勇訳	200
愚かものの失楽園	クェンティン	井上勇訳	190
二人の妻をもつ男	クェンティン	大久保康雄訳	220
追跡者	クェンティン	大久保康雄訳	160
わが子は殺人者	クェンティン	大久保康雄訳	250
13の秘密	シムノン	大久保輝臣訳	200
男の首 黄色い犬	シムノン	宮崎嶺雄訳	220
シンデレラの罠	ジャプリゾ	望月芳郎訳	160
寝台車の殺人者	ジャプリゾ	望月芳郎訳	180
新車の中の女	ジャプリゾ	望月芳郎訳	190
赤毛の男の妻	バリンジャー	大久保康雄訳	200
シカゴ・ブルース	ブラウン	青田勝訳	200
手斧が首を切りにきた	ブラウン	青田勝訳	220
現金を捜せ!	ブラウン	井上勇訳	200
月夜の狼	ブラウン	井上勇訳	200
交換殺人	ブラウン	小西宏訳	160
復讐の女神	ブラウン	小西宏訳	220

書名	著者	訳者	価格
消された男	ブラウン	北村太郎訳	180
殺人プロット	ブラウン	菊池光訳	180
死にいたる火星人の扉	ブラウン	鷲村達也訳	180
霧の壁	ブラウン	田中小実昌訳	170
彼の名は死	ブラウン	高見沢潤子訳	180
まっ白な嘘	ブラウン	中村保男訳	190
モーテルの女	ブラウン	中村保男訳	190
不思議な国の殺人	ブラウン	般若敏郎訳	170
通り魔	ブラウン	森本清水訳	190
3、1、2とノックせよ	ブラウン	森本清水訳	170
パパが殺される!	ブラウン	向後英一訳	160
悪夢の五日間	ブラウン	向後英一訳	160
小人たちがこわいので	ブラックバーン	高見浩訳	190
技師は数字を愛しすぎた	ボワロ&ナルスジャック	大久保訳	180
呪い	ボワロ&ナルスジャック	大久保訳	170
女魔術師	ボワロ&ナルスジャック	江口訳	180
犠牲者たち	ボワロ&ナルスジャック	石川訳	170
仮面の男	ボワロ&ナルスジャック	井上訳	180

- 青いジャングル　ロス・マクドナルド　田中小実昌訳　190
- 動く標的　ロス・マクドナルド　井上一夫訳　200
- 魔のプール　ロス・マクドナルド　井上一夫訳　200
- 暗いトンネル　ロス・マクドナルド　菊池光訳　200
- 悪徳警官　マッギヴァーン　中田耕治訳　190
- 最悪のとき　マッギヴァーン　井上勇訳　190
- 最後の審判　マッギヴァーン　小西宏訳　180
- ビッグ・ヒート　マッギヴァーン　杉浦安訳　190
- ゆがんだ罠　マッギヴァーン　中田耕治訳　200
- 恐怖の限界　マッギヴァーン　中田耕治訳　170
- 虚栄の女　マッギヴァーン　中田耕治訳　190

＜死刑執行人シリーズ＞

- マフィアへの挑戦1　ペンドルトン　池央耿訳　190
- マフィアへの挑戦2　ペンドルトン　高見浩訳　200
- マフィアへの挑戦3　ペンドルトン　池央耿訳　190

怪奇と冒険

- 怪奇小説傑作集1　ブラックウッド他　平井呈一訳　220
- 怪奇小説傑作集2　ジョン・コリアー他　宇野、中村訳　220
- 怪奇小説傑作集3　ラブクラフト他　橋本、大西訳　220
- 怪奇小説傑作集4　アポリネール他　青柳、澁澤訳　220
- 怪奇小説傑作集5　エーベルス他　植田、原訳　220
- 第二の顔　M・エイメ　生田耕作訳　180
- 紅はこべ　B・オルツイ　西村孝次訳　210
- サハラ砂漠の秘密　ヴェルヌ　石川湧訳　280
- 必死の逃亡者　ヴェルヌ　石川湧訳　190
- 諜報作戦／D13峰登頂　A・ガーヴ　永井淳訳　180
- アトランの女王I　J・ギャスケル　深町真理子訳　380
- 消え失せた密画　ケストナー　小松太郎訳　200
- 雪の中の三人男　ケストナー　小松太郎訳　180
- スカラムーシュ　R・サバチニ　大久保康雄訳　280
- 虚栄の神　シェラバージャー　西村孝次訳　380
- 吸血鬼ドラキュラ　ストーカー　平井呈一訳　320

- 黒いチューリップ　A・デュマ　宗左近訳　210
- 王妃の首飾り　上　A・デュマ　大久保和郎訳　330
- 王妃の首飾り　下　A・デュマ　大久保和郎訳　330
- 勇将ジェラールの回想　コナン・ドイル　上野景福訳　180
- 勇将ジェラールの冒険　コナン・ドイル　上野景福訳　180
- ソロモン王の洞窟　H・R・ハガード　大久保康雄訳　200
- 鎧なき騎士　J・ヒルトン　竜口直太郎訳　230
- 暗黒大陸の怪異　ブリッシュ　中村保男訳　160
- 吸血鬼カーミラ　レ・ファニュ　平井呈一訳　220
- ゼンダ城の虜　A・ホープ　井上勇訳　290
- 怪奇クラブ　マッケン　平井呈一訳　200
- 快傑ゾロ　マッカレー　井上一夫訳　200
- ①コナンと髑髏の都　R・E・ハワード　宇野利泰訳　200
- ②コナンと石碑の呪い　R・E・ハワード　宇野利泰訳　200
- ③コナンと荒鷲の道　R・E・ハワード　宇野利泰訳　200
- ④コナンと焔の短剣　R・E・ハワード　宇野利泰訳　200
- ⑤コナンと黒い予言者　R・E・ハワード　宇野利泰訳　220
- ⑥コナンと毒蛇の王冠　R・E・ハワード　宇野利泰訳　190

ハード・ボイルド 警察小説

便宜上、同一作家の作品は同一個所にまとめてあります

深夜の張り込み	ウォルシュ	杉浦安訳	180
脱獄と誘拐と	ウォルシュ	向後英一訳	170
危険な乗客	ウォルシュ	向後英一訳	190
深夜特捜隊	グーディス	井上一夫訳	200
コルト拳銃の謎	グルーバー	小西宏訳	180
ゴースト・タウンの謎	グルーバー	小西宏訳	180
百万ドル・ガール	W・C・ゴールト	井上勇訳	170
スピレーン傑作集 1	スピレーン	小鷹信光訳	200
スピレーン傑作集 2	スピレーン	小鷹信光訳	200
とむらいは俺がする	チェイス	井上勇訳	240
危険なやつは片づけろ	チェイス	井上勇訳	190
ミス・ブランディッシの蘭	チェイス	井上一夫訳	180
蘭の肉体	チェイス	井上一夫訳	220
プレイボーイ・スパイ 1	チェイス	井上一夫訳	220
プレイボーイ・スパイ 2	チェイス	井上一夫訳	200

その男 凶暴につき	チェイス	佐和誠訳	200
貧乏くじはきみが引く	チェイス	一ノ瀬直二訳	200
クッキーの崩れるとき	チェイス	菊池光訳	190
幸いなるかな、貧しき者	チェイス	菊池光訳	200
カシノの金をまきあげろ	チェイス	菊池光訳	190
あぶく銭は身につかない	チェイス	小鷹信光訳	200
暗闇から来た恐喝者	チェイス	小鷹信光訳	190
ミス・クォンの蓮華	チェイス	小鷹信光訳	180
世界をおれのポケットに	チェイス	笠原豊樹訳	200
悪女イブ	チェイス	小西宏訳	190
ダブル・ショック	チェイス	田中小実昌訳	140
ダイヤを抱いて地獄へ行け	チェイス	田中小実昌訳	200
ある晴れた朝突然に	チェイス	田中小実昌訳	200
殺人(ころし)は血であがなえ	チェイス	田中小実昌訳	220
ソフト・センター	チェイス	中村保男訳	190
群がる鳥に網を張れ	チェイス	村上博基訳	180
カメラマンケイド	チェイス	村上博基訳	180
かわいい女	チャンドラー	清水俊二訳	190

大いなる眠り	チャンドラー	双葉十三郎訳	190
チャンドラー傑作集 1	チャンドラー	稲葉明雄訳	200
チャンドラー傑作集 2	チャンドラー	稲葉明雄訳	220
チャンドラー傑作集 3	チャンドラー	稲葉明雄訳	200
チャンドラー傑作集 4	チャンドラー	稲葉明雄訳	220
ガラスの鍵	ハメット	大久保康雄訳	160
血の収穫	ハメット	田中西二郎訳	180
マルタの鷹	ハメット	村上啓夫訳	220
ハメット傑作集 I	ハメット	稲葉明雄訳	220
失踪当時の服装は	ヒラリー・ウォー	山本恭子訳	220
脱獄九時間目	ベンスン	小西宏訳	200
女狩人は死んだ	ベンスン	佐倉潤吾訳	180
燃える導火線	ベンスン	沼沢洽治訳	160
ビッグ・マン	マーステン	中田耕治訳	170
処刑6日前	ライマー	井上一夫訳	180
シカゴの事件記者	ライマー	小西宏訳	220
三つの道	ロス・マクドナルド	井上勇訳	200
兇悪の浜	ロス・マクドナルド	鷲村達也訳	220

④レンズの子ら　E・E・スミス　小西宏訳　230
⑤ファースト・レンズマン　E・E・スミス　小西宏訳　230
⑥三惑星連合軍　E・E・スミス　小西宏訳　230

＜スカイラーク・シリーズ＞
①宇宙のスカイラーク　E・E・スミス　中村能三訳　200
②スカイラーク3号　E・E・スミス　中村能三訳　220
③ヴァレロンのスカイラーク　E・E・スミス　中村能三訳　220
④スカイラーク対デュケーヌ　E・E・スミス　中村能三訳　240

明日プラスX　タッカー　中村保男訳　180
山椒魚戦争　チャペック　松谷健二訳　180
ウイリアム・テン短編集1　ウイリアム・テン　中村保男訳　220
ウイリアム・テン短編集2　ウイリアム・テン　中村保男訳　近刊
マラコット深海　コナン・ドイル　大西尹明訳　120
失われた世界　コナン・ドイル　竜口直太郎訳　180
霧の国　コナン・ドイル　竜口直太郎訳　220
毒ガス帯　コナン・ドイル　竜口直太郎訳　140
巨人頭脳　ハウザー　松谷健二訳　170

太陽系帝国の危機　ハインライン　井上勇訳　180
月を売った男　ハインライン　井上一夫訳　200
異星の客　ハインライン　井上一夫訳　420
ボディの宇宙旅行　ハインライン　中村能三訳　190
ロボット市民　バインダー　青田勝訳　220
スター・キング　ハミルトン　井上一夫訳　200
スター・キングへの帰還　ハミルトン　井上一夫訳　190
死の世界1　ハリスン　中村保男訳　180
死の世界2　ハリスン　中村保男訳　180
死の世界3　ハリスン　中村保男訳　190
時間の墓標　バラード　伊藤哲訳　200
狂風世界　バラード　宇野利泰訳　170
時間都市　バラード　宇野利泰訳　220
溺れた巨人　バラード　大谷圭二訳　180
永遠へのパスポート　バラード　永井淳訳　200
結晶世界　バラード　中村保男訳　180
燃える世界　バラード　中村保男訳　200
沈んだ世界　バラード　峰岸久訳　180

時の声　バラード　吉田誠一訳　200
オブザーバーの鏡　パングボーン　中村保男訳　220
惑星間の狩人（ハンター）　バーンズ　中村能三訳　220

＜火星シリーズ＞
①火星のプリンセス　E・R・バロウズ　小西宏訳　180
②火星の女神イサス　E・R・バロウズ　小西宏訳　200
③火星の大元帥カーター　E・R・バロウズ　小西宏訳　200
④火星の幻兵団　E・R・バロウズ　小西宏訳　200
⑤火星のチェス人間　E・R・バロウズ　小西宏訳　200
⑥火星の交換頭脳　E・R・バロウズ　小西宏訳　200
⑦火星の秘密兵器　E・R・バロウズ　厚木淳訳　200
⑧火星の透明人間　E・R・バロウズ　厚木淳訳　200
⑨火星の合成人間　E・R・バロウズ　厚木淳訳　200
⑩火星の古代帝国　E・R・バロウズ　厚木淳訳　200
⑪火星の巨人ジョーグ　E・R・バロウズ　厚木淳訳　200

＜金星シリーズ＞
①金星の海賊　E・R・バロウズ　厚木淳訳　170
②金星の死者の国　E・R・バロウズ　厚木淳訳　190

SF

暗黒星雲のかなたに	アシモフ	沼沢洽治訳	190
宇宙の小石	アシモフ	沼沢洽治訳	200
〈ファウンデーション・シリーズ〉			
銀河帝国の興亡1	アシモフ	厚木淳訳	220
銀河帝国の興亡2	アシモフ	厚木淳訳	220
銀河帝国の興亡3	アシモフ	厚木淳訳	220
処女惑星	アンダースン	榎林哲訳	190
地球人よ、警戒せよ！	アンダースン	榎林哲訳	180
〈アダム・リース・シリーズ〉			
冒険の惑星I	ヴァンス	中村能三訳	190
第五惑星の娘たち	ウィルスン	吉田誠一訳	200
トリフィド時代	ウィンダム	井上勇訳	240
時間の種	ウィンダム	大西尹明訳	190
賢者の石	ウィルソン	中村保男訳	270

透明人間	ウエルズ	宇野利泰訳	160
宇宙戦争	ウエルズ	井上勇訳	180
ウエルズSF傑作集1	ウエルズ	阿部知二訳	160
ウエルズSF傑作集2	ウエルズ	阿部知二訳	180
ウエルズSF傑作集3	ウエルズ	阿部知二訳	未刊
月世界へ行く	ヴェルヌ	江口清訳	160
地底旅行	ヴェルヌ	窪田般弥訳	190
オクス博士の幻想	ヴェルヌ	窪田般弥訳	170
悪魔の発明	ヴェルヌ	鈴木豊訳	180
宇宙船ビーグル号の冒険	ヴォクト	沼沢洽治訳	190
イシャーの武器店	ヴォクト	沼沢洽治訳	180
武器製造業者	ヴォクト	沼沢洽治訳	180
非（ナル）Aの世界	ヴォクト	中村保男訳	180
目的地アルファ・ケンタウリ	ヴォクト	永井淳訳	200
非（ナル）Aの傀儡（かいらい）	ヴォクト	沼沢洽治訳	200
時間と空間のかなた	ヴォクト	沼沢洽治訳	190
原子の帝国	ヴォクト	吉田誠一訳	200
ありえざる星	オールディス	井上一夫訳	220

銀河帝国の崩壊	クラーク	井上勇訳	140
地球幼年期の終わり	クラーク	沼沢洽治訳	180
20億の針	クレメント	井上勇訳	160
重力への挑戦	クレメント	井上勇訳	190
テネブラ救援隊	クレメント	吉田誠一訳	190
ロボット文明	シェクリー	宇野利泰訳	180
地底のエリート	シェール	松谷健二訳	170
地球人捕虜収容所	シェール	松谷健二訳	180
地球への追放者	シェール	松谷健二訳	180
宇宙船ビュルスの人々	シェール	松谷健二訳	170
渚にて	シュート	井上勇訳	240
原子力潜水艦シービュー号	スタージョン	井上勇訳	200
シービュー号と海底都市	フェアマン	高橋泰邦訳	150
ブレーン・マシーン	G・O・スミス	伊藤哲訳	220
〈レンズマン・シリーズ〉			
①銀河パトロール隊	E・E・スミス	小西宏訳	230
②グレー・レンズマン	E・E・スミス	小西宏訳	260
③第二段階レンズマン	E・E・スミス	小西宏訳	230

創元推理文庫版

モーリス・ルブラン

リュパン・シリーズ

怪盗紳士リュパン
リュパン対ホームズ
水晶の栓
奇巌城
リュパンの告白
リュパンの冒険
二つの微笑を持つ女
虎の牙
金三角
カリオストロ伯爵夫人
緑の目の令嬢
カリオストロの復讐
オルヌカン城の謎
謎の家
バール・イ・ヴァ荘
特捜班ヴィクトール
赤い数珠
ジェリコ公爵

定価 200 円

③金星の独裁者	E・R・バローズ	厚木淳訳	190
④金星の火の女神	E・R・バローズ	厚木淳訳	190
⑤金星の魔法使	E・R・バローズ	厚木淳訳	190
〈ペルシダー・シリーズ〉			
①地底の世界ペルシダー	E・R・バローズ	厚木淳訳	180
時間に忘れられた国(全)	E・R・バローズ	厚木淳訳	280
失われた大陸	E・R・バローズ	厚木淳訳	150
73光年の妖怪	ブラウン	井上一夫訳	170
未来世界から来た男	ブラウン	小西宏訳	180
SFカーニバル	ブラウン	小西宏編	190
天使と宇宙船	ブラウン	小西宏訳	200
スポンサーから一言	ブラウン	中村保男訳	190
宇宙の一匹狼	ブラウン	中村保男訳	180
宇宙をぼくの手の上に	ブラウン	中村保男訳	220
スは宇宙(スペース)のス	ブラッドベリ	一ノ瀬直二訳	240
何かが道をやってくる	ブラッドベリ	大久保康雄訳	190
10月はたそがれの国	ブラッドベリ	宇野利泰訳	280
ウは宇宙船のウ	ブラッドベリ	大西尹明訳	240
悪魔の星	ブリッシュ	井上一夫訳	180
猿の惑星	ブール	大久保輝臣訳	180
ドウエル教授の首	ベリャーエフ	原卓也訳	140
分解された男	ベスター	沼沢洽治訳	190
ピー・アイ・マン	ベスター	大西尹明訳	200
22世紀の酔っぱらい	F・ポール	井上一夫訳	170
天候改造オペレーション	ベン・ボーヴァ	伊藤哲訳	200
〈TERRAの工作員シリーズ〉			
①空飛ぶ円盤	マードック	高橋泰邦訳	170
②黄金の女神	マードック	高橋泰邦訳	170
③エメラルドの象	マードック	高橋泰邦訳	170
④タイム・トラップ	マードック	高橋泰邦訳	近刊
マイ・ベストSF	マーグリイズ他	中村能三訳	260
黙示録三千百七十四年	W・ミラー	吉田誠一訳	260
年刊SF傑作選1	メリル	中村保男訳編	220
年刊SF傑作選2	メリル	井上一夫訳編	240
年刊SF傑作選3	メリル	吉田誠一訳編	220
年刊SF傑作選4	メリル	宇野利泰訳編	220
年刊SF傑作選5	メリル	大谷圭二訳編	近刊
金星の尖兵	ラッセル	井上一夫訳	190
自動洗脳装置	ラッセル	大谷圭二訳	170
宇宙のウィリーズ	ラッセル	永井淳訳	210
第五惑星から来た4人	ラインスター	小西宏訳	170
ガス状生物ギズモ	ラインスター	永井淳訳	150
地の果てから来た怪物	ラインスター	高橋泰邦訳	170

Maurice Leblanc
La demeure mystérieuse

創元 推理 文庫

作者別番号二〇一N

¥200